
サバイバル高校生

残念無念

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サバイバル高校生

【Nコード】

N5225K

【作者名】

残念無念

【あらすじ】

ある日突然ゾンビが現れた。噛まれた人間はゾンビとなってしまい、次々とゾンビは増えていく。

この異常現象に巻き込まれた高校生達は、生き延びることは出来るのか！？（注）この作品の主人公は変態です。良い子は真似しないでね！（真似したら社会的に死にます）

第1話 こうして平穏な日常は終わりを告げた（前書き）

この小説を書き始めた理由は、自分の書いている「脱出」という作品では「生き残る」ことをテーマにしている、敵と戦うことが少ないのです。

対してこの作品の敵はゾンビ、何をするにも昼夜問わずに戦う羽目になります。

こんな作品ですが、どうか末永く見守ってください。

第1話 こうして平穏な日常は終わりを告げた

皆はいわゆる「ゾンビ」という物を知っているだろうか？こう訊くと、おそらく殆どの人が「はい」と答えるだろう。

未知の病原菌に感染した人間、呪術で蘇った死体、はたまた人知を超えた超自然の力で現れた者 e t c . . . 。おそらくこんなイメージが皆にはあるだろう。

そしてゾンビ映画やゲームをやった人間は、一度は「ゾンビが出現したらどうしよう？」と考えるはずだ。これについても皆に訊けば、

「ゾンビ達を倒しながら脱出する」

「立て籠もって救助が来るのを待つ」

「自殺する」

等々、様々な答えが返ってくるだろう。

しかし最終的には、「まあそんなこと、現実には起こらないよね」で締めくくって終わりにしてしまう。実際、俺もそれくらいにしか考えていなかった。

ゾンビが出てくる事なんて、ありえないと。

つい10分前まで、そう考えていた。

201X年 5月1日 10..45

その日もいい天気だった。空には雲ひとつ無く、空気は暖かった。

俺——県立豊島高等学校2年F組 岩崎 武——は、窓際の一番後ろの席で惰眠を貪っていた。別に授業をサボっている訳ではなく、今は休み時間中だった。

陽光を浴びて熟睡していた俺は、チャイムの鳴る音で目を覚ました。3時間目が始まったのだ。

ドアを開け、教師が教室内に入ってきた。3時間目は確か、英語の時間だったか。

委員が号令をかけ、規律と礼を行う。まだ頭が上手く働いていない俺は、のそのそと礼をした。

着席し、教科書とノートを取り出した俺に、前席に座る女子——
高田 美雪——が振り返った。

「ごめーん、ちょっと教科書の英訳見せて〜」

「・・・またかよ？」

「だって今日当たるのを今思い出したんだもん」

仕方なく無言でノートを差し出すと、美雪は「ありがと」と言ってお前を向いた。ショートカットの髪がさらつとなびく。

美雪の言った通り、直後に教科書の英訳文を読めと美雪が指された。美雪は俺のノートをチラチラ見つ、指示された箇所を読んだ。

その間俺は、することも無いので窓から校庭を眺めていた。いつものように。

異常に気づいたのは、授業も終盤に差し掛かったところだった。時々板書をノートに書き写しつつ、何気なく視線を校庭に向けた俺は、校庭で何か騒ぎが起きているのに気づいた。

よく見れば校門から何人か大人が入り込んできて、校庭で体育の授業中だった生徒達に向かってゆっくり歩いている。授業中の生徒達は立ち止まり、入り込んできた大人たちを警戒しているようだ。

そこで俺は、入ってきた大人たちの衣服がボロボロである事に気づいた。動きも散漫で、手を前に突き出してノロノロと歩いている。酔っ払いの浮浪者か？

校庭では異常に気づいた体育教師が、不審者達を追いつ返すためなのか近寄って行った。何があったんだろうとその光景を眺めていた俺は、次の瞬間、信じられない光景を目撃した。

体育教師に近づいた不審者が、いきなりその喉元に噛み付いたのだ。

「何だアレは!？」

思わず立ち上がった俺は、その光景に叫んでいた。クラス中の視線が俺に集中し、どこからか笑い声も聞こえた。

前席に座っていた美雪も、何事かと校庭を見つめた。すぐにその顔が、驚愕の表情に染まる。

その時校庭から、女子の甲高い悲鳴が聞こえた。それも1つだけでなく、いくつもの悲鳴が後に続く。

何か起きているのだろうかと思っいたらしい俺のクラスメート達は、窓際に駆け寄って校庭を眺め、そして絶句した。

校庭にいた生徒達が「喰われて」いた。

「お、おいなんだアレ!？」

「何が起こってるの!？」

「どうなってんだよ!!」

もはや授業どころではなく、隣の教室からもざわめき声が聞こえてくる。俺は言葉を失ったままその光景を眺め、そしてある事を発見した。

最初に不審者に噛まれた体育教師が、今度は生徒を襲っていたのだ。それだけではなく、喰われた生徒も立ち上がり、次々と他の生徒を襲っている。

その時教室に設置されたスピーカーから、異常に気づいたらしい教師の焦った声が流れてきた。

『現在校庭に不審者がいます！生徒の皆さんは、教師の誘導に従って落ち着いて避難してください！繰り返し、現在校庭に不審者y――』

いきなり音声途絶えた後、スピーカーから教師の絶叫が響いた。何かが倒れる音や湿った音が一緒に聞こえ――唐突に放送が切れた。

教師の死を生中継で聞いてしまった俺のクラスメートはパニックを起こし、一斉に教室の入り口に駆け寄った。英語の担任が必死で制止を促したが、誰も聞くものはいない。

皆がドアから出ようとするせいで、入り口は早々に詰まってしまった。押し寄せる人の波にドアが耐え切れなかったのか、2枚で構成されるスライドドアが両方廊下側に倒れ、津波が押し寄せるようにどっと生徒が教室から出て行く。

俺も教室から出て行きたかったのだが、運の悪いことに席の位置がドアから一番遠い窓側だった。必死で教室の外に逃れようとする生徒達から離れ、俺と何人かの生徒は窓際に寄っていた。

「ど、どうするんだよ？」

柔道部員で巨漢の友人、五里^{ごり} 頼人^{らいと}が不安そうに言い、パニックを起こしている生徒達を眺める。俺の友人の何人かは既に廊下へと脱出し、何人かは教室から出ようとする一団に加わっている。

「とにかく落ち着いて、深呼吸、深呼吸・・・」

と言ったのは、陸上部員の上田 奈津美だ。薄い胸に手を当て、どうにか落ち着こうとしているらしい奈津美を見た俺は、廊下から悲鳴が響くのを聞いた。

それと同時にドアに群がっていた連中が、悲鳴を上げて入り口から離れる。開きっぱなしのドアから、呻き声を上げて血まみれの人間が入ってきた。

いや違う、人間ではない。人間だったら内臓が腹から飛び出ていたり、首が半分千切れている状態で歩けるはずが無い。

まるで、ゾンビだった。

「なんじゃこりゃあ!!?」

ゴリ（頼人のあだ名）が喚き、美雪と奈津美が悲鳴を上げて後ずさる。教室内に侵入したゾンビ達は逃げ遅れた生徒に喰らいつき、あちこちで阿鼻叫喚の地獄絵図が繰り広げられた。

次々教室に入ってくるゾンビによって、俺達4人は教室の隅に追い詰められてしまった。4対のゾンビが俺達を取り囲み、逃げ場が無く、じりじりとゾンビとの距離が詰まってくる。

俺は決断した。

「ゴリ、手伝え!!」

俺はそう叫び、俺の席の椅子を持ち上げた。鉄パイプで出来た椅子の脚を掴み、ゾンビに対して振り回す。

バキッという音と嫌な感触と共にゾンビの頭が陥没した。その様子

を見てゴリも椅子を持ち上げ、ゾンビを倒す。

俺達を取り囲んでいた4体のゾンビは倒れた。このことから、映画やゲームみたいに頭を潰せばゾンビは倒せることがわかった。

だが4体だけ倒しても、続々と入り口からゾンビ達が入ってくる。

教室にいた逃げ遅れた生徒の殆どはゾンビに喰われてしまい、生き残ってるのは俺達4人だけだった。

「ゴリ！机だ、正面突破するぞ！！」

俺はそう叫び、机の脚を掴んで持ち上げた。机の中から教科書やノートが零れ落ちたが、お構い無しに机の脚を持ち、天板を正面に向けた。

俺のやろうとしている事を察したのか、奈津美と美雪が俺の後ろに並んだ。ゴリも机を持ち、俺の隣に立つ。

「うおおおおお！！」

俺とゴリは叫び、一斉にゾンビ達に向けて突撃した。机が盾代わりとなり、近づいてきたゾンビ達を弾き飛ばす。そうして出来た隙間を、ゾンビ達に襲われないよう走った。

そうして教室の入り口まで辿り着いたが、廊下には更に多くのゾンビがいた。階段方向から多くのゾンビが押し寄せてきて、俺達は必然的に反対方向に逃げるしかない。

だが逃げる方向にも、多くのゾンビがいた。

「そおい！！」

とゴリが気合の声を出し、持っていた机をゾンビの集団に投げつけた。柔道部員で力持ち、筋肉モリモリマッちょマンのゴリが投げつけた机は、物凄い速さでゾンビに直撃した。机に当たったゾンビは

吹っ飛び、後ろにいたゾンビを巻き込んで倒れる。

その瞬間に俺達は前進し、俺は立ち上がろうとしたゾンビ達に蹴りを入れた。

——こうして、俺達とゾンビとの戦いが幕を開けた。

第1話 こうして平穏な日常は終わりを告げた（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第2話　まずは安全な場所。話はそれからだ。（前書き）

前書きでは登場人物の設定を公開したいと思います。

岩崎 武 いわさき たけし

17歳（高校2年生）

知識	★★★☆☆
体力	★★★☆☆
攻撃性	★★★☆☆
敏捷性	★★★☆☆
統率力	★★★☆☆

この作品の主人公。ミリタリー軍事オタク。

幼い時に両親が離婚、世界的な外資系製薬会社の研究員だった父親に引き取られる。2年前に父親が交通事故で死亡し、それから1人暮らしを続けている。シェパード犬を一匹飼っている。

昔よく父親とキャンプや登山に出かけていて、サバイバルのスキルが高い。祖父は東北に住むマタギ（猟師）。

父親の趣味が猟銃による狩猟であり、祖父もマタギなので実銃に触った事もある（ただし発砲経験はない）。

趣味はサバイバルゲーム、ホラーゲームのプレイやゾンビ映画の鑑賞。

第2話　まずは安全な場所。話はそれからだ。

どうにか教室から逃げ出した俺達は、ひたすらゾンビがいない方向へと走った。理由は簡単、武器が無いからだ。

武器が無い状態で下手にゾンビの群れに突っ込むのは自殺行為だ。何故か俺が先頭に立ち、廊下をひたすら走っていると、前方に階段が見えてきた。

「階段使って、一階に降りるぞ!!」

俺は後ろを走る3人に叫び、答えを待たずに走るスピードを上げた。俺以外の3人は全員体育会系の部活に所属していて、どれだけ走っても疲れを見せなかった。

階段の手前の教室に着いた途端、その教室のドアが開いてゾンビ達があふれ出てきた。とっさに足にブレーキを掛け、反転して戻ろうとした。

が、階段の反対側からもゾンビ達が俺達を追ってきていた。前後をゾンビに挟まれてしまい、俺達は身動きが取れなくなる。

「どうすんの、逃げ場が無い!」

「んな事わかってる!!」

美雪が叫び、俺は何か武器になりそうな物を探しつつ怒鳴った。窓から逃げるか、ととっさに考え、並んだロッカーの上の窓を見た俺はある物を見つけた。

負い紐のついた円筒形のそのケースは、どうやらバットを収めている物らしかった。ゾンビに襲われないよう素早くそのケースを引き寄せ、中身を取り出す。

ケースの中には予想通り、木製のバットが収まっていた。どうやら

野球部員の私物らしきバットを握った俺は、階段側に陣取るゾンビ達に殴りかかった。

まず先頭のゾンビの頭を叩き潰し、そこで倒れそうになったそのゾンビをゴリが蹴り飛ばした。頭の潰れたゾンビが吹っ飛び、後ろのゾンビをなぎ倒していく。

まるで教室を出た時にゴリが使ったような戦法だったが、効果は抜群だった。ゾンビ達の包囲網に穴が開き、階段までの通路が出来る。俺はその瞬間を見逃さず、

「今だ！走れ！！」

と怒鳴った。3人は美雪、奈津美、ゴリの順番でその隙間を潜り抜け、武器を持つ俺は3人の援護に徹した。3人が上手くゾンビから逃れたのを確認してから、近づいてきたゾンビを殴り、猛ダッシュでゾンビ達から離れる。

俺が階段に辿り着くと、今度は奈津美が先頭に立って走り始めた。

「どこに行くんだ？」

と俺が訊くと、夏見は振り返ることも無く

「用具室！！」

と答えた。

用具室とは、授業で使う道具や清掃用具を収めている教室のことだった。用具室は2階に位置し、階段を降りてすぐの所にある。普段出入りしている人は居ないので、格好の避難場所だった。

そのまま奈津美が先導し、俺達は2階に降りた。2階の廊下にはゾンビの姿がちらほら見えたが、俺達に気づいていないらしく、近づ

いてくるゾンビはいなかった。

用具室のドアは施錠されているので、俺は手にしたバットでドアの小窓を叩いた。小窓のガラスが割れ、そこから手をつ込んだ俺は、手探りでドアの鍵を探した。

やがてそれらしき出っ張りに手が触れ、それを捻る。ガチャリという小さな音と共に開錠され、ドアが開いた。

まるでドロボーみたいだったが、今は誰も突っ込む者はいなかった。極力音を立てずに用具室に入り、奈津美がそっとドアを閉めた。

用具室の中には、様々な用具を並べた棚がいくつもあった。それらの棚から余計な物を落とし、怪力を誇るゴリがバリケードとして施錠したドアの前に積み重ねる。用具室の資材の中にあつた新品のロープで棚と棚をきつく結び、ちよっとやそつとでは突破できそうに無いバリケードが完成した。

ようやく安心して休める場所が完成し、俺達は床に座り込んだ。一気に脱力感が襲ってくる。

「疲れた」

「しばらく動けない」

等と皆が口々に呟く。ゾンビと戦っていた俺も、その意見に同感だった。水が飲みたいところだが、生憎用具室には飲み物も無ければ水道も通ってない。

壁にもたれ掛かって休んでいると、

「・・・慣れてるんだな」

と唐突にゴリが話しかけてきた。

「慣れてるって、何が？」

「ゾンビが出てくるって異常事態だったのに、お前の動きは素早かった。まるでこういう事態が起きるのを想定していたみたいだな」

ゴリの言葉に、改めて俺は先ほどからの行動を思い返してみた。

確かに校庭にゾンビが現れたのを見た後、俺はどう行動すればいいかを既に知っていた。いや、知っていたという表現は正しくなく、直感的に悟ったと言った方が正しい。

それだけではない。俺は教室や廊下で、先ほどまで友人や学友だった存在^{ゾンビ}を殴り殺した。その事について、俺は何も感じていなかった。まるで、こうするのが正しいと知っていたかのように――――。

「まあ、ゾンビ映画とかよく見てるからな。それでどうすればいいかわかったんだ」

取りあえず俺は、ゴリの疑問に答えることにした。別にこれは嘘ではなく、実際俺だって多くのゾンビ映画やゲームだって鑑賞している。

だが実際にゾンビが出てくるなんて……。

用具室に立て籠もってから数分も経った時だった。突然美雪が立ち上がり、皆に言った。

「ねえ、そういうえば皆のケータイって通じてる？あと警察にも通報しない」と

ゾンビ達から逃げることに精一杯で、俺達は外部と連絡を取ることをすっかり忘れていた。皆がケータイを取り出し、俺は取りあえず

目の前のゴリに電話を掛けてみた。

電話帳から市外に住む友人のケータイ番号を選択し、決定ボタンを押す。そしてケータイを耳に当てた俺が聞いたのは、

『・・・ただいま回線が非常に混雑しております。後ほどお掛け直しください。繰り返します。ただいま回線が・・・』

との頼り無い録音メッセージだった。どうやら他の3人も同じだったようだ。

「通じない・・・」

「まだ。警察なら何とか・・・!!」

と奈津美が立ち上がり、110番に電話する。そしてケータイを耳に当てた奈津美は、絶望したような表情になって床に座り込んだ。

「どうだったんだよ？」

と俺が聞くと、奈津美は無言でケータイを差し出した。その時からケータイを引ったくり、耳に当てた俺は、

『・・・ただいま110番通報が集中しています。しばらくお待ちください。これは録音メッセージです。・・・』

との無情な女の声を聞いた。

俺も無言でゴリと美雪にケータイを渡し、それぞれ録音メッセージを聞いた2人は、無言で奈津美にケータイを返した。

「つまり、街中でこんな事が起こってるって訳だな」

ゴリが口を開き、室内に沈黙が満ちた。

俺は無言で立って窓の近くまで歩き、外を眺めた。窓を開けて見えた風景は、まさしくこの世の終わりといった風情だった。

街のあちこちから黒煙が上がり、校庭には多くのゾンビが徘徊していた。中には俺の友人と思われるゾンビもいた。

そのゾンビ達が、玄関から逃げ出した生徒達を校庭で取り囲む。すぐに阿鼻叫喚の地獄絵図が繰り広げられ、俺は目をそらした。

耳を澄ませば、街からサイレンの音がいくつも重なり合って聞こえ、銃声らしき破裂音も聞こえた気がした。

地獄だ――――。

第2話 まずは安全な場所。話はそれからだ。 (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第3話 近代戦で重要なのは、情報と武器なのだよ。（前書き）

登場人物紹介

高田 美雪 たかだ みゆき

17歳（高校2年生）

知識	★★☆☆☆
体力	★★★★★
攻撃性	★★★★☆
敏捷性	★★★★★
統率力	★★★☆☆

武の友人。単純。

女子バスケットボール部に所属し、常に1軍で活躍している。俊敏な動きで相手を翻弄するのが得意。ただし勉強は苦手。

家族構成は、父、母の3人家族。豊島高校には市外から電車で通学している。

趣味はバスケットボール。

第3話 近代戦で重要なのは、情報と武器なのだよ。

電話は使えない。警察にも通じないとなると、あちこちでゾンビが発生しているのだろうか？

俺はそう考え、再びケータイを取り出した。ワンセグを起動し、収納式のアンテナを立てる。そして電波が入りやすい所を求めて歩き回り、一番動画が鮮明に映る窓際に座り込んだ。

俺は皆にも聞こえるよう音量を上げ、音声を聞いたのか皆が俺の周囲に集まった。皆でケータイを覗き込むようにして見ると、そこには絶望的な状況が映し出されていた。

『・・・の最初の患者は、午前10時に現れ始めました。現在ではほぼ本州の全域、四国や九州の一部でも現れたの情報が・・・』

『ワシントン支局の森田記者によると、アメリカのあちこちでも似たような事態が・・・』

『住人の被害は既に2000名を越えたとの情報が入っており・・・』

チャンネルを変えても、全ての局でゾンビ発生事件を報道していた。アナウンサーの背後ではスタッフが怒号を交わしつつ、鬼のような形相で走り回っている。

「どうなってるの、これ・・・？」

美雪が、震える声で言った。

「知らん！知らんが、あちこちでゾンビが発生してるらしい」

俺はそう答えつつ、またチャンネルを変えた。

『ここ、汐留の本社ビルの前にも先程から感染者が現れました。現在我々は1階のスタジオから避難し、4階の報道フロアからお伝えしています。』

・・・今入った情報です。総理は先程、自衛隊に治安出動を命令しました。自衛隊は既に厳戒態勢を敷いている警察と協力し、事態の収拾を図るものと見られます』

ヤバイ。マジヤバイ。俺達が知らない間に、世界は大きく変わってしまったらしい。

「どうするんだ？ここを出ても、ゾンビがあちこちにいらっしゃるぞ」

ゴリが言うのと、奈津美も同調したように頷き、

「ここに立て籠もっても、食料も水も無いしね。どうする？」

2人とも、質問の相手は俺のようだった。3人の視線が俺に突き刺さり、俺はケータイを保持したまま言った。

「俺に訊くなよ。俺はバイオハザードの主人公でも無ければ、ランボーみたいなヒーローでもない」

「だって武はこういうのに詳しいんでしょ？」

俺が言うと、即座に美雪が返答した。

確かに俺はゾンビが出る映画やゲームには詳しい。だが、あくまでもアレはフィクションだ、現実こんな事が起きるなんて誰も想像しじゃない。

皆のすぎるような視線を受けて、溜息をついて俺は立ち上がった。

「いいか、まず情報を整理しておこう」

俺が言うと、3人は大きく頷いた。俺は更にプレッシャーを感じたが、それを表情に出すことはしなかった。

「1つ。ゾンビというのは感染者というのかはわからんが、あんなバケモノが世界中で発生している。

2つ。一応ここではゾンビと言うが、噛まれたらゾンビになる。

3つ。ゾンビは人を喰う。

4つ。頭を潰さなきゃ倒せない」

俺は指を折りつつ、今まで見てきた事と、今テレビで得た情報を重ね合わせつつ言った。他に何かあったかな？

「5つ。取りあえずヤバイ」

「・・・ふざけてんの？」

俺が思い出したように付け足すと、奈津美が怒ったように言った。

「じゃあどうなんだよ？今の状況を安全と言えるのか？」

「っ！それはそうだけど・・・」

奈津美が黙り、変わりにゴリが立ち上がって言った。

「そんな事より、これからどうするかの方が重要だ。いつまでもここに居る訳には行かないし、救助がくるかもわからん」

「その通りだ。だから俺が提案する案は3つある」

俺はゴリに続けて言い、再び指を折りつつ言った。

「A、ここで救助がくるまで立て籠もる。

B、ここを脱出し、避難場所か救助してもらえる場所まで行く。

C、このままゾンビの仲間になる。どれがいい？」

俺が訊くと、皆は迷わず「B!!」と叫んだ。まあ、当然の選択だろうな。

「でもどこに行くの？私の家は市外だし」

美雪が不安そうに言った。俺以外の3人は、全員市外から電車通学している。

「俺んちしかないだろう。幸い、歩いても20分の距離だからな」

俺の家はこの高校に近く、歩いて20分、自転車なら10分もかからない。だがそれは最短ルートを通る場合であって、ゾンビがうじゃうじゃいるようだともルート変更も考えなければならぬ。

皆は俺の言葉を聞くと、武器になりそうな物を探し始めた。現状では戦力はバット1本だけで、これでゾンビの群れに立ち向かうのは自殺行為だ。

床に転がった道具類を漁り始めた俺を見て、ゴリ、美雪、奈津美の3人もそれぞれ使えそうな物を探し始めた。

バットはこのまま俺が持っていて大丈夫だろう。ゴリは怪力だから長物を持たせて、女子2人には軽い物を持たせたほうがいいかな？そう考えつつ用具室内を物色すること数分、2本の角材を手にした美雪が俺に訊いた。この角材は、おそらく補修用として保管されていたのだろう。

「武、これ使える？」

俺はその角材を受け取り、取りあえず構えてみた。長さは1メートルちょっとで、重量も軽い。ただし握ると角が手に食い込む。

「まあいいんじゃない？でも握ると手が痛いから、あそこにある雑巾を紐で巻いとけ」

俺はそう言い、袋に入った新品の雑巾の束を指差した。すぐに美雪が駆け寄り、袋を破って雑巾を取り出す。

握りやすくなった角材を奈津美と美雪が掴んだ横では、ゴリが袋に入った新品のサスマタを取り出した。大柄なゴリにはうってつけの得物だろう。

戦闘準備が整ったところで、俺は皆に向き合って言った。

「いいか、絶対に足を止めるな。咬まれたヤツは、どんなことがあっても置いて行く。いいな？」

俺が訊くと、皆は大きく頷いた。

俺も覚悟を決め、大きく息を吸い込み、そしてドアを開けた――――。

第3話 近代戦で重要なのは、情報と武器なのだよ。（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第4話 弓道少女と木刀少女（前書き）

登場人物紹介

五里^{ごり} 頼人^{らいと}

17歳（高校2年生）

知識 ★★☆☆☆

体力 ★★☆☆☆

攻撃性 ★☆☆☆☆

敏捷性 ★☆☆☆☆

統率力 ★☆☆☆☆

武の親友。巨漢。

柔道部に所属し、2年生の中で最も地位が高い。身長は190cm
近く、筋肉モリモリマッチョマン。怪力を誇る。

生徒からはその外見から「ゴリラ」との印象があり、またその怪力
から「人間重機」との愛称まである。

家族構成は父、母、妹2人、弟1人。実家は農家で、よく両親の手
伝いをしている。

趣味は料理。

第4話 弓道少女と木刀少女

用具室のドアを開け、俺は目の前にいたゾンビを殴り倒した。ゾンビ達は俺達に気づいていなかったらしく、ゾンビがこちらを見る前に俺達は用具室を離れた。

俺達は出来るだけ物音を立てずに階段を降りた。というのも、ゾンビ達は音で獲物の位置を掴むかもしれないからだ。

実際、俺は教室で目が潰れていたゾンビに襲われたし、他の3人もその事を知っていた。詳しく調べればゾンビの習性が判るかもしれないが、残念な事に時間が無い。

階段を降りるとそこは1階で、ゾンビ達の姿は少なかった。玄関のドアが開きっぱなしなので、逃げた生徒達を追っていったのかもしれない。

「靴、履き替えとけよ。シューズで外を走るのはキツイ」

俺はそう言い、自分の下駄箱に向かった。下駄箱の周囲にゾンビはおらず、簡単に上履きからスニーカーに履き替えることが出来た。他の3人も外履きに履き替え、玄関のドアの前に集まった。

校庭には、多くのゾンビがいた。死んだ生徒達も身体を貪り、そしてあちこちでまた死体が起き上がっている。

「どうすんの？」

「突破するしか無いだろ」

美雪が小声で俺に訊き、即座に俺は返答した。

一々ゾンビを相手にしては、いずれは取り囲まれてしまう。ここは戦闘は避け、強行突破するしかない。

「ゴリ、先頭を頼む。サスマタでゾンビ共を薙ぎ払え、倒さなくていい」

「わかった。ちゃんとサポートしてくれよ」

ゴリがそう言い、サスマタを手にしち上がった。ゴリを先頭にしてそつとドアから外に出た時、俺達に気づいたのかゾンビ達が一斉にこちらを向いた。

「どりゃあああああああ！！！」

ゴリが気合の声を出し、そしてサスマタを構えて突進する。戦国時代の槍兵のようにサスマタを前方に向けたゴリは、ゾンビの群れに突っ込んでいく。

「よし、行くぞ！！」

俺はそう言って走り出し、美雪と奈津美も後に続く。

ゴリが突き出したサスマタはゾンビ達を次々に跳ね飛ばし、モーゼのようにゾンビの海に強引に道を作った。その後を俺と美雪、奈津美が続き、取り囲まれる前に突破していく。

とその時、俺の横からゾンビが手を伸ばし、ゴリの服を掴もうとした。俺は即座にそのゾンビの頭を殴り倒す。

そうして50メートルも進み、校門が目の前に迫った時だった。

「きゃっ・・・！！！」

最後尾を走る奈津美が、悲鳴を上げて転んだ。すぐにゾンビ達が奈

津美に群がろうとする。

「奈津美!!」

俺は叫び、来た道に戻って奈津美の所に駆け寄ろうとした。だが、間に合わない。すでにゾンビの手は、奈津美の服を掴みかけている。どう走っても、間に合わない。奈津美の表情が絶望に染まる。

俺が奈津美の死の場面を見ないよう、目を瞑ろうとした、その時だった。

奈津美の服を掴んでいたゾンビの頭に、長い矢が「生えて」いた。

「・・・・・・・・?」

予想外の事態に頭がついていかず一瞬呆然とした俺の目の前で、奈津美に襲いかかろうとしていたゾンビの頭に、次々と矢が突き刺さった。奈津美を囲んでいたゾンビは倒れ、その隙に俺は奈津美の手を掴んで走り出す。

が、今度は俺の目の前にゾンビが立っていた。とっさにバットを振りかざしたが、数が多すぎる。

だが、

「大丈夫!?!」

という声と共に、木刀がゾンビの頭に振り下ろされた。ゾンビ達は頭を陥没させ、地面に崩れ落ちる。

「こっちだ!早く来い!」

「武、早く!!」

先にゾンビの群れから脱出していたゴリと美雪が、自分達に近づいてくるゾンビを倒しつつ叫んだ。俺は助けてくれたヤツの顔も見ないまま、全速力で校門までダッシュする。後ろから、俺を助けたヤツがついて来るのがわかった。

俺達が走って校門を抜けた直後、待機していたゴリが校門を閉めた。これでしばらくは時間稼ぎが出来るだろう。

疲れた俺は一端地面にしゃがみ込み、さっきのヤツに礼を言おうと顔を上げた。

「ありがとう。助かった」

「いえいえ、どういたしまして」

「ほんと、無茶しないでよね」

俺が礼を言うと、二人分の返答があった。しかも声質も似ている。顔を上げた俺の目に映ったのは、ほとんど瓜二つと言っていい双子の少女だった。片方は長い弓を持ち、もう片方は木刀と何本も矢が入った筒を持っている。

俺は立ち上がり、校門の前の坂道を下りつつ自己紹介を始めた。

「俺は岩崎武。一応このグループのリーダー、かな？」

「わたしは白木しろぎ 亜衣あい。クラスは2－Bで、弓道部に所属してる。よろしく」

「アタシは白木 麻衣まいよ。アタシのクラスは2－Dで、所属は剣道部。ヨロシク」

ゴリ、美雪、奈津美も続いて自己紹介し、俺は彼女らと握手を交わした。

歩きつつ話を聞くと、この双子はゾンビ出現後部室棟に立て籠もっていたらしい。それぞれ部活で使う得物でゾンビを撃退していたが、俺達が学校から脱出する時の叫び声に気づき、俺達に合流しようと

外に出た。そこで襲われていた奈津美を亜衣が弓矢で撃退し、俺を襲おうとしたゾンビを麻衣が撲殺（元々死んでるけど）したということだ。

そういえばこの2人は、（色々な意味で）有名なのだ。確か亜衣の方は弓道大会で優秀な成績を収めて、麻衣の方は弱小剣道部を一気に全国大会出場まで押し上げたんだっけか。

そして亜衣は清楚・可憐、麻衣は凶暴・猛獣というイメージが全校に広がっている。

「で、御二人さんはこれからどうするんだ？俺達の当面の目標は、一端俺の家に行くことだけだ」

「家は近いの？」

「まあな」

俺の質問に、亜衣が質問で返した。

「じゃあアタシ達も一緒に行こうかしら。数が多いほうが生き残れる確率も上がる。休む事も必要だし、詳しい情報を得ればどこに避難すればいいかもわかるから」

麻衣がそう言い、俺達のグループに亜衣と麻衣が加わった。

俺達は校門の前の坂道を下り終わり、団地が立ち並ぶ地区に入る。市街地の方から聞こえてくる銃声が、先ほどよりも多くなった気がした。

この地域のゾンビは、生き残った人間を追ってどこかへ行ってしまったようだ。あちこちに残る死体の残骸と、血で赤く染まっていたいくつもの足跡がそれを証明している。

「武の家まで、あとどれくらいだ？」

「ん、大体15分ってとこかな？」

血に染まったサスマタを構えつつゴリが訊いた。俺もいつゾンビが出て来てもいいよう、バットを構えて答えた。

エンジンを掛けっぱなしにした車が、道路のあちこちに乗り捨てられていた。俺達はその車の陰を注意しつつ、道を進んだ。

だがどうやらそれは杞憂だったらしく、数分後には俺達はゾンビに襲われること無く団地街から出ていた。俺達は市街地に向かって歩き続ける。

オフィスビルや商店が立ち並ぶ市街地は、今や地獄と化していた。

あちこちで車がビルに突っ込んで炎上し、青い空に黒煙を立ち昇らせている。

そして道路には逃げ惑う人々が溢れ、それを追ってあちこちにゾンビが歩いていた。

「酷い………」

奈津美が、口を手で押さえていった。

確かにこれは酷すぎる状況だ。俺の家に行くには、この市街地を通るしかない。

俺は後ろを振り返り、皆の顔を見て言った。

「かなりヤバイ状態でも、行く？」

「当たり前だ。行くしかない」

「今から引き返せっての？」

「突破するしかないわね」

どうやら皆、覚悟は出来ているらしい。それぞれの得物を構え、殺る気満々といった顔で俺を見ている。まるで俺だけ覚悟が出来ていないようではないか。

俺は溜息をつき、そして先頭に立って走り出した。

第4話 弓道少女と木刀少女（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第5話 ねんがんの ブッシュナイフを てにいったぞ!! (前書き)

登場人物紹介

上田 うえだ 奈津美 なつみ

16歳(高校2年生)

知識 ★★★★★

体力 ★★★★★

攻撃性 ★★★★★

敏捷性 ★★★★★

統率力 ★★★★★

武の友人。貧乳。

陸上部に所属し、短距離走の選手である。短距離走の県大会記録を保持していた。

家族構成は両親との3人暮らし。それぞれの職業は、父親は銀行員、母親は会社員。

趣味は買い物。

第5話　ねんがんの　ブッシュナイフを　てにいったぞ!!

市街地の大通りは、放置された事故車両で進めなかった。歩道には死体が転がり、お世辞にも綺麗とはいえない状況だったけれども、この際文句は言っていられない。

逃げ惑う人達を掻き分け、邪魔な死体を避け、時には踏み潰しながら進んでいた俺達の前に、5体ほどのゾンビが現れた。ゾンビの口には、食いちぎったと思われる人間の手が咥えられていた。

「任せて！」

亜衣が叫び、弓に矢をつがえ、狙いを定めて射る。次々と矢を速射し、道を塞いでいたゾンビ達の頭に矢が突き刺さる。

「グッジョブ！」

俺は親指を立て、再び前進を開始した。亜衣達は部室棟から多くの矢を持ち出してきたので、今のところ使った矢は回収しなくてもいいだろう。いざという時には自作すればいい。

俺がそんな事を考えながら走っていると、歩道の脇のガードレールに接触するように横転していた乗用車の陰から、ぬっと女のゾンビが顔を出した。

突き出された腕を素早く避け、ゾンビの頭にバットで一撃を入れる。が、ゾンビの頭が陥没すると同時に、乾いた音を立てて俺の持っていた木製バットが柄から折れてしまった。当然だ、木製バットは人を何度も叩けるよう設計されてはいない。

「え・・・？」

一瞬呆然とした隙に、別のゾンビが俺に近寄っていた。素手では、感染する危険があるから戦えない。

とっさに後ずさった俺の脇を、角材を携えた美雪が素早く通り抜け、そのままゾンビを殴り倒した。

「大丈夫？」

「あ、ああ・・・」

続いて別のゾンビを殴った美雪が聞き、彼女のセーラー服に点いた返り血を見ながら俺は頷いた。美雪はこんなにパワフルな奴だったっけ？

俺がそんな事を考えている間に、ゴリがビルとビルの隙間に手を突っ込み、壁面を走る配管を掴んだ。ゴリは勢いをつけて配管を引っ張り、錆びた鉄パイプを掴みだした。

「岩崎！」

「サックス！！」

ゴリが投げたその鉄パイプを空中でキャッチし、近づいてくるゾンビの頭に振り下ろす。

ゴリが強引に引きちぎったその鉄パイプは所々錆びていたが、重量もあるしリーチも長い。少なくともバットよりは頑丈だろう。

新たな武器を手に入れた俺を再び先頭にし、俺達のグループは大通りを進んでいく。

10分後、市街地を抜けた俺達は、俺の家がある住宅街を走っていた。住宅街に人気は殆どなく、道路には血溜りや死体の残骸しかな

かった。

その様子を見て、美雪が不安そうに呟いた。

「皆どこ行っただろうね？」

「死んだか、逃げたか、あるいは家に閉じこもってるかのどれかな。ここから港や空港は近いし、多分南の方角へと逃げたんだろう」

俺は答えつつ、血や肉片のこびりついた鉄パイプ片手に周囲を見回した。そろそろ俺の家が見えてくるはずだが、ゾンビがいたら計画変更も考えなければならぬ。

だが、どうやらその考えは杞憂だったようだ。

ようやく着いた俺の家の周囲にゾンビの姿は無く、ゴーストタウンと化していた。2階建ての俺の家からは、俺が飼っている犬の吠える声が聞こえる。

俺は注意深く家の門を開け、庭にゾンビがいない事を確認してから皆を呼んだ。皆は足音を立てず、門から俺の家の敷地内に入る。

「アンタの家、広いのね・・・」

「そういえば俺、今まで岩崎の家に来た事が無かったな」

「やっと休める・・・」

等と背後で皆が口々に言う中、俺は学生服のポケットを漁り、ドアの鍵を引っ張り出した。鍵穴に鍵を突っ込み、開錠する。

ドアを開いた俺を待っていたのは、「お座り」の体勢で玄関に座っていた愛犬のシェパードだった。性別はメスで、線のような模様があるから名前はラインだ。

ラインはワンと吠えらると、俺に飛び掛ってきた。いつものように、俺の帰宅を喜んでるのだ。

俺が庭に突っ立っている皆に「入っていいぞ」と告げると、皆はし

ずしずと玄関から家に入って行った。

「お邪魔しまーす」

「おう、入れ入れ」

と俺は言い、皆と入れ違いに庭に出て、開きっぱなしだった門を閉めた。そして玄関に戻り、皆が家に入ったことを確認してドアを閉めた。

2つあるドアの鍵を閉め、チェーンを掛ける。これでようやく一安心だ。

俺は皆をリビングまで誘導し、ソファーに座らせた。やっと安心できる場所を確保出来た事に安堵したのか、皆がソファーに沈み込む。俺はリビングの雨戸を閉め、皆に言った。

「少し休んでくれ。テレビは点けてもいいけど、音量は下げてくれよ。俺は雨戸を閉めてくるから」

俺はそう言い、暗くなったりリビングの電灯を点けて出て行った。奈津美が点けたテレビの画面には、生中継の最中、ゾンビに喰われる女子アナが映っていた。

数分後、全ての雨戸を閉めた俺はリビングに戻り、皆に向かって言った。

「皆疲れが取れたようだし、行動を始めよう。まず必要なのは情報だ。誰かテレビとインターネットで情報収集してくれる奴はいないか？」

俺がそう訊くと、奈津美と麻衣が挙手した。2人は大手ネット揭示

板をよく見ているらしく、必要な情報ならすぐに集めてくれるだろう。

俺は2階の自室に上がり、ルーズリーフと筆記用具、そして全国版と地方版の地図を持ち出して1階に下りた。2人にそれらを渡すと、麻衣はノートパソコン、奈津美はテレビに視線を注いだ。

「じゃあ次、メシを作ってくれる奴はいるか？皆腹減ってるんじゃない？」

続いてそう訊くと、ゴリと亜衣が手を上げた。2人とも料理には自信があるのだという。

冷蔵庫の中身は保存食以外自由に使っているという事を伝え、すぐにゴリと亜衣は台所に向かった。

「じゃあ最後、俺と一緒に家中から使えそうな物を集めるんだが・・
・。美雪、やってくれる？」

「ええ、いいわよ」

俺が訊くと、美雪は力強く頷いて立ち上がった。

壁にかかった時計を見ると、すでに12時近くになっていた。だが感覚的には、既に何時間も経過したような気がする。

俺は美雪を連れ、ひとまず玄関に向かった。武器になりそうな物は、裏の倉庫に放り込んであるからだ。念の為ラインも連れ、インターホンのカメラで外に誰もいない事を確認してからドアを開ける。

庭に出た俺は、ラインに「待て」と命令を出した。ラインは賢いので、すぐに俺の命令に従う。もしゾンビが近づいてきたらラインが吼えるだろう。

俺は庭を通り、家の裏手に回った。組み立て式の小さな倉庫の中には、昔親父と一緒に使っていたキャンプ用具などがある。

俺が倉庫のドアを開けると、美雪が口を開けて啞然としていた。俺はそんな美雪に構わず、使えそうな物を倉庫から取り出す。

まず取り出したのは、いわゆる「ブッシュナイフ」と呼ばれる代物だ。これは植物が密生した場所で進路を切り開く為に作られた大きなナタのような物で、対危険生物用にもなるよう頑丈に作られている。

続いて取り出したのはハンティングナイフだ。これは文字通り狩猟の際、獲物に止めを刺したり解体する際に用い、非常に頑丈で大きい。

最後に取り出したのは普通の鉈だ。主に草木を払う用途で使われる。その時ようやく気がついたのか、美雪が呆然としたまま訊いてきた。

「あのさ、これってもしかして、武の物？」

「んな訳あるか、これは親父が使っていた獲物だよ。俺が持つてるのは、もっと小さな折り畳みナイフくらいさ」

俺はそう答え、倉庫から取り出した刃物類を、これまた倉庫から取り出した大きなバッグに放り込み、もっと使えそうな物が無いか探した。

俺の親父はアウトドア活動を好み、休暇の度に俺とあちこちに出かけていた。中でも親父は狩猟が大好きで、狩猟用のライフル銃などと共にこのナイフを所持していた。

猟銃があればもっと楽にゾンビに立ち向かえるのだろうか、生憎猟銃はここには無い。親父が死んだ後、俺が田舎の祖父に預けてしまったのだ。

今では凄い後悔している。

その他に使えそうな道具をバッグに放り込み、外を見張っていたラインを呼んで家の中に戻る。ドアをしっかりと施錠してリビングに

戻ると、奈津美と麻衣が一心不乱にパソコンとテレビに向かっていた。

「何かあったか？」

と俺が訊くと、パソコンの画面を見ていた麻衣が肩を竦めて言った。

「いいニュースは無いわね。わかった事といえば、ゾンビ達への対策くらいかしらね」

そう言って、ノートパソコンの画面を俺に向けた。どうやら画面に映っているのは大手インターネット掲示板「3ネット」らしい。その様々な板で、ゾンビ関連のスレッドが立っている。ゾンビが発生してから2時間程しか経過してないのに、既に立てられたスレッドは100を超えている。

【ゾンビ】おまいらどうする？ vol. 3 【大発生】 [455]

ゾンビに咬まれたけどどうすればいい？ [987]

【生きるか】ゾンビ地獄でサバイバル vol. 5 【死ぬか】 [775]

etc.....

「こういう時って掲示板は便利よね。本物かどうかはわからないけど、とりあえず情報は入ってくる」

「で、対策ってのは？」

俺が訊くと、麻衣はルーズリーフを俺に突き出した。

「それ、2ネットで拾ったゾンビの性質。信憑性は高いと思うけど」
『1、ゾンビの性質

ゾンビに咬まれると、遅かれ早かれゾンビになる。血液や体液を浴びた場合、量にもよるがゾンビになるらしい。

ゾンビは人を喰う。食欲が満たされる事は無いらしく、ひたすら獲物を求めてさまよう。

ゾンビは一切の苦痛を感じないようで、腕が千切れようが足がもげようが、人間を追ってくる。動きはのろい。

人間を感知する方法は聴覚だけらしく、視覚は無い。

2、撃退方法

頭、特に脳を損傷させるとゾンビは活動しなくなる。

3、咬まれた場合

咬まれた場合、ウイルスが傷口から侵入してゾンビになるらしい。今のところ治療法は無く、発症率はほぼ100パーセント。ウイルスは人から人へしか感染しないらしい……」

かなり詳しく書いてあるので、今後はこの情報を基にゾンビ対策を練るか。

続いて俺はテレビを見ている奈津美の元に寄り、訊いた。

「で、こっちの方はどうなんだ？」

「ダメね。テレビはあっちこっちで生中継が途絶えちゃってる。さつきからお花畑でいっぱいよ」

その言葉で俺がテレビを見ると、

『申し訳ございませんが、しばらくお待ちください』

とお花畑の画像が映り、続いてスタジオからの映像に切り替わった。

『えー、ここからはスタジオからお送りいたします。……』

「……たしかに頼りないな」

「ええ、それでも最低限の情報くらいはわかるわ。ゾンビのことは

『狂人病患者』って言われてる。それで、ほらコレ」

奈津美はそう言い、地図を差し出した。まずは全国版の地図を見る。ゾンビが発生した県には×印が書かれていて、日本の本州のあちこちに×印がついていた。北海道、四国、九州、沖縄についた×印は少ない。

「本州以外では、ゾンビの発生が少ないようね。発生していても数が少ないか、既に警察と自衛隊が制圧し終わったみたいよ」

と、奈津美がテレビのチャンネルを変えつつ言った。

「すでに空港とかには自衛隊が展開してて、殺到する避難民を選別して飛行機に乗せてるみたいだけど・・・」

「でも、すぐに空港は封鎖されるだろうな」

俺が言うと、奈津美は「何で？」と俺に訊いた。

「本州の方が被害甚大なんだろう？ だったら偉い人が考えるのは、これ以上の感染拡大の防止だ。多くのリスクを負って残りの無事な地域を汚染させるより、殺到する避難民を全員追い返して治安維持と戦力の温存を図るはずだ」

俺はそう言い、テレビに目を向けた。

テレビでは、中継で炎上する中国の北京の映像が映っていた。

第5話 ねんがんの ブッシュナイフを てにいれたぞ!! (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第6話 ゾンビと言っても、色々種類があるのだよ。(前書き)

登場人物紹介

白木 亜衣しろき あい

16歳(高校2年生)

知識 ★★★★★

体力 ★★★★★

攻撃性 ★☆☆☆☆

敏捷性 ★☆☆☆☆

統率力 ★★★★★

武のグループに合流した高校生。清楚。

弓道部に所属し、弓の腕がいい。万年地区大会止まりだった弓道部を県大会の常連に押し上げた。物静かな性格である。

家族構成は父親と妹の麻衣との3人暮らし。父親の職業は警察官。趣味は修行。

第6話 ゾンビと言っても、色々と種類があるのだよ。

時計の針は12時半を指し、台所からチャーハンの盛られた皿（我が家には食器が少ないので、種類はバラバラだった）を手にしたゴリと亜衣が台所から出てきた。皿をリビングのテーブルに並べ、皆が床に座り込む。

「じゃ、頂きます」

とゴリが言い、楽しい(?) 昼食が始まった。

チャーハンの冷蔵庫のご飯を使ったようで、今後の事を考えたのか使う食材と量が少なめだった。俺は橋を手に取り、チャーハンを口へかきこむ。

皆凄惨な死体を見た後だったので、昼食を食べない奴も出るかと俺は考えたが、意外に皆が差し出されたチャーハンを食べていた。死体を見たことなんてどうでもよくなるくらいに腹が減っていたのだろう。

ただし、チャーハンに肉は入っていなかったが。

皆が昼飯を食べ終わった頃を見計らって俺は立ち上がり、皆に向かって言った。

「で、これからどうする?ここにいいのか、避難所まで行くか、それとも家族を捜すか?」

俺が言うと、皆が考え込んだ。

そう、いつまでもここに居る訳にはいかない。今のところここは安

全だが、いつゾンビが押し寄せてくるかわからない。食料だって、俺は1人暮らしなので豊富とは言えない。しばらくして、ゴリが手を上げて言った。

「俺としては、家族を捜したいんだが……」

「五里くんの家ってどこだっけ？」

奈津美がゴリに訊いた。

「この市の2つ隣、松浦市だけど」

「遠すぎるわね」

麻衣が即座に判断した。

松浦市までは電車で40分以上かかる。歩いていくには何時間もかかり、しかもこの状況では松浦市まで辿り着けるかどうか怪しい。ゴリは下のきょうだいが沢山いるから、家族を思う気持ちが大きいのは当然だ。

「松浦市は人口も少ないから、ゾンビの数だって少ないわよ」

「そう。きっと無事に避難出来てるって」

気を落としたゴリを、美雪と奈津美が慰めるように言った。

実際、松浦市は田舎と言っていい程人口が少なく、主な産業は農業だ。だからゾンビさえかわせれば何とかなっているだろう。それに自衛隊の駐屯地もある。

「この状況では家族の無事を祈るしかないわね」

「となると、やっぱり避難所まで行く？」

亜衣が言ったが、俺は避難所に行くのは危険だと考えていた。

「多分避難所はヤバイ。多くの人間が避難したとすれば、そこにゾンビが一体来るだけで最悪の状況になる」

「わざわざゾンビの群れの中に飛び込んで行くも同然、って言いたいのか？」

俺の言葉に、気を取り直したゴリが訊いた。

天災の時なら避難所に行くのは名案だ。しかしゾンビにとって避難所は餌場も同然、殆ど丸腰と言っている人間が多くいるだろうから、まともな抵抗も出来ずに人間が喰われるのは目に見えている。

これが警察署や自衛隊の駐屯地なら話は別だが、生憎豊島市には普通の警察署しかない。

「じゃ、ここに立て籠もるってのは？」

麻衣が言ったが、俺は今は安全だがこれからどうなるかわからない事、食料も保たない事を告げた。

麻衣が黙り、再び室内に沈黙が舞い降りる。
沈黙を破って口を開いたのは、美雪だった。

「じゃあ今日はここで一夜を明かして、明日安全な場所に行きましょ」

「安全な場所って・・・どこよ？」

麻衣が疑問を口にするのと、美雪はテレビを点けて言った。

「自衛隊だって動いてるんでしょ？なら安全な場所くらいあるはずよ。そこに向かうのは？」

「無理だな」

俺は美雪の提案をバツサリと切り捨てた。美雪が少し怒ったような顔をして言う。

「何だよ？何でそう言いきれんの？」

「よく考えればわかることだ。自衛隊の駐屯地や展開してる場所に行っただって、俺達と同じような考えの人間がとくに集まってるはずだ。そして人間が多いって事は、ゾンビが混じってる確率も高くなる」

「でも、ゾンビくらい自衛隊だって倒せるでしょ！？」

美雪は諦めず、強い口調で言った。この状況で希望に縋るのは当然だが、その希望が打ち砕かれた時にパニックを起こしてもらっては困る。

だから俺も早々に皆の希望を打ち砕いて、現実を直視してもらおう。

「そうだな。自衛隊は実戦経験が無いとはいえ、対人殺傷には十分すぎる火器を保有している。被害は少ないだろうな」

「なら、何でダメなの？」

「まずこんな状況に放り込まれた際、人間ってのは家族の安全を考えるもんだろ？自衛隊員だって同じだ。」

家族を助けるため、ライフフル担いだ自衛隊員が脱走するのを阻止する為に、一般人の避難の優先順位は自衛隊員の家族が高いはずだ。家族が安全なら隊員だって安心して任務に集中できるしな」

「つまり、行った所で避難させてもらえるかわからない、ってこと？」

亜衣が締めくくるように言った。俺は頷き、続けた。

「そういうこと。仮に救助されとしてもかなり後だろうな」

「じゃあどうすればいいのよ？」

先程より言葉に棘が少なくなった美雪が訊いた。

どうすればいいか？そんなの俺が訊きたいよ！！と言いたくなるのを我慢して、俺は言った。

「美雪が言った通り、今日は俺の家に立て籠もった方がいい。この近くにあるのは豊島警察署だけど、歩いて30分はかかる。ゾンビの事も考えておくと、日中に辿り着けるかは微妙だな」

「そう・・・、じゃあそれがいいわね。皆それでいいと思う？」

美雪が代表して訊くと、皆は頷いた。こうして俺達のグループの行動計画が決まった。

今日はひたすらゾンビの目を避けて家に立て籠もり、明日の朝に豊島警察署に向かう。

方針が決まった所で、俺達は必要な物を集め始めた。ゴリは保存可能な食料を集め、断水した際に備えてペットボトルに水を詰める。

美雪、奈津美、麻衣は家の中から必要な物を集める役割だ。

ただ俺はやる事があるので、亜衣に護衛を頼み、ラインを伴って一端家を出た。無論身を守る為、刃渡り30センチ以上のブッシュナイフを装備してだ。

「それで、何をするの？」

家の前の道路に出て、弓を構えてゾンビを警戒する亜衣が訊いてきた。

「ん？とりあえず警報装置の設置かな」

「警報装置？」

亜衣が不思議そうな目で俺を見たが、俺は構わず家の中から持ち出

した空き缶と釣り用のテグス糸を取り出した。家の前の道路を50メートル程歩き、道路の両端に電柱がある場所で俺は立ち止まった。亜衣とラインに周囲を警戒させ、電柱の脇にしゃがみ込んだ。

空き缶の上部に工具箱から持ち出した錐で2つの穴を開け、テグス糸を通して空き缶に小石をいくつか入れる。そのまま伸ばしたテグス糸を一端の電柱に30センチ程の高さできつく結びつけ、もう一端に片結びで結びつけた。

「なるほど・・・、ゾンビがこれを引っ掛ければ糸が解け、空き缶が落ちて音が出るって訳ね」

「そういうこと。気休めにしかならんが、いきなりゾンビが現れて慌てるってことは回避できる」

亜衣が関心したように言い、俺は答えながら立ち上がった。そのまま20メートル程下がり、そこにも警報装置を取り付けた。そして道路の反対側の50メートル地点にも警報装置を取り付けている時、周囲を警戒している亜衣が唐突に

「慣れてるのね」

と言った。

「慣れてるって、何が？」

「全部の事。ゾンビが現れた事にも動じてないし、躊躇う事無くゾンビを倒していることも。そして警報装置や必要な物についてまでよく知ってる」

ああ、その事か。確かに一般人から見たら、俺は驚異的なまでに事態に対応出来ていると思われるだろう。もしかしたら不審がられるかもしれない。

結局、女子は制服・下着とも水洗いした後、短パンやTシャツを重ね着してもらい、それぞれ自分の服が乾くまで仮眠してもらう事にした。無論大きな音を出すので洗濯機や乾燥機の使用は禁止。たらいと洗濯板で服を洗った後、ガストローブの熱で服を乾かす方針を取った。

偶然親父の服のサイズがゴリの体格と合っていたので、ゴリには制服が乾くまで親父の服を着てもらう事にした。女子が風呂に入っている間、俺とゴリはリビングでそれぞれ物資の点検を行う。

「・・・ところで、訊きたい事があるんだが」

とゴリが訊いてきたのは、俺がハンティングナイフの刃の具合を確かめている時だった。俺は刃が正常な事を確認して鞘に収め、続いてゴリが学校から持ち出したサスマタの具合を確認する。

「何だ？ 訊きたい事って？」

「お前はゾンビ映画に詳しいんだろ？ 具体的に、ゾンビってどんな種類のがいるんだ？」

サスマタはあちこちが歪み、枝分かれしている部分が今にも外れそう。近い内に壊れそうなので、これは廃棄っと。

俺はそんな事を考えつつ、ゴリの質問に答えた。

「俺が知ってるのはあくまでもフィクションのゾンビだぜ。それでもいいのか？」

「ああ。フィクションだろうとノンフィクションだろうと、知識は多いに越したことはないからな」

ゴリはそう言いつつ、アウトドア用の折りたたみ式スコップを手

取って物珍しそうに見ていた。体格の大きなゴリに持たせるのは、やっぱり大きなスコップかな……？
そんな事を考えつつ、再びゴリの質問に答える。

ゾンビには色んなタイプがある。

まず第一に映画『ドーン・オブ・ザ・デッド』タイプのゾンビ。

『ドーン・オブ・ザ・デッド』は『ゾンビ』って大ヒット映画をリメイクした物だ。ここでは原作を旧ドーン、リメイク品を新ドーンと便宜的に呼ばせてもらう。

旧ドーンのゾンビは、

- ・身体が腐っている
- ・動きがのろい
- ・知識も無い
- ・人間を食べる
- ・ゾンビに襲われて死んだ人間もゾンビとなって蘇る
- ・原因は何かのウイルスっぽい
- ・怪力
- ・頭を潰せば倒せる

が特徴だった。対して新ドーンのゾンビの特徴はほぼ同じだが、

- ・走る

という能力が追加されている。これによって生存者の危険はより高まることとなるのだが、俺達が対峙するゾンビが走るかどうかはわからない。

走るゾンビが出てくるのは『28日後……』という映画の方が先だが、この映画のモンスターは死者が蘇ったものでは無く、感染すると凶暴化するウイルスに罹った人間である。

どちらにしても走り始めるようになったら、俺達にとって終了のお知らせだけど。

続いて和製ホラーゲーム『SIREN』タイプのゾンビ。厳密に言

うとこの作品に出てくるのはゾンビでは無く、屍人と呼ばれるものである。

第1作の『SIREN』に出てくる屍人は、人間が神に近づく為に特殊な赤い水を摂取したものだ。神に近い存在だから、銃で撃つても身体をバラバラにしてもいずれは復活し、倒せない。倒すには特殊な神器？を使う必要がある。

『SIREN』の屍人は元々が人間だったので知識があり、普通の人間を襲うのは赤い水と一緒に神になろうという意味があるのだが、長くなるので割愛する。

第2作の『SIREN2』に出てくる屍人は、屍霊という地球の先住民みたいな存在が、人間の死体に乗っ取って活動しているものだ。似たような闇人というものも出現するが、こちらは闇霊が取り付いたものである。

どちらもその死体の生前の記憶を有するので、

- ・銃で狙撃する
- ・鍵のかかったドアを開ける
- ・言葉を発する
- ・罠を仕掛ける

等でプレイヤーを攻撃してくる。特にこの作品では武装した自衛隊員が多く死に、それに霊が取り付いて屍人や闇人にあちこちから銃撃・狙撃されるという無理ゲーにもなっている。

ちなみに倒しても、別の屍霊・闇霊が死体に移ると復活してしまう為、復活を防ぐには屍霊・闇霊を全て倒すしかない。

もしも警官や自衛官のゾンビに知能があったら、俺達に待っているのはデッドエンドしかない。

最後に紹介するのはブードゥー教のゾンビだ。元々はこれがゾンビの起源である。

このゾンビは人々を襲うものではなく、死体をブードゥー教の司祭が復活させ、奴隷として使役させるものだ。他にも生きている人間

を薬物で自発的意識を失わせ、同じく奴隷にしてしまうものだ。

俺が長々としたゾンビ講義をゴリに終えた時、女子陣で最後に風呂に入った美雪が風呂場から出てきた。美雪は両手で身体を隠すようにして、仮眠を取る2階へ素早く上がって行った。

「ゴリ、お前先に入るか？」

「いいのか？」

「遠慮すんな。俺は最後に入っても問題ないから」

俺がそう言うと、ゴリは「じゃ、お先に」と言い、タオルと着替えを持って風呂場に歩いて行った。俺の膝の上にラインが飛び乗り、俺はラインの頭を撫でてやる。ラインは嬉しそうに目を細めると、俺の膝に頭を預けた。

俺はラインの頭を撫でつつ、テレビのリモコンを手にとった。電源を点け、音量を最小にしてテレビを見る。

テレビでは、ゾンビの発生していない地域が避難民の受け入れに難色を示していること、政府がその機能を海上自衛隊の艦に移転する事を検討中であること、そして避難の優先順位が俺の予想通り公安関係者の家族が高く、その事に市民団体が抗議していることなどが伝えられていた。

本当、世紀末だよな。時間的にはまだ21世紀初頭と言えるけど。

第6話 ゾンビと言っても、色々の種類があるのだよ。 (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第7話 オタクになって何が悪い！？（前書き）

登場人物紹介

白木 麻衣しろぎ まい

16歳（高校2年生）

知識 ★☆☆☆☆

体力 ★★★★★

攻撃性 ★★★★★

敏捷性 ★★★★★

統率力 ★☆☆☆☆

武のグループに合流した高校生。凶暴。

亜衣の双子の妹であり、剣道部に所属している。剣道の県大会で優勝した。

その外見とは裏腹に、性格は凶暴で猪突猛進。男勝りの性格と口調なので、友人からは猛獣扱いされている。趣味はゲーム。

第7話 オタクになって何が悪い!?

夜。

街の方から上がる炎が空を赤く染め、悲鳴とゾンビの唸り声が昼間より多く聞こえる。

「大丈夫かな・・・？」

「ん？何が？」

美雪が不安そうに言い、俺は地図を眺めつつ答えた。

日没と同時に夕飯を食べ、俺、美雪、麻衣は6時間交代の不審番についた。12時まで、ゾンビ達が接近してくるか警戒していなければならぬ。

「ゾンビの事か？ゾンビなら警報装置もつけたし大丈夫だろ」

「いや、その事もあるけど。まさか武がこんな趣味を持ってたなんて・・・」

美雪が呆れたように言った。

今俺達がいるのは、2階の俺の部屋だ。つまり俺の趣味全開の部屋に2人は入っているのだ。

俺は美雪の言葉で、椅子を回転させて部屋の中を眺めた。

壁にかかったエアガン・モデルガンの数々。

箆笥の上に所狭しと並べられ、それでも足りずに本棚にまで並べられているプラモデルの数々。

さらにプラモデル・エアガン関係の月刊誌の数々。その数は参考書

よりも多い。

どこがおかしいのだろうか？

俺がその旨を美雪に訊くと、

「いや、普通の人こんな趣味は持たないでしょ・・・」

と言われた。

俺が首を傾げていると、俺のベッドで横になり、小説（勿論俺の私物）を呼んでいた麻衣が言った。

「人それぞれに興味があるんだから、そこを突っ込んだら負けだろ」
「そうだけど・・・」

美雪はまだ何か言いたそうだったが、俺は構わず机に向き合った。

机の上には豊島市の地図のコピーが広げられていた。俺は蛍光ペンを手に取ると、進むべき進路を考え始めた。

例えば車やゾンビで道が塞がっていること等が考えられるので、別のルートを考えておかねばならない。それも1つや2つだけでなく、幾通りも。

皆の戦闘力を考えれば強行突破なども出来るかもしれないが、それはそれで危険だ。ゾンビなどチャライ、等と考え始め、積極的に攻勢に出られたら困るからだ。ゾンビを倒そうと余計な体力を使ったり、あるいはゾンビの脅威度を低く評価して油断するかもしれないのだ。

なのであっちの道がダメならこっちの道を、その道もダメならそっちを・・・という風に行っていると、あっという間に地図が印刷されたコピー用紙は蛍光インクで染まってしまった。

ようやく10ばかりのルートを選択し、俺は軽く休憩することにした。とはいっても、この不審番自体、休憩のようなものだけだ。

俺は棚に置いてあるテレビの電源をつけ、背もたれに寄りかかりつつテレビ画面を見た。音を最小限に絞ると、美雪と麻衣の視線もテレビに移った。

どうやらゾンビは世界中で大発生しているらしく、人口の多い中国や、元々衛生環境が最悪なアフリカ等では壊滅的な被害を被っているらしい。

無論日本も例外ではなく、自衛隊も出動しているが、駐屯地や基地を防衛し、避難民を輸送するので手一杯だと報道されていた。救助が来るのは当分先だろう。

俺はそんな事を考えつつ、本棚から模型のカタログを取り出し、ページを捲って読み始めた。せっかく買いたいプラモデルがあったのに、この状況では発売されるのはいつになるのやら・・・。。。。美雪と麻衣は、そんな俺を遠巻きに見ていた。人の趣味に口出しする気は無くなったようだが、物珍しいのかそれともドン引きしているのか、俺にはわからなかった。

数時間後、俺の腕時計のアラームが電子音を発して監視の交代を告げ、それと同時に部屋のドアがノックされた。俺はとっさに腰のブッシュナイフに手を伸ばし、いつでも抜けるようにしてドアを開けた。

開いたドアの向こうにはゴリ、奈津美、亜衣が立っていた。眠そうなゴリは、

「・・・交代だ」

と言い、1階に降りて行った。どうやらリビングで警戒するらしい。

ちょうど俺も眠くなってきていた頃合だったし、美雪と麻衣は半分寝ていた。どうにか美雪と麻衣を別の寝室に移し、部屋に1人だけになった俺はベットに横になった。

気づけば物凄い眠気が俺を襲っていた。ゾンビが大量発生するような異常事態で、しかもゾンビ撲殺やら何やら物凄い運動をしたので当然だろう。

俺は腕時計に起きる時間をセットし、目を瞑った。すぐに、俺の意識は闇に飲み込まれていった。

第7話 オタクになって何が悪い！？（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第8話 あーたーらしい朝が来た。きぼーうの朝だ。(b y ラジオ体操) (前

前回のあらすじ..

武くんはミリヲタでした。

第8話 あーたーらしい朝が来た。きぼーうの朝だ。(byラジオ体操)

腕時計のアラーム音で俺は目覚めた。

ぼやける視界で腕時計を見て、目覚ましセットされた時間の午前6時である事を確認する。まだ眠かったが、今の状況では二度寝することは叶わない。

ワイシャツ姿の俺が学ランを身に着けると、部屋のドアがノックされてゴリが入ってきた。ゴリの手には、鞆に収まったままのハンテイングナイフが収まっている。

「おう、起きてたのか。俺が叩き起こさなきゃならんのかと思ったぞ」

「俺は寝起きがいいんだよ。今まで遅刻したことはない」

俺はそう言い、ゴリが投げて寄こした水の入ったペットボトルをキヤッチした。蓋を開けて水を一口飲み、枕元のタオルを掴んで俺は立ち上がった。

「他の連中は？」

「もう起き始めたと思う。幸い、夜間には何も無かった」

ゴリはそう言い、安堵したように肩を竦めた。俺は机の上に放り出してあったブッシュナイフを掴み、学生服のズボンのベルトに鞆を装着した。

俺はゴリと一緒に一階に降り、ゴリは台所へ、俺は洗面所に向かった。さっさと顔を洗ってさっぱりしたい。

俺が洗面所に向かうと、ラインが嬉しそうに尻尾を振りつつ俺について来た。ラインは一晚中一階にいたから、俺と一緒にいれてうれ

しいのだろう。

俺はラインの顔を撫でてやると、洗面台の蛇口を開いて顔を洗い始めた。冷水で洗顔フォームの泡を濯ぎ落とすと、心なしか意識がリフレッシュされた気分になる。

俺が洗面所を出るのとはほぼ同時に、2階から着替え終わった美雪と麻衣が降りてきた。2人とも昨日洗ったセーラー服を身に着けている。

「おはよ、武。昨日はよく眠れた？」

「精神的な意味では安眠できなかったな」

そう訊いてきた美雪に、俺はそう返した。美雪は苦笑し、洗面所へと向かう。

俺はリビングに戻り、やることもなく点けっ放しだったテレビを眺めた。放送局はいくつか減っていて、有益な情報は入りそうに無い。ただ混乱の極致にあることだけは伝わって来た。

俺が頭の中で警察署までのルートを思い浮かべていると、顔を洗い終わったらしい美雪と麻衣が洗面所から出てきた。全員がリビングに集まったのを確認すると、ゴリと亜衣が台所から朝食代わりのおにぎりの乗った大皿を運んできた。

おそらく夜中の内に作っておいたのだろう、おにぎりは冷えていたが、朝食としてはとても美味しかった。

全員が朝食を食べ終わると、俺は昨日のうちに印刷しておいた地図を取り出した。地図を皆に渡し、俺は立ち上がって言った。

「地図を見てくれ。地図に赤や青、緑の線がコピーしてあるだろ？」

「ああ、確かに」

ゴリが地図を眺めて答えた。俺は全員に地図が回ったことを確認し

て続ける。

「道を赤くなぞってある線が、これから豊島警察署まで向かうルートだ。青い線はそのルートが使えなくなった時の為の予備」

「この緑色の線は何だ？」

麻衣が地図の緑色の線を指差して言った。

「緑色の線は、予備の予備ってとこかな。本当はもっと予備のルートを確保しておきたいんだが、これ以上やると汚くなって読めなくなる」

俺が答えると、麻衣は「フーン」と言って再び地図を眺めた。とりあえず皆それぞれのルートを頭に叩き込んだようなので、家から出発する準備が始まった。

食料や水は、配分できる物は6等分して、皆が持つバッグに収められた。配分できない物はゴリのバッグに入れられた。

ノートパソコンは奈津美が持った。情報収集をするのにパソコンは欠かせず、そして上手くパソコンを扱えるのは奈津美だからだ。

救急箱の中身も食料と同じく分け、各自で持つことになった。もし負傷した場合、それぞれが自分で手当てすることになっている。

家中から集められた武器になりそうな物も、誰が何を持つか昨晚の内に決めておいた。

俺の場合、ガキの頃に使っていた金属バットと、親父の私物だったブッシュナイフを持つことになっている。ブッシュナイフは人も斬れる程頑丈だが、それでも何十体というゾンビを斬り続けていられるものではない。よって主な武器は金属バットにしたのだ。

皆が自分の獲物を携え、玄関に集結した。腕時計を見ると、時刻は既に午前7時を回っていた。

玄関前に積んであったバリケード代わりの椅子やテーブルをゴリがどかし、ドアを少しでも開けた。ドアの隙間から外を見て、ゾンビがいない事を確認したゴリは、ドアを大きく開けた。

俺は開いたドアから外に飛び出し、即座に金属バットを構えて周囲を警戒した。が、先程確認した通り、外にゾンビの姿は見えない。俺とゴリが周囲を警戒するなか、残りの4人が外に出てきた。俺は家に誰も残っていない事を確認すると、ドアを施錠し始めた。

いつか家に帰って来た時、再び暮らせるように施錠は厳重にした。最も、帰ってこれない事も想定しているが。

グッバイ、俺の電動ガン達。グッバイ、俺のプラモデル。またいつか戻ってくる時まで待ってろ。

俺はそう胸中に呟き、家の敷地から出た。

昨日と同じくいい天気だった。電線のあちこちにカラスが留まり、街から腐臭が漂ってくることを除いては。

俺が家の門を閉め、歩き出そうとした、その時だった。俺の傍らにいますラインが急に立ち止まり、鼻をひくつかせた。

「おい、どうしたライン？」

俺がそう訊くと、ラインは低く唸り声を上げ始めた。まずい、これは嫌な予感がする—————。

立ち止まった俺の耳に、カランという金属音が聞こえた。その音で皆が立ち止まり、俺は恐る恐る後ろを振り返った。

俺の目に映っていたのは、曲がり角から現れたゾンビの群れだった。

第8話 あーたーらしい朝が来た。きぼーうの朝だ。(b yラジオ体操)(後妻

御意見、御感想お待ちしております。

第9話 ゾンビにかこまれた! たたかう or にげる? (前書き)

前回のあらすじ..

ゾンビに囲まれちゃいました。てへっ☆

第9話 ゾンビにかこまれた！ たたかう or にげる？

道の反対側からゾンビ達が現れた事で、俺達は無意識の内に一步後ずさりしていた。俺は足元で唸り声を上げるラインを黙らせる。

美雪が震えつつ、小声で

「・・・誰か音出した？」

と訊き、皆が一斉に首を横に振る。

とにかく音を出さずに逃げれば安全、と思った俺は、

「音を出さずに歩いて逃げるぞ」

と言い、振り返ってゆっくりと前進した。

だがその足もすぐに止まった。俺達が進もうとした方向からもゾンビの集団がやって来ていたからだ。

これで、俺達は道の前後をゾンビに囲まれた。このままではゾンビの餌食だ。

なぜ？どうしてだ？誰も音を立ててないし、あんな大集団のゾンビが現れるはずなんて・・・。

1、たまたまここまで来た

↓でも何であんな大集団がやってくる？

2、音を聞きつけた

↓俺達はそんなに音を立てた覚えは無い

3、他の探知手段で俺達を見つけ、ゾンビ達がいつの間にか合流して大集団になった

↓他の探知手段って何だよ!?

俺が3つほど原因を考えていると、不意にゾンビ達は俺達めがけて前進を始めた。それも、道の左右から。俺は足元で唸るラインを見て、閃いた。

「・・・臭いだ」

「え? 何だって?」

武器のスコップを構えたゴリが、俺の呟きに反応した。

「そうだ! 臭いだよ!! ゾンビは音だけじゃなく、人間の臭いにも敏感なんだ!」

だとしたら、ゾンビ達がここにいる理由もわかる。おそらく市街地で人間を襲っていたゾンビ達は、俺達の臭いをかぎつけてここまでやってきたのだろう。

だとしたら、無音で行動することにもはや意味は無い。どこにいてもゾンビに臭いを気取られてしまうからだ。

「原因はわかった。それでもどうやってゾンビの群れを突破するんだよ?」

麻衣が愛用する木刀を構え、言った。

俺は叫んだ。

「亜衣、弓で前方のゾンビを何体か倒せ! ゴリと麻衣はそこに突っ込んで突破口を開け! 残りは後に続いて突破しろ、俺が殿をする!」

俺がそう言うと、皆が頷き、さっそく亜衣が弓を構えた。

同時に俺が「ライン、ゴー！」と言うと、亜衣が矢を放つのとラインが走り出すのはほぼ同時だった。まず亜衣が次々放った矢が先頭集団のゾンビの頭に突き刺さり、続いて猛スピードで走っていたラインが残ったゾンビの腹に体当たりをぶちかました。ラインの体重とスピードを受けて先頭のゾンビが倒れると、その後ろに立っていたゾンビ達が次々と将棋倒しを起こす。

そこに木刀を構え麻衣とスコップを持ったゴリが突撃した。ゴリがスコップを振り回してゾンビ達の頭を叩き、動きが鈍ったところを麻衣が木刀を振り下ろして次々ゾンビの頭を潰していく。

なるほど、ゴリが「人間重機」、麻衣が「猛獣」と呼ばれるのがよくわかった。ゴリと麻衣は見事なコンビネーションでゾンビ達を次々倒し、ゾンビの包囲網に突破口を開いた。

「今だ、行け！行け！行けーッ！！」

俺は叫び、亜衣、奈津美、美雪が駆け出す。俺は3人の後を殿として続き、背後から迫ってくるゾンビを警戒した。ラインはというと、さっさとゾンビの足元をすり抜けてゴリと麻衣の許にいた。

先を進む奈津美が、自分に掴みかかろうとしたゾンビをゴルフクラブで押しのける。亜衣は奈津美の後に続き、その後ろの美雪がバールをふるってゾンビの頭を叩き潰した。

俺もゾンビの群れに突入し、後ろから迫ってくるゾンビを金属バットで叩いていた。奈津美、麻衣、美雪が幅10メートルにもわたるゾンビの群れ抜け、俺もあと少しで突破できるという時に、俺の背後にいたゾンビが俺に急接近してきた。

金属バットで殴るのは間に合わず、俺はゾンビ目掛けて回し蹴りを放った。一応小学校の時に空手をやっていたので、俺の回し蹴りは上手くゾンビの顔面を捉えた。

ゾンビの前歯が折れる感触が足裏から伝わり、ゾンビが仰向けに倒

れる。これまた後ろのゾンビが巻き込まれ、折り重なったゾンビ達
がもがいている内に俺はゾンビの群れから脱出した。

すでにゾンビの包囲網を突破していたゴリ達は、彼らに俺が追いつ
くと走り始めた。一戦交えた後に走り続けるのはキツイが、この際
文句は言えない。

果たして、警察署に無事に辿り着けるのだろうか……？

第9話 ゾンビにかこまれた！ たたかう or にげる ? (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第10話 警察が壊滅するって、お約束だよね？（前書き）

随分久し振りに投稿します。迷惑をおかけしましたorz

第10話 警察が壊滅するって、お約束だよね？

俺は違和感を感じていた。

家から脱出してから十数分、俺達は警察署に向けて走り続けていた。時々ゾンビの集団に遭遇したが、大集団の場合は走って逃げるか、少数の場合はゾンビを倒しながら順調に進路を進んだ。

それが、警察署に近づいた途端、ゾンビの姿が少なくなった。道にゾンビがいたとしても、1体か2体くらいしかないのだ。

俺が考え込んでいると、隣を歩く美雪が

「どうかしたの？」

と俺に訊いてきた。俺は顎に手をやりつつ言う。

「何かおかしい」

「何かって、何よ？」

「ゾンビの数が少なすぎる」

俺が言うと、美雪は『それがどうした？』とでもいうような表情で首を傾げた。アホか、こいつは？

俺の話を聞いたのか、ゴリも立ち止まり、

「何かおかしいんだ？」

と訊いてきた。俺は皆に立ち止まるように言い、話し始めた。

「まず、ゾンビは人のいる所に集まるって話はしたよな？ 奴らは多分、音と臭いで人を感じているんだと思う」

「ええ。ネットで調べた限りでは、多分その考えで合っていると思う」

奈津美が答えた。

「でさ、俺達がこれから行くのは警察署だろ？ もし警察がまだ機能していて、生きてる人間が沢山いるなら、もっとゾンビが警察署の方向に向かってきているはずだ」

「警察が壊滅したかもしれないって言いたいのか？」

俺の話を聞いた麻衣が、不安そうな表情で言った。一瞬その表情に萌えてしまいがちながらも、落ち着きを保って俺は話し続ける。

「仮に警察が壊滅していたとしたら、そこにいた警官や非難してきた人間はどうなる？ ゾンビになる可能性が高いはずだ。もし警察署にいた全員がゾンビになったとしたら、今度は逆に俺達に向かって多くのゾンビがやってくる計算になる」

「でも、余りゾンビはいないわね」

亜衣が言った。皆が不安そうな顔をしていたので、俺はさっさと結論を言った。

「このことから勘案するに、警察署はとっくに壊滅したか、あるいは放棄された可能性がある」

「そんな・・・！！」

美雪が悲痛な表情を浮かべたので、俺は慌てて言った。

「ま、まあ俺の勝手な考えだから心配すんな。もしかしたらゾンビに気づかれてないだけかもしれないし」

俺はそう誤魔化すと、再び走りだした。俺の考えが当たっていないことを祈りながら。

そして、更に数分後・・・・・・・・・・。

俺達は呆然とした表情で、警察署を見つめていた。

外から見た限り、警察署はとくに放棄されていた。門はゾンビが押し寄せた時に壊れたのか折れ曲がり、赤色灯を回転させたままのパトカーと消防車が1台ずつ放置されている。

そして極めつけに、ゾンビの死体が警察署の正面駐車場に無数に転がっていた。どれも胴体や頭に穴が開いていたので、恐らく銃で射殺されたのだろう。その証拠に、あちこちに空薬莖や拳銃の弾倉が転がっている。

門の前にあった死体は、殆どが自動車のタイヤで轢かれた様に押し潰されていた。警察署に立て籠もっていた人間達が、脱出する際に轢いていったのだろうか。

少なくとも・・・・・・外から見た限り、生きてる人間はいなさそうだ。

「・・・・どうすんのよ?」

目に涙を見せつつ、美雪が言った。脱出できると期待していた分、衝撃が大きかったのだろう。

周りを見ると、皆無表情になっていた。重い雰囲気漂っているのがわかる。

「・・・とりあえず、何か情報が得られるかもしれない。もしかしたら銃も手に入るかも」

俺はそう言い、警察署の敷地へと足を踏み入れた。やる事があると安心するのだろうか、俺の後ろに皆が続いた。

放置されているパトカーの横を通り、正面玄関に至った。正面玄関には、腕に咬み傷があり、頭を吹っ飛ばされている警察官の死体が倒れていた。咬まれてゾンビ化し、同僚に撃たれて死んだってところだろう。

俺は警察官の死体の傍らにしゃがみ込むと、何か使えそうな物を持つていないか死体を漁り始めた。余り気分がいいものではないが、生き残っていくためには仕方が無い。

残念ながら、死体の腰のホルスターには拳銃が収まっていなかった。同僚達に回収されたのだろうが、俺としては残念極まりなかった。拳銃があれば多少は戦うのが楽になるし、何より一発で自決できる。俺はそんな事を考えつつ、死体を漁り続けた。俺以外の5人は何か有益な物がないか、「生活安全課」とのプレートが掲げられたカウンターの周りを探していた。

結局、警官の死体から回収できた使えそうな物は、伸縮式の警防が1本、そして手錠が1つだった。ゾンビ相手に警棒はリーチが短すぎるし、手錠なんかゾンビに掛けたって仕方が無い。とりあえず、「物騒な人間」対策用として持っておくことにした。

すると突然、ラインが鼻をひくつかせ、ワン！と吼えた。

それと同時に俺が死体の傍らから立ち上がると、パンッという銃声が聞こえた。それも、どうやら警察署内から。

銃声は2回、3回と続いた。銃声を聞いた俺達は顔を合わせると、すぐさまその方向へと走り出した。どう考えても銃を持っているのは警官だし、生きているのなら合流したい。

階段を駆け上がり、俺達は2階へと到達した。署内にゾンビが何体かいたが、銃を撃っている人間と合流するのが先だ。ゾンビに構っている暇は無い。

2階には「犯罪捜査課」だの「交通安全課」だの書かれたプレートが天井から下がり、あちこちに机や棚が並んでいた。とても狭くバットは使いにくそうだったので、俺は金属バットを背負っていたケースに収めると、腰のベルトに装着した鞘からブッシュナイフを引き抜いた。

ブッシュナイフを順手で構え、銃声がした方向へと、俺を先頭にしていって進んでいく。途中で再び銃声が聞こえ、俺は銃声が近くでなった事がわかった。

銃声のした方向に走っていくと、小さな給湯室があった。入り口にはゾンビの死体が積み重なり、今も新しいゾンビが給湯室に侵入しようとしている。

間違いない。給湯室に人間がいる。

そう判断した俺は、ブッシュナイフを構えてゾンビに突進した。俺に気づいたのかゾンビが振り返ったが、構わず俺はゾンビの頭をブッシュナイフで切りつけた。

頑丈な刃はあっさりゾンビの頭蓋骨を貫通し、ゾンビの頭が大きく切り裂かれる。倒れたゾンビを押し分け、給湯室の中を見た俺は息

を飲んだ。

あちこちから出血し、仰向けに倒れている警察官がそこにはいた。

第10話 警察が壊滅するって、お約束だよね？（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第11話 内臓がないぞう（前書き）

前回のあらすじ..

警察は壊滅してました☆

第11話 内臓がないぞう

俺が給湯室に入ると、床に倒れていた警官が「動くな!」とかすれた声で叫び、拳銃を向けてきた。銃口の黒い穴が俺に突き出され、俺はとっさにホルドアップした(血のついたブッシュナイフを持ったままだったが)。

その様子を見た警官は

「子供か……」

と呟き、銃を持つ手がだらんと下がった。

いきなり拳銃を突きつけられ、思考停止していた俺は、銃口を外されたことによってようやく手を下ろした。そして倒れている警官を見た俺は、その様子に息を飲んだ。

内臓がないぞう。

実際にこのギャグが通用するのを初めて見た。

床に倒れていた警官は、青い制服の腹部を破られ、服の下がむき出しになっていた。

だが、破れた制服の下に見えていたのは……、暗い空洞だった。

本来そこにあるはずの皮膚が、無かった。

遅れてやってきた皆も、警官の壮絶な様子に息を飲んだ。中には、余りの酷さに目を背けた奴もいる。

「・・・ああ、これか？ 気を抜いた一瞬に、やられちゃったよ」

俺達が無言でいるのに気づいた警官は、そう言って唇の端をつり上げた。笑ったのだろうが、口から鮮血が零れている状態では、とても笑ったようには見えない。

警官の身体は真っ青になり、床には血の池が広がっている。まるで血をバスタブ一杯分ぶちまけたようだった。

どう見ても死亡寸前です。本当にありがとうございました。

・・・という冗談は置いて、俺は警官の傍らにしゃがんだ。一応傷の具合を診るためだ。

警官の腹部は大きく裂かれ、本来そこに収まっているはずの内臓は喰われて無くなっていた。普通の人間だったらとくに失血死かショック死している状態なのだが、これもゾンビに咬まれた影響なのだろうか？

気になった俺は警官に訊いてみた。

「・・・いつやられたんです？」

「10分かそれくらい前かな」

「痛くは無いんですか？」

「・・・全然。それどころか何にも感じない」

警官はそう言い、大きくせきをした。同時に口から血の霧が飛び、俺は慌ててそれを避けた。

これでは、どんな名医がここにいても、彼を救う事はできないだろう。それほど、警官は誰が見ても重傷だった。

一応まだ確認しておきたい事があるので、まだ俺は質問を続ける。

「ここはどれくらい前に放棄されたんですか？」

「・・・3時間前だ。ゾンビどもが多く押し寄せてきて、オマケに保護した民間人が署内でゾンビになって、もう駄目だって結論が出たんだ」

「あなたは何でその時に脱出しなかったんですか？」

「・・・駐車場に停まっていたバスで逃げる直前に、腕を咬まれたんだ。同僚は俺を撃ち殺すのが不憫だと思ったのか、俺を殺さないでここに置いて行っただ」

俺はそこでおかしい事があるのに気づいた。

ここが放棄されたのだ3時間前、そしてこの警官が咬まれたのがその少し前。実に3時間以上咬まれてからゾンビ化していないことになる。

俺達が今まで遭遇したゾンビは、殆どが学校や街で出会った奴だ。

そして学校では、咬まれた生徒はすぐにゾンビになっていた。

どういうことだろう？

俺のその疑問に気づいたのか、警官が血塗れの口を開いて言った。

「・・・たしか、県警本部から来た情報によると、咬まれてもゾンビにならないか、咬まれてもしばらくはゾンビにならない人間がいるという事だ。俺もそうだったんだろうが・・・」

警官はそこまでいうと、もはや空洞でしかない自身の腹部を眺めた。咬まれても大丈夫ってことは、やっぱりこのゾンビ化現象は感染症の一種なのだろうか。俺達は咬まれても大丈夫だと信じたいが、それは確率的に低いだろう。まさか実際に咬まれて確かめる訳にもいくまい。

「それで、無事に逃げ出せた人たちはどこへ？」

「近くの自衛隊駐屯地へ行くって計画だったが・・・、皆が出発した直後、今度は自衛隊から通信が来た」

「何て？」

「『これ以上の感染拡大を阻止する為、そして部隊の被害を抑えるために、今後はゾンビだろうが人間だろうが無差別射殺する』・・・だそうだ」

＼（＾Ｏ＾）／オワタ

無差別射殺パターンキタコレ！まるで「28週後・・・」だよ。

という冗談は捨てといて、これで俺達が助かる可能性がまた減った。警察署を脱出したという人たちはバスに乗っていたから撃ち殺される確率は低いだろうが、徒歩である俺達が自衛隊の駐屯地に助けを求めても、ゾンビと誤認されて射殺可能性が高くなる。

最も、最寄の自衛隊駐屯地でも市のはるか向こうだったので、そこまで行く事はないだろう。しかし、今後自衛隊に助けを求めるのはほぼ不可能になった。

俺がそんな事を考えていると、また警官が大きく咳き込んだ。口から血の塊が飛び出し、警官の呼吸が荒くなる。

「・・・どうやら・・・、俺もそろそろ死ぬっぽいな。・・・多分ゾンビになるんだろう」

警官はまた咳き込んだ。それと同時に、警官の目が真っ赤になり、瞼の端から血の涙が流れた。目の毛細血管が破れたのだろうか。

とりあえず、重傷でも死んでいないこの警官は、死んだら恐らくゾンビになるだろう。そんな事、彼が望んでいるだろうか？

俺の考えを読み取ったのか、警官は口から血を流しつつ言った。

「・・・俺は、ゾンビになりたくない。今のうちに、一発で殺してくれ」

その言葉を聞いた皆が、一斉に他の面々を見回す。殺してくれという願いを誰が実行するのか、という気持ちで他の人を見たのだろうか。

誰だって、進んで人を殺したいわけじゃない。だが死んだらゾンビになるし、死に掛けの人間の願いだ。無下に断る訳にもいくまい。

だから、俺は言った。

「わかりました」

「ちよつと武、何言ってるの!？」

すかさず、美雪が抗議の声を上げた。だが俺は「黙ってろ!!」と一喝すると、警官に歩み寄った。

「どうすればいいですか？」

「・・・銃を、使ってくれ。それなら一発でカタがつく。・・・本当なら、自分で死にたいが、腕がもう動かないんだ・・・」

「わかりました。まだ弾はありますか？」

「銃の中に何発か。後は俺のポケットに装填済みの弾倉が2本ある。後、警察署内の武器は全て持って行かれたから、探しても何も無いと思う」

俺は無言で頷くと、倒れている警官の手から拳銃を取り上げた。SIG-P230JP、それがこの拳銃の名前だった。確か県警では数年前、回転式のニューナンプ拳銃からこの拳銃に切り替えたのだと、俺は脳内銃器データベースから情報を引っ張り出した。

俺は警官のズボンのポケットに手を入れ、そこから拳銃の弾倉2本を取った。装填済みの2本の弾倉を自分のポケットに入れ、俺は手にしたP230自動拳銃のスライドを軽く引いた。

排莢口から金色の弾丸が見え、弾が薬室に装填してある事を確認すると、今度は弾倉を排出する。

弾倉に残っていた弾は2発。これらとさっき回収した2本の弾倉に入っていた弾の合計は、わずか19発。とてもじゃないが、ゾンビに立ち向かうには足りない。

それでも、人を殺す分には十分だが。

俺は警官の足元に立つと、

「・・・あなたの名前は？」

と訊いた。

警官は苦しそうに

「・・・中田 なかた 栄一 えいいち だ」

と答えた。

「中田さん、色々ありがとうございました。生き残れたら、あなたを2階級特進させるよう、警察の人に言うておきます」

「よせよ・・・。俺は何もしていない。俺は一足先にあの世に行くが、君達は生き残れよ」

中田さんは苦笑すると、

「さあ・・・、さっさとやってくれ」

と呟き、瞼を閉じた。

俺は拳銃を両手でしっかり握ると、中田さんの頭に照準を合わせた。エアガンとは違い、実弾がつまっただずしりとした重みが、俺に銃は人を殺す道具だという事を教えてくれる。

しっかりと狙いを定めた俺は、引き金を引いた。パン、という軽い音と反動と共に銃口から火が吹き出し、中田さんの額に小さな穴が開いた。

血が溢れた床に落ちた空薬莢が、小さな金属音をたてた。

第11話 内臓がないぞう（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第12話 ねんがんの かえんびんを てにいられたぞ!! (前書き)

前回のあらすじ..

武は中田さんから拳銃を受け継いだ。

第12話　ねんがんの　かえんびんを　てにいれたぞ!!

俺は中田さんを撃ち殺した後、拳銃をベルトに挟んだ。俺が中田さんを撃った事を皆に非難されるのでは、と思っていたが、俺の予想に反して皆何も言わなかった。

残酷だが、死なせてやる事が本人にとっても一番良い事だとわかったのだろうか。どちらにしても、彼らがこの世界で生き延びるには、残酷な判断を下す事も必要だとわかる必要がある。

「:じゃ、何か探すか？」

亜衣が、重苦しい雰囲気を払うように明るく言った。

確かに、色々と思えそうなものを探す必要がある。俺は頷くと、

「そうだな。1階はさっき探したから、2階と3階を探そう。俺はラインと一緒に色々探すから、お前らは手分けして2階と3階を探してくれ」

俺がそう言うと、皆は早速固まり、誰がどこを探すか決め始めた。結局、2階は俺とライン、亜衣と奈津美、3階は美雪、麻衣、そしてゴリが使えるような物を探す事となった。

その後、何かあっても無くても20分後までには1階入り口に戻る事を確認すると、俺たちはそれぞれ割り当てられた階に向かった。

俺は亜衣達とは別の方向に向かい、廊下を歩いていた。俺の目の前をラインが歩いているので、ゾンビが居たら吠えたりなんなりするだろう。

「…にしても、まさかゾンビが出てくるなんてな。お前もゾンビの肉は食っちゃだめだぞ、映画とかだとゾンビ犬になっちまうってパターンがあるからな」

俺は一人、ラインに対して話しかけていた。しかしラインは俺の話など興味がないのか、あるいはただ単に人間の言葉が分からないのか、あるいはその両方なのか、そっぽを向いたまま歩き続けていた。

「…冷たいな」

俺が言うと、ラインはいきなり立ち止まり、そこにあったドアの前で鼻をひくつかせた。俺がそのドアを少し開けてみると、部屋の中にはいくつもの棚が並んでいるのが見えた。どうやら何かの保管庫らしい。

俺はドアを半分くらいまで開くと、「ライン、ゴー」と言って部屋の中を指差した。ラインはすぐさま部屋に飛び込み、ややあってラインの鳴き声がした。おそらく、ゾンビはいないのだろう。

俺はバットを構えたまま部屋に入り、そして周囲を見回した。

部屋に並んでいた多くの棚に入っていたのは、免許証だの、手帳だの、両刃ナイフだの、血の付着した包丁だの、色々と犯罪に関わっているようなブツが、ビニール袋に包まれて置かれていた。

それらのブツをよく見ると、名前や時間、場所等が書かれたシールが、それらのビニール袋に張られていた。どうやらここにある物は、犯罪の遺留品や押収品、証拠品らしい。

俺はそれらの押収品の並んだ棚の間を歩き、何か使えそうな物が無いか見回した。だが並んでいた凶器は、殆どが刃の短いナイフや包丁であり、しかも血が付いていたので強度や刃の鋭さが悪くなっているに違いない。

俺が溜息をつくとき、床に座り込んだラインが大欠伸をした。オマエ

も手伝え、と言いたくなかったが、相手は犬だ、言うだけ無駄つてものである。

俺がラインから視線を外すと、部屋の端にあった棚に、何本かの酒瓶が置かれているのが見えた。俺は棚に近寄って、その酒瓶を手にとった。

一見普通の酒瓶だったが、その脇にはガスコンロで使うサイズのガスボンベがビニールテープで括りつけられた。しかも酒瓶の口にはめられていたのはボロキレだ。

俺はその酒瓶を袋から取り出すと、臭いを嗅いでみた。酒の臭いではなく、ガソリンのような臭いが漂ってくる。

こいつは火炎瓶だった。そういえば、最近放火魔が捕まったというニュースを聞いた記憶がある。

これはおそらくその放火魔が作ったのだろう。酒瓶の脇に括りつけられたカセットボンベは、熱で爆発させて殺傷能力を増す為のものか。

俺は迷う事無く火炎瓶をリュックに突っ込んだ。全部で3本あり、しかも中には液体がたっぷり詰まっていたので結構重量があったが、何とか耐えられる程度の重さだった。

無理やり火炎瓶をスペースの無いリュックに詰めた俺は、押収品保管庫から廊下に出た。ラインも俺に従い、再び俺の先に立って廊下を歩き出す。

その後しばらく色々な部屋を物色したが、使えそうな物は無かった。約束していた20分間が経とうとしていたので、俺は一階の入り口に戻った。

俺が戻ると、そこには既に皆がいた。どうやら俺より先に、色々使えそうな物を見つけていたらしい。

まず亜衣と奈津美が見つけたのは、携帯式の無線機だった。本体からマイクとイヤホンがコードで伸びていて、両手が塞がった状態でも使えるのが利点だった。

ただし2組しかないので、俺とゴリが持つことになった。

続いてゴリたちが見つけたのは、大きな市内の地図だった。その地図には、ゾンビが大量発生している場所、車で塞がっていて通れない場所、そして避難所の場所が書き込まれていた。

ただし、避難所を示すマークには殆どが×が付けられていたので、その避難所は壊滅したと考えた方がいいか。

最後に俺が火炎瓶を皆に見せると、唐突に俺のポケットから携帯電話の着信音が鳴った。

第12話　ねんがんの　かえんびんを　てにいれたぞ!!　（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

なお、この話に出てくる「押収品保管庫」なる部屋は、完全に作者の創作です。実際にあったとしても、大分違う様子だと思います。

第13話 おぶつはしょうどくだー! (前書き)

地獄の試験期間が終わりました。

随分間が開いてしまいましたが、ようやく再開できます。感想等を返信することが出来ず、申し訳ありませんでしたorz

第13話 おぶつはしょうどくだー！

ポケットの中のケータイが着信音と共に震え、俺は慌ててケータイを引っ張り出した。いきなり着信したので、一瞬心臓が止まるかと思ったよ。マナーモードにしておくべきだった。

俺はそんな事を考えつつ、電話を掛けてきた相手の名前も見ずに通話ボタンを押した。俺のケータイは掛けることも掛かってくることも極端に少ないので、いちいち相手の名前を見る習慣がないのだ。俺がケータイを耳に当てると、

『・・・ああ、よかった繋がった。お兄ちゃん、助けて!!』

という少女の泣き声が聞こえた。

一瞬誰だか判らなかった俺は、ケータイを耳から離し、画面に表示されていた名前を見る。

表示されていたのは「岩崎 遥^{いわさき はるか}」という名前だった。彼女は俺の親戚である。

小さい頃は家が近かった事もあってよく遊んであげたのだが、彼女の家族が豊島市の北部に引っ越した事により、今では遥と会う機会は少なくなっていた。

しかし何故彼女が電話を掛けてきたのか？そう思った俺は、とりあえず遥に訊いてみた。

「どうした遥？今どこだ？」

『学校だよ！昨日からずっと閉じ込められてるの！友達も一緒なんだけど・・・きゃっ!!!!』

遥が悲鳴を上げた瞬間、イヤホンから何かを叩く音が聞こえた。彼女はゾンビに近い場所にいるのか？
イヤホンからは他の少女の悲鳴が聞こえ、彼女達が混乱の極みにいることが伝わってくる。

「さて、落ち着け！何で学校にいるんだ？」

『昨日音楽の授業があつて、それからあのゾンビ達が来て……。先生達は逃げようって言って外に出て行ったんだけど、すぐに殺されちゃって……。』

「水とかは大丈夫か？誰か怪我したりは？」

『怪我人はいないよ。音楽準備室に水道があるから水は大丈夫なんだけど、ご飯は食べてないし……。』

遥はそこまで言うと、再び泣きはじめた。

俺は後ろを振り返り、怪訝な目でこちらを見ている皆に言った。

「俺の親戚が学校に閉じ込められて、助けてって言ってる」

「アンタの親戚が通う学校って？」

奈津美が訊いてきたので、「豊島第2中学校だ」と答えた。すると、すぐに皆の表情が険しくなった。

当然だ。豊島第2中学校はここから更に北側、市の最北端に位置している。今から歩いていっても、到着するのは午後になる。

さらに移動距離が長いことは、ゾンビに襲われる可能性も高いということだ。自分の身の安全を優先するか、見ず知らずの友人の親戚を助けるか、優先順位がどちらが高いかなんて、どんなバカでもわかる。

皆は、自分達の安全の為に彼女達を見捨てるべきだと、俺に対して目で訴えていた。

それを見た俺は言ってやった。

「何だよ……。自分の身が第一だから、そんな奴らは見捨てろとでも言いたいのか？今までだって何度も死に掛けたのに、そんな事が恐いのか？」

「でも、ここから中学校までどれだけあると思ってるの？今から行って、途中で襲われたらどうするの？」

「そうだ。それより松浦市の自衛隊駐屯地まで行って、それから自衛隊に助けてもらえるよう言えばいいんじゃないか？」

美雪と麻衣が、代わる代わる言った。

彼女達だって、本心では助けてやりたいのだろう。でも、今の世界では自分の身を守るのが精一杯で、誰かを助ける余裕は無いのだ。だが俺は続けた。

「自衛隊に言ったって、助けに行けるほどの戦力を割けるはずがないだろう！第一、ゾンビに間違えられて射殺されたらどうする！？そもそも遙達はメシすら食ってねえんだぞ！」

「ッ！そうは言っても……………」

美雪はなおも食い下がった。麻衣も同じ意見のようで、亜衣とゴリはどちらの側につくか決めかねているようだ。

……仕方ない。

「遙、今から助けに行くから待ってろ。しばらくの辛抱だ」

『うん！ありがとうお兄ちゃん！！』

遙の嬉しそうな声が聞こえ、俺は通話を終了させた。「助けに行く」との俺の宣言に、皆は目を白黒させていた。

「お前らがそんなに臆病チキンなら、俺一人で行く。お前らはさっさと自衛隊でもどこへでも行くがいいさ」

「ちよつと武、本気で言ってるの!？」

奈津美が怒ったように言う。俺はラインを呼び、それから答えた。

「ああ。俺は困っている人間を見捨てたくは無い」

そう言うと、俺はラインと共に警察署の門へ歩き出した。

俺は本気だった。親のいない俺にとって、遥は年の近い親戚だ。これ以上親類がいなくなるのは気持ちの悪い事ではない。

俺が警察署の正門まで来た時、背後から

「・・・・・・・・・・しょうがねえなあ」

とゴリが呟く声が聞こえた。俺が足を止めて振り返ると、ゴリは放置されていた消防車によじ登り、車体に備え付けられていた防火用の斧を取り外していた。

「なにやってんの、お前？」

「お前一人じゃ心配だ。だから俺もついて行くさ」

あちこちが歪んでしまったスコップを捨て、代わりの赤色に塗装された斧を担いだゴリが、笑いと共に言った。

「・・・・いいのかよ？危ないぜ？」

「いいさ、乗リかかった船だ。それに見捨てて逃げ出すなんて後味が悪いし、それに漢おとこの名が廃る」

ゴリが言うのと同時に、亜衣も俺達に歩み寄ってきた。

「私も行くわ。逃げ出したなんてお父さんに知られたら、きつと悲しむと思うから」

亜衣と麻衣の父親は警察官だった。亜衣も市民を守るという父親の職業を尊敬しているのか、誰かを助けたいと思う気持ちは強いようだ。

一方、いまだにどうするか迷っていたらしい奈津美、麻衣、美雪の3人は困ったように目を合わせていたが、麻衣が大きな溜息を吐いて言った。

「あー、わかったよ！行くよ！アタシが逃げ出すなんてかっこ悪いじゃねえか！」

奈津美、美雪も同じように頷き、俺達に歩み寄ってきた。

俺は皆に感謝しつつ、「ありがとう」と言った。ある者は笑顔で、ある者は苦笑で返しつつ、皆が遥達を助けに行く覚悟を固めたらしいと俺は判断する。

よかった、誰かを見捨てる事をしないなら、まだこいつらは人間の心を持っている。少なくとも、これから先も、俺とこいつらは仲良くやっていけるだろう。

「・・・で、ゾンビが寄って来てるんだけど？」

奈津美の声で後ろを振り返ると、警察署の前の道路の南側から、ゾンビの集団が押し寄せてきていた。警察署の前の道は南北に延びる一本道なので、必然的に北に進むしかない。

ま、ちょうど進路がそちらなので別にいいことだが。

「よし、ゾンビに追いつかれない内にさっさと行くぞ。ゴリ、麻衣はいつもどおり前に、残りは2人の後をついて行け」

俺が言うと皆は頷き、さっさと警察署の敷地を抜け出した。

ゾンビにストーキングされるのも面倒なので、俺は警察署から持ち出ししてきた火炎瓶をリュックから取り出した。ここで1個使って威力を確かめてみたい。

「なにやってんの、武？」

「ちよつと火炎瓶を使ってみる」

美雪が訊いてきたので、俺はポケットからライターを取り出しつつ言った。

ライターで瓶の口に詰められたボロキレに火をつけ、俺は十分距離を取り、思いつきり火炎瓶を投擲した。

「汚物は消毒だー!!」

俺がそう言った瞬間、火炎瓶が先頭集団のゾンビの頭にぶち当たり、大きな音を立てて割れた。瓶の中から火の着いた燃料が撒き散らされ、押し寄せていたゾンビの先頭集団に降りかかる。

その瞬間、ゾンビ達の身体が火に包まれた。しかし髪や衣服を燃やしつつも、ゾンビ達は前進を続けていた。

どうやら火炎瓶に詰まっていた燃料は、放火魔の手によって改良が加えられていたようだった。燃料はゲル状になっていて、すぐに燃え尽きないようになっている。

普通のカソリンなどではすぐに燃え尽き、また身体から火の着いた

燃料を落とす事が可能だ。しかしこのゲル状の燃料だと、火の着いた燃料が身体に振りかぶっても、容易に消えないし身体から落とす事も難しい。

まるで焼夷弾だ。

「・・・おお」

俺は意外な火炎瓶の威力を目の当たりにして、目を見開いていた。キャンプファイヤーの薪よろしく、ゾンビは火達磨になって歩いている。

とその時、火炎瓶に括り付けられ、火の着いた燃料が付着していたガスボンベが破裂した。ボンベの破片がゾンビ達にめり込んだが、痛覚の無いゾンビにとってさほど威力は無いようだ。

しかし火炎瓶は意外な効果をもたらしていた。火に包まれたゾンビ達は俺達を追うのを止め、周囲をうろろし始めていた。弓を構えていた亜衣が、不思議そうに呟いた。

「何が起きてるの？」

「多分、火で空気が攪拌されて臭いが追えないか、それとも鼻をやられたんじゃないか？俺達を見失っているんだ」

俺はフラフラとその場を歩き回るゾンビを見つめつつ、亜衣の疑問に答える。

どうやら俺の予想は正しいらしく、燃え盛るゾンビは俺達を追わなくなっていた。それどころか180度進路を変え、別のゾンビを巻き込んで転倒し、さらに火災を広げているゾンビもいる。

とにかく、今の内にゾンビ達と距離をとることが必要だった。ゴリと亜衣を先頭にして、俺達は遥を助けるべく走り出した。

第13話 おぶつはしょうどくだー! (後書き)

御意見、御感想、御質問お待ちしております。

第14話 俺たち、ラピ〇タ王（前書き）

前回のあらすじ..

汚物を消毒しました。

第14話 俺たち、ラピ〇タ王

警察署を出発してから数時間後、ようやく俺達は中学校の近くまで来ていた。この辺り一帯の地形は起伏が激しく、俺達が走るペースは段々落ちていく。

「・・・にしても、まさか奈津美が第2中学校の出身だなんてな」

斧を構えたまま走るゴリが呟いた。

そう、奈津美は俺達が目指す豊島第二中学校の出身だったのだ。中学の終わりに市外に引っ越したらしいが、この辺りの土地勘は未だに衰えていないようだ。

その証拠に、奈津美は先程から俺達を先導して走っている。

「いつまでこの坂道続くのよ。今まで何回坂を上り下りしたのか・・・」

額に汗を浮かべつつ、美雪が言った。

この辺りは丘陵が多くあり、それを越えたところに第二中学校はある。中学校に辿り着く前に俺達の体力が無くなってしまわないか心配である。

「この坂を越えたらすぐ中学校よ。もう少して頂上だから、頑張っ
て!!」

疲れた様子も無く、奈津美が言った。さすが陸上長距離の県大会選手、ちよっとやそっとじゃ疲れないのだろう。

ちなみにこの坂、高低差40メートル、傾斜は45度近いと奈津美

は言っている。

「お前・・・、この坂上った事あんのか？」

「アタシが中学の時、マラソン大会でこの辺りはよく走ってたの。」

『心臓破りの坂』って言われて、何人の生徒がこの坂を越えられずに脱落したことか・・・。」

奈津美が懐かしそうに言った。

マラソン大会なのに脱落者が多かったのかよ。普通コースを見直すべきだろ。

そんな事を思ったが、しかし俺は何も言わずに走った。

数秒後、俺達はこの丘の頂上に立っていた。が・・・・・・・・。

「マヂですか・・・？」

「あらー大変だ」

「どうやって中学校まで辿り着けと・・・・・・・・。」

俺達は口々にそう呟いていた。

俺達のいる一本道の先、つまり丘の麓には、多くのゾンビがいた。

しかも、道を数メートルに渡って埋め尽くすほどだ。

ゾンビ達は俺達に気づいていないらしく、丘を上ってくることはなかった。が、このままでは道を進むことは出来ないだろう。強引に突破しようとしても、犠牲が出る恐れがある。

「なあ、他の道は無いのか？」

不安そうにゴリが言ったが、奈津美は

「あるけど、かなり迂回することになるわよ。しかも住宅街を通る

ことになるから、ゾンビに襲われる可能性が高いわね」

と言った。ゴリは「そうですか・・・」と言い、すごすごと下がった。

道の左右には塀に囲まれた家が並び、他に進路は無い。まさか屋根を伝って逃げる、なんてルパン紛いの事をやらかす訳にもいかなかったらう。

かといってこのまま前進していても、ゾンビの海に真っ直ぐ突っ込んで行く羽目になる。ゴリと麻衣を前面に押し立てても、無事に突破できるか疑問だ。

「火炎瓶を使うのはどう？」

「お前バカか？自分達で進路塞いでどうすんだよ？」

美雪が訊いて来たので、俺は即答した。

火炎瓶を使ってゾンビ達の鼻を潰しても、今度は鎮火するまで待たなければならなくなる。爆発物でもない限り・・・。

ん？爆発物？

俺はとっさに周囲を見回し、平屋建ての家が無いか探した。

ちょうど俺達の立っている場所から数メートル後方に、平屋建ての家があった。俺はその家に目を凝らし、そしてお目当ての物を見つけた。

家の外に設置された、大きなLPガスのボンベである。

「よし、いけるぞー！！」

俺は思わず叫んでいた。その言葉に、皆が一瞬驚いたように身体を震わせる。

麻衣が「何がいけるんだ？」と訊いて来たので、俺は言った。

「あそこの家にあるLPガスのボンベを束ねて、ここから落とすんだ。坂を下ってボンベが麓まで落ちたら、亜衣の矢に火を点けて放ち、爆発させるんだ」

「上手くいくのか？」

「何もしないで迂回して時間を取るよりいいだろう。もしかしたら、かなりゾンビを倒せるかもしれない」

俺が言うと、皆は特に反対もせず、早速作業に取り掛かった。

本来なら映画やゲームみたいに拳銃でボンベを爆破したいところだが、あいにくP230JPが使用する弾丸では、射程も短いしボンベを貫通するだけの威力もない。

まずLPガスボンベを運んでくるのは俺とゴリ。女子達はゾンビ達を警戒する。

俺とゴリは持っていたバットや斧をその場に置くと、ガスボンベのある家まで走った。ボンベは40キロ近くあるので、余計な物は持てないのだ。

LPガスのボンベは、平屋建ての家の壁に鎖で固定されていた。俺達は庭に侵入してボンベを固定する鎖をペンチで切断し、2本あるボンベをそれぞれ持ち上げた。

40キロ近くボンベの重量はあるが、ぎっくり腰に注意すれば一人でも運べる。怪力を持つゴリはラクラクとボンベを運んでいたが、あくまで普通の高校生並みの運動能力しかない俺は、ゴリに比べてゆっくりとボンベを引き摺るように運んだ。

俺がどうにかして先程の地点まで戻ると、血や肉のこびり付いた得物を構えた女子陣が待っていた。ゾンビ達は俺達に気づいてきたらしく、何体かが斜面の階段を上って来ている。

これは作業を急がなければならぬ。そう判断した俺は、リュックから針金の束を取り出した。

ゴリに2本のボンベを持ち上げてもらい、針金を2本のボンベに巻きつけて固定する。

「亜衣、矢を持ってちょっとこっち来い」

ボンベを固定する作業を終えた俺は、火炎瓶を持って亜衣を呼んだ。そして亜衣が持って来た1本の矢を手にとると、口を塞いでいたボロキレを取った火炎瓶の中に突っ込んだ。矢の先端にゲル上の燃料を絡みつけると、矢を引っ抜いて再びボロキレで栓をする。

「これで良し。ボンベが麓まで落ちたら、これを使ってボンベを爆破してくれ」

「え？でも距離が遠すぎるわよ？」

「何だよ。県大会にも出てるのに、50メートル先の的を狙う自信が無いのか？」

俺がそう言うのと亜衣はニヤリと笑い、「甘く見てもらっちゃ困るわね」と言って燃料が付着した矢を受け取った。

これで準備は整った。

俺は繋がれたガスボンベの位置を調整しているゴリの所に戻ると、2本のガスボンベのバルブを捻った。ガスの噴出する微かな音がして、周囲に異臭が漂い始める。

それを確認した俺は、ゴリと一緒にガスボンベを思いっきり蹴った。

「「見せてあげよう！ラピ〇タの雷を！！」」

そう言った俺とゴリに蹴られた2本のボンベは、斜面に作られた階段の、自転車を移動させる為のスロープの上を滑り下り始めた。

斜面を下っていくうちにボンベはどんどん加速し、斜面を下りきって麓に到達すると、繋がれた2本のボンベは道を塞いでいたゾンビの群れに突っ込んだ。

40キロ近くのボンベが2本、計80キロ近くの物体が加速して落ちてきたのだ。最初にガスボンベが直撃したゾンビの足は折れ、密集していたゾンビ達が次々将棋倒しを起こす。

2本のボンベは倒れたゾンビ達の頭を押し潰し、押しのけ、そして止まった。

「よし今だ！亜衣、矢を放て！！」

俺が合図すると、既に燃料に着火していた矢を亜衣が構え、そして放った。放たれた火の点いた矢は斜面を真っ直ぐ下り、ボンベの近くで倒れていたゾンビの頭に突き刺さる。

瞬間、丘の麓で大爆発が起こった。

爆発の衝撃でゾンビ達は吹き飛ばされ、肉や骨の欠片が丘の上の俺達にまで降ってくる。

「「見ろ！人がゴミのようだ！！」」

俺とゴリはそう言うと、大きく笑った。女子達は俺達にドン引きしているようだが、それはこの際無視しよう。

ガス爆発なのですぐに炎は収まり、徐々に麓の凄惨な様子が見えて

きた。

爆発の間近にいたゾンビ達の身体はバラバラに千切れ、あちこちにボンベの破片が突き刺さっていた。中には頭に大きな破片が突き刺さり、死んだゾンビもいる。

爆心地から少し離れた所のゾンビ達も、爆風で首の骨を折ったのか、折り重なって倒れていた。

あれ？何気にこれって凄いことなんじゃね？俺SUGEEEEEE
EEEEEE！！

第14話 俺たち、ラピ〇タ王（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第15話 ねんがんの ういんちえすたーM70を てにいれたぞ!! (前書き)

前回のあらすじ..

バルス!!!

第15話　ねんがんの　ういんちえすたーM70を　てにいれたぞ!!

丘の麓を埋め尽くしていたゾンビ達をガスボンベを使ってバルスした俺達は、一路豊島第2中学校へ向かっていた。

校舎が家々の屋根の間から見え、俺達は走るスピードを上げる。近づいてきたゾンビ達を蹴り飛ばし、撲殺し、薙ぎ払いながら前進した俺達は、あっという間に中学校の校門前に着いた。

「うっわ、ひでえ………」

校庭の様子を見たゴリが、眉をしかめて言った。

中学校の校庭には制服を着たゾンビ達がふらつき、あちこちに喰われた死体の残骸が放置されていた。校門から脱出したような人間は全員殺されたのか、大きな校門は閉まったままだった。

そして俺は、そこであるゾンビを見つけた。

赤いジャケットを着て、帽子を被り、背中にリュックと棒状の物を引っ掛けたゾンビである。

どう見ても猟師のゾンビです。本当にありがとうございます――――

ん？ 猟師？

俺はそのゾンビが背負っている棒状の物体を凝視した。木製の本体上部に黒い筒が載っている。

猟銃である。

それを見た俺は、そのゾンビに向かって走り出していた。目的は当然、ゾンビの背負っている猟銃である。

ころしてでも、うばいとる。

ぶっちゃけもう死んでいるけどね。

俺は手にしたバットをゾンビの振り下ろした。頭蓋骨が砕け、陥没するイヤな感触が伝わり、猟師のゾンビは崩れ落ちた。

「武、何やってんの!？」

いきなり走り出し、ゾンビを撲殺した俺を見た美雪が言った。が、俺は一切答える事無く、崩れ落ちた猟師のゾンビの身体を漁り始めていた。

猟師の背中に引っかかっていた猟銃は、アメリカ製のウィンチェスター M70 ボルトアクション式小銃だった。血に汚れていたが、迷わず俺は小銃を剥ぎ取った。死んでる奴に銃は要らないだろうし。

続いてリュックを漁り、数個の紙箱に入っていたM70の使用する7.62mm弾を手に入れた。弾薬は全部で40発程だろうか。俺は迷わず弾をポケットに突っ込んだ。

P230拳銃の弾は20発にも満たないが、ライフル弾が40発もあれば積極的に使っていけるだろう。

「おい武、何やってんだ？」

「ライフルを手に入れたんだよ！これで勝つる！！」

死体を漁り始めた俺を見たゴリが、駆け寄って来て俺に訊いた。俺は更に猟師のゾンビの身体を漁りつつ、答えた。

そして俺は猟師のジャケットを漁る。ポケットから出てきたのは財布や何かの鍵ばかりだったが、最後に俺はある物を引っ張り出した。

円筒形のそれは、民間用のスタングレネードだった。スタングレネードとは、爆発した瞬間に大きな音と強烈な閃光で対象の動きを止める手榴弾だ。殺傷能力は無いが、特殊部隊でよく使われている。民間用は主に暴漢に襲われた時の為に通販でよく売られている代物で、軍用や警察用よりも爆発音や閃光が抑えられている。それでも人間の動きを止めるには十分だろう。

死んでるゾンビに効くかはわからないけどね。

俺は猟師のゾンビの死体から使えそうな物を回収した後、死体に合掌した。彼のもたらししてくれたM70ライフルはこれから役に立つだろう（主に俺の）。豊島市の北部には山が広がり、銃猟をする人もかなり多いので、もしかしたらこれからも猟師のゾンビに遭遇するかもしれない。

俺はM70の機関部から突き出ているボルトを引き、弾丸が装填されているか確認した。薬室から金色の弾丸が飛び出て来たので、弾は装填されているらしい。

俺は今度はボルトを後退位置まで引き、ポケットから7.62mm弾を取り出して装填し始めた。M70には5発の弾丸が装填出来る。

嬉々として銃を弄る俺を見ている皆は、心なしか一步引いているように見えた。

「使えるの？」

「ああ、俺の親父が持っていたのはレミントンM700だったけど、操作は同じだろう。M700だってウィンチェスターから発展したようなもんだし、弾丸だって同じ7.62mm NATO弾だ」

「れみんとん・・・？ういん・・・？なとーだん？」

奈津美は俺の答えに、わかったようなわかってないような顔をしていた。面倒なので、一々用語は解説しない。

M70はスポーツ用や狩猟用なのでスコープを装着しての射撃が前提だが、残念ながらこの銃にはスコープが着いていなかった。なので通常の照準器アイサンサイトで射撃するしかない。

と、俺はそこで、一応皆に訊いておいた。

「そういえば、誰かコレ持りたい人いるか？」

とM70を掲げた、

本当は俺が装備したかったのだが、他に誰か持たい人がいて揉め事になったら大変だ。俺の方が上手く使えると思っているので、渡す気は毛頭ないが。

皆も俺が使う方がいいと思ったのか、一斉に首を横に振った。

俺はM70を装備したので、金属バットが邪魔になった。ライフルと一緒にバットを装備しても邪魔になるだけだし、接近戦はライフルの銃床打撃（銃を打撃武器として扱う戦闘法）で乗り切れるだろうし。

なので俺は、金属バットを奈津美に渡した。奈津美が持っていたゴルフクラブはあちこち歪んでいて、そろそろぶっ壊れる頃合だったので、ちょうどいいタイミングである。

俺はM70を構えてみた。M70の全長は1メートル以上あるので、閉所での取り回しには苦勞しそうだ。一々サイトを狙って発砲している間にゾンビに接近されたら厄介だし。

俺はリュックから、2つのある物を取り出した。

1つは細い円筒形のレーザーポインターである。よくガチャポンで売られている物で、しかもコレは規制強化前に入手した物なので、出力が今の物より大きい（ちなみに規制強化の原因は、レーザーポインターを入手した子供達が友人の目に照射し、障害が起きる事件が頻発したことによる）。

俺はレーザーポインターをM70の銃口付近に、ビニールテープを巻いて装着した。これで大体の着弾予想地点がわかるので、近接戦で一々サイトを覗かなくても済む。

もう1つは、エアガン用のフラッシュライトだ。元々は遊戯銃に装着し、サバイバルゲーム等で使用する物だが、普通に日常生活で使えるほど高性能だ。

フラッシュライトはハンドガードの前方部分にテープで装着した。これにより、暗所でも懐中電灯を持って片手を塞ぐ、なんて事にならずに済む。

たけしは レベルが1 あがった!!

たけしのこうげきりよくが 100 あがった!!
こうげきはんいが 200めーとる あがった!!

たけしは 「しゃげき」を おぼえた!!

ポケ○ンかド○クエ風に表すならこんな感じか。

ライフルの改造が終わり、校舎に殴りこむ準備が完了した。

重い校門をゴリが開き、この中学校出身の奈津美が先頭に立ち、皆が校庭を走り抜ける。飛び道具を手に入れた俺は亜衣と同じく後衛のポジションにつき、後ろから皆を援護する。

・・・が、進路上に立ち塞がっていたゾンビ達は、ゴリの消防用斧で首を飛ばされ、麻衣の木刀によって次々撲殺された。なので俺のライフルが火を噴くことは無く、俺達はすんなり校舎内に突入した。

「それで、音楽室ってのはどっちなんだ？」

「改装でもされていない限り、音楽室は管理棟の2階にあるわ。こっちよ、ついて来て！」

そう言い、奈津美は駆け上がった。

校舎内の惨状は、校庭よりも酷かった。外へ脱出する暇も無かったのか、廊下のあちこちに身体を貪り尽くされてゾンビにならなかった死体の残骸や、混乱の最中の事故で死亡したのか身体が綺麗なままの死体が転がっていた。

そして、それらを遥に上回るほどのゾンビ達が、校舎内を彷徨っている。

「管理棟は生徒の教室が無いから、多分ゾンビも少ないはずよ。管理棟で授業中だった生徒の数も少ないだろうし」

と、俺達を先導する奈津美が言った。

渡り廊下を駆け抜け、教室棟から管理棟へ向かう。奈津美の言った通り管理棟にゾンビは少なく、障害になると判断されたゾンビは直ちにゴリと麻衣の手で葬られた。

そして管理棟をしばらく走っていると、突然奈津美が立ち止まり、前方を指差した。

「あそこが音楽室なんだけど・・・、まずいわね」

「あらら、ゾンビがいっぱい」

美雪が、うんざりするように呟いた。

音楽室と思われる教室は管理棟の一番端に位置し、その前の廊下にはゾンビの群れがいた。ゾンビ達は音楽室内に立て籠もる遙達に気づいているらしく、ドアをどんどん叩いている。

その光景を見た俺は決断した。

「よし。俺と亜衣が射撃でゾンビの数を減らすから、続いてゴリと麻衣が突っ込んで、残ったゾンビを掃討してくれ。いいな？」

皆が頷くと俺と亜衣は廊下に並び、そして撃ち始めた。

廊下^{マズルフラッシュ}が銃火で照らされ、銃声が反響する。覗いた照準器の向こうで、狙ったゾンビの頭が弾けるのがわかった。

頭がパーン。

という冗談は置いといて、反動は想定していたよりも軽く、かなり撃ちやすかった。これなら一撃必殺を決めるのも容易だろう。

ボルトを引き、空薬莢を排出するのと同時に次弾を薬室に装填し、再び撃つ。俺の隣では亜衣が矢を速射し、ゾンビの頭に次々矢が刺さっていた。

俺と亜衣がゾンビを10体ほど射殺した後、ゴリと麻衣が突っ込んで言った。俺達の見ている前で、ゾンビの頭が碎ける嫌な音が鳴り続く。

接近戦では滅法強いゴリと麻衣の手により、音楽室に侵入しようとしていたゾンビ達はあっという間に全滅した。俺は音楽室前まで走り、

「助けに来たぞ遥！もう大丈夫だ！ゾンビは皆やつつけた！！」

と叫んだ。すぐにドアの向こうから、

「お兄ちゃん！？来てくれたの？ドアが開かないの！！」

と、遥の声が聞こえた。声から判断するに、遥達は無事のようなのだ。どうやらゾンビ達の馬鹿力で叩き続けられた結果、ドア枠かドアそのものが歪んでしまったらしい。

俺は一步後退し、ドアに向けて渾身の前蹴りを放った。映画とかで見てカッコよかったから一度やりたかったのだが、現実は厳しかった。

音楽室というのは大抵壁が厚く作られている。それは楽器等の音が外に漏れないようにするため、ドアも例外ではない。

防音仕様の厚いドアは俺の蹴りを受けてもびくともせず、作用反作用の法則で蹴りの衝撃はそのまま俺の足に返ってきた。激痛が走り、俺は足を押さえて悶絶する。

「馬鹿だろ」

「やっぱお前アホだ」

「というか、冷静に考えれば蹴破れないってわかるよね。ゾンビだって破れなかったんだし」

「今日のバカは武に決定ね」

「バーカバーカ」

声も出せず、足を押さえて床を転げまわる俺に、皆からひどい言葉が浴びせられた。チクショウ、俺の味方はラインだけなのか！？
そう思い足元のラインを見ると、「別にアンタに興味ない」とでもいうように、ラインはあちこちの臭いを嗅いでいた。

あれ？俺の味方は？

そう俺が絶望している間に、ゴリが手にした消防用斧をドア枠に叩きつけた。木の折れる音と共に、ドア枠から木端が飛び散る。

消防用斧はその名の通り、消防士などが災害時に障害物を叩き壊し、救助に向かう為の装備だ。つまり、最初から斧を使っておけばよかったのだし、そうする事が本来の用途だったのだ。

あれ？やっぱり俺バカじゃね？

そう思っている間にもゴリは斧をドア枠に叩き付け、やがて蝶番が破壊されたのか、ドアは教室内に向けて倒れた。

そして教室内から、数人の中学生がふらふらと出てきた。その先頭にいたのは、もちろん遥だ。

「遥！大丈夫か！？もう大丈夫だ！！」

すぐさま立ち上がり、俺が言うと、遥は俺を見上げた。

「・・・トイレ」

それが、救助されて遥が一番に発した言葉だった。

第15話 ねんがんの ういんちえすたーM70を てにいれたぞ!! (後書き

御意見、御感想おまちしています。

第16話 SATSUGAI (前書き)

登場人物紹介

いわさき はるか
岩崎 遥

15歳(中学3年生)

知力	★★★
体力	★★★
攻撃性	☆☆☆
敏捷性	☆☆☆
統率力	☆☆☆

武の親戚である少女。オタク。

物凄いオタクであり、アニメ・ゲーム関連の知識が豊富であり、オタク的行動を武が取る度に解説してくれる。

やや天然なところがある。

家族構成は父、母との3人暮らし。

趣味はアニメ鑑賞。ゲームのプレイ。そしてライトノベルやマンガを読む事。

第16話 SATSUGAI

救出直後、音楽室にいた面々はトイレに行きたいと言いだした。1日も閉じ込められていたので仕方ないが、問題は美雪達女子陣もついでにトイレに行くと言ったことだ。

なので俺とゴリは二人だけ残り、押し寄せてくるゾンビ達を撃退する羽目になってしまった。

音楽室からグランドピアノを廊下に運び出し、横倒しにしてバリケード代わりにする。それでもあちこちに隙間があったので、音楽室から持ち出した椅子や机、そして重そうな楽器を積み重ねて補強した。

「いつトイレから出てくるんだよアイツらは！」

「知らんがな。女子のトイレの時間は長いんだから仕方ないだろ」

俺とゴリはバリケードを破られないよう、ピアノを押さえつつ怒鳴りあった。ゾンビの怪力でバリケードは徐々に破壊されていて、しかも教室棟側から俺達に気付いたのかゾンビ達が押し寄せてきている。

その数は廊下を数メートルに渡って埋め尽くす程であり、数えるのも面倒だ。

ピアノのあちこちにヒビが入り、弦に何かが当たっているのか変な音色が流れる。俺とゴリは必死にバリケードを押さええるが、机や楽器を積み重ねただけのバリケードは、既に崩壊寸前といった体であ

った。

そしてついにグラウンドピアノが真っ二つに割れ、ゾンビ達がトイレ側に向けて押し寄せてきた。

「やばい！ゴリ！！」

「おうよ！！」

俺とゴリはそれぞれ手にした獲物を振りかざし、近づいてくるゾンビ達を倒す。

ゴリの斧が曲線を描いて振られ、頭を潰されたり飛ばされたゾンビ達が床に崩れ落ちる。俺もM70ライフルを数発撃ったが、すぐに弾の無駄だと気が付き、銃床ストックによる打撃に切り替えた。

だが、鈍器として作られていないライフルでは、ゾンビの頭を数回殴って倒すのが限界だった。ライフルはバットよりも重いが、ストックは木製なので一撃で倒せる程の強度は無い。

「こりゃバットの方が良かったな……」

俺は奈津美にバットを渡した事を後悔した。ちなみに奈津美はバットを持ったままトイレに入ってしまった。

いかに非常事態とはいえ、俺に女子トイレに入る勇氣は無かった。

何かないかと俺が視線を巡らせると、床に転がっていたある物を俺は発見した。

エレキギターである。

俺はエレキギターを拾い上げると、棹の部分を持ち、ゾンビの頭にギターの胴の部分振り下ろした。エレキギターは意外と重いので、

直撃したゾンビの頭は容易に陥没した。
うふ、これって意外といいかも。

「SATSGAIせよ！ SATSGAIせよ！！」

「お前はクラウドーさんか！？」

ゾンビの頭にエレキギターを振り下ろしつつ「SATSGAI」と連呼する俺に、ゴリが呆れたように言った。

残念な事に、ギターは4回殴ったら折れてしまった。すかさず別のギターを取り上げ、再びゾンビ達をSATSGAIするのに専念する。

と俺が後ろを振り返った瞬間、女子トイレから出てきた遥と目が合ってしまった。

「あ」

「……」

ゾンビが押し寄せてきているにも関わらず、俺は一瞬動きが固まってしまった。ヤバイ、このままでは変人の兄（親戚だけど）と見られてしまう！

「……お兄ちゃん」

「……何だね？」

相変わらず、俺の動きは固まったまま。遥は顔を上げると、

「クラウドーさんみたいだね！！！」

と言った。それも笑顔で。

俺は盛大にずっこけた。何故純朴な少女である遙が、放送禁止用語、公然猥褻カット満載のDMCを知っている!?

「え?だって漫画全巻持ってるし、映画のDVDも持ってるもん」

「何か、俺の中の遥のイメージが崩れていくよ……」

俺はうなだれ、ラインが慰めるように俺の顔を舐める。

その間にも、美雪たちはトイレから出て来て、ゾンビの迎撃に加わった。押し寄せていたゾンビ達の進行速度が、若干ではあるが遅くなる。

「お兄ちゃん知ってる? DMCの曲をラジオで流す時は、放送禁止用語満載だからピー音ばかり流れるんだよ?」

「知ってるよそんなもん! てかどうでも良いよ! それよりさっさとここから逃げるぞ!」

俺はそう言い、皆に音楽室に後退するよう言った。一番前でゾンビ共を食い止めているゴリと麻衣が俺より後ろに下がった後、俺は猟師のゾンビから拾得したスタングレネードを取り出した。

「フラッシュバン!!」

FPSゲーム風に格好良く叫んで、スタングレネードの安全ピンを引き抜き、ゾンビの集団目掛けて放り投げる。

ちょうどゾンビの集団の中心部に落下したスタングレネードは、数秒後には大音響と閃光を伴って炸裂した。民間用で効力は少ないとはいえど、廊下の閉鎖空間で炸裂音は反響し、更に音が大きくなる。耳を塞いでいた俺でも、若干耳がおかしくなりそうだった。

「・・・いきなり何すんのよ!?!?せめて事前に『耳塞げ』くらい言
ってよ!!!」

「下がれて言ったら、さっき!!」

奈津美が耳を押さえつつ怒鳴り、俺は叫び返す。

視線をゾンビの集団に戻すと、スタングレネードの爆発間近にいた
ゾンビ達は、床に転がって手と足をばたつかせていた。

おそらく、音で三半規管をやられたのだろう。それで平衡感覚を失
い、地面に倒れてバタバタしているのか。

しかし先頭集団のゾンビ達は、未だにこちらに向けて歩いてくる。
スタングレネードの効果範囲外だったのだろう。

「もう一発投げれば!?!」

美雪が叫んだ。

しかし爆発の衝撃で廊下の窓の大半が割れてしまっているので、ス
タングレネードを投げたところで先程みたいな効果を生み出すのは
難しいだろう。

「だめだ!今から俺も下がるから、ドアを塞げ!!」

と言い、俺は音楽室に駆け込んだ。俺が音楽室内に入ると同時に、
ゴリ達が机を積み重ねて入り口を塞ぐ。ドア?さっきゴリが蝶番ご
とぶっ壊しただろ。

俺は休む間もなく、床に転がっていたドラム型の延長コードを手
に取った。そのまま窓に近寄ると、ライフルのストックで窓を叩き割
った。

そしてコードを窓枠に巻きつけて固定すると、延長コードの中心部分のドラムを外に放り投げた。コードの長さは十分あるので、ドラムは地面に設置した。

続いてリュックからタオルを取り出すと、とりあえず手近な場所にいた男子中学生に渡した。タオルを受け取った男子中学生が目を白黒させる。

「コードを伝って滑り降りろ。手を火傷するから、タオルを握ってスピードを落としつつ地面に降りること」

俺は男子中学生の手を取り、コードを握らせつつ言った。とその時、机で塞いだ入り口が、どんどんという音と共に揺れ始めた。

「ちょ、無理です！無謀です！！」

「じゃあゾンビ共がひしめく廊下の階段を降りるか？大丈夫だ。下は駐車場だから、ゾンビはいないだろう」

「そういうことじゃなく・・・」

未だに中学生が降りることを躊躇っていたので、イラついた俺は、コードを握っていたその男子中学生を蹴り落とした。

「おわ—————ッ！！！」

という悲鳴と共に、男子中学生が窓から姿を消す。窓から下を見ると、ちゃんと中学生はタオルでスピードを調整し、どうにか地面に無事着地していた。

「アメリカ版ゴジラのジャン・レノみたいだね、お兄ちゃん！」

「もうどうでもいいよ・・・。てか、あんなマグロばかり食って対艦ミサイルで死ぬようなひ弱な奴、俺はゴジラとは認めん」

俺は半ば投げやりになりつつ、「次は誰がいいかな？」と皆を見回した。

中学生達は俺に蹴落とされたくはないのか、進んでタオルを手にとると、次々と地面に降下した。遥も地面に降り、次は俺達の番だという時に、入り口に築いたバリケードが破壊された。ゾンビが次々と音楽室内になだれ込んで来る。

「やばい、女子は先に降りろ！ここは俺とゴリが引き受ける！」
「わかった！！」

俺が言うのと美雪たちは頷き、コードを手にとって地面に降り始めた。下から「それは死亡フラグだよ、お兄ちゃん！」という遥の声が聞こえたのは、気のせいではないだろう。

美雪達は無事に地面に降下し、続いて俺はゴリを降下させた。脇にラインを抱えたゴリが、窓から姿を消す。

が、ゴリが地面に着地したその瞬間、今までの重さに耐えられなかったのか、コードが窓枠の部分で千切れてしまった。

「えっ・・・？」

と全員が呟く。

呆然としていた俺が我に帰ると、もうゾンビ達は俺の目と鼻の先まで来ていた。コードは地面に落下し、安全に降りる手段は無い。

手段を選んでいる暇は無かった。俺はベルトからP230拳銃を抜

くと、割った場所とは違う窓ガラス目掛けて一発撃った。窓に大きなヒビが入る。

俺は拳銃をベルトに戻すと、ライフルを肩に掛けた。そしてそのままヒビの入った窓目掛けて走り、勢いよく窓ガラスに体当たりをします。

窓が粉々に割れ、俺の身体が空中に浮く。受身の姿勢を取った俺は、窓の真下に駐車してあったワゴン車の屋根に着地した。

強い衝撃を受け、屋根に着いた手足が一瞬痛む。着地のスピードはそれだけでは殺せず、俺は数度前転し、運転席の窓ガラスを割り、ボンネットを大きくへこませてから地面に着地した。

両手を片膝を着いた状態で地面に着地した俺を見て、遥が、

「お兄ちゃん、まるでMGS2のタンカー編冒頭のスネークみたいだね」

と言った。

もはやつつこむ気力すらない俺は、すぐに立ち上がって皆の元へと駆け寄った。すぐさま皆は走り出し、こうして俺達は遥たちを救出し、中学校から脱出する事に成功した。

第16話 SATSUGAI（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第17話 俺の性能は、例えるならウィンドウズ98並みだな。

俺達は遙達中学生を救出した後、市のさらに北部にある薬局へと向かっていった。今日はここで一夜を明かす予定だ。

本来はスーパーなどがいいのだが、奈津美や中学生達の話では、近いスーパーはもっと北に行かなければ無いのだという。

豊島市は色々と揃った市だ。南部には港湾地帯、中部には市街地。そして北部には田園地帯や山、そして森林が広がっている。

つまり、都会から田舎まで、幅広く揃っているのだ。そして俺達がいるのは、その中でも「ド」がつくほどの田舎である。

駅前にある薬局には直ぐ着いた。小さな木造の駅舎を囲むように、個人経営の商店が並んでいる。元々駅に到着する電車数は少なく、こんな非常事態なので、当然電車が来ることはない。

道路を歩くゾンビ達も、俺の家付近に比べれば非常に少なかった。まあこの辺りは人口少ないし、当然といえば当然であるが。

「こっちょよ、ついて来て」

奈津美の先導で、俺達は通りを走った。ゾンビの数が少ない以上あまり警戒する必要はないが、それでも俺と麻衣はそれぞれライフと弓を構えておく。

結局、俺達はゾンビと戦う事無く、目的地の薬局に辿り着いた。全国チェーンの店だが、人口が少ないこともあってか、随分小さな店

舗だ。

ゴリと奈津美が先頭に立ち、店内に押し入る準備をする。自動ドアが俺達を感知して開き、ぱっとゴリ達が入った。

「・・・誰もいない」

ややあって、亜衣の声が聞こえた。俺は念のためライフルを構えつつ、皆に続いて店に入った。

店内には、亜衣が言った通り誰もいなかった。照明が店内を照らし、BGMが虚しく流れているだけだった。血痕すらない。

「多分逃げ出したのね。ここのアルバイトの店員、やる気無かったから」

奈津美が呟いた。恐らくその通りだろう。店員が奈津美の知っている3年前のままでなくても、逃げ出すのは悪くない判断だ。その後、こちら辺の住民は殆どゾンビになったせいで、誰も立ち入る事は無かったのだろう。

通りをうろついていたゾンビ達が臭いで俺達を察知したらしく、徐々に薬局前に集まり始めていた。俺はさっさと皆を店内に押し込み、ゴリと1人の男子中学生に手伝わせて、商品の塩素系漂白剤や洗剤を店の入り口へ大量に運ばせた。

女子たちは今晚ここで過ごす準備を始めていた。

「どうするんですか、こんなもん？」

男子中学生が俺に訊いてきた。彼は中学で真っ先に窓から突き落とされた少年である（突き飛ばしたの、俺だけ）。おがた名前は緒方、と

いうらしい。

俺は漂白剤のボトルを手に取ると、店の前の道路まで進んだ。そこでボトルのキャップを外すと、道路にぶちまける。

俺の行動を嘩然と見ていたゴリ達に、俺は、

「ゾンビどもは臭いに釣られてやって来るんだ。だから奴らの鼻をコレで潰す」

「でも、臭くないですか？」

「お前、臭いのを我慢するのと死ぬの、どっちがいい？」

俺が訊くと、緒方は不承不承といった感じで頷いた。

ライフルを持つ俺がゾンビ達を警戒する為、薬品をばら撒く作業を2人と交代する。店にあったボトルが次々空となり、数分もすれば辺りに強烈な塩素の臭いが漂っていた。

「消臭」を終えて俺達が店内に戻ると、既に女子たちは夕飯の準備を始めていた。時計を見ると既に6時を回っていて、夕飯の時間には最適だと思った。

一応ゾンビの侵入に備え、入り口のシャッターを下ろした後、空にした商品棚を移動させて入り口を塞ぐ。万一入り口のバリケードを破られた際は、裏口から脱出するよう皆には伝えておいた。

どうやら美雪はこの手の店でアルバイトしたことがあるらしく、空調設備や警報などの扱い方も知っていた。ばら撒いた塩素の臭いがひどくて窓は開けられないので空調を強めに入れてもらい、店内の明りを消してもらう。

俺が家から持ち出したランタンを点灯し、座り込む皆の中心に置くと、さっそく夕飯の時間が始まった。

昨日から何も食べていない中学生達の食べっぷりは凄かった。一応中学校を脱出した少し後で、持っていた菓子類を分けてやったのだが、それでも足りなかったらしいので当然といえば当然だろう。店の商品だった菓子パンはあつという間に食べつくされた。同じく売り物だったジュース類を飲ませ、冷凍庫のアイスを食べると、中学生たちは疲れが出たのか横になり、すぐに眠りに落ちていった。

一方俺達は夕飯を食べると、早速これからの行動を検討し始めた。この店には食品が少なく、しかも売り物だったそれらは先程半分以上食べてしまった。切り詰めても後2食分と言ったところで、ここですつと立て籠もるのは不可能といえる。

俺の家に戻るという案も出たが、それも却下された。戻ってどうなるというものでもないし、そもそも俺の家にあった食料品は全て持ち出し、俺達が食った。

皆が頭を悩ませていると、恐る恐るといった体で、奈津美が手を上げた。

「あのー、ここの近くにショッピングモールがあるんだけど。そこならどう？」

奈津美の話によれば、ここから歩いて一時間もしない場所に、大きなショッピングモールがあるのだとか。

そういえば、以前開店のお知らせが書いてあったチラシがポストに突っ込まれてたな。食品から農業器具、更には車まで、何でも買えるという触れ込みだったが。

この地方の人口が少なく、訪れる人も少ないことに頭を悩ませた市の担当者が、苦肉の作として考えたらしい。土地だけは有り余っているし、それに市街地から離れた所に建設すれば、必然的に北部の

ショッピングモールに客が集まり、金も落としていってけると考えたのだろうか。

「そこって客が多いか？」

「わたしも時々行くんだけど、平日はメッチャ閑散としてるわよ。人口少ないから。でも休日はいっぱい客がいるわ」

俺の問いに、奈津美は何かを思い出すように言った。

幸い(?)、ゾンビが出没し始めたのは昨日の午前。つまり平日だ。その時間帯ならショッピングモールにいるのは店員と若干の客くらいだろうし、仮に地域の住民がそこに避難していても、その数は微々たるものだろう。俺達が行っても問題は無いはずだ。

「よし・・・、じゃあそこに行こう！」

俺の言葉に、皆が頷いた。

明日は早く出ることになるだろう。そのためにゆっくり休む必要があった。

シフトは昨日と同じままで、交代でゾンビを警戒する。中学生たちは疲れているようなので、今夜は監視にはつかせない事にした。俺は入手したライフルの使い方をゴリに教えた。ずっと俺が持っている訳にもいかないし、緊急事態でゴリが使うこともあるだろう。おれがしんだとき

「いいか、屋内戦闘の際は、銃口の向きは視線と一体化させる事。撃つ時以外、絶対引き金に指を掛けないこと。保持する場合、暴発しても被害が出ないよう、銃口は上か下に向けておく事。構える時はストックをちゃんと肩に当てること」

「わかった。弾はどうやって装填するんだ？」

俺はM70ライフルのボルトを引いた。

「ボルトを引いて、そこから弾を押し込んでいく。一発撃つごとにボルトを引け、そしてこまめにリロードするんだ」

「わかった。俺は斧が扱いやすいから多分ライフルは使わんだろうけど、一応警戒する時に持っておくよ」

ゴリはそう言い、弾を抜いたライフルを構えた。俺が姿勢を整えてやり、3回も練習すれば、それなりに様になってきた。

元々男の子は武器が大好きなのだ。祭りの出店でクジを引くのだって、中国製の安っぽいエアガンが欲しいからなのだ。武器が好きだから、子供の時おもちの剣を振り回して遊んだりするのだ。

実際、ゴリもライフルを構える時は若干口元が笑っていた。それはライフルを持てて嬉しいのか、それとも強力な武器が手に入った事が心強かったのか、俺にはわからなかったが。

「女子達に持たせなくていいのか？」

「ああ。拳銃はともかく、ライフルなんて持たせるには体格が貧弱だ。撃ったって反動を吸収できず、外すだけだろうし」

一応、P230拳銃の使い方も教えておく。ゴリは俺に銃を返した後、深夜からの警戒シフトがあるため床に横になり、すぐさま眠ってしまった。

俺は美雪と亜衣の3人で、とりあえず深夜12時まで起きている事となった。誰もいない会計所の椅子に座った俺は、とりあえず目の前のレジスターを弄り回してみる。

やがてそれにも飽きた俺は、足元に座るラインの頭を撫でた。照明が点いていれば本が読めるのだが、もしかしたらいるかもしれない避難民が来ないように、照明は全て消してしまった。

俺達が助けて連れて行ける人間の数には限りがある。道行く人々を

全て助けることは出来ないし、その後の面倒を見ることも無理だ。
俺達はまだ世間一般のいう「子供」であるし、ゾンビどもを蹴散らす豊富な武器を持っているわけではない（ゴリや亜衣みたいなチートな奴はいるが）。そして食わせるメシも少ない。

残酷だが、どこかで線引きをするしかないのだ。今日助けた中学生達10人が、俺達の連れて行ける限界だろう。

俺はそんな事を考えつつ、ベルトからP230拳銃を抜き、台の上に置いた。弾倉を排出し、予備の弾倉も取り出すと、装填されている弾丸を一発ずつ弾倉から取り出していった。

全ての弾丸を抜き終わると、今度は再び弾を込めていく。そうして装填された弾倉から、再び弾丸を抜き出していくという作業を、俺は無意識の内に行っていた。

なあ、どうすればいいんだよ。中田さん。

俺は警察署でこの拳銃をくれ、そして俺が撃ち殺した警官の名前を呟いた。

俺は市民を守る警察官ではないし、国を守る自衛官でもない。異変前にはクラスで目立たない部類に入っていた、タダの軍事オタクの男子高校生だ。

その俺が、十数人の命を守る、なんて重大な使命を押し付けられてしまった。そりゃあ初期に適切な行動を取っていたせいで、俺にはリーダーシップがあるスゲー奴と皆は思ったのだろうが、俺にはリーダーシップなんて全然ない。クラス委員なんてやったことはないし、遠足でも班長とか勤めたことすらない。

その俺が、皆を守り、飢えを満たし、安全を確保し、尚且つ陰悪な雰囲気キャパシテイが漂わないようギャグも言わなければならぬ。そんなこと、明らかに俺の性能を越えている。

いっそのこと、今ここで頭を撃ち抜こうか。一瞬そんな事を考えてしまった。

どうせゾンビ達が全員倒されても、この後に待っているのは悲惨な未来だろう。毎日ちゃんと腹が満たされるか、安全が確保できるか。そんな不安要素がてんこ盛りの未来だ。

なら、今のうちに楽に……………。

俺はそこまで考えると、いかんいかんと頭を振った。それほど、俺はストレスを感じていたのだ。

「なあ、俺これからどうすればいい？」

俺はそう、足元で伏せるラインに言った。愛犬であるメスのシェパードは、やはり何も言わなかった。

第17話 俺の性能は、例えるならウィンドウズ98並みだな。 (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第18話 番外編 特攻野郎Zチーム（前書き）

先日「特攻野郎Aチーム THE MOVIE」を見て思いつき、作ってみました。特に後悔はしていない。

第18話 番外編 特攻野郎Zチーム

豊島高校で鳴らした俺達は、突如ゾンビどもの襲撃を受け高校に立て籠もったが、どうにか脱出して市街地へ向かった。しかしそんな所でくすぶってるような俺たちじゃない。

生き残るためなんでもやってのける命知らず（命は投げ捨てる物・・・じゃない！）。不可能を可能にし、ゾンビの群れを粉碎する、俺達特攻野郎Zチーム！！

てーててー てれれー てーれててー てーれれれー（OPソングです）

「俺はリーダー岩崎 武。通称ミリオタ。軍事知識豊富な作戦立案（という名の奇行）の名人。俺のような天才策略家でなければ、百戦錬磨のつわものどものリーダーは務まらない！」

「アタシは白木 亜衣。通称猛獣。自慢の剣道の技に男はみんなイチコロ（物理的な意味で）さ。ハツタリ（という名の脅迫）かまして、ブラジャーから木刀まで、何でもそろえてみせるぜ（強奪的な意味で）」

「私は豊島第二中学校の岩崎 遥。通称オタク。チームの妹成分。情報収集（アニメ、マンガ、ゲーム等に限る）は、美貌（妹的な要素で）と頭の良さ（パソコンを駆使する的な意味で）お手の物」

「よう、お待ちどう！私こそ上田 奈津美。通称貧乳（貧乳って何よ！）。陸上部員としての足の速さは天下一品！ツルペタ？スレンダー体型？だから何？」

「五里 頼人、通称ゴリラ。柔道の天才だ。総理大臣でもぶんぐってみせらあ（マヂで殴りたいよね・・・）！でも飛行機だけは勘弁な！」

てーてってー てれれー てーれてってー てれれれー

俺達は、ゾンビの溢れる世の中に敢えて挑戦する、頼りになる（かなあ？）神出鬼没の、「特攻野郎Zチーム」！

助けを借りたい時は、そこら辺の奴に言ってくれ！

ゴリ .. 「そういえば『Zチーム』のZって、どういう意味だ？」

奈津美； 「さあ・・・？」

武 .. 「『Z旗』のZじゃね？『皇国の興廃この一戦にあり、各員一層奮励努力せよ！』的n」

亜衣 .. 「ミリオタは黙れ」

遥 .. 「やっぱりお兄ちゃんは、こういう扱いなんだね！」

ゴリ .. 「やっぱ、ゾンビのZかなあ・・・・・・？」

・・・実は、ザコのZだったりする。

第18話 番外編 特攻野郎Zチーム（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第19話 最近の深夜アニメって、こういうラッキースーシーンばかり多いよね (音)

前回のあらすじ..

特攻野郎Zチーム。20100年8月21日公開!!

・・・あ、嘘ですよ。

第19話 最近の深夜アニメって、こういうラッキーシーンばかり多いよね

3日目にもなると、この異常事態にはだいぶ慣れてきた。

ゴリに起こされ、続いて皆を起こした俺は、ケータイのワンセグを起動してみた。昨日よりも放送している局の数は少なくなっており、まともに機能しているのはNHKとラジオくらいしかなさそうだ。

外を見ると、空は暗く曇り、ざあざあと雨が降っていた。これはチャンスだ。

雨で俺達人間の臭いが大分薄れるし、雨音が俺達の物音をかき消してくれる。ゾンビに気付かれる事なく、かなりの距離を移動できるかもしれない。

俺はそう考えると、皆をせかしてさっさと朝食を食べさせた。この薬局にあった菓子パン類もこれで無くなり、いよいよここから立ち退かざるをえなくなる。

食べ終わった中学生から順にトイレに行かせ、その間に俺達は準備を整える。武器のチェック、食料、水、エトセトラ……。俺はゴリからM70ライフルを返してもらうと、ボルトを引いて5発の7.62?弾を込めた。ベルトにぶら下がっているブッシュナイフの具合も確かめ、刃が欠けていない事を確認する。

トイレから戻って来た中学生達には、店の中で見つけたバッグを背負わせ、その中に必需品を入れる。俺達の物資だけでは全員養う事は出来ないの、中学生達にも可能な限り荷物を持ってもらうのだ。更に武器として、清掃ロッカーに入っていたモップの柄や、倉庫に転がっていた鉄パイプを持たせた。モップの柄は木製なので強度は

低い、鉄パイプが全員に行きわたる分確保出来なかった、この際仕方がない。

どちらにしても、戦闘の矢面に立つのは俺達。中学生はゾンビと極力戦わないで逃げると決めておいたので、まあ問題ないだろう。

準備を終えた俺達は入り口のバリケードを取り払い、再び自動ドアを作動させた。念のため、俺とゴリが先行し、安全を確かめることとなっている。

俺とゴリを感知した自動ドアが開き、俺とゴリはゆっくり歩を進める。雨のせいでたちまち体中がびしょ濡れになり、ワイシャツや学生服が身体に張り付いた。

かなり不快だったが、この際仕方が無い。傘を差せば片手が塞がってしまうし、雨合羽を着ると動きにくくなる。

俺はライフル、ゴリは斧を構えると、一番近くにいたゾンビに向けて進んだ。中年のオバサンだったらしきゾンビの半径3メートル以内に近寄ったが、そのゾンビが俺を襲ってくることは無く、得物を探してあーうー呻きながらうついていた。

やはり、雨のせいで鼻が機能していないのだろう。物音にさえ気がつけば、安全に脱出出来そうな雰囲気だった。

いける。俺はそうゴリに目配せした。ゴリは手を振って皆を呼ぶ。足音を殺し、後の皆が薬局から出てくる。雨により、皆の身体もたちまち濡れてしまう。

うわあ女子のセーラー服が透けて下着がこれはラッキーイベントなのか神は俺を見捨てていなかったヒヤッハー！！

・・・あれ、俺今一瞬でとてつもない量の思考を巡らせていた気がする。

どちらにしても、皆が薬局から脱出するのには数分がかかった。狭い場所から足音を出さずに移動しなければならない、といった条件もあるだろう。どのみち、ここを抜ければ後は道路を突っ走り、ショッピングモールへと行くだけだ。

ショッピングモールね・・・。ゾンビ映画の鉄板といえば鉄板だが、あそこは入り口さえ塞げれば、後は長期間籠城できるので、立て籠もれたらいい場所だろう。

・・・その塞ぐ必要のある入り口が、多すぎるとかそういう事は言っていない。

全員が薬局の敷地内から脱出したのを確認すると、先頭にゴリと亜衣が立ち、俺達は道路を進んでいった。ゾンビとの交戦は最小限に留め、余り物音を立てずに戦う。

俺と麻衣は飛び道具を持っているので、前方、左右を警戒する。俺はその動作に、女子の透けた下着を観察するという行為を加えつつも、さらに思考を巡らせていた。

ショッピングモールに既に人が立て籠もっていた場合、そいつが善人だったらいい。しかしこの状況だ。ヒヤッハーしているような奴らが立て籠もっている場合だってあるし、その場合、俺達を受け入れて貰えなくなる可能性が高い。

いや、女子は別か。多分女子たちは内部に入るのを許可されると引き換えに、暴行を加えられてもおかしくない状況に放り込まれるだろう。

だが・・・。。俺はそこで唇をゆがめ、手にしたM70ライフルのグリップを強く握った。

こっちには銃が2丁ある。いざとなれば、コイツで追い出してやる！！

なあに、人を殺すのは簡単だ。敵を照準に納め、引き金を引くだけ。ひと サイト
俺はそうして、既に一人の人間を殺したからな！！

隣を併走する麻衣が、俺の顔を見て、衝撃を受けたような顔をしていた。おそらく、とてもヤバイ表情をしていたのだろう。

俺はすぐに普通の表情に戻り、走り続けた。このペースで行けば、シヨッピングモールまでそんなに時間はかからない。

俺は銃を手に行っていること、そして責任による重圧で、おそらく精神がおかしくなってしまうたらしい。このまま仲間に銃を乱射する、なんてことにならなければいいが。俺はそう思い、再びライフルのグリップを強く握り締めた。

第19話 最近の深夜アニメって、こういうラッキーシーンばかり多いよね (後

御意見、御感想お待ちしております。

第20話 とびだすな くるまはきゆうにとまれない(前書き)

前回のあらすじ..

僕は変態じゃないよ。仮に変態だとしても、変態という名の紳士だよ。

第20話 とびだすな くるまはきゆうにとまれない

走り続けて20分。ついにショッピングモールが見えてきた。
が、同時に雨も止みはじめ、ゾンビが俺達の存在に気付き始めるだろう。

「よし、ここを走って突破するぞ！行けーッ！！」

俺はそう言い、先頭に立って走り出した。

ショッピングモールの駐車場はかなり広く、学校のグラウンドくらいならいくつも出来そうだ。俺は駐車場を囲う腰の高さくらいの柵を飛び越え、ショッピングモールの建物との距離を目測した。

250、いや300メートルは離れているか。どれだけの車が収容できるんだろう？

俺はちらっとそんな事を考えつつ、周囲に目をやった。

ゾンビ発生は平日の昼間だった事もあり、駐車場に残っている乗用車は少ない。ただ、持ち主が帰ろうとした矢先にゾンビに遭遇し、慌てて車を降りたのか、何台かドアが開きっぱなしの車もあった。と、俺達の前に、ゾンビの集団が立ち塞がる。雨は完全に止み、臭いと音が誤魔化せなくなったのだろう。

「ライン、ゴー！」

そう命令し、ラインがゾンビの集団に突進した。

ラインが猛スピードでぶつかったせいで、何体かゾンビが倒れる。すかさずそこにゴリと麻衣が突っ込み、ゾンビをなぎ倒して無理や

り通る空間を作っていく。

俺は弱い中学生集団がその空間を通る間、ライフルの銃床でゾンビを押しつける作業に徹した。中学生集団が包囲していたゾンビの輪を通り抜けると、すかさず俺もゾンビに前蹴りを放ち、走る。

直後、ゾンビの包囲の輪から逃れ、中学生集団を追い越して走っていた俺の耳に、

「ああん！」

との声が聞こえた直後、俺の足が突然重くなった。足を上げつつ下を見ると、誰かの腕がセットで持ちあがった。

倒れたゾンビに掴まれたか。そう思い、銃を構えつつすぐさま振り返ると、

「アシクビヨクジキマシター」

と、眼鏡を掛けた男子中学生が地面に倒れ、俺のズボンの裾を掴んでいた。

そしてその向こう、近い距離からゾンビの集団が接近していた。距離は20メートルもない。

今すぐ離れなければヤバイ。タダでさえ200メートル近く全力疾走している状態で疲れている。コイツを抱えながら走ったら確実にスピードは遅くなり、ゾンビに捕まってしまう。

置いていくか。

パニックに陥った俺の思考がそんな言葉を紡ぎ出した。そしてその考えに気づいたのか、男子中学生の表情が強張り、ますます俺の足に強くしがみ付く。

「お、置いていかないでください！お願いします！！」

半泣きの状態で、そう懇願された。

手を振りほどこき、その顔面に蹴りを入れ、「イキノコルカチハアリマセン！」。そう言って逃げ出すのもよかったが、そんな手段で助かったら、俺はゾンビ以下の存在になってしまう。

俺には道行く全ての人を助けることは出来ない。しかし、このグループの皆だけでも助けなければならんね。

やっぱり、助けるしかねえよなあ！！

俺と男子中学生が追ってこない事に気づいたのか、奈津美が走って戻ってきた。皆とは大分離されてしまい、後ろからはゾンビが接近中。絶対絶命の状況だ。

陸上部員の駿足さで戻ってきた奈津美に、

「こいつ足をくじいた！担ぐからゾンビを近づけさせないでくれ！」

そう言い、俺はリュックから突き出ていた火炎瓶を奈津美に放り投げた。状況を察したらしい奈津美は、火炎瓶をキャッチすると頷いた。他の皆は中学生達に接近するゾンビの迎撃に忙しく、こちらには来れないようだ。

ストラップでライフルを背中に回し、俺がアシクビ君を肩に担ぎ上げている間に、奈津美はポケットから出したライターで火炎瓶に火をつけた。

俺がアシクビ君を抱えて走り出した直後、奈津美が火炎瓶を投げ、炎が広がった。ゾンビ達が火達磨になり、フラフラと俺達を見失ったように彷徨う。

「右にいるわ!」

奈津美の叫び声で俺が右を見ると、手が届くほどの距離にまでゾンビが近づいていた。俺は一步下がり、ベルトからP230拳銃を抜き、素早く構えて撃つ。

1体のゾンビの頭に穴が開き、その間に猛スピードで近づいてきた奈津美が、バットで残りのゾンビを殴り倒す。脅威が去ったので、再び走り出す。

とその時、耳に装着していたイヤホンから、ゴリの声が流れた。あらはじめ、警察署で回収した無線機をゴリと俺が装着していたのだ。

『こちら五里! ようやく正面入り口に着いた! どーぞ』

『こちら岩崎、入り口は閉まっているか? オクレ』

『閉まってる! お前ら随分遅れてるようだが、どうかしたのか? どーぞ』

『中学生が一人足首をくじいた! お前らは予定通り、2階からの侵入を開始しろ! オワリ』

『りょーかい!』

ゴリとの交信が終わり、俺も走るスピードを上げる。とは言っても人を一人抱えているので、そのスピードは歩くよりは速いくらいだ。その間に、正面入り口に到着したゴリ達は、店内に侵入する準備をしていた。入り口のすぐ上にはバルコニーがあり、そこにいくつかテーブルと椅子が並んで、休憩できるようになっている。そう奈津美が言っていた。

ただバルコニーの位置は高く、ジャンプしても肩車しても届きそうにない。なので、バスケット部のエースである美雪が活躍する事となる。

屈んだゴリの背中を、助走をつけた奈津美が蹴り、大きく跳躍する。バスケ部員でダンクシュートも時々するらしい奈津美のジャンプ力は優れていた。それにゴリが踏み台の役割を果たし、美雪は高く跳躍した。

跳んだ美雪は、落下するギリギリ寸前でバルコニーの柵を掴んだ。美雪は柵を上がってバルコニーに侵入すると、今度は柵から手を突き出した。

そこを、ゴリの肩に立った亜衣が、美雪の手を掴んで引き上げられる。亜衣はバルコニーに上がると、すぐに弓での攻撃を始めた。

俺は亜衣の援護を受けつつ走り、ようやく正面入り口に到達した。正面玄関入り口は、格子状のシャッターが下ろされていた。ガラスを破っても、店内に侵入する事は出来なさそうだ。

アシクビ君を降ろすと、俺もライフルを持って迫りくるゾンビ達を迎撃する。

その間にゴリは中学生を自分の肩に立たせ、バルコニーの美雪が中学生の手を掴んで引き上げる。そのテンポは遅々としていて、全員がバルコニーに避難するには時間がかかりそうだ。

おまけにアシクビ君は足を負傷し、ゴリの肩に立つ事はできない。ゴリの肩に立ち、なおかつ美雪がバルコニーから大きく身を乗り出して、ようやく中学生を引き上げられるのだ。

アシクビ君を見捨てれば彼以外の全員が助かるが、その方法はさっき却下したばかりだ。

俺はM70ライフルを一発撃ち、全員が助かる方法を考え続けた。その間にも中学生はどんどん美雪に引き上げられ、残るは俺達高校生とアシクビ君だけになってしまった。

「どうすんのよ!?! 彼を見捨ててくの!?!」

「んなこと出来るか！今考えてる！！」

奈津美がゾンビをバットで殴りつつ叫び、俺は再びライフルを一発撃って答えた。ゾンビの頭に風穴が開き、斃れたが、押し寄せるゾンビの前には焼け石に水だった。

何かないか、何かないか、何かないか……？

まるで慌てて道具を取り出そうとしているドラえもんのように呟きつつ、必死に思考を巡らせた。

車が動けば、ここに配置して踏み台に出来るのに。でもドアに鍵は掛かり、エンジンキーも付いていな……。

ん？

そういえば、さっきドアがあけっぱなしの車があったような……。
……？

俺はゾンビの包囲の輪の外に目を凝らした。さっき駐車場を通過した際に見た、ドアが開けっぱなしのワゴン車が確認出来た。

アシクビ君を見捨てないためには、あのワゴン車に賭けるしかない。3日程度放置された位じゃ、バッテリーはまだつかえるだろう。エンジンが掛けっ放しだったら燃料が無くなっているかもしれないが、その時はその時だ。

エンジンにキーが付いていれば俺達の勝ち。付いてなかったら死デッドエンドしかない。

「ゴリ！お前前に軽トラ運転出来るって言ったよな！？」

「ああ！親父の手伝いで何回か運転したが……、それがどうかしたのか！？」

ゴリが斧でゾンビを殴りつつ、答えた。

「!!」と叫んだ。

「さっさとエンジン動かせ!」

「今やってる!・・・軽トラと違うから、もう少しかかるかもしれない」

ゴリが運転席のレバーやボタンを弄っている間にも、俺達に気付いたゾンビ達が接近してくる。

俺はブッシュナイフに持ち替えると、近づくゾンビの頭に振り下ろした。ぶしゅっとゾンビの頭が割れ、ナイフの刃が頭がい骨を叩き割る。

俺がそうして数体のゾンビを倒すと、ワゴン車のエンジンが唸った。ゴリはゆっくりワゴン車を前進させると、助手席のドアを開けて「乗れ!!」と叫んだ。

俺はゾンビを蹴り倒すと、助手席に回ってシートに座った。風雨にさらされた車内は、シートがぐっしより雨で湿っていた。ドアを閉めると、ワゴン車は走り出した。

「運転、大丈夫か?」

「軽トラ何度か運転した程度じゃ、ペーパードライバーより酷いレベルだ。乗り心地は期待すんな」

「・・・そーですか」

ゴリが不安そうにハンドルを握り、動かすたびに車体が危なっかく揺れる。

そして前方にゾンビの群れが見え、そして包囲されてる奈津美達の姿が確認できた。俺は下手にゾンビを引いてワゴン車をスリップさせないよう、ゴリにスピードを落とすよう言った。

ゴリが頷き、その足が動いた途端、ワゴン車がいきなり加速を始め

た。シートに背中を押しつけられ、俺は怒鳴る。

「どうした!？」

「わりい! ブレーキとアクセル踏み間違えた!!」

「お前は教習所出立てのペーパードライバーか!？ もしくはボケてきた老人ドライバーか!？」

「運転経験少ないって言っただろ!!!」

俺とゴリは座席に背中を押しつけられ、怒鳴りあってる間に、ゾンビの群れがワゴン車に迫ってくる。ブレーキは間に合わず、ワゴン車は猛スピードでゾンビの群れに突っ込んだ。

車体にゾンビが当たる鈍い音と、ボンネットがへこむ音が次々となる。フロントガラスがゾンビを引いた血と肉片で、真っ赤に染まっていく。

そしてゾンビを轢いた時にタイヤに血脂や肉片が付いたせいか、ワゴン車はいきなりスピンし始めた。車体前部を中心にして回転しつつ、ワゴン車は正面玄関に迫って行く。

「ノオオオオオオオオ!!!」

「ヘルプミー!!!」

慣性の法則に従い、俺達はシートにより強く背中を押しつけられていた。ミラーに俺達が絶叫する姿が大写しになり、続いて正面玄関で茫然と回転しつつ迫ってくるワゴン車を見る奈津美達が見えた。このままでは正面玄関に勢いよく突っ込み、奈津美達を轢いてしまふ!!!

固定されていない物が車内を乱舞し、何かが俺の頭を直撃する。どうする事も出来ず、俺は目を深く瞑った。

次の瞬間、ワゴン車が急に回転を止め、ゆっくりと停車した。

ゆらゆらと揺れる視界の中、視線を右に向けると、玄関の前で茫然と座り込む奈津美達の姿が見えた。そして俺は、どうやらまだ生きているらしい、と真っ白になった思考の片隅で思った。

ワゴン車は、バルコニーの真下より少し手前、正面玄関のドアに平行になるようにして停車していた。

車内では、俺とゴリがだらしなく口を開けたままシートに座っていた。ゴリは頭からドリンクホルダーから外れて宙を舞ったコーヒーを頭から浴び、俺は灰皿から飛び出した煙草の灰をかぶって真っ白に染まっていた。

「・・・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・！」

「・・・・俺達、生きてるのか？」

「・・・・そうみたいだね？」

俺とゴリは、何かを悟ったような顔で言葉を交わした。それほど、回転ワゴン車は俺達に恐怖を与えたのだ。

正直、今まで乗ったどのジェットコースターよりも恐怖を感じた。

と、ドアがどんどん叩かれ、麻衣が助手席のドアを開けた。俺とゴリの顔を見た麻衣達は爆笑し、続いて、

「さっさと出ろよ。バルコニーに上がるぞ」

と俺達を車内から引っ張り出した。

ワゴン車は、バルコニーへの踏み台となるよう上手く停車していた。偶然ってすごいね。

すぐさまゾンビ達が迫って来たので、奈津美達はさっさとボンネットを踏み台にして屋根に上がった。ゴリはアシクビ君を背負い、俺

はラインを抱っこして屋根へと上がる。

ワゴン車の屋根は高く、ゴリが誰かを背中に立たせなくても、手を伸ばす美雪に余裕で手が届いた。ゾンビ達は屋根に上る事はしないので、安心してバルコニーに上げれる。

ゴリがアシクビ君を肩車し、それを美雪が引き上げる。続いてゴリもバルコニーに上がり、ワゴン車の屋根に残っているのは俺だけになった。

「武、早く!!」

「ああ、わかった。今上がる」

俺はそう言うと、差し出された美雪の手を掴んだ。下を振り返ると、ゾンビ達がうめきつつ、屋根の上に向けて手を伸ばしてくる。

「・・・残念だったな。俺を喰えなくて」

俺はゾンビ達に向けてそう言うと、美雪の手を掴んで一気にバルコニーへと上がった。

第20話 とびだすな くるまはきゆうにとまれない(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第21話 良い子は、というよりみんな真似しないでね（マジで）！！！！（前妻

前回のあらすじ..

アシクビヲクジキマシター

第21話 良い子は、というよりみんな真似しないでね（マジで）！！！！

「フンフンフーン、楽しい工作の時間だよ」

俺はそう独り言を呟きつつ、カートに手頃な長さの鉄パイプを放り込んだ。

今俺達が居るのは、ショッピングモールの北側に位置する資材館だ。何で俺がこんなところに居るかというところ……。

「花火持って来たよ、お兄ちゃん」

遥がそう言い、花火をいっぱい搭載したカートを押してやって来た。

まあ、簡単に言うと、爆弾を作るためさ。テヘツ★

事態は数十分前に遡る……。

事情を説明すると、ショッピングモールには先客が居たのだ。それも数十人規模で。

店内に侵入した俺達は、彼らから（武器を突き付けられての）歓迎を受けた。そして一応リーダーを務めているらしい老人の話を聞く限り、彼らはゾンビ発生時からここに立て籠もっていたらしい。

幸いにも、外に通じる入り口は、警備システムが作動して迅速に塞がれて（俺達が破ったバルコニーの窓を除く）いて、店内にゾンビ

は侵入していなかった。生存者たちはスーパーから食料を得つつ、救助が来るまで立て籠もっているつもりらしい。

「で、これからどうするよ」

地に濡れた木刀を拭きつつ、麻衣が言った。余談だが、俺らはゾンビとの戦闘で全身血塗れであり、店内の生存者たちを怯えさせていた。

「このままあの人たちと一緒に、救助が来るまで待とうよ」

美雪が言った。が、俺はその考えに口を挟んだ。

「さて、ここで救助を待つというのは良い考えだ。でもあの生存者たちと一緒にいるのはどうかと思う」

「何で？」

奈津美が訊いてきた。

「あいつら、俺達がゾンビと戦っていたのに、一切助けなかったんだぞ。せめて入り口のシャッターを開けるぐらいはしてくれてもいいのに」

「それほどゾンビが怖かったんだろ。そこを責めちゃだめだ」

ゴリが俺をなだめるように言った。しかし俺は話し続ける。

「それだとしても、簡単に他人を見捨てられるような人達と、お前は一緒にいたいのか？ 最悪、俺達は武器も持ってるし戦える、って理由でここから放り出されるかもしれない。それどころか、ゾンビが侵入したら捨て駒扱いされるかもしれないぞ」

俺がそう言うと、皆は何かを考えるように視線を宙に向けた。

店内の生存者たちは、まともな武器を持っていなかった。銃はもちろん、バットやボールといった鈍器もだ。せいぜいが、店に元からいた警備員の警棒と、ベンチなどを破壊して作った角材くらいである。

他の館に行けば武器になりそうなものが沢山得られるのに、彼らはゾンビを恐れ、ずっとスーパ―のある本館から出ていないらしい。

その点、武器が充実し、大量のゾンビとも渡りあってきた俺達は、彼らに驚かれた。特に俺の持っていたライフフル銃は、下手したら生存者に奪われるかもしれないほど、威力の高い武器だ。

俺達は話し合い、元からいた生存者たちとは距離を取って、店内に立て籠もる事にした。

生存者たちのリーダーは、

- ・ 物資は決まった量しか配給しない事
- ・ 本館の物は勝手に持ち出さない事
- ・ 武器があつたら持つてくる事

ということ伝えると、さっさと俺達から離れて行った。どうやら俺達は歓迎されていないらしい。

ま、新たに10人以上加われば物資の減りも早くなるし、歓迎されるわけではないが。

……そして時間は今に戻る。

俺達はまず、本館から出て武器になりそうなものを見つけ、作ることにした。一応本館以外もシャッターで封鎖されたらしいが、監視

カメラで見る限り、数体のゾンビが侵入している可能性があるらしい。

それぞれ単独行動をしないよう小グループに分かれ、俺と美雪、遥、そして緒方少年は、武器を見つかるべく資材館へと向かった。

資材館は、角材や板などの資材が沢山あった。俺はそこで鉄パイプを見つけ、そして頭の中で何かが閃いた。

爆弾作れば、最強じゃね？

そう考えた俺は、皆を集合させた。

「・・・で、何するんだ？」

ゴリが訊いてきた。

俺はあらかじめ用意しておいた、必要なものを書いたルーズリーフをゴリに突き出した。ルーズリーフを受け取ったゴリは、怪訝な表情でそれを読み上げた。

「花火、ボルトやナット。硝酸アンモニウム（硝安）？ 軽油？ 小さなドラム缶・・・？」

「こんなもんどうすんのよ？」

美雪が訊いてきたので、俺はニヤリと唇の端を吊り上げて言った。

「爆弾作る」

「ばっ・・・！？」

皆が固まった。

「そんなもん作ってどうすんのよ!？」

「ゾンビに対する備えだよ。武器は威力が高いほどいいしね」

奈津美の問いに答えると、今度は亜衣が訊いてきた。

「仮に必要なものを全部集めてきたとして、作れるの？」

「ふっふっふ。爆弾なんて、すこし調べれば簡単に出来るもんさ」

俺はきざっぽく、額に手を当てながら言った。

すると、脇から遙が歩み出て来て、

「ま、お兄ちゃん軍オタだもんね」

と言い、俺の顔を見上げてきた。

・・・少し調べれば、というのは俺を基準にした場合でした。

とりあえず皆を物資調達に行かせた後、俺は硝安と軽油を調達に行くゴリ達を呼びとめた。

硝安は肥料で、園芸コーナーで多分入手できる事。軽油は外のガソリンスタンドで調達でき、その際はゾンビに注意する事。もし硝安がなかったら、他の軽油などは要らない。という旨を伝えると、ゴリ達は頷いて出発した。

資材館に残った俺達4人は、とりあえず簡単に出来そうな爆弾を作る事にした。今回作るのは、花火の火薬を流用した威力の弱い爆弾と、硝安を主体にして作る高威力の爆弾の2種類だ。

まず俺は、花火爆弾の容器となる鉄パイプを加工する作業を始めた。緒方を手伝わせ、手頃な鉄パイプを集める。

続いてそれらの鉄パイプを、資材加工用の回転ノコギリで30センチほどの長さに切断した。この回転ノコギリは、客が買った資材を加工するために資材館に元々あったものだ。

同じく備え付けのフェイスガードと手袋を付け、学生服の袖で腕を覆う。金属を加工するので、飛び散った火花で火傷しないためだ。鋭い金属音を立ててノコギリの円形の歯が鉄パイプに刺さり、火花が飛び散る。俺は2メートル程の鉄パイプを30センチずつにブツ切りにすると、続いて遙が集めてきた花火を手にとった。

まだ5月だが、これから夏に向かう事もあって、遙が集めてきた花火の量は多かった。

「よし。お前ら花火をほぐして、こっちのバケツに入れてけ。おっと、爆竹とか癩癩玉はやらなくていいぞ」

俺はそう指示すると、床に座りこみ、花火をほぐし始めた。他の皆も俺の様子を見て、後に続いて花火をほぐす。

持ち手の厚紙をはがすと、中からは黒い粉末状の火薬が現れた。俺はそれを、プラスチック製のバケツに放り込む。花火の火薬は少量なので、根気よく続けて行くことが大切だ。

「でも、こんなので爆弾になるの？」

そう、俺の隣に座る美雪が訊いてきた。俺は次の花火を手にとると、再びほぐしながら答えた。

「花火の火薬は圧力がかかってないからな。でも容器に詰めて圧力掛けて火をつけると、沢山集めれば花火の火薬でも爆弾になる。爆竹だって握って火い付ければ、指が吹っ飛ぶんだぜ」

「そうなんだ……。それも、軍事オタクの知識が役に立ってるの？」

美雪の問いを、俺は笑ってごまかした。

「ここから先を詳しく書くと、作者が公安にマークされてしまうので割愛します」

数十分後、俺は火薬がぎゅうぎゅう詰めになった鉄パイプを手にしてた。出来あがったのは一本だけ。これが試作品だ。

まだゴリ達は帰ってきていない。もし硝安と軽油が揃ったら。そっちの方の爆弾も作るつもりだ。

花火に付いていた短い導火線を引き抜き、繋げて一本にした長い導火線を手取る。鉄パイプの開口部は、自作したフタで塞いである。そして鉄パイプの中心部には、小さな穴が1個開いていた。

その穴に、繋げた導火線を挿入する。導火線と穴の隙間を塞ぐと、自作の鉄パイプ爆弾が完成した。

火薬で黒く汚れた手を洗うと、俺は早速爆弾の威力を確かめるため、資材館の屋上へと向かった。

第21話 良い子は、というよりみんな真似しないでね（マジで）！！！！（後妻

御意見、御感想お待ちしております。

第22話 ボクは爆弾魔じゃないよ。仮に爆弾魔だとしても、爆弾魔という名の

前回のあらすじ..

良い子は 絶！対！に！ 真似しないでね！

第22話　ボクは爆弾魔じゃないよ。仮に爆弾魔だとしても、爆弾魔という名の

お手製パイプ爆弾を携えた俺達4人は、階段を上がり、資材館の屋上に来ていた。屋上の淵から下を見下ろすと、多くのゾンビが建物を取り囲むようにうろついていた。

その数は、奈津美が言っていたこの町の人口よりも、遥かに多すぎる。

これは、もしかして……。豊島市内のゾンビが、全部このショッピングモールに集まって来たのか？

「……。なあ美雪。豊島市の人口って、大体どの位だっけ？」

「……。昼間人口だけで言うなら、大体30万人以上ね」

「……。どう見ても、このショッピングモールを取り囲むゾンビは、1000単位で数えた方が早んじゃないか？」

俺達はゾンビの多さに絶望しつつも、早速パイプ爆弾の試験を行う準備を始めた。

まず火薬の詰まった鉄パイプを、それよりも太い直径の鉄パイプの内部に挿入する。そして出来た隙間に、調達した釘やボルトやナットを詰め込んだ。

これはパイプが爆発した際、一緒に飛散して被害の拡大を図ったものだ。高速で飛び散る金属片なんて、凶器以外の何物でもない。パイプの開口部を塞ぐと、立派なパイプ爆弾が出来あがった。

「うっし、これでいいか！」

「・・・武さん、将来の進路はテロリストか過激派ですか・・・」

完成したパイプ爆弾を見て、緒方がボソツと呟いた。

「やかましい。うだうだ言うなら、ここからまた突き落とすぞ」

俺がそう言うと、緒方は一瞬震えて無言になった。どうやら中学校の音楽室の窓から俺に突き落とされたのが、よっぼどの恐怖だったようだ。

俺は念のため皆を下がらせると、ゴーグル（これは資材館備え付けのだ）を装着すると、屋上の端まで歩いた。ポケットからライターを取り出し、そしてパイプの先端から伸びる導火線に着火する。

「グレネード！！！！」

俺はFPSゲーム風にそう叫び、パイプ爆弾を放り投げた。何故パイプ爆弾なのに手榴弾グレネードの掛け声かって？その方が気分が乗るからだよ。

俺が放り投げたパイプ爆弾は弧を描きつつ落下し、上手くゾンビが密集している場所に落ちた。皆が耳を塞ぎ、爆発するその時を待つ。待つ事数秒、爆音と共に、ゾンビの集団が吹っ飛んだ。赤い霧と肉片が散乱し、近くにあった乗用車に降りかかる。

その様子を、俺以外の3人は啞然と見ていた。只一人、俺だけがテンション高いままである。

「ヒヤッハー！！やっぱり漢は爆発だよなあ！！！」

俺がはしゃいでる横で、ようやく我に返ったらしい3人は、爆心地付近を眺めていた。

まず、爆発の間近にいたゾンビは即死（もう死んでる、という注釈は何回目だろうか）。しかもバラバラなんて生易しい状態ではなく、高速で飛翔する鉄片に切り刻まれ、肉片として周囲に飛び散っていた。

そして爆発から半径数メートル以内のゾンビは、頭にボルトやナット、釘や鉄パイプの破片を突き刺して死んでいた。よほど、爆発の威力が大きかったに違いない。

威力は・・・、たとえばなら手榴弾並みといったところか。

「さて、威力も確認したところだし、さっさと下に戻ろう」

俺は上機嫌のまま、皆を促した。

さて、再び資材館に戻った俺達は、先程以上に花火をほぐす仕事に力を入れていた。

あれよりも威力の高いパイプ爆弾を作ろうとも思ったのだが、威力が申し分ない事と、あれ以上強力にしたらパイプがより太く、重くなるので止めたのだ。

ざらざらと花火から取り出した火薬をバケツに注いでいると、複数

の足音が聞こえた。その方向に目を凝らすと、誰かが近付いてきているのがわかる。

その人影が俺達に近付き、やがてそれらがゴリ達だという事がわかった。俺は立ちあがって大きく手を振り————、そして絶句した。

何故かって？ そりゃあ……………。

ゴリ。お前がポリタンクと硝安の入った袋を台車に載せて押してるのはよく分かる。でも、なんでその台車の上にチェーンソーがあるんだ？

亜衣。お前が持ってる弓、明らかに変わってないか？ どう見てもアーチェリー用のそれだし、なんで手にクロスボウまで構えてる？

そして極めつけの麻衣。お前、さっきまで持ってた木刀はどうした！？ 今お前が持ってるのは、明らかに本物の日本刀だぞ！！ しかもなんでゴリも背中に数本背負ってるんだ！？

「……………」

俺があんぐりと口を開けている間に、ゴリ達は俺のもとへと到着した。そして何事もないように、持ってきた獲物を床に下ろし始める。

「よっこいしょ。ほれ、硝安ってのはこれだろ？ あと軽油のポリタンクも」

ゴリはそう言い、硝安の入った大きな袋を数個、床に置いた。続いて軽油が入っているらしいポリタンクも、これまた数個、床に下ろ

す。

ようやく俺は我に返り、そして言った。

「ちょ、おま。それより前に、それらの武器はどうしたあ！？チェインソーはまあわかる。アーチェリー用の弓も許す。だけどそのクロスボウと日本刀はどっから持ってきたあ！？」

俺が叫ぶと、ゴリ達はニヤニヤと笑いながら顔を見合わせた。そして、麻衣が言う。

「ああコレね。さっき武器のバーゲンセールがあったから、そこで買って来たんだよ」

「嘘つけ。バイ○ハザードじゃあるまいし、こんなゾンビの溢れる場所です器を売る商人がどこにいる！？」

「落ちつけよ。ジョークだって」

ゴリが麻衣に助け船を出す。今度は亜衣が口を開いた。

「チェインソーは工具店で。アーチェリーの弓と矢、そしてクロスボウはスポーツショップで調達したの。日本刀は、何か『日本の刀剣展覧会』みたいなのが途中のホールでやってて、そこから持ってきたのよ」

刀剣展覧会・・・？　そういえば、と思って俺が視線を移すと、やっぱりあった。

『日本の刀剣展覧会、現在東館ホールで開催中！刀剣40本以上が展示してあります！』

そんなポスターが、資材館の壁に貼ってあった。

こんなところで展覧会をして、見に来る人はいるんかい。と思ったが、日本刀を嬉しそうに構える麻衣を見て、その気も失せた。

麻衣が持ってきた刀は3本。ゴリが背負ってきたのは4本。これなら、長時間麻衣が戦えるだろう。

日本刀というのは、意外と脆い。達人が使うならともかく、一般人が使ったらすぐに血脂で刃が鈍るか、骨に当たって刃が欠けてしまう。

なので本田忠勝がロボットなゲームの某バサラとか、某無双とか、某学園黙示録で描かれているように、日本刀はメンテナンスフリーで戦える物では無いのだ。

もし40本以上の日本刀があったら、麻衣が数本オシャカにしても、すぐに換えが利く。これはいい武器を発見した。

にほんとうを みつけた!!

まいの れべるが 5 あがった!!

ぜんたいの れべるが 1 あがった!!

某ドラゴンクエストやポケットモンスター風に表すならこんな感じか。

続いて亜衣が持って来たアーチェリーとクロスボウ。

豊島市は弓道やアーチェリーが盛んな市だ。アマチュア・プロ問わず、選手は多い。なのでスポーツショップに行ったら、たいいていの場所ですべて売っている。

クロスボウは銃刀法に引っかからないし、資格も要らないのでスポーツショップで売っていることがある。豊島市の北側には山と森が広がっているので、狩猟用に売っていたのかもしれない。

亜衣によると、クロスボウやアーチェリーの矢は、鍵のかかる棚に

閉まってあったらしい。その鍵を壊して入手したんだとか。

さて、話を戻す。

ゴリ達が調達してきた硝安と軽油を手に入れた俺は、早速爆薬制作を始めた。こればかりは、誰にも手伝わせる事は出来ない。

そのためゴリ達は、さっき取り残した武器を取りに戻った。どうやら他の生存者達も、他館にゾンビが少ないのを知ってうろつき始めたらしく、彼らがそれらを取る前に入手しなければならないのだ。

なぜ武器を独占する必要があるかって？そりゃあキミ、武器を多く持つ方がイニシアチブを取れるじゃないか。

冷戦然り、現在のロシアや中国然り。武器を持つ方が事を有利に進められるのは、誰が見ても明らかだ。

他の生存者たちを信用していないわけではないが、武器が多くあるに越したことは無い。

さて、爆薬を作り始めよう。

今回作るのは「硝安油剤爆薬」といい、比較的簡単(?)に作れる爆薬だ。主に工事現場でサッと作って発破に使えるほど、製造法は簡単だ。

まずは硝安94%、軽油6%の割合で混合し、続いて――――

・・・ちよおまうわなにをするやめアッー!!!!

※作者はただいま公安の取調べを受けています。もう少しお待ちください。

——最後に完成した爆薬を容器につめ、完成だ！

雷管とか他に色々自作、または転用する必要があるが、とりあえず作業は8割方終わった。

その様子を、遥は隣で興味深そうに見ていた。

「お兄ちゃん、爆薬の作り方ってどうやって知ったの？」

「うっ……。そ、それは高校に入れば誰にでもわかるものなのサ

ー（棒読み）」

「そうなの？」

遥が俺の顔を見上げてくる。その表情を見て、俺はますます罪悪感に苛まれた。

・・・違法なサイトとか、書物を調べたとか言えないよな。中学三年の時には、すでに爆弾の作り方を知っていたなんて言えないよな。ミリオタとして、爆弾製作方法を知っておくのは義務だけどね（何の義務だ）！！

「ふーん……。わたしはお兄ちゃんがミリオタだから、てっきり誘惑に負けちゃったのかと・・・」

「そ、ソナコトナイサー。高校の化学でピクリン酸とかニトロ基とかスルホ基とかベンゼン環とか、そういうのを沢山習うんだよ」

「ピクリン酸・・・？なにそれ？」

遥が訊いてくる。

「一番爆発しやすい物質だよ・・・、記憶どおりなら」

「へえ・・・。わたしも、高校に行ったら化学を習おうかな」

遥はそう言った後、「わたしが16になるまでに、死ななかったら
の話だけど」と寂しそうに言った。

俺はその様子を見て、頭を殴られたような衝撃を受けた。

俺は何の為にここまで来たのか？

何の為に武器を作るのか？

何が目標だ？

——皆を守る為だ。

皆を守る為、俺はここまで戦ってきたんだ。皆が生き残れるよう、
俺は爆弾を作るんだ。

全ては皆が、生き延びるための行動だ。

俺は遥を背後から、そっと抱きしめて言った。

「大丈夫だ。遥は、いや、皆は俺が守る。守り抜いてみせる。だから、死ぬとか言うなよ」

俺がそう言うと、遥は頷いた。

俺には妹萌えの属性は無い。だが、これだけは確かに言える。

———こんな可愛い従妹を、死なせてたまるかよ。

第22話 ボクは爆弾魔じゃないよ。仮に爆弾魔だとしても、爆弾魔という名の

御意見、御感想お待ちしております。

第23話 実際こんなカレーを作る奴がいたら引く(前書き)

前回のあらすじ..

武に妹属性は無いようです。

第23話 実際こんなカレーを作る奴がいたら引く

「・・・終わったあゝ!!」

俺はそう叫ぶと、床に寝転がった。

俺の手は花火の黒色火薬で真っ黒に汚れ、目の前には、20本近いパイプ爆弾が積み重ねてある。数時間かけて、これだけの量を完成させたのだ。

「おっ、終わったか。それどうする？」

「とりあえず、一人一本は・・・、ってオイ。お前くつろぎすぎだろ」

俺は、声をかけてきた麻衣に突っ込んだ。

麻衣は資材館の内部に運び込まれたソファーに横になり、本屋から持ってきた漫画の単行本を読んでいた。そして麻衣の足元には、40本近い刀が、整然と並べられている。

視線を横に向けると、ゴリが鼻歌を歌いながら、手にした消防用斧の汚れをタオルで拭き取っていた。そうして綺麗にした斧を床に置くと、今度は調達してきたチェーンソーを手に取った。

亜衣は、アーチェリー用の弓の弦の張り具合を確かめていた。そして足元には、スポーツショップから持ってきた4丁のクロスボウ。

奈津美は、麻衣の隣に座り、俺の家から持ってきたノートパソコン

のキーボードを叩いていた。情報収集に努めているらしい。

……あれ？何で俺達、こんなにリラックスしてるんだろう？

俺達は爆弾の試験を終えた後、資材館に武器や道具などを運び込んでいた。資材館は本館や他の館と手頃な近さにあるので、そこを拠点とすることに決めたのだ。おまけに資材館には角材や板などがあり、簡単にバリケードが構築できる。

他の生存者たちに物資を奪われないよう、搬入にはスピードが求められた。刀剣展覧会の日本刀を持ってくるのにゴリと麻衣が台車を持って出ていき、クロスボウや弓矢を調達するため、亜衣が中学生達を連れてスポーツショップに向かった。

その間俺は、パイプ爆弾と硝安油剤爆薬を作るのに専念した。奈津美は情報収集に忙しく、俺は美雪と遥、緒方をパシって火薬などを大量に調達させた。

その甲斐あって、俺達は数時間のうちに、大量の武器を手に入れる事が出来た。これならゾンビが大量に襲来しても、サクッと撃退出来るだろう。

日も落ちてしまい、ショッピングモール内は照明で煌々と照らされていた。奈津美がネットで調べたところによると、どうやら発電所などの重要施設には自衛隊が展開していて、ライフラインの維持に力が注がれているらしい。

これなら、展開している自衛隊が壊滅でもない限り、電気や水道、ガスなどは今後も安定して使えるだろう。そして強力な武器を持っ

ている自衛隊が、ノロノロ歩くゾンビにやられる可能性は低いに違いない。

そんなわけで、俺達はのんびりと、半ば要塞と化した資材館に立て籠もっているのだった。

今日の夕食は昨日とは違い、ちゃんとした食材を使っただけの料理らしい。先程から美雪が、アウトドアシヨップから持ち出したガスコンロで、鍋の中身を煮込んでいるのが見える。

・・・それにしても、美雪って料理、出来たっけ？

俺がそんな事を考えていると、資材館に誰かが入ってきた。反射的に腰のブッシュナイフに手を伸ばしたが、入ってきたのがシヨッピーングモールに元々いた生存者達と分かると、俺は手を降ろした。

その生存者達のグループのリーダーらしき中年の男は、資材館の内部を見て額に皺を寄せた。そして俺の目の前に積み重ねてあるパイプ爆弾を見て、仲間たちとなにやら相談事をしていた。

「えー、さっき何かを爆発させたのは君かい？」

「・・・そうですが」

男が話しかけてきた。

「それ、君が作ったのか？」

「はあ。まあ」

「そんな武器を独り占めするのはよくないと思うなあ。私達に預けた方がいいと思うよ、危ないし」

・・・何言ってんだ、こいつ？

俺は男の顔をポカンと見つめ、ややあってから気づいた。こいつらは、ただ単に俺が作った爆弾が目当てだったのだ。

「それに、その銃とかボウガンとか、子供が使うのは危ないよ。こはおじさんたちに預けてくれれば、皆をちゃんと守ってあげるよ」
「・・・失礼ですが、そのつもりはありません」

俺が言うと、男の顔が一瞬歪んだ。すぐに曖昧な笑顔に戻り、続ける。

「大体君、それは君の銃じゃないだろう。それに上手く使えるのかい？」

「これは親父の使ってた銃です（無論、嘘だ。今は俺のだけどね）それに腕前は御心配なさらずに。よく親父に連れられて狩猟とか言っていましたし。それに・・・」

俺はそこまで言うと、M70ライフルを取り上げ、男に向けて構えた。一応弾は装填されていないが、それでも十分な威嚇にはなる。

「現に俺、もう何体もゾンビ倒してますから」

男は銃口を向けられ、一瞬体が震えた。そして今度は顔を真っ赤にし、声を大きくして言う。

「そういうことを言ってるんじゃない！私はただ単に、子供が武器を持つのはよくないと言ってるんだ！！さっさと寄越しなさい！！」
「仮にあなた達に武器を預けたところで、あなた達が俺達を守って

くれるという保証はあるんですか？無いでしょうね。俺達が必死にゾンビから逃げてるのに、入り口すら開けてくれなかったんですから」

俺が言うと、男の顔色は赤から蒼白に変わった。まるで信号機みたいな奴だな。

などと思ってるうちに、資材館には不穏な空気が立ち込めていた。男が連れてきた生存者の大人たちは、それぞれショッピングモール内から見つけてきたバットなどの武器を手にし始めた。どうやら、力づくで奪うらしい。

無論こっちも武装してある。スポーツショップから持ち出したバットは全員に配ってあるし、麻衣なんか日本刀を持ってる。おまけに俺の武器はライフルだ。戦って負ける方がおかしい。

それでも大人たちはどうにかなると思っているのか、武器を構えて俺達に近付いてきた。中学生達是不穏な空気を感じ取ったのか、店内の奥へと逃げる。

目の前の男の腰にナタが下がっているのを見て、俺はこっそり手を後ろに回し、P230拳銃のグリップを握った。何かあればすぐ撃てるよう、ベルトから半分引き抜く。

とその時、

「ご飯出来たよ」

という美雪のマヌケな声が、店の奥から聞こえた。

その声で張り詰めていた緊張感が一気に抜け、俺達の争いは不完全燃焼に終わった。戦う気も失せたのか、大人たちはそろそろと資材館から出ていく。

「・・・また来るから、そのときまで、きちんと考えておきなさい」

リーダーの男はそう言い、資材館から出ていった。

「・・・・・・・・ぶはあゝ」

「やばかった・・・・・・・・」

彼らが去った後、俺達は一気に力を抜いた。まさかいきなり人間と対立するとは思っていなかったからだ。

「はゝい、今日はカレーだよ・・・ってアレ？みんなどうしたの？」

カレーが入っているらしき鍋を持って現れた美雪は、俺達の様子を見て首をかしげた。どうやらこいつは、血みどろの戦い一歩手前まで事態が切迫していたのに気付かなかったらしい。

天然というか、もはや才能の一種かもしれん。

俺達は美雪に呆れつつも、彼女が持ってきたカレーの入った鍋を見た。鍋からはいい臭いが漂ってくる。

美雪達が配膳の準備をする間に、俺とゴリは床をかたづけろよう言い渡された。パイプ爆弾や工具などを閉まっていると、急に俺達の腹が鳴る。

俺とゴリは顔を見合わせると、ニヤリと笑ってカレーの鍋に近付いた。

やっぱり、つまみ食いは男の特権だね？

俺とゴリは大きなスプーン（サラは1枚しかなかった。美雪は気が効かないな）を手に取ると、蓋を開け、中身を掬った。

意外にも、見た目はまともだった。どんな味がするんだろうと俺達は心を躍らせ、そしてスプーンを口に運んだ。

瞬間、口の中に何とも形容しがたい味が広がった。

美味しいという意味ではない。

むしろ、「これは食べ物なのか？」というレベルの味である。

うわーレイン◯ーパンとか謎ジャムとかこんな味なのかなとか美雪ってドジっ子属性あったけどここまで酷いとは思わなかったとかもうあいつには料理を作らせないようにしようという思考を最後に、

俺の意識はブラックアウトした。

第23話 実際こんなカレーを作る奴がいたら引く(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第24話 あれ？フラグが立った？

「・・・お前の料理の腕はどうなってんだよ？」

「だーから、ゴメンって言ってるでしょ」

俺の隣を歩く美雪が、口を尖らせて言った。

俺は今、美雪とラインを連れ、資材館の隣のアミューズメントパーク内を歩いていた。

昨夜の地雷カレーを食し、一晩があけていた。ようやく安全な拠点を得た俺達は、モールの探索を始めたのだ。

俺達が今掌握しているのは資材館のみ、それ以外の場所は、本館を除いて安全が確認されていない。警備質の防犯カメラの映像によると、館内をうろつく不審な影がいくつかあるらしく、それらの正体を調べるのも仕事だ。そして外部との通路が塞がれているのかを確認しなければならぬ。

中学生達は、体力や気力を回復させるために資材館に残っている。そしてその護衛のためにゴリと麻衣を残し、残った俺を含めた高校生4人を二手に分けて館内の探索を行っている。

今俺達が歩いているアミューズメントパークは、その名の通り、ゲームセンターや遊戯施設が揃っている。客が買物物についでに、ここで遊びにいくのを期待して作られたのだろう。

館内に電気がまだ通っているおかげで、アミューズメントパークは騒々しい音楽で満たされていた。ゲームセンターからは大音響でゲ

ーム音が流れ、これではゾンビが呻いていても聞こえないだろう。

話題は地雷カレーに戻る。

「お前、食料を大量破壊兵器に変えるなんて、最早一種の才能だぞ。毒ギョーザとか農薬野菜のお返しに、中国に輸出してやったらどうだ？」

「うっさいわね。大体大量破壊兵器って何よ大量破壊兵器って。アタシのカレーは核兵器並みだっていうの？」

「いや。化学兵器の一種だろ」

昨夜の地雷カレーは、倒れていた俺とゴリの異変に気付いた亜衣の手により、調味料を大量にぶち込まれてようやく食用に適すようになった。それでもまだ「どうにか食べられる」レベルでしかないのだ、多くの中学生がカレー抜きのカレーライスを食べる羽目になった（というより、ただのライスだろ）。

味が変わるまで調味料を投入された結果カレーの量は増え、おまけにカレーを食べない奴が続出した事により、未だにカレーは鍋に半分以上残っている。

ハッキリ言って、アメリカ軍の放出品のレーションの方が、まだおいしいと思う。

「おまえ、家庭科の調理実習とかどうしてたの？」

「え？ そうね……。たしか一度だけ料理させてもらったら、食べた全員が授業後トイレから戻ってこなかった事があったような。次の日も皆学校休んでたし」

「おまえ、家庭科の授業で一体何を作ったあ！？」

いやはや。こいつに料理をさせるのは、もうやめよう。下手に料理

を作らせたなら、ゾンビに喰われて殺される前に、美雪の地雷料理によって死んでしまう。

しかも今日の料理は、やっぱり美雪の地雷カレーだ。大量に作って長く保存できるのがアダになったが、主に食べさせられるのは俺とゴリになる。

学校と聞いて、俺はふと話題を変えた。

「そういや俺、将来の進路予定表まだ提出してなかったな」

「いまさら将来の進路？ だいたい予定表を提出する学校は、とくにゾンビの巣窟よ」

美雪はそう言って笑い、すぐに真剣な表情になって俺に向き合った。その瞳に、俺は立ち止まってしまう。

「あのさ、武。この先どうするの？」

「どうするって、救助が来るまでここに立て籠もるか、武器を集めて脱出するか・・・」

「違う。わたしが言いたいのは、これからあなたがどうするかって事。たとえば大学とか職業とか」

こんな所、こんな状況で進路の話かよ。俺はそう言っておどけようとしたが、美雪の真剣な表情を見て止めた。

俺は漠然と描いていた、将来の予定図を頭に思い浮かべた。

「普通に大学行って、普通に就職かな。ま、今の状況じゃ学力云々以前に、この先大学とか残ってるか疑問だな」

「へえ・・・。そうなんだ。案外普通の将来像ね」

「じゃあ、ゾンビハンターとかゾンビバスターズとかやれってのか？ まあ俺に向いてそうだけど」

俺はそう言い、美雪と一緒に笑った。

まるで、平和だった時の、教室での一場面のような。将来についてお互い語り合ったり、進路で悩んだり。

でも、そんな風景は、もう戻ってくる事はないだろう。

「じゃあ美雪はどうなんだよ？ お前も進学か？」

「ああ、わたしは結婚」

結婚！？ お前、どこの幼稚園児だ？

「しょうらいパパとけっこんする」とか、「およめさんになる」とか言っているのは、小学校に上がるまでだ！

そんなセリフ言ってる幼稚園児、アニメやゲームでしか見た事ないけどね。

俺がその旨を言うと、美雪は顔を真っ赤にして反論した。

「ち、違うわよ！ 別に結婚だけが将来の目的じゃなくて、進学とか就職とかして、それから・・・」

最後の方を消え入るように言うと、美雪は赤い顔のままうつむいた。無言になり、美雪は俺から顔を背ける。

やべえ。めっちゃ萌える。

高1から美雪と一緒にいたが、こんな可愛い表情は見た事がなかった。やっぱり、人間って隠れている部分が多いんだな。

それと同時に、俺は皆のそうだった一面をあまり知らない事に、若干だが落ち込んだ。こんな状況にならなければ、俺は彼らの素顔を知る事は無かったかもしれない。

「んで、結婚相手は決まってるの？」

俺が冷やかすように言うと、美雪はうつむいたまま、小さく何かを呟いた。

「え？誰？聞こえないよ？」

ニヤニヤしながら言うと、突如美雪が顔を上げた。何かを決心したような表情で、俺を見ってくる。
そうして美雪は、蚊の羽音のような小さな声で言った。

「わたしが、好きなのは……」

俺はニヤケながらその続きを待ったが、美雪の声は、ラインの唸り声によってかき消された。

ラインを見ると、先程まで地面に伏せていたのに、今や何かを警戒するように前方を見て、唸り声を上げていた。ラインの視線を辿って行くと、その先には数体の人影。

ゾンビだった。

「チッ、やっぱり何体か入り込んでたか！美雪、さっさと片付けるぞー！」

俺が言うと、美雪は我に返ったように顔を振り、そして頷いた。

ライフルを使ってもいいのだが、弾はあと30発くらいしかない。
なので俺はライフルを肩にかけ、ブッシュナイフを抜いた。

ゾンビのいる方向に目をこらしたが、どこかの通路が開いているよ

うには見えない。おそらく、通路のシャッターが閉まった時には、既に館内に侵入していたのだろう。

美雪も獲物のバールを握り、戦う準備は万端だ。ラインも戦闘態勢に入り、吠える。

「よし、行くぞ!!」

俺は叫び、ラインが飛び出す。俺と美雪も走り、ゾンビの頭めがけてそれぞれの獲物を振り下ろす。

・・・美雪の好きな人って、結局誰だったんだろうね？ ネタになるし、美雪は美人なので、少し気にはなっていたんだが。

第24話 あれ？フラグが立った？（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第25話 あれ？（死亡）フラグが立った？（前書き）

前回のあらすじ..

フラグ？

第25話 あれ？（死亡）フラグが立った？

俺達がショッピングモールにやってきて、1週間。
つまり、今日。

「おっ、ショットガン出た。ゴリそれ使え」

「わかった。・・・っと、ボス戦かよ。隠れて撃ちまくるぞ」

アミューズメントパークの一角、ゲームセンターにて。

俺とゴリは、拳銃型のコントローラーを持ち、シューティングゲームの筐体の前に立ち、画面に向けて撃ちまくっていた。

画面の中では敵兵が俺達に撃たれて次々消滅し、続いて戦車が現れ発砲してくる。俺とゴリは足元のレバーから足を離し、障害物に隠れる。

・・・つまり、ゲームの真っ最中だったのだ。

「ライフル発見！これで勝つる！！」

「お前一人で撃ちまくるな。俺にも殺^やらせろ！」

「へっ、早い者勝ちだよ」

そう言ってコントローラーの引き金を引き、戦車が爆発してステージクリア。ミリオタ且FPSゲームマニア且ゲーセンのシューティングゲームも嗜む俺にとって、この位楽勝さ。

ゴリの腕もそこそこで、俺達は死ぬ事なくファイナルステージまで

到達していた。

え？何でこんなことしてるかって？

そりゃあ、やることが無いからだよ。キミ。

ショッピングモールに来て一週間。モール内に侵入していたゾンビを掃討した後は、俺達にはやる事が無くなっていった。

モールはシャッターによって外部との出入り口が遮断され、ゾンビが侵入してくる事もない。ゾンビはモールを取り囲むように続々と増えているが、侵入してこないなので脅威では無かった。

朝起きて飯を食い、爆弾を作り（材料切れで打ち止めだけだね）、物資を調達し、昼飯を食い、モール内を巡回し、暇になったら遊び、夕飯を食い、夜は交代で屋上に上がって外を見張る。俺達はこの5日間、そんな生活を続けていた。

当初俺達は本館の生存者たちと距離を取っていたが、ここ数日の間に、彼らと積極的にコミュニケーションを取るようになってきた。

未だに一部の大人たちからは武器を寄越せと言われていたが、ここ最近はそういうことも無くなってきた。ゾンビが侵入してこないかぎり、武器は使うことは無いからだ。

俺はこの警備員だったという田中^{たなか}と名乗る初老の男性と親しくなり、彼と頻繁に情報を交換していた。田中さんは監視カメラのモニターがある警備室に陣取り、カメラで得た情報を俺達に教えてくれる。

本館の生存者たちは当初すぐに救出が来ると思い、物資を惜しみなく使っていた。しかし1週間も立って救援が来ない事を不安に思い、

次第に物資を節約するようになってきている。

俺達は食事の時に配給される食材を少しずつ貯め込み、家電売り場から持ってきた冷蔵庫の中に保存した。もし本館からの配給が途絶えても、しばらくは大丈夫だ。

いざとなったら強硬突破で調達するから、別に困らないけどね。

俺とゴリは結局死ぬ事なく、そのシューティングゲームをクリアした。

ゲームに使う硬貨は自分たちのポケットマネーだ。どうせこの状況で通貨が重要な価値を持つわけでもないし、それにいざとなったらレジやら何やらをぶっ壊して手に入れられる。

俺達はアミューズメントパークを離れ、拠点の資材館へ向けて歩きはじめた。そろそろ巡回の時間だ。

「武、お前救助は来ると思うか？」

唐突にゴリが訊いてきた。

「何だよ急に。まだまだ物資はあるから、不安になることはないぞ」
「それでも不安なんだよ。いつまでもここに居る訳にはいかないし、俺も早く家族に会いたいし」

モールに来てから4日目になり、ようやくゴリは家族との連絡がついた。ゴリの家族は全員無事で、自衛隊に保護してもらい、今は避難所にいるそうだ。

他にも父親が警察官の亜衣と麻衣も父親と連絡がつき、奈津美も美雪も災害用伝言ダイヤルで親の無事を確認したらしい。中学生組も親と連絡がつかないのがまだ数人いるが、大体は安否が確認できたそうだ（家族が亡くなったのも数人いる）。

問題は遙だ。彼女の親は、未だに連絡が取れない。俺と遙の携帯から電話をしたり、職場に連絡を試みたが、コール音が空しく続いただけだった。

遙の親はどちらも働いている。しかも職場は豊島市の南部の市街地、つまり人口密集地帯だ。人口が多い程ゾンビの数も多く、俺は最悪の事態しか頭に思い浮かばない。

「・・・ハッキリ言って、救助が来るかどうかは微妙だな。ゾンビが死滅すれば可能性もあるけど、まだ元気そうにそこら辺をうろついている」

「自衛隊は？」

「救助するだけの戦力があるとは思えない。奈津美がパソコンで最新情報をチェックしてくれてるけど、避難所と駐屯地を守るだけで精一杯だってさ」

「じゃあ、ゾンビが死ぬか、自衛隊の戦力に余裕が出るか、あるいは」

「強硬突破して、安全地帯に行くか」

俺とゴリは同時に言い、そして大きくため息を吐いた。

そんな無茶な事、出来るわけがない。モールの外のゾンビは増え続けてるし、今や面単位で数えた方が早い位だ。俺の特製爆弾を使っても、その半分も倒せないだろう。

仮にゾンビの包囲網を突破しても、どこへ行けばいいのかが分からない。自衛隊が警備せず、ゾンビに襲われて連絡が取れなくなる避

難所は、日を追うごとに増え続けている。

そして人数の問題もある。モール内の避難民は50名以上。バスでもなければ全員が脱出出来ないし、そんなものここにはない。外にある乗用車で脱出するにしても、エンジンにキーが点いたままの乗用車はほとんどないだろう。あったとしても、辿り着く前にゾンビに喰われる。ごちそうさま。

モール内で販売している車両もある。農業用の軽トラやライトバンだが、いかんせん数台しかない。これでは避難民の半分も乗せられないだろう。

俺とゴリが再び大きいため息を吐いた時、俺がベルトに装着していた無線機が鳴った。アウトドアショップから調達してきた無線機は、警備室にいる田中さんと繋がっている。

俺は送話ボタンを押し、通信に出た。

「はい、何ですか田中さん？」

『あー、今監視カメラに映っとるんだが、駐車場に車が侵入してきたぞ。それも数台』

「生存者ですか？」

『多分な。屋上に行って確認してみい』

「りょーかいです」

そういつて通信は切れ、俺はウィンチェスターM70ライフルを手にして、ゴリに言った。

「誰か駐車場に、車で乗り込んできたらしい。屋上行って確認しよう」

「わかった。でも無事に辿りつけるかなあ？」

ゴリはそう言い、目を細めた。

ここ数日、俺達と同じことを考えたのか、ショッピングモールにやってくる生存者の数が増えている。その度に俺達は屋上から援護するのだが、彼らの半分はゾンビに恐れをなして諦めて別の場所に向かい、半分は強行突破してモールに辿りつこうとするものの、ゾンビに囲まれて全滅してしまっていた。

車で乗り込んできても、ゾンビを引いた時の血脂でタイヤがスリップし、窓やドアを怪力で破られて引きずり出されてしまう。俺達はそんな光景を、何回も見た。

駐車場の生存者たちも、そんな末路を辿るのだろうか。

俺とゴリが、駐車場が見渡せる本館の屋上に辿り着いた直後、何かが破裂するような音がした。銃声に違いない。生存者たちの中に、猟師でもいるのだろうか。

それにしても多すぎる数の銃声を疑問に思いつつ、屋上の淵から駐車場を見た俺とゴリは、予想外の光景に言葉が出なくなった。

駐車場の真ん中あたりで乗り捨てられた数台の乗用車から、男たちが次々と降りていた。数は合わせて15人程だろうか。

問題は、彼らの半分以上が銃器を所持している事だった。銃砲店で売っているようなライフル、散弾銃……。そして拳銃。

俺は双眼鏡を取り出し、彼らを見た。銃を持っていない者は日本刀を持ち出し、近づくゾンビを斬っている。その腕や肩に見事な入れ墨を確認した俺は、拳銃を撃つ男の手元を注視した。

男が撃っていた拳銃は、旧ソ連製のトカレフやマカロフといった自動拳銃だった。これらの銃は主に闇ルートで売買され、そして主に

違法な団体が購入している。

これらの事から考えられる事は1つ。

どう見てもヤ○ザか暴力団構成員です。本当にありがとうございます。

———って、ボケている場合じゃねえだろ!!

第25話 あれ? (死亡) フラグが立った? (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第26話 この女の人、だれ？（前書き）

前回のあらすじ..

オー、ジャパニーズヤクザ！！サムライ！！

第26話 この女の人、だれ？

YAKUZAな男たちがモールに来てから3日。

事態は悪化しつつあった。

YAKUZA達は手にした銃や刀で、先にモールに居た避難民たちを威圧し始めたのだ。貧弱な武装しか持たない避難民たちは、彼らの機嫌を損ねないよう、無抵抗でいる事を余儀なくされた。

取り締まる者がいないヤクザ達は、すぐに好き勝手に始めた。配給を無視して食料を勝手に食べたり、避難民の女性に手を出そうとしたり。

今のところ、まだ誰かを傷つける行動をヤクザは取っていない。しかし彼らがそのような行動をしたら、このモールに止める者はいない。

無論、俺達も同じであった。

「あいつら、ホント好き勝手に始めたな」

「ああ。俺達程じゃないが、それでもやり過ぎだ」

俺とゴリは、電気の消えた資材館内にいた。

他の女子たちは、今は警備室に行かせている。何故かというと、ヤクザ達の目から隠すためだ。もしヤクザ達が理性を失い、暴れはじめたら、その結果は火を見るよりも明らかだ。

俺達は余計な疑問や敵意を持たれないよう、武器を隠した。ライフ

ルはもちろん、クロスボウや刀もだ。拳銃は小型で隠しやすく、今でも俺が持っているが、小型の拳銃一丁で立ち向かえるとは到底思えない。

ヤクザの人数は20人程。持っているライフルやショットガン、拳銃の数は約30丁。刀は数本。立ち向かっていっても、あつという間に俺の体に風穴がいくつも開く。

爆弾を使えば結果は変わるかもしれないが、投げて届く程の距離まで接近しなければならぬのが問題だ。

とその時、入り口の方から足音が聞こえた。反射的に、俺とゴリはそれぞれの獲物に手を伸ばす。

資材館に入ってきたのは、2人の高校生だった。改造した学生服を身につけ、髪を染め、耳にピアス。誰がどこからどう見ても不良の体裁である。

「あつれー？女の子いないのー？男しかいないのかよー？」

そう言ったのは不良の片割れ、関口せきぐちという高校生だった。俺とコイツには、深い因縁があった。

俺はコイツと、小中学校が同じだった。関口はそのころから素行が悪く、他者に暴力を振るうのは当たり前。同級生にカツアゲしたり、万引きを強要するなどのことを行っていた。

同然、同級生をいじめる事があった。そして俺は、そのいじめの標的だったのだ。

関口とは中学卒業以来会っていなかったが、昨日やってきたヤクザ

の集団に何故か関口がいたのだ。噂では卒業した後、偏差値の低い（＝当然不良が集まる）高校に進学し、そこでヤクザの下っ端になったと聞く。

まさかその噂が本当で、しかも俺達の避難しているモールにそのヤクザの組がやってくるなんて、本当に運が悪い。しかし、俺達にとっては運が悪いでは済まされない事だ。

関口達はヤクザの構成員よりも、モールでの素行が悪い。大人よりも経験を積んでいないので、感情をコントロール出来ず、すぐに行動に表してしまうのだ。

資材館に入ってきた関口達は、俺とゴリに向けて歩いてきた。俺達は関口達を刺激しないよう、何も言わないし何もしない。

関口は資材館の内部を見回し、つまらなそうに鼻をならした。

「おーおー岩崎、何か飲むモンない？俺のど乾いちゃったんだけどー」

俺は大人しく、腰のドリンクホルダーからミネラルウォーターのペットボトルを取り出した。そして関口に差し出す。刺激してはならない。

関口はヘラヘラ笑いつつ、俺の手からペットボトルをもぎ取った。そして蓋を開け、飲む……

と思いきや、中身の水を俺にぶっかけてきた。

「あっ、ごめーん。手が滑っちゃった」

そう言って、関口はもう一人の不良と一緒に大笑いした。その口内の歯は、シンナーでもやっているのか変色し、溶けている。

刺激するな。刺激するな。刺激するな・・・！！

俺はそう心の中で繰り返し、手をぎゅっと握りしめ、うつむいた。髪から水が滴り落ち、床の絨毯にしみを作る。

ゴリは俺にされた行為に怒り、何かを言おうとした。が、俺がゴリの手を掴み、行動に出ないよう制止した。

「岩崎・・・！」

「何もするな。怒らせるな。皆に被害が出る」

俺とゴリはそう小声で言いあう。ゴリは俺に水がぶっかけられた事にまだ怒っているようだが、皆の事を思い出したのか、再び大人しくなる。今ここで騒ぎを起こしたら、関口の怒りは俺だけでなく、警備室に避難している女子達にも向くだろう。そうなったら、どんなことになるかは考えるのも恐ろしい。

「おまえよー、ハッキリ言ってとっくに死んでると思ってたよ。まさか生きてるなんてなー」

俺が屈辱に耐えている間、関口はヘラヘラと俺の頭などを軽く叩き、ニヤニヤと笑う。これだから不良はいやなんだ、と言いたところだが、ぐっところえる。

関口は俺が抵抗しないのを見てか、俺を蔑む言葉を連発し始めた。曰く、キモイ。オタク。陰気。ブサイク。死んだ方がマシ、今すぐゾンビに喰われてこい。エトセトラエトセトラ・・・。

そうだ、いつもこいつはこうだった。

クラスが同じだった時も、そうでなかった時も、皆の面前で俺を罵倒し、侮辱し、蔑んだ。小中学校というのはいじめが発生しやすい環境であり、皆のストレスが溜まる場所でもある。

そのストレスは関口というフィルターを通じ、俺に向けられた。俺をいじめの標的にするという行為は、主に女子の恐ろしいネットワークで通じ、それから間もなく学年全体に広まった。

「おはよう」と言っても、誰も返事をしてくれない。

体育の授業中、他クラスの生徒に机の中身をひっくり返され、窓の外へと放り投げられる。

トイレに行っている間に、教科書をカッターナイフで切り刻まれる。

給食で、「ごめーん、もう無くなっちゃった」と、俺の給食だけ明らかに皆の半分以下の量。

掃除を押し付けられるのは日常茶飯事。

俺の持ち物を隠すのも当たり前。

体育なんかあった日は最悪だ。殴る蹴るの傷が、怪我と皆に誤魔化される。ドッジボールでは俺が集中的に狙われ、本気のボールが顔面に当てられる。顔面だから無効、という理由でコートに残らされ、再び的になる。

教師は責任を被りたくないのか、手助け一つしてくれなかった。学

校側も、いじめがあつたと教育委員会に知られては自分達の経歴に響くと思つたのか、俺が何度訴えても無駄だった。

そう、この関口クンヤローのせいで、いい思い出はない。俺はずっと耐え続けてきた。

高校に行き、やっといじめから解放されたと思つたのに。ゾンビが世界に溢れ、やっそこさ遙達を救出し、ショッピングモールに避難したというのに。そこにヤクザと共に関口がやってくるとは。

神様はどうやら、俺を徹底的に嫌っているらしい。

俺がぐつと関口を殺したい衝動を抑えている間にも、関口は空になったペットボトルで、俺の頭を叩き始めた。俺が何も言わない様子を見て、さらに大笑い。

とその時、遂にゴリがキレた。

「てめえらっ！いい加減にしやがれっ！！！」

ゴリが吠え、その声に関口達が体を一瞬震わせる。動きが止まり、ゴリがその手からペットボトルをもぎ取った。

「さっきから何だその態度は！こんな状況なのに、よく他人をいたぶってられるな！！」

巨漢、筋肉モリモリマツチョマンのゴリが吠えている様は、はつきり言って体育教師並みに威圧感があった。俺は慌てて、ゴリの腕を掴んで止めさせる。

どうにかゴリを落ち着かせたら、今度は関口の仲間が俺に怒鳴ってきた。

「お前ら自分達が何したか分かってんのか！？これからどうなっても知らないからな！！」

そう言い、関口を連れて資材館から出ていった。恐らくゴリの気迫に押され、慌てて逃げ出したに違いない。

どうなっても知らない、というのは負け犬の遠吠えに等しい。いわゆる虎の威を借りる狐、といったところだが、その虎と狐が仲間関係にある以上、俺達に何かしてくるかもしれない。

「・・・すまん武。急に怒鳴っちゃまって。お前がいたぶられてるのを見ると、カッとなって」

「いいさ。俺の為を思ってくれたんだろ？むしろ嬉しいくらいさ」

関口達が去った後、ゴリは俺に謝罪してきた。

俺はタオルで濡れた頭を拭いつつ、これからの対処法を考え始める。対処する相手とは、もちろんヤクザと関口だ。ゾンビなんて侵入してこない限り、たいした脅威ではない。

が、ヤクザ達が大量の銃器で武装している以上、マトモな案など出てくるまでもない。こっちも銃が沢山あれば話は別だが、生憎こちらにはライフル一丁と拳銃一丁、そしてクロスボウ四丁しか飛び道具はない。

結論..無理

「・・・ホントに、どうすっかな・・・？」

俺とゴリはうなだれ、そして大きくため息をついた。

数時間後、日付が変わって間もなく。

俺は緒方を伴い、資材館の屋上に立っていた。無論、ただ突っ立っているのではなく、ゾンビ達の動向を監視し、救助が来ないか見張っているのだ。

アウトドアショップから持ってきた折り畳み式の椅子に腰かけ、同じくキャンプ用の折り畳み式テーブルを広げ、その上にランタンを置く。屋上は明かりが少ないので、屋内から持ってくるしかないのだ。

駐車場は自動的に点灯した照明で煌々と照らされ、ゾンビ達がその明りの下を歩き回る。ショッピングモールを包囲するゾンビは日に増えていく。

俺はテーブルの上のランタンの明かりを頼りに、書店から持ってきた軍事情報を掲載する雑誌を読みふけていた。監視とは言っても、ゾンビは入り口のバリケードで店内に侵入できず、救助なんて来る

わけないだろう。

他の避難民たちも俺達を見習い、それぞれ避難している館の屋上に立って監視をしている。新たにやってきたヤクザ達はどうかって？ そんなことしているわけ無いじゃないか。

俺と同じく椅子に座り、ジャ○プを読んでいる緒方は眠そうに目をこすっていた。さっき俺が叩き起こしたので、まだ眠いのかもしくない。

こんなに無駄な事はない。侵入しないゾンビを見張り、来ない救助を待ち、仕事をしないヤクザを守るかのように監視を続ける。

俺が鬱な気分になったとき、遠くから何かが破裂するような、微かな乾いた音がした。

俺は即座に音がした方向に視線を向け、目の前の緒方を見た。緒方は何も気づいていないのか、まだジャ○プを読んでいる。

「おい、何か今聞こえなかったか？」

「え？ 何かってな・・・」

再び、微かな破裂音。緒方も気付いたのか、目を見開き、俺と同じように音のした方向へ目を向ける。

「・・・銃声？ ですか？」

「多分な。猟師の生き残りかもしれない」

俺が言った瞬間、今度は銃声らしき乾いた音が、連続して聞こえた。たとえるなら、タタン、タタタンといった感じに。

連射可能な銃は、日本で流通していることは絶対ない。所持が許可されているのは警察か自衛隊。違法に持っているのはヤクザや暴力

団、もしくはテロリストくらいだ。しかし、そんなに多くは持っていないだろう。確率的に言って、今の銃声は前者のものだろう。だとすると、警察か自衛隊の救助が来たのか？

俺と緒方がそうワクテカしつつ連発される銃声を聞く。2回程、何かが爆発するような音も聞こえた。

が、救助マダー？と俺が待っていると、突然、遠くから聞こえる銃声が途絶えた。

「「ゑ？」」

俺と緒方は、そう同時に言ってしまった。

最初は、ただ近くに居たゾンビを掃討し終わったのかと思った。が、何分経っても何十分経っても、一向に銃声は戻ってこない。

「・・・殺^やられたんですかね？」

「・・・かもね」

「・・・救助は？」

「・・・来ないんじゃない？」

「「・・・」」

「「・・・はあ・・・」」

4時間後。

そろそろ俺達の監視が終わる時間だ。しかし、午前4時近くになっても、未だに銃声は戻ってきていない。

恐らく、全滅した（どこの部隊か分からないが）ものと思われる。期待が失望に変わった反動で、緒方はとてもショックを受けたらしい。机に突っ伏した緒方は、俺が肩を揺らすまで動かなかった。

「・・・うーん、救助は？」

「来てない」

「・・・そうですか・・・」

緒方はそう言い、立ち上がった。俺達が失意のどん底で館内に戻ろうとした、その時。

再び、銃声がした。また連続した銃声で、しかも近い。

俺と緒方は、慌てて銃声のした方向をみた。恐らく北の方向から銃声が鳴っている。

屋上の淵まで走り、双眼鏡を取りだして北の方角を見る。街灯の明かりで所々が照らされているだけで、町の大部分は闇に包まれている。

「おい、何か見えたか？」

「いや、何も見えませ——ちょっと待って下さい」

「何だ？」

俺も緒方が見えている方向を双眼鏡で覗き、目を凝らす。銃声はどんどん大きくなっている。つまり、こっちに向かっているという事だ。そして、暗闇の中から、一つの人影が飛び出て来た。

「——！！！」

双眼鏡で見た人影。それは。

拳銃を構え、あちこちから出血している状態で、こちらに向けて走ってくる女性の姿だった。

「おい、あれを見ろ！」

「女！？しかも銃持ってますよ！？」

「んな事分かってる！とりあえずこっちから呼び掛けるぞ！！」

俺は店内にあったメガホン（集客用の備品だった）を取り上げると、

『あー、あー、その方！聞こえますか！？聞こえてたら手を挙げて下さいー！！』

同時に緒方がランタンを掲げ、ロケット花火を空に向けて放つ。

女性は俺達に気付いたのか、一瞬立ち止まり、そして手を挙げた。

俺はそれを確認し、続ける。

『このままだとゾンビに囲まれるので危険です！自分達が火炎瓶を使ってゾンビを攪乱するので、その間にこっちに来て下さいー！！』

双眼鏡越しに女性が頷くのを確認した俺は、テーブルの上に放っておいた警察用無線を手に取り、スイッチを入れた。これは屋上と館内の交信用に使っているのだ。

「ゴリ！女性が1名こっちに来てる！入り口を開ける準備をしてくれ！！」

『わかった！何か情報は？』

「拳銃を持ってる！多分一般人じゃない！！」

『拳銃！？マジかよ！』

ゴリとの交信を終え、俺は同じく机の上に置いておいた火炎瓶を手に取り、緒方に渡した。この火炎瓶は俺が警察署で入手したのとは違い、ここで一から作ったものだ。材料が少なく、放火魔が作った前の火炎瓶程の威力は無いが、これはこれで長所がある。

前の火炎瓶の燃料はゲル状で、着火しても燃料が飛び散らず、長い間燃え続けて進路を塞いでしまう欠点があった。今回は燃料が普通なので、着火し瓶が割れたら燃料が飛び散り、しかも短時間で燃え尽きるので進路を塞ぐ事がない。ゾンビの鼻を潰すのに特化したのだ。

緒方は中学校で野球部所属らしく、主に火炎瓶の遠投要員としてここにいる。緒方は火炎瓶の口の布に火をつけ、大きく振りかぶって瓶を投げた。

瓶は回転しつつ弧を描いて飛翔し、女性に気づいたらしく、女性めがけて歩き始めたゾンビ達の頭に落下した。すぐさま火が広がり、しばらくして嗅覚を潰されたゾンビ達がてんてばらばらな方向にふらつき始める。

女性はそのチャンスを見逃さず、一気にモールの入り口目がけて走り出した。進路上の邪魔なゾンビを撃ち倒し、近付いて来るゾンビの頭に回し蹴りを放つ。回し蹴りを食らったゾンビは首がへし折れたらしく、頭部をあり得ない方向に捻じ曲げて地面に崩れ落ちた。

俺はその様子を見て、

「回し蹴りで首をへし折るなんて、どんだけの脚力を持つんだよ・
」

と呟いた。

緒方が火炎瓶で女性の進路上のゾンビを攪乱し、女性は邪魔なゾンビを排除しつつこちらに近付いて来る。拳銃を持っている事といい、その銃の腕前も良い事といい、体術といい、一般人では無い事はたしかだ。

かといって警察官や自衛隊員かと聞かれれば、そうでもないだろう。女性の服装はジーパンにTシャツとラフで、ワンショルダー式のバックを持っているだけだ。警察官や自衛隊員なら、制服か迷彩服を着用しているはずだ。

顔が肉眼で分かる距離まで、女性はモールに近付いてきた。そろそろ、一階の入り口に陣取るゴリ達が、女性を救出するはずだ。

緒方が最後の火炎瓶を投げ終わり、俺はその場で待機するよう命じると、一階めがけて走り出した。入り口から数十メートルの距離まで来た事で、下手に火炎瓶を投げられなくなったのだ。もう屋上から出来る事はない。後はあの女性が自力で何とかするしかない。

俺が一階に到着した直後、入り口のシャッターが上がる音がして、続いてチェーンソーのエンジン音が響き始めた。救助が始まったようだ。

俺がようやく入り口に着くと、ゴリを先頭とした男子達が、それぞれ獲物を構え、入り口付近のゾンビを片付けていた。俺もすぐさま金属バットを構えて入り口から外へと飛び出し、加勢する。

ゴリの持つチェーンソーが唸り、近づいて来るゾンビを自動で解体する。俺はバットを構え、手近なゾンビの頭に振り下ろす。

俺達が奮戦しているおかげで、ゾンビの包围網が一部薄くなった。

女性は拳銃を構えると、その場所のゾンビ達目がけて連射した。

拳銃を連射だと！？機関拳銃か？

はつきり姿が見える距離まで女性は近付いてきていた。俺はその顔を見て、息をのむ。

綺麗だった。銃を持っている姿が似合わないくらいに。

年齢は・・・20代前半といったところか。しかしまだまだ10代と言っても通用しそうな風貌だ。髪はショートカット。やや日本人離れた風貌をしている。もしかしたらハーフかもしれない。

手にしている拳銃は、イタリア製のベレッタM93Rマシンピストルだ。通常の単射に加えて、3点射撃も可能な対テロ用に開発された拳銃だ。海外でも民間の流通数は少ないはずだが、そんな代物を何故持っている？

俺の頭の中で「？」マークが色々飛び交っている間に、女性は俺達の所まで辿りついた。俺はすかさずその体を受けとめ、そして女性があちこちから出血しているのを見た。

見たところ、普通の怪我では無い。何かで強い力で引き裂かれたような傷が、大小問わず体中にある。体は煤で汚れているし、まるで戦場から帰ってきた人のようだ。

とそこまで考えたところで、俺は女性の体をあちこち触っているのに気がついた。

皮膚の感触はやや固い。筋肉質だが、その上にうすーく皮が・・・

おっといかんいかん。ここで女性の体を堪能している暇はない。さっさとモールの中に戻らねば。

俺はすぐさま賢者モードになり、女性に立てるかと訊いた。が、返事がない。息はしているので、恐らく気絶したのだろう。

おや。じよせいが きぜつ している。

1.. かつぐ

2.. せおう

3.. おひめさまだっこ

4.. キス して めざめさせる

一瞬俺の頭の中に、さまざまな選択肢がよぎった。どれにしようか迷う暇もなく、

「早くしろ！もう限界だ！！」

とゴリに怒鳴られた。

俺はすぐさま気絶した女性を背負うと、入り口めがけて走った。何か背中に柔らかい感触が2つするのだが、それについて考えてはいけない。考えていたら、きつと（色々なところが）ヤバくなる。

女性を背負った俺が一番にモール内に避難し、続いて男子中学生達飛び込んでくる。最後にゴリが斧を振り回しつつ駆け込んできたところで、一部だけ開いていた入り口のシャッターが閉じた。

入り口のドアは2つあり、外側のドアのガラスはとくに破られていた。なのでシャッターしかない。内側のドアはガラスもシャッターも健在で、仮に外側のシャッターが破られても、まだ内側のシャッターでどうにか出来るというわけだ。

俺達は入り口にベンチや机（無論売り物）、カート（備え付け）、そして角材（売り物）などを積み重ねてバリケードを作り、ようやく一息ついた。

俺は女性を床に下ろし、そしてあり得ない物を女性の胸部に発見した。

何かって？それはね。

女性の胸部から斜めに突き出る、鋭利な鉄片だよ。

・・・これ、放っておいたら死ぬんじゃない？

第26話 この女の人、だれ？（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第27話 お医者さんごっこ（性的な意味ではない）？（前書き）

今回胸に刺さった鉄片を云々という表現がありますが、「川の深さは」という小説を参考にさせてもらっています。なので表現が被っている場面が多々ありますが、そのところをご了承して読んで頂ければ幸いです。

第27話 お医者さんごっこ（性的な意味ではない）？

女性の胸から突き出た鉄片は、俺をぞっとさせた。

さっき女性を背負って走ったが、下手に動かしていたら更に鉄片が深く刺さっていたのかもしれないのだ。刺さっている位置からして、鉄片は肺に突き刺さるかもしれない。

とその時、女性がうつすらと目を開けた。

「おい、アンタ大丈夫か？」

俺がそう言い、一步踏み出したところで――、女性は俺に手にしていたM93Rマシンピストルの銃口を向けてきた。俺を含む周囲の皆が凍りつき、女性は俺達を警戒するかのように視線を飛ばす。

「・・・近寄るな。まずは両手を頭の後ろに。上着を脱いで、武器が無いかわたしに見せろ」

どうということなの・・・・・・・・（森の妖精風に）？

という冗談はさておき、何で助けた相手に銃を向けられなくちゃならないんだ？ しかもあの銃は本物だし、下手に近づいたら本気で殺されるかもしれない。

皆の動きが止まり、俺も近寄ろうとした態勢のまま止まる。女性の動きには隙が無く、素早く壁際に寄り、俺達に銃口を向けて警戒している。

もしかしたら、何か酷い目にあったのだろうか。俺はそう考え、そして、女性の足元を見た。

女性は体のあちこちに傷を負っていて、そこから流れ出る血が地面に滴り、小さな血の水溜りを作っている。このままではヤバイ。出血で死にかけない傷だ。

俺は一步踏み出した。

「止まれ！動くな！」

すぐさま銃口を向けられた。しかし俺は立ち止まらず、叫んだ。

「銃を下ろせ！俺達にアンタを害するつもりはない！」

「止まれと言ってるんだ！！！」

うん、話は平行線を辿ってるね。

女性の人差し指がドリガーガードから引き金へと移る。トリガー彼女は本気で俺を撃つつもりか？そう考えるとすぐにでも立ち止まり、引き返したい気分になった。

が、こっちにも男の意地ってもんがある。

怪我してる美人を、放っておくわけにはいかないんだよね。

「いいからっ！銃を下ろせっ！！怪我の手当てをしてやるってんだよ！！！」

「・・・ッ！」

俺が大声で怒鳴り、一瞬女性の動きが止まる。俺は両手を上に上げ、

武器を持っていない事を示す。

女性は俺を上から下まで見回していたが、俺が本気で彼女を助けようとしているのを察したのか、ようやく銃口を下ろした。

俺は彼女に近寄り、その身体を詳しく見た。シャツの背中が大きく裂け、そこから血が流れている。どうやら皮膚を裂かれているようだ。

そして一番の問題は、胸に刺さった鉄片だ。どうやって刺さったのか、どんな形状なのかを調べる必要がある。

「ここじゃヤクザ達が来る。資材館の中で手当てをする」

俺はそう言い、彼女を資材館へと促した。まだ警戒しているのだろうか、彼女は周囲を見回しつつ、足取り重く資材館へと入って行った。歩くのもつらそうだ。

とその時、どたどたと美雪達がやってきた。俺達がさっき繰り広げた救出劇に気付いた田中さんが、どうやらここに送ってきたらしい。

「どうしたの!？」

「女の人が怪我してる。手当てしなきゃなんから、何人か来てくれ」

俺が言うと、美雪と亜衣が資材館へと入って行った。それを見た俺はゴリを呼ぶ。

「何だ？」

「ヤクザが来ないように、入り口で男子達と見張っててくれ。もしヤクザが来たら、『避難民は死んだ』って言っというて」

「やつらが信じるか？」

「信じるだろ、あの血を見れば」

俺はそう言い、床に出来た血溜りを指差した。ゴリはそれを見て「りょーかい」といい、男子中学生を呼びに行った。

女性は資材館の奥、床に敷かれた布団に横たわっていた。隣では美雪、亜衣、遥が付き添っている。

俺は彼女の横にしゃがみ込むと、背負っていたリュックの中から救急セットを取り出した。応急処置に必要な器具や薬品は、とりあえずこの中に一式揃っている。

「おい、アンタ。この傷はどうしたんだ？」

俺は彼女に問いかけたが、彼女は無言のままだった。いまだにマシンピストルを握っていたが、とりあえず指が引き金から外れているので、俺達に対する警戒心は薄れたのだろう。

とりあえず俺はハサミを手にとると、煤だらけでボロボロの彼女の来ているTシャツを切り裂き始めた。傷口を露出させて具合を診るためだったが、必要なこととはいえ、何故かドキドキするな。

傷口周辺のシャツを切り終わった俺は、思わず息を飲んだ。

何故かって？

そりゃあ、女性のナマ肌を見て、触るなんて体験は初めてだからな。お、もう少しで下着が見え・・・、

「お兄ちゃん、目つきがいやらしいよ」

・・・遙に言われてしまった。見ると美雪達も、蔑むような目で俺を見ている。これじゃあまるで、俺がHENTAIみたいじゃないか。

ボクは変態じゃないよ。仮に変態だとしても、変態という名の紳士だよ。

俺はそう名言を（心の中で）言うのと、改めて女性に向き合った。先程よりも傷口が露出している分、痛々しく見える。

まずその背中には、いくつも何かに引き裂かれたような傷があった。皮膚が数センチに渡って裂かれ、そこから出血している。

刃物でやられたのか？ いや違う。刃物だったら傷口がこんなに抉られず、すっぱりと皮膚が切り裂かれるはずだ。クマカライオンの爪で裂かれたらこうなるかもしれない。

そして胸には鉄片が突き刺さっている。露出している部分は大体2～3センチといったところだが、体内に残っている部分はどうなっているかわからない。下手にひっこ抜いたら死ぬ可能性もある。

それを見た俺は、美雪と亜衣を呼び、ひそひそとしゃべる。

「ヤバいな。あんなの俺の手に負えるようなもんじゃない」

「何よ、いつも『俺はどんな状況に陥っても大丈夫！』とか言ってるくせに、傷一つ手当出来ないの？ アンタ医者の子でしよう？」

「俺の親父は医者じゃねえよ！ 製薬会社の研究員だよ！」

「同じようなモンでしょ」

「ちげえよ！ 研究員と医者じゃ大違いだよ！」

俺と美雪がそう言いあっていると、亜衣が手を挙げた。

「武が診た感じだと、どうなの？助かるの？」

そう訊かれ、俺は答える。

「うーん、ハッキリ言って厳しい。背中の傷はどうにかなるかもしれないが、胸の鉄片はヤバイ。もし先が曲がっていて、下手にひっこ抜く時に胸膜を傷つければ、その時はオダブツだな」

「胸膜？」

美雪が何も分からない、といった表情で言った。仕方がない、俺が解説してやろう。

胸膜というのは、肺を守るための頑丈な膜だ。胸膜の内部は常に陰圧（つまり気圧が低い事だ）に保たれていて、そのおかげで呼吸する際に肺は膨張と収縮が出来るのだ。

が、もしこの胸膜に穴が開けば、胸膜内部に空気が流れ込んでくる。肺は外気の圧力に耐え切れず収縮したままになり、呼吸が出来なくなる。人間がスキューバダイビングで海に潜る時、酸素ボンベを装着していても深く潜るほど呼吸がしにくくなるが、あれは水压を受けて肺が若干収縮しているためだ。あれと同じ事が陸上で、しかもその何倍もの圧力を受けると考えればいい。

「・・・で、肺が縮んだままになるとどうなるの？」

「オマエはアホか！肺が収縮したままって事は、呼吸が出来なくなるんだよ！イコール死！！」

美雪はわかったような、わからないような顔をしていた。せっかく

俺が親切に噛み砕いて説明してやったのに、コイツは……。一方亜衣は、俺の話が完全に理解できたらしい。いつもと変わらぬ冷静な表情で言う。

「それで、武はどうすべきだと思う？」

「普通だったら救急車を呼んで医者に診せるべきなんだが……。こんな状況じゃ来る訳ないよな。引っこ抜くにしても鉄片の形状を調べなきゃならんし、それにはレントゲンが必要になるし……」

「じゃあ、あのままにしておくってのは？」

ようやく状況を理解したらしい美雪が言った。が、俺はそれは無理だろうと言う。

あのまま鉄片を残しておくのは、彼女にとって常に激痛に耐えろと言うのに等しい。それに下手に身体を動かし、更に深く刺さるような事態になったら目も当てられない。

それに傷口を治療せずに放っておいたら、いつかは化膿してしまうだろう。そうなったら菌が全身に回り、いずれにしろ死ぬ。

「……やっぱ、抜くしかないか」

「だね」

「そうね」

俺はそう結論を下すと、布団に横たわる彼女に向き合った。彼女は息が荒く、傷口からはまだ血が流れている。このままではヤバい（というか、ヤバいって言うのは何度目だ？）。

「先に言っておきますが、この鉄片、引き抜いたらヤバいと思いま

す」

「分かっている。でも、このままでは遅かれ早かれ死ぬ」

「・・・やれと？」

俺が言うと、彼女は無言でうなづいた。俺はため息を吐き、そして美雪と亜衣に指示を出した。

まず亜衣には、女性の首と傷口周辺を押さえて止血するように命じた。頸動脈を押さえれば血の巡りが遅くなり、出血もおさまるだろう。ただし、押さえすぎては逆に死んでしまうが。

美雪には、お湯をたっぷり沸かすように言った。彼女の身体を拭くためだ。温度は風呂の湯くらいといったところか。

美雪が館の事務室へと走って行き、亜衣が女性の首と傷口を押さえている間に、俺は手をアルコール（インフルエンザ対策で店に置いてあった）できちんと消毒し、制服の上着を脱いだ。ワイシャツの袖を捲り、救急セットの中から必要な道具を取り出す。

亜衣が傷口に当てていた血を吸ったガーゼを捨て、新しいガーゼを当てる。だいぶ出血が収まってきたらしく、布団に滴る血の量は減っている。

これなら背中中の傷を縫う必要はないかもしれない。・・・傷口を縫う技術も道具も、俺には無いけどね。

「じゃ、先に言っときますけど、あんまり当てにしないでくださいよ。親父が製薬会社の研究員だったおかげで救急セットと応急手当の仕方は知ってますけど、それでも医者じゃあないんで本格的な治療は無理です」

「わかってる。この際仕方がない」

彼女は真剣な表情で言った。その顔は何かを決心したかのように引き締められ、その瞳は澄んでいた。

ミリオタの性で、野外における応急手当の知識は一般人より充実しているはずだ。それに親父は研究員だったおかげで、家には会社で作った薬の試供品が大量にあった。それも駆使すれば、どうにかなる！・・・と思いたい。

まあ、先に忠告しておいたから、死んでも責任は取れないよ？

傷口からの出血はほぼ止まり、俺は亜衣と交代して女性の傍にしゃがみ込む。ちょうど美雪がバケツに満たした湯を持ってきたので、俺はタオルを湯に浸けて絞り、胸の傷口の周辺を拭いた。白いタオルがすぐに、煤と血で赤く黒く染まる。

俺は別のタオルをリュックから取りだすと、巻いて円筒形にして彼女に差し出した。鉄片を引っっこ抜く時の痛みで、舌を噛み切らないようにするためだ。

抜いた後にまた出血しないよう、亜衣に首の血管を押さえさせる。俺は大きく息を吐くと、覚悟を決めた。

もし鉄片が長く、先が曲がっていたらアウト。胸膜を傷つけ、あっという間に呼吸困難になる。

もし鉄片が短く、曲がっていなかったらセーフ。傷口に軟膏を塗って終わりだ。

「いいですか？」

「いいよ」

俺はその言葉を聞く前に、勢いよく鉄片を引っっこ抜いた。女性が歯を食いしばり、その目が大きく見開かれる。

抜かれた鉄片の形は……、短く、まっすぐだった。

「っしやあああ！」

俺はそうガッツポーズをし、すぐさま胸の傷にガーゼを当てた。首の血管を押さえているおかげか、その出血量もすくない。これなら失血死することもないだろう。消毒し、女性の顔を見る。

呼吸困難を起こした様子もなく、俺は安心した。一応予告しておいたとはいえ、実際に死なれたら困る。罪悪感とか凄いだらうし。

「……どうやら、大丈夫みたいだな」

「ですね。いきなり抜いちやってすみません」

「いや、下手に身体を強張らせたら、鉄片も抜けにくくなっただらうし」

女性はようやく痛みを乗り越えたのか、口を開いた。俺は応じつつ、組織の回復を促進するタイプの軟膏を傷口に塗り込んでおく。これで一通りの処置はすんだ。

俺が傷口に新しいガーゼを当て、包帯を巻く頃には、女性は気絶したかのように眠っていた。痛みが無くなったせいだろうか、その顔には先程までの険しさはなかった。

うん、悪くはない。

そして疲れた。眠い、眠いよパトラッシュ……。

第27話 お医者さんごっこ（性的な意味ではない）？（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第28話 武器をください(前書き)

前回のあらすじ ..

お医者さんごっこだよ、グフフフフ.....。

第28話 武器をください

「おい、起きろ。朝だぞ」

その声で俺が目を覚ますと、目の前には筋肉モリモリマッチョマンが立っていた。ゴリである。

俺が身体を起こすと、そこは今朝眠ってしまった資材館の中ではなく、廊下のカーペットの上だった。しかも廊下のあちこちには、昨夜女性の救出に力を貸した男子中学生達が寝転んでいる。中には始祖鳥の化石みたいなポーズで転がっている奴がいたり、観葉植物の鉢に顔を突っ込んで寝ている奴もいた。

あれ、俺は寝ながら歩いたのかな？

そんな事を言うと、ゴリは呆れつつ、

「美雪たちが、『男子は勝手に入ってくるんじゃないわよ』とか言っ
て、俺にお前を運ばせたんだよ。ま、傷の手当もしたし、女の面倒は女に任せた方が色々問題なくて済むからな」

と答えた。

残念だ。非常に残念だ。

あの女性の服を脱がして身体を拭いてやったり、着替えの手伝いをしてやったり、移動するのに背負ってやったりしたかったのに。

「それはそうと、ヤクザ達は来たのか？」

「ああ。でもお前に言われた通り『避難民は死んだ』って言ったら、

あっさり帰っていったよ」

「そうか。でも、銃声はどうやって誤魔化したんだ？ あいつらにだって聞こえてたはずだろ？」

「そこは改造モデルガンを持ってたって事にしといたよ」

ゴリはどうやら、俺が女性の手当てをしている間、ヤクザ達が資材館に入ってこないよう必死だったらしい。あんな奴らに怪我をしている女性を引き渡したらどうなるか、ゴリもわかっていたのだろう。

腕時計を見ると、既に午前7時を回っていた。朝食の時間だが、俺はあの女性に訊かなければならない事がいくつかある。

俺は立ち上がると、資材館へと入っていった。

資材館の床に滴った女性の血の痕は、美雪達が掃除でもしたのか、殆ど残っていないかった。これならヤクザ達が資材館に入ってきて、特に不審がることはないだろう。

俺はゴリを連れて館の奥まで進み、普段は従業員しか入れない、事務室の扉の前に立った。咳払いをし、ドアをノックする。

え？ 何故ドアをノックするかって？ そりゃあキミ、中で女子達が着替えをしているかもしれないじゃないか。

いやそんな状況じゃむしろ喜んで入りたい。アニメみたいな展開を味わってみたいが、もしそうになったら直後に俺は死ぬだろう（社会的にも物理的にも）。

だって相手は日本刀を持つ麻衣を始めとした、体育会系の女子ばかりなのだ。俺はまだ死にたくないの、大人しくノックする。

「武だ、入ってもいいか？」

「武？何のよう？」

ややあって、奈津美の声が中から聞こえた。

「昨日助けた女性の事なんだが・・・、彼女は起きてるか？」

「うん。さっきまで寝てたけど、今起きたわ」

「じゃ、入るぞ」

俺はそう言い、奈津美が事務室の内側からドアの鍵を開けるのを待った。ややあって、ガチャリという音がして、奈津美がドアを開ける。

俺とゴリは資材館の近くにヤクザがうろついていない事を確認すると、すばやく事務室に入った。そして、目を見開く。

女性の格好は、胸の辺りに包帯を巻きつけ、ジャケットを羽織っただけの格好だった。下半身は毛布を被っているせいでわからないが、それでも十分セクシーな格好である。

胸は・・・巨乳でもないが、かといって微乳でもない。そこそこの大きさだ。例えるならそう、美乳だツツツ！！！！

「武、視線がいやらしいぞ」

「わー麻衣待て待て！頼むから刀に手を掛けつつそういうことを言わないで！！」

俺がすぐさま平謝りすると、麻衣はようやく刀から手を離れた。

俺が土下座したままこっそり女性の表情を羽化飼うと、彼女は困惑したような様子で俺達を見ている。

俺は顔を上げ、女性に向き合った。彼女の手には未だにM93Rが握られている。完全に心を許しているわけでもなさそうだ。

何から話せばいいかわからないが、とりあえず自己紹介からいこう。

「どうも、俺は岩崎武っています。豊島高校の2年生です。こいつらは俺の同級生で、今は行動を共にしています」

「・・・岩崎？」

俺が「岩崎」と名乗った瞬間、女性の視線が俺に向いた。彼女は俺の顔を貫くような視線で見ているので、俺としてはちょっと恐い。とりあえず話を続けよう。

「俺達にはあなたに害を与えるつもりはありません。だからあなたも、俺達に危害を加えようとは思わないで下さい」

「君達がわたしに害を加えないという証拠は？」

そうきたか。俺がいくら「俺は変態じゃありません、ただの紳士です」と言ったところで信用してもらえないわけにはいかなそうだし、何か証拠を示す必要がある。

俺はそう考えると、ベルトの後ろに挟んだP230JPを引き抜いた。女性の目が見開かれ、引き金に指がかかり、俺に銃口を向ける――

その直前で、俺は拳銃から弾倉を排出し、続いてスライドを引いて薬室内の弾丸も取り出した。中に一発の弾丸も入っていない状態のP230JPを床に置くと、俺はそれを女性に向けて差し出した。

女性は俺が彼女を撃つとも思っていたのか、銃口を俺に向ける途中のポーズのまま固まっていた。続いて俺は立ち上がり、事務室内の清掃用具のロッカーを開ける。

中には箒などが収められているが、取り出すのは箒ではない。俺はロッカーに手をつ突っ込むと、そこから紙で包まれた棒状の物を取り出した。

包んでいた紙を破くと、中からはウィンチェスターライフルが現れた。これはヤクザの目から隠す為に、偽装してロッカーの中に隠匿しておいたのだ。このライフルも同じようにボルトを引いて弾を全て排出し、同じく女性にさしだす。

女性は訳がわからず困惑しているようだった。

「これで俺に、あなたを殺傷する為の飛び道具はありません。他の奴はアーチェリーの弓とか持ってますが、仮にいまあなたを殺そうと思っても、あなたの銃が火を噴くほうが早いでしょう」

「こんな武器、子供がどこでどうやって入手した？日本じゃ銃の取り締まりは厳しいはずだが」

彼女の口から出た「日本」という単語に俺は注目した。これは彼女が、外国出身である可能性を大きく高める。

もし日本人だったら、銃規制が厳しいのを知っている。最後に「はずだ」なんてつけるはずがない。

・・・まあ、それで彼女の正体が判明するわけでもないんだけどね。

「拳銃は警察署で警官から、ライフルは猟師のゾンビから手に入れました」

「なるほど。だが、よく使い方がわかったものだな」

「親父が趣味で猟をしていて、時々俺にライフルを触らせてくれたんです」

敢えてミリオタである事は言わない。

それと、俺が「親父」という単語を口にした途端、彼女は何か考え込む素振りをしていた。子供に銃を触らせるなんて、物騒な親父だななどでも思ったのだろうか。

ややあって、彼女が口を開いた。

「・・・わかった。君たちに敵意がないということは信用する」
「ありがとうございます。こちらから2・3質問があるんですが、いいですか？あ、もちろん答えたくないなら答えなくていいですけど」

俺は彼女が頷くのを確認した後、早速質問を開始した。

「じゃあまず、あなたの名前は？」

「・・・リサだ」

「リサさんね。成程」

リサという名前は、外国でも日本でも一般的だ。これではどこの国出身かはわからない。
とりあえず俺は、リサさんに質問を続ける。

「あなたはどこの国の、特殊部隊の所属ですか？それでも警察官か自衛隊員？M93Rそんなものを持っているなんて、明らかに一般人じゃないですね？」

「・・・すまない。今はまだ答えられない」

やっぱり、そう簡単に身分は明かしてくれないか。まあ最初からわかっていただけ。

「じゃあ最後の質問。どうしてあなたはここにたどり着いたんですか？」

「・・・怪我をしていて、手当てが必要だったんだ。一番近くにあったスパーがここだった。それだけだ」

怪我。それはあの鉄片のことか？あれは一体何の怪我だったんだろう？

俺がそう思ったのも束の間、今度はリサさんが口を開いた。

「武・・・とか言ったな。君は岩崎武で間違いないな？」

「はあ、そうですけど」

「じゃあ君のお父さんは、『アルカディア製薬』の研究員で間違いないな？」

「・・・どうして親父のことを知っているんです？」

俺の親父はとっくに死んでいる。今更気にする人はいないはずだ。アルカディア製薬というのは国際的な製薬会社だ。この豊島市にも研究所があつて、親父はその主任研究員だった。でも、親父がそんなに名前を知られていたわけ？

「君のお父さんが科学雑誌に載っていたのを見てな、それでわかった」

「・・・ああ、成程」

確か、以前親父が上機嫌で帰ってきたことがあった。どうやら画期的な新薬の開発に成功したらしく、ネイチャーだかなんだかよく知らないが、科学の雑誌にその記事が載ったのだ。俺も親父が持っていたその雑誌を読んだことがある。

「よく憶えてましたね、あんな小さな記事」

「まあな、わたしにとっては重要な事だから」

重要、ねえ。だとすると、リサさんは科学者かなんかか？

俺がそう思っていると、突然、事務室のドアが開いて男子中学生達

が飛び込んできた。

「おいお前達、今は取り込み中・・・」

「ヤクザが来たんですよ！！銃を持ってモールの中を見回ってるんです！！」

緒方が息を切らせつつ、言った。

俺は素早く彼らを事務室の奥まで下がらせた。同時にこっそりとドアから資材館の中へと出て、資材館の入り口から廊下の様子を伺う。

廊下には、散弾銃を携えたヤクザがいた。あちこちを見回しつつ、モールの中をうろついているようだ。

俺はヤクザの手元を注視し、持っているのがウィンチェスター M1300ショットガンだということを確認した。俺の持つM70ライフルと同じメーカーで、安く、日本に合法的に輸入されている銃だ。無論、銃砲店で手に入る。

ショットガンの散弾なんか近距離で喰らったら、あつという間にあの世逝きだ。俺は気づかれない方が得策と判断すると、大人しく事務室へと戻った。

事務室に戻った俺を、皆が不安そうな視線で迎えた。俺が「ヤクザは行った」と言うと、皆が安心したように息を吐く。

その中で、リサさんだけが訳がわからなそうな表情をしていた。

「どうしたんだ？」

「ヤクザですよ。ショットガンを持ってあたりをうろついている」

「ヤクザ？どうしてそんな連中が？」

「数日前に突然やって来たんですよ。拳銃とライフルとショットガ

ンと日本刀で武装したのが20人近く」

「そうか。それで、君達に手出しが出来ないと」

俺は頷いた。リサさんは顎に手を当て、何かを考え込んでいるようだ。

「奴らが来てから悪い方向に転がりっぱなしですよ。ルールは守らない、食料は節約しない、拳銃の果てに女性に手を出そうとする。やりたい放題ですよ」

「せめて、武器があったらな。拳銃とライフルが1丁ずつ、それにクロスボウが4つじゃ、お話にならないよな」

ゴリが遠くを見るような目で言う。もはや皆、ヤクザのやることを止められず、諦めのムードだ。

下手に放っておいたらどうなるか、考えるだけでも恐ろしい。

「いまーわたしのー、ねがーいごとがー、かなーうなーらばー、武器が欲しい」

「武、そこは『翼が欲しい』よ」

「んなことわかってらあ！」

奈津美が突っ込んできたが、俺はこういった冗談でも言わなければやってられない。

とその時、今まで黙っていたリサさんが口を開いた。

「――ある」

「え？」

「――武器ならある」

第28話 武器をください（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第29話 メタルギアごっこって、誰しも一度はやったことあるよね？ (前書き)

前回のあらすじ..

ねんがんの ぶきのばしよのじょうほうを てにいれたぞ!!

第29話 メタルギアごっこって、誰しも一度はやったことあるよね？

リサと名乗る謎の女性を救出した、その日の深夜。

「ヤクザに対抗する為の武器ならある」という彼女の言により、俺とゴリはその場所まで向かうこととなった。

本当なら他の皆も連れて行きたいのだが、生憎ヤクザの活動が活発化し始めていたので、女子を連れて行くことは出来ない。見つかったら大変だからね。

他の館にいる大人に協力を要請してみたが、彼らは頑として頷かなかった。何でも、ゾンビがうようよいる外に向かうのは自殺行為だ、との事だ。

他の男子中学生たちは、連れて行くのには危険すぎる。そういうわけで却下。結果として、俺とゴリの2名だけだ。

まあ、そもそも本当に武器があるのかすらわからないし、もしも無かったら行くだけ無駄足である。そんな賭けに皆を巻き込むわけには行かない。

そうして俺達は、夜の12時まで待った。何故わざわざ夜中に行くのかというと、昼間はヤクザがモールの中をうろろろしていて、下手に動いたら見つかってしまうからである。もし見つかれば「武器を取りに行く」なんて事がヤクザに知られてしまったら、そこで一巻の終わり。ヤクザ達はその武器を手に入れ、ますます勢力を強めるだろう。

そんなわけで、俺達は危険だと知りつつも、夜中に行く事を決めた

のだ。

俺とゴリは、モール内のアウトドアショップで必要な装備をそろえていた。懐中電灯や大きめのリュックなどを俺が身につけていると、先に装備を済ませていたゴリが俺に近寄り、

「そんな装備で大丈夫か？」

と言ってきた。

ここはどう答えるべきだろうか？俺は悩み、そして答えた。

「大丈夫だ、問題ない。――と言いたいところだが、一番いいのを頼む」

よし、コレで死亡フラグは回避したぞ。「大丈夫だ、問題ない」だと、ボコボコにされた挙句、「神は言っている。まだ死ぬ運命ではない」となってループしちゃうからね。

ネタがわかっている俺とゴリは、そのやり取りに声を抑えて笑った。声を出すとヤクザに見つかる可能性があるからだが、奴らは夜間スパーに籠もっているの、見つかる確率は低いだろう。

装備を整えた俺達は、一路資材館へと向かった。今回は、家具館の商品搬入路にあるマンホールから、下水道を使ってショッピングモールの外に出る計画である。

ゴリはいつもの消防用斧とブッシュナイフを装備し、ついでに取り回しのいいボールも持っていた。本当はチェーンソーも持って行きたかったようだが、下水道での移動がしにくくなるということで、俺が装備を止めさせた。

俺はもはや固定装備となりつつあるP230拳銃と金属バット、そしてクロスボウを装備している。ライフルは長いし弾も少ないが、クロスボウの矢には余裕があるからだ。

俺とゴリはヤクザ達に見つかからないようにモールの中を進み、そして資材館に辿りつくど、不安げな表情の皆が待っていた。その中から美雪が一步前に出て、俺に地図を渡してくる。

「はい、これが田中さんがくれた、下水道の見取り図」

「おお、サンキュー」

「・・・ねえ、武。本当に、行くの・・・？」

俺がさっさと資材館を出て行こうとすると、美雪に腕を掴まれた。その表情は、どこか物悲しさを感じさせる。

「武、やっぱり止めたほうがいいよ。2人で行くのは危ないよ。しかも今は夜中だし、暗闇から襲われたらどうするの？」

「大丈夫だって。懐中電灯持ってるし、やばくなったらすぐに引き返すさ」

「やっぱり、わたしたちもついて行った方がいいと思うんだけど・・・」

美雪の最後の一言に、女子達が頷いた。

見れば皆、すでに各々が使う得物が床に置かれている。麻衣はすでに帯刀し、ついて行く気が満々のようだ。

「駄目だ。ここから家具館に行くには、ヤクザ達のいるスーパーの前を通り抜ける必要がある。もしそこで見つかってみる、どうなるかわかったもんじゃない」

「わかってるよそんな事！わたし達は武達と一緒に・・・」

「今回ばかりは駄目だ！お前らを危険に曝すことは出来ん。な、ゴリ？」

俺が言うと、ゴリはそうだとでも言うかのように大きく頷いた。

本心を言えば、俺だって美雪達を連れて行きたい。でもそうすれば集団が大きくなり、家具館への道の途中でヤクザ達に見つかる可能性が大きくなる。ヤクザに対抗する為に武器を取りに行くのに、その途中で捕まったりしたら本末転倒だ。

「お前らはここに残って、中学生達の面倒を見てくれ。なあに大丈夫さ、俺がゾンビなんかにやられるとでも？」

「それは死亡フラグだよ、お兄ちゃん！」

と言って、遥が俺に抱きついてきた。

今回遥は、俺が行くことに強く反対していた。両親の安否がわからない遥にとって、俺が唯一の肉親になってしまった可能性もあるのだ。

その事を考えると俺も躊躇してしまいそうになるが、そこを「皆を守る義務がある」という言葉で誤魔化して、俺は今ここにいるのだ。

俺は遥の頭を撫で、

「大丈夫、ちゃんと帰ってくるよ。俺、もし帰ってきたら、お前と一緒にゲームしてやるよ」

そう言うと、皆が笑った。

「・・・それも、典型的な死亡フラグだって。お兄ちゃん・・・」
「大丈夫さ。敢えて死亡フラグを立てると、生存フラグになるんだ

ぜ。だから心配すんな」

俺がそう言うのと、ようやく遥は俺から離れた。

武器があると言った張本人のリサさんは、高熱を出して寝込んでいたのでここにはいない。あの人はなんとなく頼りになりそうなので、出来ればここにいて欲しかったのだが。

俺は皆の顔を見回し、そして言った。

「じゃ、行ってくる!」

「皆楽しみに待ってろよ!」

俺とゴリはそう言うのと、家具館へと向けて走り出した。振り返ることは出来ない、そうすると行くことに躊躇してしまう。

俺とゴリはまるで特殊部隊のように、出来るだけ音を立てないように進む。ヤクザのいそうなところではゆっくり進み、柱やベンチ、自販機の陰から影へと移動する。

幸い、途中の館では誰にも出会わなかった。問題は、目の前にある食品館のスーパーだ。

スーパーをヤクザ達が拠点としていることは調べがついている。どうやら奴らは、中で空き放題にメシを食べたり酒を飲んでいらしい。

そしてスーパーとその前の廊下を隔てる物は、スーパーの自動ドア（しかもガラス製）しかない。つまり、スーパーから廊下の様子は丸見えなのだ。

廊下からこっそりスーパーの内部を見ると、奴らは入り口付近に陣取り、車座になって酒を酌み交わしていた。奴らの手の届く場所に銃器が置かれていなければ、まるで花見に来ている人達みたいだ。ゴリがヤクザ達の様子を見つつ、不安に言う。

「で、どうするよ？」

「大丈夫だ、問題ない。コレを持って来た？」

「？これって何だよ？」

俺はそう訊かれると、「じゃじゃーん」と小声でいい、ある物を取り出した。

折り畳まれた、2つのダンボールである。

「……………」

「なんだその『お前頭がおかしいんじゃないか』って視線は？」

「いや武、お前マジでどうかしてると思うぞ」

「ダンボールなめんなよ！メタルギアじゃ必須のアイテムだぞ！！俺が実際にかくれんぼで使ってみたら、ものの見事に皆に見つからなかった事があってだな……」

「それはお前の存在感が薄いだけだったんじゃないか？」

「……………それを言うな。悲しくなる。」

俺はまだグダグダ言うゴリにとりあえずダンボールを1つ渡すと、もう1つを展開し始めた。このダンボールは資材館にあったやつで、サイズも結構大きい。人間が隠れるには十分だ。

俺はダンボールを展開し終わると、早速被った。内部は暗く、目の前にある取っ手の穴からしか外を見る事ができない。

「・・・おやなんだろう。何故か安心感が湧いてきたぞ」

「ふふん、ダンボールの魅力に引き込まれているなゴリ！じゃあ俺が先行するから、お前は俺に従ってついて来い！」

俺はそう言うと、穴からスーパーの内部の様子を見つつ、蟹のように横に動いた。

違和感しかないダンボールでも、壁沿いに動いていけば見つかる確率も低くなる。厳に3回ほどヤクザが俺達の方を見たが、気づかれることは無かった。動きを止めれば、大抵の人間は『どうしてダンボールが？』と思っても、すぐに『ま、どうでもいいか』と思って気にも留めなくなるのだ。

こうしてダンボールで偽装した俺達は、スーパーの前の廊下約20メートルを、ヤクザ達に発見されること無く通り抜けることに成功した。

スーパーの前を通り抜けた俺達はダンボールを捨てた。本当は持つて行きたいところだが、嵩張るので仕方が無い。

泣く泣くダンボールと別れを告げた俺とゴリは、一路家具館へと向かった。家具館はその名の通り家具を売っている館であり、ベッドや筆筒、テーブルといった大きな商品を運び込む為の搬入路がある。その搬入路はトラックで直接乗り付けることが出来るよう、外部とシャッターを隔てて繋がっている。そして床には、下水道へと通ずるマンホールがあるのだ。

家具館には人は誰もいなかった。皆既にベッドなどは自分達の拠点に移動させてしまったので、来る必要はもう無いからだ。

俺達は気兼ねなく家具館へと侵入し、そして迷わず奥の搬入路へと

向かった。

搬入路にも、やはり誰もいなかった。俺は外部と通ずるシャッターがきちんと閉まっていることを確認し、早速ゴリが作業を始める。ゴリの持つボールがマンホールのフタの穴に突っ込まれ、そしてゴリがボールを押すと、てこの原理で大きくて重いフタも一気に持ち上がった。

丸いフタを脇にどけると、黒々とした、下水道へと通ずる穴が現れた。俺とゴリはそれぞれ胸元に装備したL字形ライト（先端が直角に折れ曲がったライト。リュックの紐などに装着することで、手を塞がずに前方を照らせる。LED電球使用）を点灯させ、マンホールの壁面の梯子を使って下水道へと降りて行った。

下水道の中は、ひどい臭いだった。浄水施設が今だ動いているお陰で汚物が溜まったりしていることは無かったが、それでも染み付いた臭いはとても臭い。

「くっせ・・・」

「言うな。余計臭く感じるぞ」

ゴリはそう言うと、下水道の中を進んでいった。俺はゴリの背中を守るよう、クロスボウ（Perfect Line社製。全長90センチ弱）を構えて後について行く。

俺達が下水道を使うと警備員の田中さんに言ったら、田中さんはある物をくれた。それが、俺が美雪から受け取った下水道の見取り図だ。どうやら工事した時の見取り図がそのまま残っていたらしい。見取り図には、ショッピングモールとその周辺の地下を這う下水道

の位置が全て書き込まれていた。ご丁寧にマンホールの位置も書いてあるので、これとコンパスを併用すれば、どこで地上に出ればいいのか簡単にわかる。

とりあえず目指すのは、リサさんが行くように言った、北だ。

臭い下水道の中を俺とゴリは黙々と進んだ。ゾンビがいる可能性も否定できないので武器を構えたままだが、それでも地上を進むよりははずっと気楽だ。

「今どこらへんだ？」

「っと、後50メートル進めばモールの駐車場の外だ」

「わかった。そこで地上に出よう」

俺がコンパスとライトで照らした地図を使って位置を確認し、ゴリがゾンビを警戒しつつ前を進む。

そしてしばらく進んでいくと、俺の言った、駐車場の外へと通ずるマンホールが現れた。

「よし、ここで待ってろ。フタをどかしてくる」

ゴリはそう言うと、下水道の壁面にある梯子を上り、あっという間に上へと上がっていった。ややあって金属の擦れる音がし、もうしばらくすると、下水道内にわずかな明りが差し込んできた。

「大丈夫だ。ゾンビ達はモールの方に引き付けられてる」

「わかった！」

俺はそう言うと、梯子を一気に上っていった。

地上に出ると、そこは道路の真ん中だった。そして南の方を見ると、広い駐車場を隔ててショッピングモールが見える。そしてモールの周りを黒々としたものが埋め尽くしていた。ゾンビである。

「うっわ、俺達さっきまであんな場所にいたのか・・・」

俺は思わず呟いた。

対して俺達の周りにいるゾンビは、僅かに10体ほど。それも俺達と離れた場所をフラフラしているので、さほど脅威ではない。

「じゃ、行こうか」

俺がそう言って駆け出そうとすると、いきなりゴリに肩を掴まれた。何事かと振り返ると、ゴリは道路の脇に立つ民家を指差していた。そしてその指先を辿っていくと、庭先に停められた1台の軽トラが目に入った。

「・・・あのな、いくら俺でも、運転席のカバー外してコードを擦り合わせてエンジン直結なんてできないぞ？」

「わかってるって。鍵を使えば普通に走れるだろ？」

「鍵って・・・。どこにあるかわかってんのか？」

「ああ、農家ならだいたい同じ場所に置いてあるさ」

ゴリはそう言うと、真っ直ぐ民家へと進んでいった。仕方なく、俺もゴリについて行く。

その民家は農業を営む家族が住んでいるのか、軽トラの他にもトラ

クターなどが停められていた。ゴリは家屋のドアに手を掛けて引張ったが、鍵が掛かっているのか当然開かない。

するとゴリは、斧を掲げると、いきなりドアノブ付近に叩きつけた。一撃でドアを斧が貫通し、2度、3度と斧をたたきつけると、ドアノブのすぐ脇には大きな穴が開いていた。

ゴリはその穴から手をつ突っ込み、鍵を解除してドアを開けた。そして「鍵取って来るから、少し待ってろ」と言い残し、家屋へと侵入していった。

「・・・なんだかな」

俺はゴリの行動を見て、思わず呟いた。

最近、ゴリの行動も大胆不敵になってきている。ゴリもいよいよ、精神のタガが外れてきているのかもしれない。

そして俺達の臭いを嗅ぎつけたのか、ゾンビ達が近寄ってきていた。数は少しだけだが、ここでクロスボウを使ってみる。

俺はクロスボウを構えると、レイルにマウントされたドットサイトを覗き込んだ。ドットサイトとはレンズに赤い光点が浮かび上がり、光点を目標に合わせて撃てば命中するという照準補助のための装置である。

普通は銃器にマウントされているが、クロスボウにマウントすることも可能だ。そしてモールにあったクロスボウには、幸運な事にドットサイトが付属していた。

俺は赤い光点を近づきつつあるゾンビの頭に重ね合わせると、引き金を引いた。ブン、と弦が前進する音と共に、ゾンビの頭に矢が突き刺さる。

頭に矢を生やしたゾンビは、すぐに地面に倒れた。威力は十分だろ

う。

俺はその事を確認すると、矢を再装填するために弦を引いた。が、弦を引くには成人男性以上の力が必要とされているので、中々上手くいかない。

「ふんぬっ・・・・・・・・」

俺は前進の力を込めて弦を引き、数秒かかってようやく次の矢が装填できた。そして続いて近づいてくるゾンビを狙い、引き金を引く。やっぱ、クロスボウを俺が持つのは無理だな。力の強い、ゴリ辺りならクラク使えるだろう。

俺が3体ばかりゾンビを倒し終えると、ようやくゴリが戻ってきた。その手には、軽トラのものらしき鍵が握られていた。

「遅いぞ」

「何言ってたんだ、まだ2分も経ってないだろう」

ゴリはそう言うと、鍵を使って軽トラのドアを開け、エンジンを掛けた。ぶるん、という音と共に軽く軽トラが振動し、俺はすかさずその荷台に乗り込む。

「ゴリ、今度はちゃんと運転できるんだな？」

「まあ見てろって。軽トラは何度か運転したことあるって、前にも言っただろ？」

「・・・あのワゴン車の一件を見れば、不安しかないんだが・・・」

ゴリが軽トラを発進させ、ゾンビを2体ばかり弾き飛ばす。ゴリの

運転する軽トラは、一路地図にマークされた北の地点へと向かっていく。

第29話 メタルギアごっこって、誰しも一度はやったことあるよね？（後書き

御意見、御感想お待ちしております。

第30話　ねんがんの　ぶきを　てにいたぞ……………？（前書き）

前回のあらすじ…

新番組「けいとら！」

ストーリー

葉桜高校2年生の岩崎武とその愉快な仲間達「HTT（ひたすら退却タイム）」の、ゾンビ溢れる世界でのゆるっとしたサバイバル生活の物語。

・・・あ、某「けい○ん！」とは、一切関係ありませんうわなにをやるやめ

第30話　ねんがんの　ぶきを　てにいれたぞ………？

おかしい。

俺は地図に記された武器の場所に近づいていくたび、そう思った。

俺はゴリの運転する軽トラの荷台に座りつつ、周囲にくまなく視線を配っていた。ゾンビに取り囲まれたら、いくら車であっても安全ではないからだ。

なのに、目標地点に近づいていくにつれ、俺達が目撃するゾンビの数は減っている。

「なあゴリ」

「何だ？」

「ゾンビが少なすぎないか？」

「ああ、俺もそう思ったところだ。でも、皆ショッピングモールの方に行ったんじゃないか？」

確かに。ゴリの言う通り、ゾンビの嗅覚は優れているから、遠く離れたショッピングモールにいる人間の臭いを嗅ぎつけて、そちらへ向かったのかもしれない。

更に軽トラを走らせる事数分。

ようやく目標地点のすぐ近くまで来た。俺は荷台から、運転席のゴリをナビゲートする。

「次の角を右に曲がって、二つめの信号を左折だ」

「りょーかい」

当初はゴリの運転は酷かったが、今はスムーズに車を走らせている。元々ゴリの実家は農家で、農業の手伝いで軽トラをしばしば運転した事があるらしい。その事が助けになった。ショッピングモールから歩いて向かったのでは、一時間以上かかってしまう距離だ。

ゴリが俺の指示通り、角を曲がって2つめの信号を左折する。

次の瞬間、ゴリが急ブレーキを掛けた。

「のわっ・・・！！！」

軽トラが急停車したせいで、荷台にいた俺は前方へと投げ出された。荷台には掴める物が無かったので、俺は運転席の壁にしたたかに頭をぶつける。

身をもって慣性の法則を実践した瞬間だ。

「・・・痛ってえ。何でいきなり車を停めるんだよ！」

「武・・・。前見てみる」

運転席からゴリの声が返ってきたので、俺はぶつけた箇所をさすりつつ、荷台に立ち上がった。

軽トラのヘッドライトで、道の前方が明るく照らし出されている。道路にはワゴン車が2台停まっていた。一台は横転していて、道を塞いでしまっている。

そしてワゴン車の手前に、中身の詰まったゴミ袋みたいな塊が、いくつも道路に転がっている。

・・・否。

あれはゴミ袋なんかじゃない。

「・・・死体？」

俺はそう呟くと、荷台から飛び降りた。「おい、危ないぞ！」とのゴリの声が聞こえ、ドアが開く音と共に、ゴリも軽トラから降りてきた。

俺はバットを握り締め（矢を再装填するのに力が必要なクロスボウはゴリに譲った）、ゴリと共にいくつも道路に転がる死体へと近づいていく。

そしてその死体の様子がはっきりわかった瞬間、俺とゴリは立ち止まった。

地面にいくつも転がっている死体は、皆同じような格好をしていた。

黒い戦闘服に身を包み、防弾チョッキとヘルメットを装着し、顔をマスクで覆い、軍用ブーツを履いているそれらの死体は、どう見ただけで一般人じゃない。

よく映画やテレビドラマで見る、特殊部隊そのものだ。

そして彼らの近くには、いくつもの銃器が転がっている。周囲には、それらの銃器から吐き出されたと思しき、街頭の光を受けて輝く葉莢がいくつも落ちている。

「・・・こいつら、誰？」

「さあ・・・。警察か自衛隊じゃないのか？」

ゴリが呆然と呟き、俺も同じく呆然としつつも、どうにかゴリの問いに答えた。

彼らが昨日聞こえた銃声の主だったのか。恐らくゾンビたちにやられ――――

おかしい。

ゾンビに殺されたのなら、どうして周囲にゾンビの死体が1つもない？銃を持っていたなら、抵抗してゾンビの死体の山が出来ているはずだ。

それに喰い殺されたとしたのなら、死体が余りに綺麗過ぎる。

そして、何で彼らのうちのいくつかは、頭が半分砕けているんだ？

疑問を感じ取った俺は、すたすたと死体に近づいて行った。そして一番近くにあった死体の傍らにしゃがみ込み、落ちていた銃を拾う。ずっしりとした重みがある。

死体の手元に落ちていた銃は、アメリカ製のSG556カービンという突撃銃だった。スイス製の傑作突撃銃SG550を基に、アメリカ向けに改修したものだ。

SG556が日本の警察や自衛隊で使用されているとは、いくらミリオタの俺でも聞いた事がない。

俺はSG556のグリップ前方にあるレバーを押し、弾倉を排出した。街灯の光にさらされ、弾倉に装填されていた弾が光を反射する。俺は弾倉を再び装填すると、機関部左にあるボルトを引いた。薬室に装填されていたらしき弾が、一発排出される。

俺はグリップの近くにあるセレクター（単発・連発の切り替えをする安全装置を兼ねたツマミ）を「S

」に合わせた。知識どおりなら、これで撃てる筈だ。

「ちょっと撃ってみる」

俺はそう言うと、ゴリのいる方向とは反対側、歩道の脇のブロック塀を照準した。

このカービンにはホロサイトという、ゴリの持つクロスボウに装着してあるドットサイトの親戚みたいな光学照準器が取り付けられていた。他にも照準を容易にするレーザーサイトや暗所を照らすフラッシュライト、銃の安定した保持を容易にするフォアグリップが、ハンドガードのレールシステムを介して装着されている。

俺はホロサイトを覗き込み、赤い光点をブロック塀に重ね合わせ、撃った。

ダン、という銃声がして銃口から火が吹き出、軽い衝撃が肩に走る。俺は反動で持ち上がった銃身を、フォアグリップを握って必死に押さえた。

同時にホロサイトの向こうのブロック塀に穴が開き、周囲にヒビが走った。

間違いない、本物だ！！

「・・・モデルガン？」

「んなわけねえだろゴリ。コイツは本物だ」

俺はそう言うとSG556に安全装置をかけ、死体を見た。死体は俺の足元にうつぶせに倒れていた。そしてその背中には、指が2本入るほどの穴が開いている。

俺は迷わず、その死体を仰向けにひっくり返した。そして、死体の着ている防弾チョッキに穴が開いている事を確認する。

この様子から見るに、彼は撃たれて死んだのだろう。防弾チョッキを貫通するほどの銃なら、恐らく7・62mm口径の狙撃銃か。

俺は何の気なしに、その顔を覆うマスクを外してみた。そしてその下から現れた顔を見て、思わず絶句する。

なぜなら。

マスクの下から現れた顔は、金髪で鼻が高く、どう見ても日本人には見えなかったからである。

数分後、俺達は全ての死体のマスクを引っぺがし、そしてある結論に至った。

彼らは警察でも自衛隊でもない、そして在日アメリカ軍でもない、もっと別の部隊であると。

マスクの下から現れた顔は、どれも人種がばらばらだった。金髪碧眼の欧米人もいれば、黒人もいた。東洋人や、ラテン系やアラブ系らしき男もいた（ただし、撃たれたせいか顔が砕けているのも何人かいたが）。

もし日本の部隊なら、まず外国人はいないはずだ。警察官や自衛隊

員に、外国人はなれないからだ。

そしてアメリカ軍であったとしても、人種がばらばらすぎる。白人と黒人だけだったらまだわかるが、東洋人やアラブ人がこんなに混ざった部隊編成は、あまりないと言っているだろう。

そもそも、彼らの死体に身分を表すものは何一つ無かった。自衛隊や米軍なら、認識票くらいは持っているだろうに。

「じゃあこいつら一体誰なんだよ？」

「知るか。今言えるのは、あのリサさんが、この件に関わっているのは間違いないということだけだ」

この特殊部隊員の死体の位置を俺達に教えたのはリサさんだ。それだけで、彼女が関わったというのは間違いない。

それにいくつかの死体は、頭を3点射撃で撃ち抜かれていた。リサさんの持っていた銃はベレッタM93Rで、3点射撃が可能だ。

おそらく、リサさんは何らかの理由でこの部隊と交戦したのだろう。フロントガラスに穴が開き、死体となった運転手を運転席にさせて横転していたワゴン車の様子から考えて、俺はここで起こった事について推測を巡らせた。

まずリサさんは、この部隊がこの道を通りかかる事を予測していた。そしてどこかこの道路が狙える場所に陣取り、待った。

そして2台のワゴン車に乗った特殊部隊がここを通った瞬間、リサさんは行動を起こした。恐らく狙撃銃を使い、先頭を走るワゴン車の運転手を射殺した。

運転手を失った先頭車は横転し、道を塞いだ。後続のワゴン車から

特殊部隊員がすかさず下車したが、リサさんは彼らも撃ち殺した。

が、特殊部隊員も反撃した。グレネードランチャーが装着されたカービンが別の死体の側に落ちていたので、それでリサさんのいる狙撃地点を狙ったのだろう。

グレネードランチャーの攻撃で、リサさんは怪我を負い、狙撃地点から離れざるを得なくなった。そして特殊部隊に接近戦を挑み、そして彼らを全員殺害した。

これなら全ての辻褄が合う。リサさんが煤だらけで、胸に鉄片が突き刺さっていたのも、グレネード弾の爆発に巻き込まれたと考えればいい。

でも、何の為にリサさんは彼らと戦ったんだ？そしてこの特殊部隊は、何でこんな辺鄙な田舎に來たんだ？

とりあえず俺とゴリは考えるのを保留して、落ちている武器を拾い集めるのに専念した。死体の数はワゴン車に乗っているのも含めて10人で、彼らの持っている武器は全て最新鋭の軍用銃器だった。

拳銃はドイツ製のUSP自動拳銃。短機関銃はオーストリア製のTMP。アサルトライフル突撃銃はさっきも言ったSG556、うち2丁にはグレネードランチャースナイパーライフルが装着されている。

そして狙撃銃は、アメリカ製のM14EBR。ショットガン散弾銃はイタリア製のM3自動ショットガン。手榴弾も彼らは持っていたので、ありがたくそれらの全てを頂戴した。

「うっわ、結構な数になったな・・・」

ゴリは積み上げられた武器の数々を見て言った。2台のワゴン車の中には大型無線機や透明な盾、さらに弾薬の類も大量に搭載されていた。

銃器の総数。しめて20丁。手榴弾は2ダース以上。弾薬は・・・恐らく数千発はある。他にも使えるような装備品が山ほどあり、まるで宝の山だ。

「これだけありゃあ、ヤクザなんて恐くないな」

「ああ。でも俺は軍用銃なんて、自衛隊の駐屯地祭で何回か触らせてもらったくらいしかないぜ。俺だけじゃ使いこなせない」

俺は死体から頂戴したUSP拳銃の収まったレッグホルスターを太腿に装着し、SG556カービンを肩に掛けつつ言った。

ゴリに言った事は本当だ。俺が親父にしょっちゅう触らせてもらったのは狩猟用ライフル。最新鋭の軍用突撃銃ではない。一応海外のインターネットのサイトで軍用銃を撃っている動画などは見た事があるものの、つい先日初めて実銃を撃ったばかりの俺に、すぐにこれらの銃器を使いこなせるとは思えない。

「ま、何とかなるんじゃないの？あのリサさんに使い方を教えてもらえばいいし」

ゴリもそう言いつつ、同じく死体から剥いだチェストリグを身につけつつ言う。チェストリグは弾倉や手榴弾を収めるポーチがいくつもついたベストのようなものだ。

特殊部隊員達の死体が着ていたチェストリグは、内部に抗弾プレートが挿入されていて防弾チョッキの役割も果たしていた。が、抗弾プレートは重過ぎるので（重量は数キロ単位）、俺とゴリはプレートを抜いて身につけた。防弾能力は皆無と言っていいが、ゾンビに襲われたとき、重くて体が動かせなくなっては困る。

血塗れの死体から拝借したチェストリグからは、血の臭いが漂っていた。同じく死体から剥いだエルボーパッドやニーパッド（肘当てと膝当て。とっさにしゃがんだりしても、それらの部位を保護する）を装着した俺とゴリは、まるで特殊部隊のような格好になっていた。下に来ているのが学生服でなく戦闘服だったら、もう完全に特殊部隊だ。

装備を整えた俺とゴリは、道の真ん中に並べられた銃器を、乗ってきた軽トラではなく放置されていたワゴン車へと搬入し始めた。ワゴン車の中には大型の無線機が設置されていたので、それも一緒に持って帰ろうと思ったからだ。

俺に軍用の大型無線機を扱える能力は無いが、ショッピングモールにいる避難民か、リサさんなら使い方がわかるかもしれない。運がよければ、救援が呼べるはずだ。

胸の前で手を組ませた（死後硬直のせいで非常にやりづらかった）特殊部隊員達の死体を道端に並べ、俺は腕時計を見た。ショッピングモールを出てから、既に1時間以上が経過しようとしていた。既にゴリは黒塗りのワゴン車の運転席に収まり、エンジンを始動させている。ショッピングモールの駐車場の一件で俺は既にワゴン車恐怖症になっていたが、色々と持ち帰るためにはワゴン車で帰るしかない。

俺は溜息をつき、特殊部隊員らの死体に合掌し、それからワゴン車へと駆け出した。と、次の瞬間、ズボンのポケットに入っているケータイが、いきなり振動し始めた。

慌ててケータイを引っ張り出し、開いて画面を見ると、発信者の名前は美雪となっていた。ここ数日携帯電話の類は中々繋がらなかった

たのに、こんな時に繋がるとは・・・。
俺は通話開始ボタンを押し、ケータイに耳を当てた。

第30話　ねんがんの　ぶきを　てにいれたぞ……………？（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第31話 現実《リアル》なんてクソゲーだ（前書き）

前回のあらすじ..

へんじがない。ただの死体のようだ。

第31話 現実《リアル》なんてクソゲーだ

俺が携帯電話に出ると、いきなり、美雪の怒鳴り声が聞こえた。

「何だ美雪、こっちはぶk・・・」

『そんな事より大変よ！ヤクザ達が暴れ始めたの！！』
「なんだって！？」

俺は思わず、大声で怒鳴ってしまっていた。その声に、ワゴン車の運転席に座っていたゴリが何事かと俺の方を向く。

スピーカーからは悲鳴や泣き声、そして銃声や男達の怒鳴り声が聞こえてくる。

「それで、今どうなってる！？」

『わたしたちは今も逃げてるけど、何人かはぐれちゃった人もいて・・・。ヤクザ達は銃を撃ちまくって、怪我人もいっぱいいる。もしかしたら死んだ人も・・・』

「わかった、すぐ助けに行く！警備室に行って、内側から嚴重に鍵をかける！！」

『武器は見つかったの？じゃあ早く・・・』

そこで、美雪の声が銃声と共に途絶えた。いや、通話が切れてしまったのだ。

俺は掛けなおそうとしたが、電話が繋がる事はなかった。これは美雪が電話に出ないのではなく、通信状態に問題があるのだ。『のちほどお掛け直してください』という録音音声か、虚しくスピーカーから聞こえてくる。

俺はゴリの方を向いた。ゴリは俺の様子から大体のことを察していたらしく、既にワゴン車のエンジンをかけていた。俺はワゴン車まで走って乗り込み、後部ドアを開けて武器弾薬満載の後部座席に座る。

「どうした？」

「ショッピングモールで緊急事態だ。ヤクザ達が暴れ始めたらしい」
「・・・！！」

ルームミラーに移るゴリの表情が、一気に険しくなった。ゴリは無言でアクセルを踏み、ワゴン車を急発進させる。

俺は助手席に移動すると、後部座席にあった武器弾薬の山から、SG556カービンやM3ショットガンを取り上げ、それらに武器弾薬を装填し始めた。

俺達是最悪の事態を予想していた。それは、俺達がいなくなった途端にヤクザ達が行動を起こす、というものだった。もし男である俺達がいなくなった事にヤクザ達が気づけば、やつらは問答無用で行動を起こす。俺達はそう思ったからこそ、こっそりショッピングモールを抜け出してきたのだ。

最悪の予想は当たってしまった。

普段は商店街の福引すらティッシュの類しか当たらず、ビンゴでもなかなかカードにある番号が当たらないのに。

運が悪すぎる。

「飛ばせゴリ！全速力だ！！」

「おうよ！！」

ゴリは更にアクセルを踏み込み、身体が座席に押し付けられる。

この際、ワゴン車は怖いとか何とか言っている場合ではなかった。

俺達が遅れば遅れるだけ、ショッピングモールにいる避難民の死者は増えていくだろう。

10分もしないうちに、俺達はショッピングモールにたどり着いた。ショッピングモールは電源が落とされ、わずかに非常灯の明りが見える程度で内部は暗く、殆ど様子を伺う事は出来ない。屋上には、見張りらしき人影が1つある。

と、ガラス張りである本館の2階から、眩い光が一瞬見えた。銃火に違いない。

窓を開けると、激しい銃声が聞こえてきた。

「よし、突っ込め！！」

「呐喊！！」

俺が怒鳴り、ゴリがアクセルを踏んで駐車場内に侵入する。相変わらず、ショッピングモールの周りにはゾンビが集まっているようだ。

とその時屋上の人影の手元から、一瞬銃火らしきものが見えた。直後、俺達の乗るワゴン車の目の前のアスファルトの地面に、火花と

共に穴が開いた。ヤクザ達が撃ってきたのだ！

屋上の人影は続々と増え、ワゴン車が駐車場の真ん中辺りに来る頃には、屋上から激しい銃弾の嵐に襲われていた。絶え間ない銃声が響き、車体のあちこちにライフル弾や散弾が着弾し、火花を上げる。

「ゴリ、頭下げろ！アクセルはそのまま！！」

俺は後部座席に移動しつつ、運転席のゴリに怒鳴った。ゴリは巨体をハンドル下の空間に押し込むようにして、必死にハンドルを握る。ただしこのワゴン車は特殊部隊が乗っていたおかげか、車体が防弾使用となっていた。車体に弾丸が着弾してもへこむだけで、金属板を貫通した様子は見受けられない。

しかし、窓ガラスだけはそうもいかなかった。防弾ガラスではあるようだが、銃弾がフロントガラスに着弾するたびにガラスが白くひび割れる。銃弾が貫通するのは時間の問題だろう。

後部座席から手作り鉄パイプ爆弾を回収した俺は、ゴリに立体駐車場の入り口へ向かうように指示した。各館の1階の入り口は全てバリケードとシャッターで封鎖されていてぶち破るのは難しいし、入り口の前にはゾンビが群がっている。下手に入り口を破ったら、店内にゾンビが雪崩れ込んでいくのは明らかだ。そもそも、入り口をぶち破るにはゾンビの海を掻き分けていく必要があるのだ。

その分、立体駐車場への入り口はシャッターのみしか障害物がない。下手に破ってもゾンビがすぐに店内に侵入することはない。オマケに、立体駐車場の入り口に群がるゾンビの数は少ない。

立体駐車場は3階、4階、5階、屋上の各階にあり、それらの階へは一本道で行ける。

俺が指示すると、ゴリは身を屈めたままハンドルを操作し、ワゴン車は右に曲がった。ワゴン車は屋上からの銃火に対して脇腹を曝す

形となり、車体に直撃する弾丸の数が増える。

俺はドアの窓ガラスの下に身を伏せ、時々顔を上げて立体駐車場の入り口の位置を確認した。駐車場の入り口は本館の屋上から死角になる場所にあるので、駐車場の入り口に近づくにつれて着弾する銃弾の数は減って行った。

「よし停めろ！」

俺が叫び、ゴリがブレーキを強く踏む。急停車したので俺は額を強くぶつけてしまったが、今はそんな事に構っている暇はない。

ワゴン車は停車する途中で立体駐車場の入り口の前に群がるゾンビを跳ね飛ばしていたので、とりあえずゾンビに襲われる心配はなくなった。俺はドアを開けて車外に転がり出ると、鉄パイプ爆弾とリユックを持って入り口のシャッターへと走った。

途中、ゾンビが数体俺に近づこうとしていたが、運転席の窓を開けて身を乗り出したゴリが、それらのゾンビをクロスボウで次々と射殺した。車内に積まれている銃を使わないあたり、ゴリは使った事のない銃よりクロスボウの方を信頼しているのだろう。

ゴリがゾンビを片付けている間に、俺は持って来た鉄パイプ爆弾4本を、シャッターの格子の四隅にビニールテープで巻きつけて設置していた。ワゴン車の体当たりでもシャッターをぶち破ることは出来るだろうが、かわりに反動でワゴン車も酷い損傷を負うだろう。だからパイプ爆弾をセットして爆破し、あらかじめ格子にダメージを与えておくのだ。そうすれば完全に格子が吹っ飛ばなくても、ワゴン車が体当たりすれば容易に突破できるようになるだろう。

格子に鉄パイプ爆弾を設置している最中にも、屋上のヤクザ達は俺達目掛けて撃ってきた。が、駐車場の入り口は完全に死角になっているので、飛んでくる銃弾は兆弾くらいしかない。

数分かかり、ようやく爆弾がセットし終えた。俺は爆弾の導火線を目一杯伸ばすと、それぞれにライターで点火していった。すぐさま俺はその場を逃げ出し、ゴリの待つワゴン車へと戻る。爆発に巻き込まれては本末転倒なので、ゴリも俺が乗るとワゴン車を急発進させた。

数秒後、格子にセットした鉄パイプ爆弾が一斉に爆発した。爆発で飛び散った鉄片や釘やボルトなどの破片が格子に直撃し、格子の鉄棒や数本吹き飛んだり、根元から曲がったりしている。

「よし、行け!!」

俺が言うのと同時に、ゴリはアクセルを踏み込んだ。そしてそのまま猛スピードで、さっき爆破したシャッターへと激突する。シャッターの格子は爆発で脆くなっていたのか、ワゴン車が体当たりしたらあっさりと格子が破れ、俺達の乗るワゴン車は立体駐車場へ向かう傾斜のキツイ通路を走り出す。ゴリはまだ運転に慣れなのか（いや、きっとそうだ）、通路を曲がる際には壁に車体を擦りつけたり、角にぶついたりしつつ進んでいた。その度に俺は、車内で頭をあちこちにぶつけてしまう。

「おい、もちっと上手く運転できんのか？」

「やかましい！ならお前が運転するか？」

「・・・すいませんでした」

俺はそう言うと、屋上へと向かうよう言った。

本館は2階建てで、その上には立体駐車場がある。3階の駐車場か

ら下に降りればすぐ本館に入れるが、おそらくヤクザ達も俺達がそうするのを見越して戦力を配置しているに違いない。

仮にヤクザ達が俺達の正体がわからないにしても、防弾車両で突っ込んできた以上、俺達が普通の人間ではないと思っっているだろう。なので、油断させる必要がある。

屋上駐車場は本館と一番離れているが、その階だけ館内への入り口がバリケードで塞がれていない。もしゾンビ達が館内に侵入したらいつでも屋上へ逃げられるよう、バリケードをあえて築かなかったのだ。

車体のあちこちをぶつけ、俺も頭をぶつけまくり、ようやくワゴン車は屋上駐車場へと到着した。ゴリがワゴン車を止め、俺達は外へ降りる。

ワゴン車は酷い有様になっていた。銃撃を受けて車体のあちこちはへこみ、ヘッドライトは片方潰れている。フロントガラスは度重なる着弾の衝撃で割れて真っ白になり、サイドミラーは両方とも無くなっていた。さらに通路で車体のあちこちを擦ってしまったので、それらのへこみと共に車体の塗料が剥げてしまっていた。

防弾使用とはいえ、よくもこんな状態で走れたものだ。俺はそう思ったが、今は館内の美雪達を助ける事が最優先だった。

後部座席のドアを開け、乱雑に積んであった武器の山からSG55 6カービンを手取る。既に弾倉は装着されており、俺はボルトを引いて初弾を装填した。

予備の弾倉をチェストリグの弾倉ポーチに収納し、俺の戦闘準備は整った。

一方ゴリは、クロスボウといつもの消防用斧、そしてUSP拳銃を持っていた。銃の扱いには慣れておらず、渋々拳銃だけ持っているといった様子だった。

その様子を見た俺は物足りなく思い、車内に積んであったベネリM3ショットガンをゴリに手渡した。ショットガンは銃器初心者でも扱える武器で、M3ショットガンは特殊部隊でも使われるほどの高性能な銃だ。

ショットガンを受け取ったゴリは、慣れない手つきでそれを構えた。どうやら使い方がわからないらしい（一般人は大抵そうだが）。

「銃の使い方、わからんのだが・・・」

「拳銃は俺の持つてるP230と大体同じ操作法。ショットガンは、一発撃ったら銃身下のフォアエンド（前床）を手前に引け。それで装弾される。セミオートで撃つ事も出来るんだが、初心者には使いづらいだろう」

「再装填の方法は？」

「撃ちきってない場合はそのまま銃身下の装填口にシエルを押し込め。撃ちきった場合は、フォアエンドを引いてそのままシエルを押し込むんだ」

俺は実演しつつ、ゴリに説明した。

YouTubeやニコニコ動画といった動画サイトでは、日本人が海外に行って銃を撃った時の映像とか、逆に外国人が射撃場で銃を撃った時の映像とかが投稿されている。俺はそれらを見て、さらに海外の銃器サイトなどを覗いて銃器の使用方法を覚えたのだ（実銃を撃ったのはほんの数日前だけだね）。

とりあえずゴリは銃の使い方を憶えたらしいので、俺は注意事項を伝えた。

味方に銃を向けない。撃つ時以外は引き金に指を掛けない。銃口と視線は一体化させる。待機状態は暴発しても被害が出ないよう、銃口は上か下に向ける。移動する時は互いの死角をカバーするなどなど・・・。

さらに俺は、元々ワゴン車に搭載されていたライオットシールドをゴリに持たせた。

ライオットシールドは警察や軍が使用する、防弾使用の透明な盾だ。ポリカーボネートというプラスチックで出来ているのだが、拳銃弾や散弾などの貫通を防ぐ事が出来る。さらに強度を上げた物は、ライフル弾も阻止できるというのだから「たかがプラスチック」と侮ってはいけない。

さて、このワゴン車に積まれていたライオットシールドは、ライフル弾も阻止可能な強度のものだった。状況からみるに、あの全滅していた特殊部隊員達の装備らしい。

シールドは身を守る以外にも、接近戦で相手を叩き潰すという使い方があつた。館内での戦闘は必然的に接近戦となるので、シールドを携行していった方がいと俺は思ったのだ。

ゴリがクロスボウを装備から外し、代わりにショットガンとシールドを持つ。武器弾薬を奪われないよう、ワゴン車のドアは厳重に施錠しておいた。

いよいよ館内に突入するという時になって、俺とゴリはほぼ同時に溜息を吐いた。

今まで俺達が戦ってきたのはゾンビだ。ゾンビは接近戦では手ごわいが、動きはのろいし、武器も使わないから回避するのは簡単だった。

しかし今度戦うのは、銃器を大量に装備したヤクザ達。俺達の姿を見れば、即座に撃ってくるだろう。対して俺達の戦力は現状2人だけで、しかも装備品は高性能とはいえ使い慣れていない銃だけだ。

「なあ武。ヤクザを見つけたらどうする？」

「・・・どうする？」

「容赦なく、殺^やるしかないか？」

「可能な限り、生きたままで捕まえよう。もし俺達に撃ってきたり、他の人に危害を加えていたら、容赦なくやるしかない」

「・・・出来るのか？容赦なく？」

ゴリはそう言っ^て俺の目を見てきた。

ゴリ達は当然、今まで人を殺した事がない。俺は警察署で田中さんを撃ったが、あれは田中さんに頼まれて安楽死させたようなもので、余り人を殺したという実感は俺にはなかった。

だがこれから戦うのは、生きている人間だ。動き、話し、考え、それぞれにそれぞれの歴史を持つ人間だ。ゲームと違って人は死んだら生き返らない。

「・・・やるしかないだろ」

俺はそう答える。

たとえ生きている人間でも、俺達の仲間に危害を加えるなら容赦なく反撃する。その結果相手が死んだとしても、それは相手の責任だ。そう俺は、今まで考え行動してきたんじゃないのか？

「人を殺していいのは、殺される覚悟がある奴だけだ！！」

俺はそう、某アニメの名言を叫んだ。これで少し、いつもどおりの俺に近づけた気がする。

「ゴリ、準備はいいか？」

「いつでも！」

「じゃ、行くとしますか！」

俺達はそう言葉を交わし、本館の入り口の自動ドアから館内へ入っ

ていった。手に銃器を構えながら。

第31話 現実《リアル》なんてクソゲーだ（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第32話 リア充爆発しろ（前書き）

前回のあらすじ..

さすが防弾仕様のワゴン車だ！撃たれても貫通しないぜ！そこにし
びれる憧れるウ！！

第32話 リア充爆発しろ

館内に突入したが、最上階にはやはり誰もいなかった。最上階は駐車場なので、建物の内部にはエレベーターとエスカレーター、そして自販機くらいしかないから、ここに誰かいるとは最初から考えていなかったが。

「最上階クリア。5階へ移動だ」

「わかった」

銃を構え、俺が先頭に立って停止しているエスカレーターを降りていく。今まで閉店時間を過ぎたら建物の電源は落とされていたのだが、俺達が屋上にたどり着いた途端に館内の電気が一斉に点いたのだ。きつとヤクザ達が電源を入れたのに違いない（エスカレーターだけ時間外は手動で起動しなければならないので、動いていないが）。

これで暗闇の中を進んでいく羽目に陥らずには済んだが、こちらから相手が見えるという事は、相手からも俺達が見えるという事だ。照明が点いていない方が、まだこっそりと潜入できただろう。

出来るだけ足音を立てないように移動し、俺達は5階へと到達した。5階も最上階と同じ構造で、エレベーターとエスカレーターしかない。そして同じく敵影も見当たらなかった。

「ヤクザ達はどこ行ったんだ・・・？」

ゴリがそう呟いた。

下の方からは相変わらず銃声や悲鳴が聞こえている。ヤクザ達は俺達に対処するだけの戦力を持っていないのだろうか？

「進んでいけばきっと出くわすさ。それより美雪達が心配だ、さっさと進むぞ」

そう言い、再び止まったままのエスカレーターを降りていく。

4階も同じく、誰もいなかった。そして3階へのエスカレーターを降りようとした、その時だった。

「！武止まれ！」

いきなり後ろから、ゴリに肩を掴まれた。ゴリは人差し指を唇に当て、「静かにしろ」とジェスチャーで示した。

俺が立ち止まって耳を澄ますと、下――3階から足音が聞こえた。そして「急げこっちだ！」と言う、男の怒鳴り声も聞こえる。

「ヤクザ達か？」

「だったらさっさと片付けよう」

ゴリはそう言って、学生服の袖を捲くった。背負っていた斧とシールドや持っていたショットガンを床に下ろし、エスカレーターの手すりの脇にしゃがんで隠れる。

俺もゴリに習って、伸縮式警棒（警察署で警官の死体から拝借した物だ）を取り出して一振りして伸ばし、ゴリがいる場所と反対側の手すりの脇に隠れた。

ややあって、3階からどたどたという足音と共に、2人の男が現れた。ガラが悪そうな奴らで、手にはショットガンと拳銃をそれぞれ携えていた。

が、銃は撃てなければ、ただの鉄の塊である。2人のヤクザがエスカレーターを上って4階にたどり着いた瞬間、俺とゴリは行動に出た。

まず男達がエスカレーターを上りきり、俺達の隠れている手すりの脇を通る直前にゴリが飛び出し、先頭のショットガンを持った男に掴みかかった。柔道をやっているゴリはそのまま寝技に持ち込み、男を動けなくする。

「てめっ・・・!!」

もう一人のヤクザはそれを見て、ゴリに旧ソ連製のトカレフ自動拳銃を構えかけた。しかしその瞬間俺も飛び出し、背後から警棒の先端をを思いっきりヤクザの後頭部へたたきつける。

奇声を上げてヤクザが倒れこんだが、俺は念を押すのを忘れない。そのまま数回警棒をヤクザの頭に振り下ろした後、「このやろ、このやろ」と言いつつヤクザを蹴る。

ヤクザが気絶したのを確認すると、俺はゴリが抑えているもう一人のヤクザの方を見た。

足を絡めて動きを封じ、ヤクザの首に腕を絡めて気管を締めるゴリ。そして白目を剥きつつ、頭に血が回らず真っ青な顔のヤクザ。

何も知らない人が見たら、「アッー!」な展開か、ゲイパレスにいるガチムチな森の妖精たちレスリングシーンを思い浮かべるに違いない。

やがて、ゴリが寝技を掛けていたヤクザも動かなくなり、ゴリが立ち上がった。

「ゴリ、まさかそのヤクザを殺してないよな？」

「大丈夫だ。問題ない・・・と思う。武の方はどうなんだ？」

「気絶してるだけだ（多分）。死んではいない（と思いたい）」

倒れたヤクザ達の首に指を当てて脈を診たが、幸いというか、2人とも気絶しているだけのようだった。

今の所ヤクザは気絶しているが、後で起きて再び自由に行動されても面倒だ。俺とゴリはヤクザ達のズボンからベルトを引き抜くと、彼らの腕にきつく巻きつけて拘束した。さらに上着を脱がせて足に巻きつけ、完全に動きを封じる。これで彼らが目を覚まして、しばらくは抜け出せないはずだ。

ヤクザ達が持っていた銃と弾薬だけは、面倒だが回収しておいた。後で仲間に渡すことにするのだ。

「さて、行くか」

俺はそう言い、再びエスカレーターを降り始めた。

3階には誰もおらず、2階へと降りようとした、その瞬間だった。2階の方から、いくつかの銃声が聞こえた。そして女性の甲高い悲鳴。

俺達に近い場所で、戦闘が行われているに違いない。

「くそっ、さっさと行くぞゴリ！」

「おうよ！」

俺達は駆け足でエスカレーターを降り、そして2階にたどり着いた。2階にたどり着いた俺達の目の前には、3人のヤクザが俺達に背を向けて立っていた。ヤクザ達の手には銃が握られており、そしてその銃口は、避難民のカップルらしき若い男女に向けられていた。

ヤクザ達は足音でようやく俺達に気づいたのか、俺達の方を振り返った。そして俺達とヤクザ達は一瞬、互いの目を見つめあう。

先に反応したのは、もちろん俺達の方だ。俺とゴリはそれぞれ銃を構えると、ヤクザ達の足目掛けて発砲する。

俺はSG556カービンを構えると、ホロサイトの光点に一人のヤクザの腿を照準し、撃つ。M70ライフル程大きくない反動と銃声と共に、直後、ヤクザの足に小さな穴が開き、そこから血が噴出した。

「つぎやああああああああ！！」

撃たれたヤクザが悲鳴をあげ、床を転げまわったが、俺は構わず次のヤクザも足を狙って撃つ。ゴリも俺と同じようにUSP自動拳銃を抜き（ショットガンでは威力が高すぎると判断したのだろう）、手を狙って発砲した。

ヤクザ達は俺達に銃弾を浴びせる暇もなく、地面に倒れ、撃たれた痛みに転げまわった。

「あ、ありがとう君たち！助かった！」

ヤクザ達に狙われていた男性が、俺とゴリに頭を下げてきた。俺は礼よりも情報を得たかったので、そのカップルに近づく。床に倒れたヤクザ達は、ショットガンを構えたゴリが油断なく見張る。

「いつからヤクザ達は暴れてるんですか？」

「つい30分ほど前だよ。いきなり銃を持って僕達の所に来て、『これからは俺達の命令に従え。さもなくば撃つ』って宣言したんだ。それで避難民の一人が反撃しようとして撃たれて、皆がパニックになってあちこち逃げ惑ってるんだ」

「あいつら、男は殺して女を自分達のものにしようとしているの！あいつらに捕まりたくない！」

カップルはそれぞれ、口をそろえてヤクザ達の脅威を唱えた。

その頃になって、ようやく彼らは俺達が何故か銃を持っている事に気がついたらしい。目を白黒させつつ、何故俺達が銃を持っているのかを訊いてきた。

曖昧に笑って誤魔化しつつ、俺はカップルにさっき拾った銃を渡した。一応使い方を教えた後、今倒したヤクザ達の銃もカップルに渡しておく。

「もし途中で仲間に出たら、銃を渡して自衛するように言って下さい。それと警備室は安全なので、警備室に行くように」

「わかったよ。本当にありがとう」

「あ。それと、俺の友達を知りませんか？女子高校生たちです」

「ごめん、それはわからない。逃げるのに精一杯だから」

カップルの男が、申し訳なさそうに言った。

一方俺達が倒したヤクザ達は、撃たれた場所を手で押さえつつ、地面に転がって呻いていた。ヤクザ達からは銃を取り上げ、ゴリがシヨットガンの銃口を向けて動きを封じている。

「こいつら、どうする？」

「一緒に警備室に連れて行ってもらえないだろ。あのカップルに頼もう」

俺が負傷したヤクザ達を警備室に連れて行ってもらおうよう頼むと、カップルは渋々といった様子で引き受けてくれた。カップルはそれぞれ奪った銃で武装しているので、ヤクザ達が反抗しようとしても無駄だろう。そもそも負傷しているので、そんな体力すらないかもしれない。

「というわけで、あんたらは捕虜だ。警備室に行け」

俺がヤクザ達にそう言うと、案の定、ヤクザ達のかみついてきた。

「ふざけんな！誰が捕虜だ！」

「ぜってーここを動かねえぞ！組長の命令だかなん！」

「連れて行くなら無理やり連れて行ってみろ！！」

ヤクザ達はベルトで後ろ手に拘束されていたが、口だけは元気なようだ。

いつまでもここに居る訳にはいかないし、どうするかと俺が悩んでいると、ゴリがヤクザ達の傍らにしゃがみ込み、言った。

「じゃあさ・・・、いつその事ここで死んだ方が、後々後腐れがなくていいよな？そうだと、フフフフフ・・・」

ゴリさん、顔が怖いんです。視線だけで人を殺せそうです。マンガだったら多分、顔の半分が暗く描かれていそうです。

ヤクザ達は急に顔を青ざめさせると、ガクガクガクと首を振った。

足を負傷しているはずの2人もすつくと立ち上がり、足を引き摺って警備室の方へと歩き出した。

ヤクザ達をカップルに任せ、次の移動しようとした時、俺は見えてしまった。

カップル達が、抱擁を交わして、濃厚なキスをしているのを。

リア充爆発しやがれ。あ、ポーチの中に手榴弾（特殊部隊員の死体から回収）があるし、リアルに爆発させてみようか。

俺がそう考え、ポーチに手を伸ばした時、

「武、『リア充爆発させよう』とか思うんじゃないぞ」

と、ゴリが言った。

見破られていたか。ちえつ。

第32話 リア充爆発しろ（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第33話 番外編 「今までこんな装備だったが、大丈夫か？」 (前書き)

前回のあらすじ..

リア充爆発しろ。

今回はアイテム紹介です。これから追加していく予定。

第33話 番外編 「今までこんな装備だったが、大丈夫か？」

イス

鉄パイプと合板で作られたイス。学校用なので簡素で頑丈。

ゾンビが武達の教室に襲来した時、武とゴリがこれを使って戦った。

机

鉄パイプと合板で作られた机。学校用なので簡素で頑丈。

ゾンビが武達の教室に襲来した時、武とゴリは机を盾代わりにして道を切り開いた。

木製バット

野球用の道具。武の初期装備の一つ。

逃げる際に廊下に放置されていた野球部員の私物を、こっそり武が拝借した。その後数時間武の相棒となるが、豊島市の市街地でゾンビを殴った際に折れてしまい、天に召される。

携帯電話

通話やメール、テレビも見れる多機能通信端末。高校生組は全員が持っている。

武のケータイは防水、耐衝撃性を持つ（ミリオタだから）。当初は

通話やテレビでの情報収集に役だっていたが、ゾンビ発生数日後には通話は殆ど出来ない状態となってしまった。

角材

工作などに使われる木製の材料。美雪と奈津美の初期装備。

逃げ込んだ用具室で新品同様の状態で発見され、握り心地を良くするために雑巾が巻かれた。武の家に一行が到着した後、破損状況が酷かったため廃棄される。

サスマタ

主に不審者を取り押さえる為の先端が二つに分かれた道具。ゴリの初期装備。

逃げ込んだ用具室で袋に入ったままの状態で見られ、以後体格の大きいゴリの装備となる。武の家に一行が到着した後、破損状況が酷かったため廃棄される。

弓

矢を発射するための道具。亜衣の初期装備。

弓道部所属だった亜衣が、ゾンビ発生時に逃げ込んだ弓道部部室に置いたあった私物。矢も他の部員の物を大量に持ち出してきたため、後々まで使われる。亜衣はショッピングセンターに到着した際、アーチェリー用の弓に持ち替えている。

木刀

木製の刀。麻衣の初期装備。

剣道部所属だった麻衣が、ゾンビ発生時に逃げ込んだ剣道部室に置いてあった私物。赤樫で出来ていて頑丈であり、80センチ程の長さ。ショッピングセンターに到着した際、そこで廃棄される。

鉄パイプ

鉄製のパイプ。豊島市市街地で武が木製バットを失った際、ゴリがビルの壁面から引きちぎって武に渡した。

あちこち錆びていたが、十分な強度を持つ。ゾンビ映画などでポピュラーな武器。

武の家に一行が到着した際、廃棄されてしまう。登場期間の短い武器であった、合掌。

ブッシュナイフ

大きなナタ。武の家にあった物（死んだ武の父親の私物）。

植物が密生した場所で進路を切り開く為に作られた大きなナタのような物で、対危険生物用にもなるよう頑丈に作られている。武によって後々まで使われるアイテム。

ハンティングナイフ

狩猟用のナイフ。武の家にあった物（同じく武の父親の私物）。

狩猟の際に獲物にとどめを刺したり、解体するのに使われる。非常

に頑丈で大きいため、ゴリの装備となる。

ナタ

木を薙ぎ払って道を作るのに使われたりする農具。武の家の倉庫にあったもの。

誰も持つ者がいなかったため、リュックに入れられたまま。無念。

ノートパソコン

情報端末。武の私物。

インターネットに繋いで情報収集するのに使われた。パソコンが得意な奈津美が主に使っている。

簡易警報装置

テグス糸と空き缶、小石で作られた警報装置。道路の電柱に結び付けられ、ゾンビの接近を感知するのにつかわれる。

エアガン

空気のでプラスチックの弾を発射する銃。武の私物。

武の家にあったもので、威力が弱すぎるため、もちろん持っていない。残念。

金属バット

野球をするための道具。武の家にあったもの。金属製なので頑丈で重量があり、結構な威力を持つ。武の装備になるが、後に奈津美の手に渡る。

スコップ

穴を掘るための道具。武の家にあったもの。重量がありそこそこリーチがあるため、ゴリの装備となる。余談だが、第一次世界大戦時にはスコップの先端をヤスリで削って鋭くし、塹壕内での戦闘にも使われた。警察署でゴリが消防用斧（後述）を入手したため、捨てられる。無念。

ゴルフクラブ

ゴルフをするための道具。武の父親の物。リーチが長く軽いため、奈津美の装備となる。しかし戦闘でボロボロになり、奈津美が武からバットを受け取ると廃棄された。合掌。

バール

釘を抜いたり、物を剥がすために使われるL型の工具。美雪の武器。重量があり軽いため、女子でも扱いやすい。ニュースでよく「バールのようなもの」と呼称される。

伸縮式警棒

警官や警備員がよく持っている打撃用武器。合金製で頑丈。警察署で死んだ警官から拝借した。3段式なのでコンパクト、振れば伸ばせる。

武がこれでヤクザを袋叩きにした。

手錠

手首にかけて身動きを封じる拘束具。警官が持っているが、偶に特殊な店（SとかMとかの大人な店）でも使われている。警察署で死んだ警官から拝借した。今はまだ使われていない。

無線機

作中に3種類登場する。

まずは警察署で発見した携帯無線機。イヤホンとマイクで構成される。小型なので、通信範囲が狭い。2つ発見し、武とゴリが持つ。続いて特殊部隊員らの死体から回収したヘッドセット型軍用携帯無線機。軍用なので耐衝撃、防水性を持つ。後述の大型無線機と組み合わせているので、通信範囲が警察用よりも広い。

最後に特殊部隊員らが乗っていたワゴン車に搭載されていた、大型の軍用無線機。衛星通信が可能なほど、出力が大きく通信範囲が広い。

シグザウアーP230JP

小型の自動拳銃。装弾数8発。32ACP弾使用。県警の制式装備品。警察署で瀕死の中田警官から武が受け取り、後々大活躍する(?)。

本当はもっと強力な銃弾が使われている(それでも威力が弱い部類に入る)のだが、犯人殺傷を恐れる警察によってさらに小口径弾を使う銃に変更されてしまった。警官涙目。ついでに武も涙目。

火炎瓶

瓶の中に燃料を詰め、口にぼろきれ等を詰めて火をつけ、敵に投げつける武器。割れると着火した燃料が周囲に飛散し、燃焼する。

作中には2種類登場する。警察署で武が入手したものは、逮捕された放火魔によって燃料がゲル状で、殺傷力を増すためにカセットガスボンベが装着されている。もう一つはショッピングモールで武が自作したもので、通常のカソリンを詰めた物。

臭いに敏感なゾンビの嗅覚を潰すのに重要なアイテム。これを使えばゾンビ達はしばらく武達を追えなくなる。

「汚物は消毒だー!!」

消防用斧

火災が発生した時などに、救助に向かう消防隊員達が障害物を破壊するのに使われる。警察署に放置されていた消防車の搭載品で、ゴリが取り外して使用。

重く重量があるため、叩き斬るといふより叩き潰すという具合に使われる。ゴリのメインアーム。

もっと小型なものは手斧と呼ばれ、ショッピングモールの避難民の

武器となる。ゲッタートマホークである。

ガスボンベ

都市ガスが通っていない家庭などにガスを供給するため、家屋の外側に設置されるLPガスのボンベ。武達がゾンビの群れをバルスするのに使用。

重量は40キロあり、重い。針金で2本まとめて括りつけられ、斜面を滑らせてゾンビの群れに突っ込ませた後、火の着いた矢を放った麻衣によって爆破された。

ウィンチェスターM70

ボルトアクション式小銃。装弾数5発。豊島第二中学校前をうろついていた猟師のゾンビから奪い取り、後に武のメインアームとなる。命中精度がよくベトナム戦争中に米軍の狙撃銃として使われたが、大量生産したため精度が落ちて米軍から見向きもされなくなった。まあそんなことはどうでもよい。

本来はスコープを装着して使用されるが、武が入手した物は通常のアイアンサイトしかなかった。そのため武によって、レーザーポインターとライトがビニールテープで装着されている。

スタングレネード

爆発した際に強力な閃光と大音量の爆発音を発する、非殺傷兵器。警察や軍隊の特殊部隊がよく装備している。

作中では2種類登場する。一つは猟師のゾンビが持っていた民間用

のもの。閃光、爆発音とも抑えられている。もう一つは特殊部隊員達の死体から入手したもの。軍用なので民間用と比べて、閃光や爆発音が強力。

ゾンビ達の三半規管を狂わせて転倒させるのに使用される。

エレキギター

楽器。豊島第二中学校音楽室の備品。

放課後ティータムからヘビメタなデトロイトメタルシティのようなバンドまで使われる楽器。ヘビメタなバンドではよく、パフォーマンスの一環でよく折られたり、殴り合いに使われる。というか、破壊されるためのエレキギターも売られている。

武が拾ってゾンビをSATSUMAIするのにつかわれた。

そんな事より「けい○ん！」見ようぜ「け○おん！」！！

延長コード

ドラムに巻かれた延長コード。武によって窓枠に結ばれ、ロープ代わりに使われる。

漂白剤

汚れを漂白するのによく使われる薬品。避難先の薬局で入手。塩素を使っているため臭いがキツく、ゾンビの嗅覚を狂わせるために薬局前にばら撒かれた。

手作り鉄パイプ爆弾

30センチ程の長さに切断した鉄パイプに、花火から取り出した火薬をぎゅうぎゅう詰めにして導火線を挿入した爆弾。ショッピングモールで武によって制作される。

2重構造になっており、隙間にボルトやナット、釘などを詰めてある。爆発した際それらが飛散し、周囲にダメージを与える。

手榴弾程の威力を持つ（武談）。

硝安爆薬

肥料と軽油などを混ぜるだけで手軽に作れる爆薬。ただし起爆には信管が必要となる。

武がショッピングモールで集めた材料で作った。しかしそれなりの威力を出すにはそれなりの量が必要なので、結構な重量となる。それに嵩張るのでまだ使われていない。硝安爆薬涙目。

チェーンソー

木を切り倒すのによく使われる、刃の点いたチェーンを電気の力で回す道具。ジェイソンがよく使う事でも有名。

ゴリがショッピングモールの工具店で見つけ、装備した。重量があるので、筋肉モリモリモリマッチョマンのゴリにしか扱えない。マスクも装着すれば、君もジェイソンだ！

日本刀

有名な武器。戦国時代の武将やヤ●ザの人達がよく持っている。

ショッピングモールで刀剣展覧会が開かれていたため、そこから麻衣が調達してきた。数は数十本あるので、壊れても交換できる。

ショッピングモールにやってきたヤクザ達も、数名が日本刀を装備していた。

某学園黙示録などではバツバツサと敵を斬っているが、現実には数人切れば刃が血油で鈍ってしまい、折れる。きっとあれは斬鉄剣に違いない。

オー、ジャパニーズヤクザ！サムライ！と、よく日本刀を持つ人を見た外国人は言う（多分）。

クロスボウ

ライフル銃に弓矢をくつつけたような外観の武器。弦の力で矢を射出する。

ショッピングモールのスポーツショップにあったのを、亜衣が拝借してきた。武とゴリが使用したが、弦を引くのには成人男性並の力が必要なので、怪力のゴリのメインアームと一時的になる。ドットサイト装着。全部で4挺ある。

地雷カレー

美雪が作ったカレー。食べた者はもれなく意識を失う。

トカレフ

旧ソ連製の自動拳銃。装弾数8発。ヤクザ達が使用。

よくそっち系の人達が使いい、押収される銃として有名。威力が高く構造が簡単で頑丈な為、コピー品が大量に存在する。

マカロフ

旧ソ連製の小型自動拳銃。装弾数8発。ヤクザ達で使用。トカレフと同じくそっち系の人達がよく使う。近年ではトカレフよりも押収量が増えている。小型なので携帯性が高い。

ウィンチェスターM1300

ポンプアクション式散弾銃。装弾数2発。ヤクザ達で使用。安く、構造が簡単な為、警察用や狩猟用として世界中で出回っている。しかし日本で販売されているものは、銃刀法の為装弾数2発というゴミ使用となっている。

レミントンM870

ポンプアクション式散弾銃。装弾数2発。ヤクザ達で使用。M1300と大して変わらない。

モスバーグM500

ポンプアクション式散弾銃。装弾数2発。ヤクザ達で使用。上記の2種類と大して変わらない。

ベレッタM93R

機関拳銃。装弾数20発。リサが使用。

イタリア特殊部隊の要請を受けて、同社製のM92自動拳銃をベースに開発された。それゆえ流通数は少ない。

通常の単発に加え、3点射撃も可能な為、主に特殊部隊で使われている。

シグSG556

突撃銃。装弾数30発。特殊部隊員の死体から武達が拝借。

アメリカ向けに同社製のSG550ライフルをベースにして開発された。特殊部隊でも使われている。

武が入手した奴は、ホロサイト、フラッシュライト、レーザーサイト、フォアグリップ装着。フォアグリップの代わりにグレネードランチャー装着のものも混在。

コルトM203

グレネードランチャー。装弾数1発。SG556カービンにアンダーマウントされている。

榴弾から照明弾、ゴム弾等多種多様な弾丸を発射可能。

ベネリM3

セミオート式散弾銃。装弾数7発。特殊部隊員の死体から拝借し、ゴリが装備。

通常の散弾銃とは違い、手動・自動での装填方法が切り替えられる。命中精度もいたため、アメリカのSWATなどでも使われている。ホロサイト、フラッシュライト装着。

シュタイアーTMP

短機関銃。装弾数32発。特殊部隊員の死体から拝借。

コンパクトで命中精度がいい。そのため特殊部隊などでよく使われる。

ホロサイト装着。

セージM14EBR

自動小銃。装弾数20発。特殊部隊員の死体から拝借。

アメリカ軍がかつて採用していたM14ライフルを、アメリカのセージ社がカスタムしたもの。単発なら命中精度が良かったため、狙撃銃としても使用される。

スコープ、パイポッド装着。

ヘッケラー&コッホUSP

自動拳銃。装弾数15発。特殊部隊員の死体から拝借し、武とゴリが装備する。

ポリマーフレーム（プラスチック）で構成された画期的な自動拳銃。軍隊や警察でも使用されている。

「24」のジャック・バウアーが使う銃としても知られている（ただしジャックが使うのはコンパクトモデル）。フラッシュライト装着。

チェストリグ

弾倉を収めるポーチなどを装着したベスト。特殊部隊員の死体から拝借し、武とゴリが着用。

抗弾プレートを挿入することで、防弾機能を付加させる事も可能。ただし抗弾プレートは一枚数キロの重量があるため、武とゴリはプレートを抜いている。

銃剣

銃口付近に装着する短剣。SG556用で、特殊部隊員の死体から拝借。

鞘と組み合わせる事で、ワイヤーカッターとして使う事も可能。

M67

破片手榴弾。特殊部隊員の死体から拝借。

アメリカ製で、その外観から「アップル」のあだ名を持つ。内部に鉄線が張り巡らされており、爆発した際の殺傷力を増加させている。ダース単位でワゴン車に搭載されていた。

グロック17

自動拳銃。装弾数17発。リサがアルカディア製薬豊島研究所より回収。

ポリマーフレーム（プラスチック）で構成されているため、軽い、安い。警察用や軍用として使用されている。

H&K MP-5F

短機関銃。装弾数30発。リサがアルカディア製薬豊島研究所より回収。

命中精度がよく、警察や軍隊で特殊部隊用として使用されている。ただし内部機構は精密なので、あまり野戦には向かない。
ドットサイト、フラッシュライト、レーザーサイト装着。

FN SCAR-L

突撃銃。装弾数30発。リサがアルカディア製薬豊島研究所より回収。

次世代突撃銃として開発され、部品を交換するだけで様々な弾薬を使用でき、用途が幅広い。プラスチックが多用されている。

ドットサイト、フラッシュライト、レーザーサイト、フォアグリップ装着。
グレネードランチャー
一部EGLM装着。

レミントン M870 MCS

ポンプアクション式散弾銃。装弾数6発。リサがアルカディア製薬豊島研究所より回収。

主に軍隊や警察が市街地戦で使用する。散弾を使用すれば近距離戦に、スラッグ弾を使用すればドア破壊などが可能。ドットサイト、フラッシュライト装着。

H&K MSG-90

狙撃銃。装弾数20発。リサがアルカディア製薬豊島研究所より回収。

G-3自動小銃を元に制作された狙撃銃。MSG-90より前に開発されたPSG-1という狙撃銃は命中精度は良かったものの、精密すぎて重かったため、それらの問題を解決するため開発された。スコープ、パイポッド装着。

第33話 番外編 「今までこんな装備だったが、大丈夫か？」（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第34話 来いよベネット! 銃なんか捨ててかかって来い! (前書き)

前回のあらすじ..

一番いいのを頼む。

そういえばそうと、最近食あたりで腹ン中が大惨事大戦だぜ。

第34話 来いよベネット！銃なんか捨ててかかって来い！

リア充共を助けた俺達は、今度は2階のエレベーターホールへと向かっていった。先程その方向から銃声がしたからだ。

シヨッピングモール内の銃声は先程と変わらず相変わらず賑やかであり、一方聞こえる悲鳴の数はどんどん減っていつている気がする。さっさとヤクザ共を排除しなければ、美雪達が狙われる確立が増えていくだろう。

俺とゴリはそれぞれ銃を構え、通路を全力で走っていた。観葉植物の鉢植えは横倒しになり、通路のカーペットには赤い染みがあちこちにある。誰かがトマトジュースをこぼしたのでもなければ、その染みはきつと血に違いない。

「そうだ、きつとドジっ娘がトマトジュースをこぼしたんだ。そうに違いない」

「武、現実を受け止めろ」

「何だとゴリ？　じゃああの染みはハンバーガーのトマトケチャップだと言うのか！？」

「そうじゃねえええええ！」

そんな会話を交わしつつ、物陰を一つずつクリアしながら俺達は走る。こういったふざけた会話でもしなければ、俺達のSAN値は直葬されてしまうに違いない。

やがて本館の一番北にあるエレベーターホールの近くまで来た。俺とゴリは足音を立てないよう前進し、柱の陰から陰へと移動する。そしてついにエレベーターホールの前まで接近出来た。大きい柱の

陰から、こっそりとエレベーターホールを伺う。

エレベーターの前の空間には、5人のヤクザがいた。ヤクザとはいっても全員大人ではなく、関口のような高校生の下っ端だ。全員が拳銃かナイフで武装している。

そしてヤクザ達の目の前には、捕まった避難民と思しき若い男女達が床に座り込んでいた。俺達と同年代の子供が5人、大人が3人いる。彼らはこれから何をされるのか不安らしく、泣きじゃくっている。

「なあ、さっさとやっちまおうぜ。どうせこいつらの仲間、まともな武器持ってねえんだろ？」

「うるせえ高橋^{たかはし}。俺だってさっさとやりたいよ。でも先にやるのは組長達だ、俺達にも回されてくるのを祈るしかねえよ」

「俺は犯すんだったら、あの黒髪の娘がいいな」

下っ端達はそう会話しつつ、舌なめずりをしてじろじろと女子達を眺めている。その目はまるで、商品を品定めしているかのようだ。

俺はそこまで見ると、頭を引っ込めてゴリの方を振り返った。ゴリも先程の会話を聞いていたらしく、怒りをたたえた表情である。

「どうする？ 助けるか？」

「助けるに決まってんだろ武。あんな下衆どもに乱暴される女の子達が可哀想だ」

俺はそれを聞くと、チェストリグのポーチからスタングレネードを取り出した。

高校生ヤクザ達は2人が拳銃、3人がナイフを所持している。ツツ

パりに刃物を地で行っている。

彼らは武器を扱いなれていないようだが、ヤクザ達が人質を取っている以上、人質の救出は慎重に行う必要がある。ヤクザが死のうと知ったこっちゃないが、俺達と同年代の子供が死ぬのは忍びない。なので俺達はひそひそと話し合い、作戦を立てた。

まず、スタングレネードを放り込む。

続いてヤクザ達が行動不能になっている最中に突入し、ボコって武器を取り上げる。

これだけ。

スタングレネードを放り込めば、ヤクザと人質を無差別に行動不能にさせてしまう。ヤクザ達と人質が接近してる以上仕方の無い事だが、幸いな事にスタングレネードは非殺傷兵器だ。爆発しても数分間目と耳が使えなくなるだけだ。

打ち合わせを終え、俺はスタングレネードの安全ピンを抜いた。金属の円筒にいくつも穴が開いたといった形状のスタングレネードを、俺は思いっきり放り投げた。

ヤクザと人質たちは、自分達の間近に音を立てて転がってきた物体をしげしげと見ていた。俺とゴリはそれを確認した瞬間、目を投げた方向とは反対に向け、両手で耳を塞いだ。

耳を塞いでいても、バン、という爆発音は聞こえた。まぶたを閉じていても一瞬視界が明るくなり、次の瞬間、俺とゴリは柱の陰から飛び出した。

ヤクザと人質達は、陸に上がった魚の如く床をのた打ち回っていた。

閃光で目をやられ、大音量の爆発音で三平規管を狂わされ、平衡感覚を失って床に転がっているのだ。

ヤクザ達は訳のわからないことを喚きつつ、手を振り回し足をばたつかせている。「目が、目がー！」とム○カのような事を叫んでいる奴もいたが、俺達はお構い無しに、まずはヤクザ達に蹴りを入れた。

続いて俺は警棒で、ゴリはM3ショットガンの銃床ストックを振り下ろし、暴れるヤクザ達をボコボコにして落ち着かせる。

数分後、ようやくヤクザと人質達の異常がなくなった。巻き添えを食らった人質達には侘びを入れつつ（全員快く許してくれた）、後ろ手に拘束したヤクザ達からは情報を入手する。

「俺の仲間たちの居場所を教えろ」

「・・・・・・・・」

リーダー格らしき高校生（関口の仲間以利根とねという）の傍らにしゃがみ込み、丁寧に聞いてみた。だが利根から帰ってくるのは無言の沈黙だけであり、このままでは時間を無駄にするだけである。

俺は溜息を吐くと、レッグホルスターからUSP拳銃を抜いて利根の頭に突きつけた。そうしたら、あつという間に利根の顔色が蒼白になる。

「教えてくれないならそれでもいいけど、俺は力が弱い方だね。もしかしたら指の力加減を誤って引き金を引いちゃうかもしれない。そうなる前に、大人しく知っている事を教えてくれないかなあ？」

「・・・・どうせ偽物だろ、それ」

「あーそー。じゃ君の頭で試してみようか、君は自分の身体で結果を知る事ができるよ。知った瞬間に死ぬけど」

俺がそう言うと、利根はがたと震え始めた。とどめとばかりに、俺とゴリは利根達の処分を話し合う。

「こいつら邪魔だから、SAT SUGAIしておこうか？」

「武、クラウザーさんかお前は？」

「じゃあシベリアで木を1本1本数える作業を与えよう。銃は2人で1丁だ」

「お前はスターリンか！？」

「じゃあ、汚物は消毒だー！」

「何か世紀末な救世主の伝説に出てきそうなキャラになったな・・・」

「面白いやつだ、殺すのは最後にしてやる」

「どこのコマンドー部隊の筋肉モリモリマッチョマンの大佐だよ！？」

「来いよベネット！銃なんて捨ててかかって来い！」

「既に処分を決める段階を超えている！？」

「じゃあ屋上から突き落として、ゾンビの餌にするか」

「・・・あ、それいいな」

俺とゴリがそう言って、利根の方を見た。利根はガクブルし、顔色が真っ青を越えて白くなる。

そしてべらべらと、様々な情報を吐き出した。

まず、美雪達はまだ資材館に立て籠もっていること。

資材館の守りが堅く、ヤクザ達が戦力の大半をそちらに差し向けていること。

避難民の中にもヤクザの側に寝返った者が何人もいることなどなど・

そして利根は、関口が遥を追っている事も教えてくれた。捕まえた避難民達をエレベーターホールに連れてくる途中で1人で逃げる遥を見つけ、関口は1人で遥を追ったのだという。

遥が逃げた方向は1階への階段で、関口は武装しているのだという。俺はそれを聞いた途端、遥を助けなければという思いが頭一杯に広がった。

「悪いゴリ、後は頼んだ」

「おい武、お前どこ行くんだ!？」

「遥を探す! 資材館で落ち合おう!」

俺はそう言い残すと、さっき利根が言った方向へと走った。後ろからゴリの呼び止める声が聞こえたが、すぐにそれも止んだ。

階段を駆け下り、1階に着いた。1階も2階と同じく荒らされており、撃たれて死んだのか血塗れの男が何人か倒れていた。この辺りは避難民達の拠点だったので、ヤクザ達が現れて逃げる暇もなく殺されたのだろう。

畜生。

遥、無事でいてくれ…………。

俺が資材館に向かう途中、トイレの前を通った。そこで俺は、あるものを発見した。

点々と続く血痕だ。血痕は入り口から男子トイレに続いている。

俺は気になったので、男子トイレの中を確認する事にした。SG5 56カービンを構え、足音を立てずにトイレへと入って行く。

男子トイレに入り、洗面台の近くまで来た俺は、中で繰り広げられていた光景を見て動きが止まった。

服をあちこち破かれ、全裸に近い状態で床に倒れている遙。

そしてその上に馬乗りになっている関口。

何が行われているのかは、考えなくても分かる。

「……野郎おおおおお!!ぶっ殺してやる!!!!」

俺は叫び、関口に殴りかかった。

第34話 来いよベネット! 銃なんか捨ててかかって来い! (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第35話 一心不乱の大戦争を！(前書き)

前回のあらすじ..

来いよベネット！怖いのか？

第35話 一心不乱の大戦争を！

俺は遙に馬乗りになっている関口に殴りかかった。関口は俺の叫び声でようやく後ろを振り返ったが、その時には俺は右ストレートを繰り出していた。

銃を使わなかったのは、遙を誤射しないようにと思ったからだ。しかし本当は、素手でコイツをぶち殺したいと思っていたのだ。

俺の拳が関口の頬にヒットし、関口が半回転して床に倒れる。俺はその瞬間を見逃さず、今まで関口がやっていたように関口の上に馬乗りになった。そして関口の顔を左手で掴み、右手で何度もその顔を殴りつける。

関口は唇を切ったのか、口から血を流していた。5発ほどその顔を殴った時、関口は膝で俺の背中を蹴った。一瞬呼吸が止まり、関口の頭を掴む力が弱まる。

その瞬間、一気に関口は俺の下から這い出し、逆に俺に馬乗りになってきた。そしてパンチを繰り出してきたので、俺は両手で顔を庇い、必死に耐える。

「てめえはっ！前からっ！キモイと思ってたんだよっ！いつも正論ばかり吐きやがってっ！目障りなんだよっ！死ねよっ死にやがれっ！！！！」

関口はそう言いつつ、拳を振り下ろす。防御しきれなかった拳が俺の頬にヒットし、鼻の奥にツーンとした衝撃が広がる。

拳を喰らった事で俺の防御は弱まり、数発顔面にパンチを食らってしまった。口内が切れたのか口の中に鉄の味が広がる。

関口は痺れを切らしたのか腰からトカレフ拳銃を抜くと、俺の顔面に押し当てようとした。俺はその手を掴み、銃口が俺に向かないよう必死に力を込める。

関口が引き金を引いたが、俺が手を掴んでいたお陰で発射された弾丸は天井に命中した。同時に発砲炎を煙感知器が感知したのか、一斉にスプリンクラーが作動する。

スプリンクラーから放出された水が目に入ったのか、関口の動きが一瞬止まった。俺はその瞬間を見逃さず、馬乗りになる関口の下から這い出る。

すかさず関口は俺に拳銃を向けてきたが、俺はポケットから財布を取り出すと、関口の顔面目掛けて投げつけた。関口が手で財布を防御したその一瞬に、俺は一気に接近する。

ブッシュナイフを鞘から抜くと、俺は関口の足を切りつけた。関口の左太腿に赤い線が走り、悲鳴を上げて関口が倒れこむ。関口は激痛に顔を歪めながらも、未だに拳銃を俺に向けようとしていたので、俺はその拳銃を握る手を思いっきり踏みつけた。バキリという音と共に関口の右手の指が数本、あらぬ方向へと曲がる。

「うぎゃあああああっ!!」

関口は悲鳴を上げ、続いて俺はその腹に蹴りを入れた。ぐっと呻いて関口が芋虫のように身体を丸める。

「奇遇だな、俺もずっとお前を殺したいと思ってたよ」

俺はそう言いつつ、ブッシュナイフを一振りして刃についた血を払った。水浸しの室内で、赤い赤い染みがいくつも出来た。しかしすぐに水と混ざって薄まり、赤い水が排水溝へと流されていく。

「いっつもいっつも、学校に行くたびに嫌がらせを受けて、殴られて、人前で恥をかかされて。何度不登校どころか自殺しようかと思っただことか」

俺は血を払ったばかりのブッシュナイフを握ると、関口のもとへと歩いて行った。関口は無事な左手と右足で必死に這い、俺から逃げようとしているようだった。それが俺の目には滑稽に映ってしょうがない。

「へえ、逃げるんだ。いっつも俺をいじめてたクセに。昔みたいにかかって来いよ、殴ってみせろよ」

「頼む、許してくれ！謝る、今までお前にやった事も全て謝る！何でもするからっ！」

関口はそう懇願した。だが俺は構わず、その顔面に蹴りを入れた。シンナーでぼろぼろになった歯が数本折れ、関口の鼻から血が噴き出る。

「そうだねえ……。お前が俺だけに暴力を振るっていたならまだ許してやれたけど、あれを見てみろ」

俺はそう言い、遙を指差した。遙はまだ気絶しているのか、服をあちこち破かれたまま床に倒れている。

「違う、あいつが俺に噛み付いて逃げたからだ！あいつの方から俺に暴力を振るってきたんだ！」

「アホですかあんたは。いやバカか。いやそれよりもカスカ。普通に考えて、人質に取られそうな状況で逃げ出さない奴がいるか。お前らが先に吹っかけたんだろ。仮にお前が言っている事が本当だとしても、遥の行動は正当防衛以外の何でもねえんだよ」

俺はそう言い、ブッシュナイフを構えた。

「さよなら、カス野郎。お前の仲間もすぐにあの世に送ってやるから心配しなさんな」

「ま、待て—————」

関口は最後に何か言おうとしたが、俺は構わずブッシュナイフを振り下ろし————

「お兄ちゃん？」

その声で、俺の動きは止まった。ブッシュナイフの刃は、関口の首の5センチ真上で止まっている。

俺は後ろを振り返った。さっきまで気絶していた遥はようやく起きたのか、上体を起こして俺の方を見ていた。そして自分の服がボロボロなのに気づいて、すぐに両手で胸などを隠す。

「遥、お前————」

「お兄ちゃん、その人を殺すの？」

遥はそう言い、俺の目を見つめた。暴行を受けたのにも関わらず、その顔には怯えなどが見られない。

「ああ、殺すよ。お前にひどい事をしたんだ、死んで当然さ」

「でもお兄ちゃん、その人を殺しちゃったらお兄ちゃんは完全に悪役だよ？わたしだってその人が憎いし殺したい。でも今のお兄ちゃんの顔は怖いよ。抵抗できない人を殺しちゃったら、お兄ちゃんは完全に悪い人だよ？わたしはヒーローのお兄ちゃんが見たいの、悪役のお兄ちゃんは見たくない」

遥の言葉で、俺の心に躊躇が生まれた。

今ここで関口を殺したとしよう。それで俺の心は満たされるだろうが、遥には「生きた」人間が死ぬグロ光景を見せる事になる。それどころか、遥が俺に抱いているイメージを全て崩壊させることになる。

遥は俺に好印象を抱いている。その俺が抵抗できない人間を殺した殺人鬼になったら、遥の心は壊れてしまうかもしれない。

俺はそう思考を紡ぎ出すと、ブッシュナイフを鞘に収めた。そしてチェストリグと学生服の上着を脱ぐと、上着を遥に手渡す。遥は小柄なので、身体の大部分が隠れた。

そして俺は脅えたまま固まっている関口に近づくと、あえて骨の折れた右手の指を掴み、トイレの個室へと引き摺っていく。

関口は痛いのか何事かを泣き喚いていたが、俺は構わず関口をトイレの個室に押し込んだ。そして警察署で入手した手錠を取り出すと、関口の左手とトイレの便器の配管をつなぐ。これで関口は、手錠の鍵を入手しない限り個室から脱出できない。

「そこでじつとしてろ、カス野郎。あとで迎えに来てやる」

「お、おい待てよ！俺を1人にするのかよ！待ってくれ——」

関口は何事かを喚いていたが、俺は構わず個室のドアを閉じた。

遙は目に涙を浮かべていたが、氣丈に振舞っていた。無理やり笑顔を作り、「わたしは大丈夫」と言った。

問題はこれからの心のケアだ。暴行を受けた女性はその後も心に深い傷を残し、誰かにその事を相談できずに泣き寝入りしてしまうらしい。他人に暴行を受けた事を知られるのも苦痛のようだ。

俺は心理学には詳しくなく、また今まで出来た彼女は2次元の彼女だけなので、そんな事は考えた事がなかった。こんな事になるのなら、もっと心理学や心のケアについて学んでおくべきだった。

とりあえず、こういう時に下手に慰めるのは逆効果だろう。そう考えた俺は無言で遙の肩を叩き、トイレを出るよう促した。

スプリングラーのせいで身体はずぶ濡れになってしまった。廊下を歩くとカーペットには、服から滴った水滴が染みを作った。

「そうだ、これを持ってる。護身用だ」

俺はそう言うと、先程関口から取り上げたトカレフを遙に渡した。遙は戸惑ったようにトカレフを受け取る。

「何で持ってなきゃいけないの？お兄ちゃんが一緒にいてくれるんでしょ？」

「わりい、俺は資材館に皆を助けに行かなくちゃならない。お前は1人で警備室に行ってくれ」

「え？イヤだよ。お兄ちゃんと一緒にいたい」

「俺だって遙を1人にさせるのは不安だ。でも資材館の周りにはヤクザ達がうようよいるらしいし、お前を連れてはいけない。大丈夫、警備室までの道程にいるヤクザは、全員倒したから」

俺がそう言うと、遙は唇を噛んで何かを考えているようだった。し

ばらくした後、先程と同じく笑顔を無理やり作り、言った。

「わかったよ。でも無事に帰ってきてね」

「大丈夫さ。ヤクザを倒すくらい、赤子の手を捻るようなもんだ」

俺がおどけてそう言うと、遥はクスリと笑った。そして「頑張つてね!」と言い、警備室のある方向に掛けていく。

悪いな遥。連れて行けない理由はお前が危険だから、というものだけじゃないんだ。

これから始まる大戦争を、お前には見せたくないんだよ。

俺は肩に掛けていたSG556を両手に保持すると、一気に資材館向けて走り出した。

俺達に危害を加えるものは、ゾンビだろうと人間だろうともう容赦しない。絶対に殺す。

今俺達に危害を加えているのはヤクザだ。そして遥は、その被害に遭ってしまった。

なら、ヤクザ共は、綺麗さっぱり全員殺しておかなくちゃならないだろ？

数分後、俺は資材館の近くまで来ていた。銃声は資材館に近づくごとに大きくなり、そして男達の怒鳴り声も増している。

柱の陰から陰へと移動し、観葉植物の鉢植えに隠れていると、俺はゴリを見つけた。ゴリは少し離れた場所にある自販機の陰に隠れており、慎重に資材館の方を伺っているようだ。どうやら人質の誘導を終えたらしい

俺は素早く動くと、ゴリのもとへと移動した。

「よう、また会ったな」

「うわっ！・・・なんだ武か」

「なんだとはなんだ。『また会えて嬉しいぜ』くら言えんのか？」

「また会えて嬉しいぜ」

ゴリはそう棒読みで言った。俺は溜息を吐くと、ゴリに人質はどうなったのかを訊いた。

ゴリは俺と別れた後、大人にヤクザ達から奪った銃を渡して警備室までのルートを教え、大急ぎで資材館へと向かったらしい。ここで隠れていたのも、俺が来るのを待っていたようだ。

「そういえばそうと、遙ちゃんはとうだったんだ？」

ゴリがそう訊いてきた。俺は無言になり、ゴリはその様子を見て大体の事情を察したらしい。それきり遙については、何も訊いてこなくなつた。

今の俺の心情を表すには、ヘ○シングの某少佐の

「諸君、私は戦争が好きだ」

から始まる、長々とした演説が必要になる。そして今の俺はこれま

た演説から借りるなら、ヤクザ達に「一心不乱の大戦争を！」を望んでいる。

遥が乱暴されたんだ。組織ってのは連帯責任を取るべきものだよね？

こっそり移動して、ようやく資材館へと着いた。自販機の陰からこっそり伺うと、銃を手にしたヤクザ達が、資材館目掛けて撃っているのが確認できた。

資材館の入り口にはバリケードが築かれており、その隙間から銃火が見えた。きっと俺が置いていったウインターM70とリサさんのベレッタM93Rで、ヤクザ達に反撃しているのだろう。

それ以外にもクロスボウの銃身などが突き出ているのが見えたが、どう見てもヤクザ達に立ち向かうには少なすぎる。ヤクザ達は物陰に隠れて銃弾や矢から身を守り、じりじりと資材館へ近づいている。

「やばいな、こりゃあ・・・」

ゴリが呻いた。

俺は膝立ちの姿勢になるとSG556を構え、問答無用で近くにいたヤクザを撃った。ヤクザが背中から血を流して倒れ、銃声で一氣に視線がこちらに集まる。

「まだいたぞ！！」

との声が聞こえ、一斉に銃弾が飛んできた。すぐさま今までいた自販機の陰に隠れ、それらの銃弾をやり過ごす。

「何でいきなり撃つんだよ！？」

「仕方ないだろ？あの状況じゃ。それとも銃撃戦の真っ只中に進んでいって、争うのはやめましょうとでも言うのか？」

「……はあ……」

ゴリはそう溜息を吐くと、背中に回していたライオットシールドを構えた。どうやら覚悟が出来たらしい。

今俺が発砲した事により、ヤクザ達の注意はこちらに向いている。その隙に美雪達は逃げるなり不意を突くなり、そういった対処法を考え付くだろう。

ゴリがシールドを構え、いつでも自販機から飛び出る姿勢になった。俺達が隠れている自販機は穴だらけになり、壊れたのか商品のペットボトルが次々と取り出し口から飛び出てくる。

「よし、俺が肩を叩いたら進め。そして2回肩を叩いたら止まるんだ。OK？」

「OK！」

ゴリが頷いたので、俺は肩を叩いた。ライオットシールドを構えるゴリが前進し、俺はその後ろに隠れつつ、SG556でヤクザ達に反撃する。

弾丸がシールドに着弾するガンガン！という音が鳴り響いているが、このライオットシールドはライフル弾でも防げる。集中砲火を長い間浴び続けられない限り、資材館に到着するまで持ってくれるだろう。

「右だ！右に進め！」

「わかった！」

そう怒鳴り、ゴリが右に進路を変更する。ゴリにシールドが与える衝撃は半端ないだろうが、筋肉モリモリマッチョマンのゴリには、

それらの衝撃などまったく問題ないようだ。

俺はシールドの陰から出ないよう前進し、時折身を乗り出して、フルオートでSG556を撃つ。撃つたびにホロサイトの向こうのヤクザ達の身体に穴が開く。

SG556はその素晴らしい性能を発揮していた。フルオートで撃つても良好な命中率を誇るSG556を、俺は完全に使いこなしていた。そうさせているのは、きっとヤクザ達に対する憎しみの力だろう。

やがてヤクザ達は俺達が脅威だと思ったのか、次第に後退するようになっていた。だがその隙を見逃さず、俺はポーチからM67破碎手榴弾を取り出して安全ピンを引き抜き、ヤクザ達目掛けて放り投げた。

ヤクザ達は一瞬、自分達の目の前に転がってきた物体がなんだかわからないようだった。ややあってそれが何か気づき、驚愕の表情をしたが、次の瞬間には手榴弾は爆発し、周囲に破片をばら撒いていた。

M67手榴弾は最大半径15メートルの殺傷範囲を持つ。爆発の間近にいた奴は言うまでもなく、屋内なので爆風が壁などに反射され、より広い範囲に高威力の破片が飛び散った。

「うわ・・・うわあ・・・」

「あ、足が・・・!」

「ちくしょおおお!! いてえ、いてえよおおお!!」

手榴弾の破片が突き刺さったヤクザ達が床を転げまわり、泣き叫ぶ。今の爆発で大体5人程度を殺傷できたようだ。

そして俺は無慈悲にも、地面を転がるヤクザ達を撃った。捕虜? なにそれおいしいの?

「武・・・お前鬼だな」

「そうか？あいつらの自業自得だろ？」

そう言葉を交わしつつ、ようやく資材館の間近の柱に隠れることが出来た。ここから資材館の入り口は、文字通り目と鼻の先だ。

「武！？武なの！？」

俺の姿を見たのか、バリケードの向こうから美雪の声が聞こえた。
俺はSG556の弾倉^{マガジン}を交換しつつ、

「すぐにこいつら片付けるから！すこし待っててくれ！」

と叫んだ。

ゴリもライオットシールドを柱に立て掛けると、代わりにM3ショットガンを手になっていた。俺とゴリは同時にそれぞれの銃を装填し、周囲に金属音が鳴り響く。

「いくぞゴリ！ショータイムだ！やつらを血祭りにあげてやれ！！」
「武それは悪役の台詞だ！」

第35話 一心不乱の大戦争を！（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第36話 「いいかおまえら。撃つなよ、絶対に撃つなよ!」(上○竜兵風に)

前回のあらすじ..

よろしい。ならば戦争だ。

第36話 「いいかおまえら。撃つなよ、絶対に撃つなよ！」（上○竜兵風に）

柱の陰に隠れ、カービン銃の銃口だけを突き出して連射し、弾をばら撒く。命中は期待せず、ヤクザ達が資材館に接近できないよう弾幕を張るのだ。

暴れる銃身を腕力でねじ伏せ、ついでにポーチからM67手榴弾を取り出す。射撃を止めて銃身を引っ込めると、ヤクザ達は弾切れになったのかと思ったらしく、それぞれ手にした銃を構えて接近してきた。

そこにゴリが、横からショットガンの連射を浴びせた。わざとかどうかは知らないが、ゴリの放った散弾はヤクザ達に命中する事はなかった。しかし慌ててヤクザ達は後退する。

その隙に俺はSG556の再装填を行い、手榴弾の安全ピンを引き抜いた。ピン、と安全レバーがばねの力で外れ、俺は「グレネード！」と叫んで手榴弾を放り投げた。

ごろごろと目の前に転がってきた手榴弾を見て、ヤクザ達は悲鳴を上げて逃げ出した。しかし次の瞬間には手榴弾は爆発し、逃げ遅れた2名が全身に破片を突き立てて絶命する。

「わっはっは！見たか、手榴弾の威力を！」

「お前は完全に悪役だな！！」

ゴリがM3ショットガンに弾の再装填をしつつ、俺につっこむ。ゴリは俺の教えたとおりにシエルを装填していたが、当然の如く慣れていないようで時間が掛かっていた。

とその時、いきなり周囲に煙がたちこめ始めた。火事でも起きたのか？俺はそう思ったが、それにしても煙の色が灰色だ。

やがて資材館前は煙に包まれ、視界が奪われてしまった。数メートル先も見えない。

「まずい、これは発煙筒だ！奴ら煙幕に紛れてせつきん……」

俺は大声で注意を促そうとしたが、最後までいう前に、煙幕の中から人影が現れた。

その人影は、銃ではなく刀を振りかぶり、俺に向けて走ってくるヤクザだった。俺は一瞬訳がわからず頭の中が真っ白になり、その隙にヤクザは俺の目の前まで近づいていた。

叫び声を上げ、膝立ち姿勢だった俺にヤクザが刀を振り下ろす。俺は身体を捻ってどうにか一刀両断されるのを防いだ、髪の毛が何本か切断され、宙を舞うのが見えた。

第一撃はなんとか避けたが、すかさずヤクザは姿勢を正し、第二撃を繰り出してきた。今度は突きだった。それも仰向けに地面に倒れることでもかわしたが、地面に横になった事で、今度は素早い動きが出来なくなる。

そのヤクザは刀の扱いが上手いのか、動きが素早かった。地面に仰向けに倒れている俺に近づいてくると、再び刀を俺の頭目掛けて振り下ろした。

刃が俺目掛けて振り下ろされるのが、スローモーションで見えた。

カービンは姿勢の問題から撃てず、レッグホルスターに収めた拳銃を抜く暇もない。

頭と胴体が永遠に離れ離れになってしまう。俺がそう思った瞬間だった。

唐突に横から人影が現れ、突き出した刀で振り下ろされた刃を受け止めた。

「おい武、なにボーっと寝てんだよ！」

その声と共に、煙の中から麻衣の顔が現れた。麻衣は刀を構えると、ヤクザと向き合った。そして二人は鏢迫り合いを始める。

俺はその隙にゴロゴロ転がってヤクザと麻衣から離れ、立ち上がってカービンを構えた。麻衣と戦うヤクザを狙って撃とうとしたが、2人は激しく動いて斬り合っているの、下手に撃ったら麻衣を誤射する恐れがある。

「なんでお前資材館から出てきたんだよ!？」

「バリケードがぶっ壊れたんだよ! 助けてやったんだから感謝しろよ!」

ヤクザと激しく斬り合う麻衣は、そう答えて再びヤクザの方に集中する。俺は麻衣と戦うヤクザを撃つのを諦め、資材館の入り口の方へ走る。

その頃には煙幕も薄れ始め、周囲の状況がわかり始めていた。乱戦といった状態で、ヤクザ達と資材館から飛び出してきた避難民達が、至近距離で戦っている。

接近戦なので散弾銃を捨てたヤクザと素手で殴りあう中年男性もい

れば、1人を集団で取り囲み、角材で袋叩きになっている中学生男子達の姿も見える。皆バリケードの破壊された資材館に立て籠もっていても無駄だと悟ったのか、積極的に外に出て攻勢に出たようだった。

ゴリなんかは得意の柔道で、次々と襲い掛かるヤクザを投げ飛ばしていた。ヤクザの1人が距離を取って散弾銃を構えかけたが、次の瞬間飛来した矢が、銃を握るヤクザの腕を貫いていた。

「いつてええええええええ!!」

と悲鳴をあげ、ヤクザが矢の刺さった腕を押さえて悶絶する。俺が矢の飛来した方向を見ると、そこにはアーチェリー用の弓を構えた亜衣が立っていた。

亜衣は右手の親指を立てると、矢をつがえて次の標的を探し始めた。そして矢を放つと、その度にどこから悲鳴が上がる。

もはや戦況は俺達に有利になっていた。ヤクザ達は俺に殺されるか避難民達に袋叩きにされて戦闘不能になり、もはや無事な者はいない。ヤクザ達から奪った銃器で武装した避難民達を見て、不利だと悟ったヤクザ達は次々投降した。武器を捨てて両手を挙げ、銃を構えた避難民達に取り囲まれる。

と、次の瞬間、いきなり銃声が鳴った。銃声のした方向を見ると、ヤクザの組長らしき男が右手で拳銃を構え、左手で中学生の緒方の襟首を掴んでいた。

「てめえら、動くな! コイツがどうなってもいいのか!？」

バリバリ悪役の台詞を吐き、緒方の頭にマカロフ拳銃の銃口を押し

当てる。どうやらさっきのゴタゴタの内に組長は資材館に侵入し、マヌケな緒方は人質になってしまったらしい。

「ひっ」と悲鳴を上げ、緒方がたたと震える。俺や避難民達はとっさに銃を構えたが、組長は銃口を天井に向け、威嚇射撃をした。

「コイツを死なせたら、お前らついてくるじゃねえぞ！」

そう言って、組長は緒方を掴んだまま走り出した。緒方は悲鳴を上げたが、逆らって死にたくないのか一緒に足を動かす。

見れば、あちこちに避難民の怪我人が転がっていた。斬りつけられ、殴られたり、撃たれたりして、あちこちで呻き声上がる。幸い重傷な人間はいなさそうだが、皆怪我人の手当てに忙殺され、緒方を追う余裕は無さそうだ。

「・・・ゴリ、ここを頼む。緒方を助けてくる」

「ああ、わかった。注意しろよ！」

ゴリは足を撃たれたらしい男性の手当てをしつつ、俺の顔を見る事もなく答えた。誰一人として緒方の心配をしていないように見えるのは、組長が緒方を殺す事はないと皆が思っているのか、それとも緒方はその程度の存在感しかないのか。

どちらにしても、このままヤクザの組長を逃がすことは出来ない。奴にはここで起こった事全ての責任を取ってもらう必要がある。

「よし、行くぞライン！！」

俺はそう言い、資材館から出てきたラインを伴って緒方達を追い始めた。ラインはさっきの戦闘に参加したのか、口の周りは血だらけだった。

緒方を人質にとった組長にはすぐ追いついた。こっちは身軽だが組長は人質を取っているのだ、当然移動速度も遅くなる。

「そのヤクザ、待ちなさい！」

俺がそう言うと、組長は鬼のような形相でこちらを振り返った。そして左手で緒方の襟首を掴んだまま、右手でマカロフ拳銃を抜き、俺とライン目掛けて撃ってきた。

俺はヘッドスライディングをきめて飛んできた弾丸をかわし、そのまま遮蔽物となる自動販売機の陰に滑り込んだ。組長はマカロフを俺の隠れる自販機目掛けて連射したが、すぐに銃撃は止んだ。舌打ちと共にがしゃつという音が聞こえたので、俺はゆっくり自販機の陰から顔を出した。

見ると、組長は左腕で緒方の首を軽く締め、右手に持った短刀ドスを緒方の首に突きつけていた。どうやらマカロフの弾が切れたらしく、スライドが後退したままのマカロフが、組長のすぐそばに転がっていた。

「ガキ、出て来い！こいつはお前の友達だろ！」

「えー、友達じゃないよ。知り合いだけどさ」

俺はそう言いつつ、自販機の陰から歩み出た。銃を持っていないなら、緒方の被害を考えないなら一方的に組長を銃撃できる。

緒方は俺の言葉にショックを受けたらしく、「俺ってただの知り合いなんだ・・・」とボソボソ呟いていた。まあ、さっきのは冗談だ

が。

「ガキ、お前の持つてる銃を寄せ。コイツを死なせたいのか？」
「やだよ。これは俺が苦労して手に入れた銃だよ、アンタなんかに渡すのはもったいないよ」

俺がそう言うと、組長は顔を真っ赤にした。そして怒鳴る。

「てめえ！なめた真似してんじゃねえぞ！」

「どっちがだよ。ガキを人質に取るなんて、あんたはヤクザとしても大人としても最低だね。ま、ヤクザなんてサイテーの人種だけだね」

ますます組長は顔を赤くした。緒方は何か覚悟を決めた顔で叫んだ。

「武さん、僕に構わずこいつを撃ってください！こいつに責任を取らせるんです！」

「え？いいの？撃っちゃっていいの！？じゃあ遠慮なく・・・」

俺がそう言うと、緒方は「はあ？」というような顔をした。まるで映画に出てくる人質みたいな台詞だったな。

「じゃあな緒方。お前の事は忘れない」

「わー待った待った！今のは撃たないでってフリです！！何で気づかないんですか！？」

「やだなあ、敢えて無視したにきまってんじゃん」

俺がSG556を構えかけると、慌てて緒方は言った。組長は自分そっちのけで話が進んでいるのが気に入らないらしく、緒方の首に短刀の刃を押し当てて怒鳴った。

「ガキ！てめえの持つてる銃をそのベンチに置け！そうしたらコイツを開放してやる」

それは、渡したら確実に俺達が撃たれるパターンだね？そう思ったが、今の俺に緒方の背後に隠れる組長を狙撃する技術はない。こは大人しく従うしか無さそうだ。

ラインが組長に向かって吼える中、俺は近くにあったベンチに、手にしていたSG556カービンとUSP自動拳銃を置いた。そのままベンチを離れようとしたら、「弾も置いていけ！」と組長の声が飛んできたので、舌打ちしてそれらの弾倉をチェストリグから抜いてベンチに置く。

両手を挙げて何も持っていない事を示すと、組長は緒方の首に短刀を突きつけたまま、じりじりとベンチの方へと進み始めた。俺は一応ブッシュナイフを腰に下げていたが、組長は銃さえ手に入れば刃物なんて脅威じゃないと考えているようで、俺から取り上げようともしない。

そしてベンチにたどり着くと、組長はしきりに置かれた銃器のほうを見た。その顔には笑みさえ浮かんでいる。きっと自分が勝利したのを確信しているのだろう。

甘いんだよ。

俺はそう心の中で言った。俺がこのまま、遥を乱暴した奴らのリーダーをおめおめと逃がし、そして自分も殺されるとでも思っているのか？

右手に短刀、左手に緒方では銃を拾い上げられない。そう思ったのか組長は緒方を突き飛ばすと、USP拳銃に手を伸ばした。俺はそ

の瞬間を見逃さない。

緒方は組長から解放され、組長は拳銃に注意が向いている。反撃するのになんな絶好のチャンスはない。

俺はベルトの背中側に挟んであったP230JP拳銃を抜くと、USPを握った組長の腕目掛けて発砲した。組長の腕に穴が開き、悲鳴を上げて組長がUSPを取り落とす。

俺は緒方に構わず組長のもとへと駆け寄ると、撃たれたのとは反対側の手を思いっきり踏みつけた。取り落としたUSPを、組長は無事な方の手で拾い上げようとしていたからだ。

「残念だったなあ。敵を武装解除する時は、最低2人1組でやるんだよ。それから全身くまなく徹底的にな」

俺はそう言いつつ、組長が取り落としたUSPとベンチに置かれたままのSG556を回収した。そしてSG556の銃口を組長の腕の銃創に押し付けると、ぐりぐりと捻る。水道管を捻ったように傷口から血が流れ出て、組長が激痛に悲鳴を上げる。

P230JP拳銃は小型だ。服の内側に隠し持っていてもわからないくらいだ。組長は銃を手にする事を思う余り、俺がもう一丁銃を持っている可能性を考えていなかったのだろう。

「さて、アンタには責任を取ってもらおうか。他の連中は知ったことじゃないが、俺の従妹はアンタの手下に乱暴されたんだよ。さて、どうやって殺そうか・・・」

「待て！俺は悪くない！俺の部下が酔っ払った勢いで始めた事なんだ、俺は何も指示していない！」

「あらそうですか。でもねえ、世の中には連帯責任というものがあるんだよ。野球部員が不祥事を起こしたら、所属している高校は甲

子園に出場したりしないだろ？企業の業績が悪ければ社長は首になる。ああそういえば、『秘書の起こした不祥事は秘書の責任だ』とかいう政治家もいるけどね。あれはアンタと同類でサイテーの人間だ」

俺はそう言いつつ、今度は組長の両足を思いっきり踏んづけた。バキリと木のへし折れるような音と共に、組長の足が途中から変な方向へ折れ曲がる。再び、大きな悲鳴が上がった。

「武さん、そいつをどうするんです？」

「責任を取らせる。今日ここで死んだ人達や傷ついた人達のな」

ようやく落ち着いたらしい緒方が俺に話しかけてきた。俺はポーチから持ってきていた最後の手榴弾を取り出すと安全ピンを引き抜いた。

緒方にラインを連れてここから離れ資材館に向かうよう言い、緒方とラインが走っていくのを見届けた後、俺は安全ピンの抜かれた手榴弾を組長の左手に握らせた。さっき俺が思いっきり踏んづけたせいで、その手の指はあちこちが折れ曲がっていた。

「な、なにをする・・・？」

「アンタにチャンスやる。そのボロボロの手で手榴弾をずっと押さえ続けられたら、アンタは死なずに済む。安全ピンはあっちにあるから、仮に押さえ続けられたら、ピンを手榴弾の穴に差し込むんだな。じゃ、頑張れよ」

「お、おい！待ってくれ！助けてくれーッ！！」

組長が顔を涙と鼻水でグシャグシャにし、懇願してきたが、俺は一切助ける事はない。さっき抜いた安全ピンを遠くへ放り投げると、俺は一目散に逃げ出した。

右手は撃たれて感覚がないだろうし、手榴弾を握る左手はあちこちが折れて使い物にならない。両足も俺が折ったから、安全ピンのある場所までたどり着くのは不可能だ。

つまり、どっちにしたって組長は爆死する運命を辿る。

当然だ、と俺は思った。組織の起こした問題は、組織の頂点に立つ人間が責任を取るべきなのだ。何人も殺し、負傷させたんだから、死を持って償うのが当然だろう。

・・・それを償わせるのが俺でいいのか、ということは別問題だが。

途中でさっき組長が落としたマカロフを拾い、出来るだけ組長から離れる。

廊下の角を曲がると、後ろから爆発音が聞こえた。どうやら手榴弾を抑え切れなかったようだ。ざまあwww。

俺はSG556を肩に掛けると、のんびり資材館へと歩き始めた。これでもうヤクザ達の脅威はない。投降した奴が寝首を掻くかもしれないが、その時はまた遠慮なく殺ればいい。あとは関口にも、遥に手を出した報いを受けさせよう。

そこまで考えたところで、俺は思考がどんどん過激になっていく事に気がついた。この異常事態の連続で、俺の心から寛容さが無くなっているのか。それとも遥を傷つけられた怒りで思考がおかしくなっているのか。

・・・あるいは、元々俺がこういった心の持ち主で、この異常事態でタガが外れてしまっているのか。

俺がそう考えていると、突然、資材館の方から甲高い悲鳴が聞こえた。悲鳴は次々と男女問わず聞こえ、そして銃声も鳴った。しかも一つや二つだけではない。

せっかくヤクザを駆逐したのに、一体なにが起こったんだ！？俺は肩に掛けたばかりのSG556を手にとると、資材館に向けて全速力で走り始めた。

第36話 「いいかおまえら。撃つなよ、絶対に撃つなよ! (上○竜兵風に)」

唐突に始まった次回よこおーく!!

次回 第37話..

「これはゾンビですか? はい、歩く死体の大群です」

御意見、御感想お待ちしております。

第37話 これはゾンビですか？はい、歩く死体の大群です（前書き）

前回のあらすじ..

よくも撃ったな！訴えてやる！！
（○島竜兵風に、被った帽子を地面に叩きつけながら）

第37話 これはゾンビですか？はい、歩く死体の大群です

嫌な予感がした俺は、走って資材館へと向かった。しかしその途中、俺の嫌な予感を裏打ちするかのように、前方から避難民達が、俺とは逆の方向へと走っていく。

「もう終わりだあ！」とか「助けて！」とか口々に喚きながら、避難民達はてんでばらばらな方向へと走っていく。その中に、ヤクザから奪った散弾銃で武装している避難民が何人かいたが、そんな武装をしている奴が逃げ出すなんて、嫌な予感しかない。

そして、資材館に到着した俺は、その嫌な予感が的中していたのを見た。

資材館付近の外部との出入り口のバリケードが崩され、そこから大量のゾンビがショッピングモール内に侵入していた。

ゴリや男子中学生達、そして一部の避難民が、侵入してきたゾンビ達と闘いを繰り広げている。しかしこちらに銃器は数丁しかなく、鈍器で戦っても倒せる数は限られる。そして接近戦をしている途中に逆に囲まれてしまい、身体の内を噛まれて悲鳴を上げつつゾンビの海に消えていく避難民が何人かいた。

「どうした、なにがあった!？」

俺がM3ショットガンを撃つゴリに訊くと、ゴリは散弾銃をリロードしつつ答えた。

「あのおっさん——確か俺達から銃やら爆弾やら巻き上げようとした人がいただろ？そいつはヤクザの方に寝返ってたんだよ。それで皆に囲まれてリンチ寸前になった時、パニックって入り口のほうに逃げ、バリケードを崩して外に出ようとしたんだ。で、このザマさ」

たしかに入り口の壊れたバリケード付近を見ると、死体が1つ転がっていた。顔の表皮のあちこちを噛み千切られていたが、それは確かに俺から銃を取り上げようとしたあのおっさんだった。

俺が見ていると、唐突におっさんの死体が一度震えた。そしてあーうー呻き声を上げつつ、立ち上がってゾンビの仲間入りをする。

「チッ、銃は使いづらいなあ。奈津美！チェーンソー持ってきてくれ！」

ゴリがそう叫ぶと、資材館からチェーンソーを抱えた奈津美が出てきた。資材館に立て籠もっていた避難民達は大半が逃げ出したらしく、がらんとした資材館内部が見える。

そして美雪や亜衣、麻衣も戦闘に加わっていた。俺達とは別の銃声が聞こえたのでそちらの方向を見ると、リサさんが俺の預けたウィンチェスターM70を射撃しているのが見えた。

どうやら熱は収まったらしく、リサさんは落ち着いて射撃していた。一発必中というのは、このことだろう。

資材館から出てきた奈津美がゴリにチェーンソーを渡した。ゴリはM3ショットガンを背中にし、チェーンソーのエンジンに点火する。

「あら武、アンタ戻ってきてたの？」

「何だその言い方は。俺の扱いひどくね？」

「だってアンタ変態じゃない」

「俺は変態じゃないよ。仮に変態だとしても、変態という名の変態だよ」

「「それってただの変態だろ!!」」

ゴリと奈津美から同時にツツコミが入った。

ゴリは「やっぱこっちの方がいいよなあ」といいつつ、唸るチェンソーを構えて近づきつつあるゾンビの群れに突っ込んだ。血しぶきが上がり、胴体や首を両断されたゾンビ達が床に転がる。

そういえば、俺の知っているライトノベルのゾンビ（男子高校生）は、胴体を真っ二つにされても生きてた(?) よなあ・・・と思いつつ、胴体を一刀両断されたゾンビ達を見た。しかしゾンビ達は、そのような状態でも床を這いずり、俺達に近づこうとする。

「そういえばゴリ、お前そのチェンソー持って、ミストルティンキックしてくれ」

「『これはゾンビですか?』かよ!? そもそもあれキックじゃねえだろ!」

「なんだと? お前もゾンビにしてやろうか!？」

「やめろ! それ以上は著作権云々に引かかる!! そもそも咬まれたらゾンビになっちまうよ」

「じゃあ、お前も蠟人形にしてやろうか!？」

「やめろ! デーモン小暮閣下が来る!」

「仕方ない。じゃあお前も農林業にしてやろうか!？」

「・・・俺に第一次産業従事者になれと? まあ将来の進路は農家だけだ」

俺とゴリのやり取りは、周りの皆に少し余裕を与えたようだった。ゴリは散弾銃を使わないそうなので、俺はゴリからM3ショットガンとその弾を受け取った。そしてすぐさま、それらをリサさんに渡

す。

リサさんはM3をちらと見ると、無言で受け取った。どうやら俺の預けたM70ライフルは、そろそろ弾切れになりそうだった。

「・・・これを持ってるってことは、君たち、あれを見たんだね？」

受け取ったM3に弾を込めている途中、リサさんは静かに言った。

「ええ。あの特殊部隊は何ですか？何でアンタがあれを知ってるんですか？アンタ一体何者なんだよ！？」

「・・・本当に済まないと思う。でも今は答えられない。後で必ず答える」

「本当に？嘘だったらゾンビの群れの中に放り込みますよ？」

俺がそう言うと、リサさんは笑った。

いよいよゾンビの群れは、資材館の入り口付近まで到達していた。

俺はSG556カービンを連射しつつ、リュックから手作り鉄パイプ爆弾を取り出した。導火線に火を点けると、俺は大きく振りかぶって、鉄パイプ爆弾を投げる。手榴弾はさっき使い切ってしまった、ワゴン車に戻ればまだ沢山あるが。

ゾンビの群れの中心で爆発が起き、破片が四方八方へと飛び散る、しかし手榴弾よりも威力が弱いせいか、倒れたゾンビの数が少ない。

「武！どうするの！？」

資材館に置いてあった食料などを積んだカートを押す美雪が、悲鳴のように言った。

SG556カービンの弾倉を交換しつつ、俺は周囲を見回す。今ここに残っているのは、俺達高校生と中学生達、そして僅かな避難民だけだった。大人が真っ先に逃げ出してしまおうとは、情けない世の

中になったもんだ。

ゴリがチェーンソーを振り回し、近づくゾンビ達を薙ぎ払っている。男子中学生達は角材やバットで集団戦を挑み、ベネリM3を持つリサさんは、彼らの援護をしていた。

少しの間考え、俺は叫んだ。

「ここを放棄する！皆、さっさと警備室に避難しろ！」

その言葉で、一瞬皆の動きが止まった。

「じゃあここはどうするの？ゾンビが入ってきてるんだよ！？」

「ここですつと戦ってたって、いずれは突破されちまうんだ！戦略的撤退だ！」

「でも、そうしたらゾンビが・・・外に逃げるの？」

「外に逃げたってゾンビがうよういいる！一端警備室で体勢を立て直し、それからここを脱出するんだ！」

ここにこだわって守り続けても、守り通せるとは思えない。壊れたバリケードを修復しない限りゾンビ達の侵入は止まらず、そしてバリケードはゾンビの群れの向こう側にある。

皆はしばらく何かを考えていたようだが、すぐに後退を始めた。ゾンビの群れが続々と館内に侵入してくるが、こちらが逃げる速度の方が速い。

「ちょっと男子中学生達待て！お前らには手伝ってもらう事がある。あとゴリ、リサさんも来てください！」

俺がそう言うと、緒方を始めとした男子中学生達と、チェーンソー

を抱えたゴリ、ショットガンとライフルを持ったリサさんが俺の周りに集まってきた。ついでにラインも俺の足元に来た。

その間に女子や他の避難民達は警備室の方向へと走っていく。美雪は最後まで不安そうに俺を見ていたが、意を決したように走り出し、すぐに見えなくなった。

男子中学生を代表して、緒方が俺に訊く。先程まで人質に取られていたとは思えない様子だ。

「どうしたんです？なにをするんですか？」

「お前達は俺達と一緒に屋上に来い。いろいろ運んでもらう必要がある」

「運ぶ物ってなんですか？そういうば、その銃はどうしたんですか？」

先程までのゴタゴタのせいで、中学生達は俺達が銃を持っているのを不自然に思っていなかったらしい。全員の注目が、俺達の持つ銃器に集まる。

「銃だ。お前達には銃を運んでもらう」

「へえ〜銃。・・・え!？」

男子中学生達がどよめく。俺は銃がいくつも屋上駐車場のワゴン車に積んである事を伝えると、6名の男子中学生とゴリ、リサさんとラインを連れて屋上へと向かう。

ゾンビ達は既に、ショップングモールのいたるところに侵入していた。俺達とは別の方向に逃げた避難民達も大分ようだが、彼らは無事に逃げ切れただろうか？

止まっているエスカレーターを駆け上がり、階段を走って上る。俺

とゴリが先程来たコースを逆戻りしているだけだが、来た時と心境は大きく違っている。

何せ、安全と思っていたショッピングモールでドンパチが起き、ゾンビまで侵入してきたんだ。安全な場所なんてどこにあるかわからないし、これからどうすればいいんだろーという表情を皆がしている（リサさんとラインを除く）。

屋上に向かうエスカレーターを駆け上がり、4階に着いた。4階には俺とゴリが倒したヤクザ2名が床に転がっており、まだ気絶している。

「こいつら、どうする？」

「置いていってゾンビのエサにするのもいいけど、それじゃ気分が悪いからな。仕方ないから、後で拾って言ってやるか」

俺としては、ゴリとヤクザのアッー！なシーンが頭から離れないんだが。そう言ったらゴリに柔道の投げ技を掛けられそうなので、黙っておく。

さらにエスカレーターを上がり、屋上駐車場に到着した。屋上にはまだゾンビが侵入しておらず、落ち着いて作業できそうだ。

途中で持って来た2つの商品用のカートにカゴを載せ、ボロボロとなったワゴン車の後部ドアを開ける。ドアが開いた瞬間、男子中学生達から「おおっ！」とテンションの高い雄たけび(?)が上がった。

「ほれ、さっさとカートに乗せろ」

「え？これ全部ホンモノですか？うわーすげー」

「下手に弄るなよ。暴発して死んでも知らんぞ」

中学生達が銃に手を伸ばそうとしたので、俺はすかさず注意の言葉を飛ばした。今ここで銃を彼らに持たせても、教える暇がないから危険だ。警備室に避難してから教える事にしよう。

バーゲンセールの如く、ワゴン車内に積み上げられた銃器やそれらの弾薬、手榴弾、装備品などを次々カートのカゴに放り込んでいく。当然、全品100%オフの取り放題だ。

ついでにさっき使って少なくなったSG556の弾薬を、着ているチェストリグのポーチに詰め込んでいく。リサさんも特殊部隊員らが着ていたチェストリグを拝借し、ついでにM203ランチャーの装着されたSG556カービンを手にし、それらの弾薬もチェストリグのポーチに入れていく。

結局、ワゴン車内の武器弾薬を乗せるのにカートをもう二台使わなければならなかった。一応中学生達にも銃を持たせておいたが、発砲はしないようきつく言っておいた。訓練を受けていない状態で撃ったって、弾の無駄遣いにしかない。

ワゴン車に設置された大型無線機だけは置いていくことにした。大きくて重量があり、とても持っていける代物ではなかったからだ。リサさんは、後でここに戻って無線機を使い、外部との交信を試みると言っていた。

「じゃ、お前ら先に警備室に戻ってろ。ゴリ、リサさん、後を頼みます」

「ちょっと待て武。お前どこに行くつもりなんだ？」

一足先にショッピングモール内に戻ろうとした俺を、ゴリが引き止めた。

俺はゴリに事情を話した。遙が関口に暴行を受けたこと。そして関口は、未だにトイレに繋がったままだということも。

「で、その関口をどうするんだ？」

「決まってるじゃん。自分のやった事の責任を取ってもらうんだよ」

「俺にはそれが『関口を殺す』ということにしか聞こえないんだが・
・・」

「大丈夫だ。いきなり殺すわけじゃないさ、一度助かるチャンスにくれてやる。それより、お前達が警備室について15分以内に俺が戻らなかったら、その時は遠慮なく警備室の扉を全部閉めろ。鍵をかけて、外からゾンビが入ってこれないようにするんだ」

俺がそう言うと、ゴリはしぶしぶといった感じに頷いた。リサさんは俺達の話聞いていたのか、何も言わなかった。

ゴリ達より一足先に、ラインと一緒に俺はモール内に戻った。エスカレーターを駆け下り、関口をどうするか考えつつ、関口を監禁したトイレへ走る。

・・・あ、ラインに関口の身体をあちこち咬んでもらうってのもアリかな？

第37話 これはゾンビですか？はい、歩く死体の大群です（後書き）

次回予告..

第38話

「パンツじゃないからはずかしくないもん！」

御意見、御感想お待ちしております。

第38話 パンツじゃないからはずかしくないもん! (前書き)

前回のあらすじ..

ジェイソンと魔装少女(ゾンビな男子高校生)は紙一重だよね。

第38話 パンツじゃないからはずかしくないもん!

皆と別れた俺は、関口を拘束している1階の男子トイレに向かった。途中で何体ものゾンビに遭遇したが、それらを全て振り切ってトイレに向かう。戦って時間を無駄にする事は出来ないからだ。

ラインが先を走り、ゾンビの存在を知らせてくれるので、進行が楽になる。ようやく着いた男子トイレ前には、幸いまだゾンビは徘徊していなかった。

トイレの中は、スプリンクラーが作動したせいで水浸しになっていた。歩くたびに、足元で水が跳ねる。

「さーて関口君、君の処分を決めちゃおうね」

俺がそう言うと、トイレの個室から脅えた声が聞こえた。関口を閉じ込めている個室のドアを開けようとしたら、中から鍵をかけられたのか開かない。

どうやら関口は、個室に籠城する気のようなのだ。だが俺は、冷静にレッグホルスターからUSP拳銃を抜くと、少し離れた場所からドアの鍵目掛けて発砲した。ドアは合板とプラスチックで出来ているので、一発着弾するごとに木やプラスチックの破片が周囲に飛び散った。

そしてドアの鍵が破壊された。俺はUSP拳銃の弾倉を空になった奴に交換しておき、スライドを引いて薬室内の弾丸を排出する。なぜこんな事をするかって?それは後々のお楽しみだ。

俺が個室に入ると、そこには震える関口がいた。足をブッシュナイフで切られ、手を折られているので、ここから脱出することが出来なかったのだろう。

「じゃ、行こうか」

俺はそう言い、SG556カービンを片手で構えつつ、関口を拘束する手錠の鍵を外す。その瞬間関口は逃げ出そうとしたが、カービンを構えると動きが止まった。

「・・・俺をどうするんだよ？」

「さあね？それはお楽しみだよ」

そう言って、関口に歩くよう命じる。中々動かなかったので、ブッシュナイフを鞘から抜いたら、一回大きく震えて歩き始めた。足を怪我しているせいで動きはのろく、俺はカービンの銃口で小突きながら、とりあえず2階に向かう。

その頃には、トイレの周囲にゾンビが出没するようになっていた。ラインが吼えて威嚇し、その間に階段を上って2階に到着する。

「ほらほら、さっさと歩かないとゾンビのエサになっちゃうよ？」
「・・・黙れ。こっちは足を怪我してるんだ」

背中に銃口を突きつけると、あっさり黙った。
そして俺達は、2階の休憩所のような場所に着いた。渡り廊下のような場所で、ベンチや自販機が設置されている。

そこに着くなり、俺はまず関口を殴りつけた。鈍い音とともに関口が床に転がる。

倒れた関口の襟首を掴んで、休憩所の柵にその背中を押し付ける。
関口の身体が宙に浮いた。柵は男性の胸辺りの高さしかないので、関口の上半身が大きく外側に傾く。

「ど、どうするんだよ・・・？」

「黙れ、大人しくしろ」

「くそ、岩崎のくせに生意気なんだよ！」

「黙れつつってんだろ！」

俺はそう言い、左手で襟首を掴んだまま、右手で関口の頬を殴った。関口の口から血が流れ出る。

とその時、突然関口が無事な左手を伸ばし、俺のレッグホルスターに納まるUSPをもぎ取った。SG556カービンは肩に掛けており、両手は関口を掴んでいるので、俺にはどうする事も出来ない。関口が勝ち誇った表情と共に、俺の額に奪ったUSPを突きつける。俺は慌てず、両手で関口を掴んだまま動かない。

「フン、間抜けめ。やっぱり岩崎はこうでなくちゃなあ」

「・・・こうって、どういうことだ？」

「お前は俺達のストレス発散相手のままでいいんだよ。社会ってのはストレスを発散する相手がいないきゃ、上手く回らねえんだよ。お前は黙って俺達に殴られてりゃいいんだよ」

「その論理を小学校の内に身につけたのか。賞賛に値する・・・わけねえよ。これだから馬鹿は困るんだ。変な論理で他人に迷惑ばっか掛けるから」

冷静にそう言うと、関口の顔が歪んだ。「黙れっ！」と関口が怒鳴り、USPのグリップで俺の頬を殴った。衝撃と共に、一瞬間の目が真っ白になる。

ラインが吼え、関口の足に噛み付こうとした。しかし関口は俺が持ち上げているので、ラインがその足を咬む事はかなわない。

口の中が切れたのか、鉄の味が口中に広がる。痛えな、口内炎は嫌なんだよ俺は。

「ま、ようやくウザイお前を殺せるな。お前を殺した後は、お前の妹も殺してやるよ、じっくりといたぶってな」

「・・・お前は本当に悪役だな。それと、遥は従妹だ。それぐらい把握しろよクソ野郎」

「・・・まあいい。じゃあな岩崎、あの世で幸福な人生を送れよ」

関口はそう言い、U S Pの引き金を引いた。

かちん、という音と共に、U S Pの撃鉄が薬室を叩いた。弾は、発射されない。

関口は弾丸が発射されない事に気づき、一瞬動きが止まった。慌てもう一度引き金を引く。ふたたび空撃ちする音。

俺は冷静に、右手で関口からU S Pを奪った。こうなる事を予期してU S Pから弾を抜いておいたのだが、それは正しかったようだ。

「全く、これだから馬鹿は困る・・・。武器を入手したら、まずは使えるかを確認しろよ」

俺はそう言って、U S Pをレッグホルスターに収めた。関口の顔が絶望に歪む。

俺はワザと隙を見せ、関口が行動を起こすかどうかで関口を救うか殺すかを決めていたのだ。もし関口が反省した態度を見せて大人しくしていたなら、俺は警備室に連れて行くつもりだった。逆に関口が俺を殺そうとする動きを見せたら、抹殺確定だ。よし、殺そう。

俺は関口を左手で掴んだまま、U S Pの空弾倉を排出し、装弾して

ある弾倉を差し込んだ。照準器の部分をズボンのベルトに引っ掛けて、勢いよくUSPを下に押す。スライドが引かれ、薬室に弾丸が装填される。

片手で装填を終えたUSPを関口の額に突きつける。関口の目が見開かれた。

「まっ、待て！ 今のは冗談だ！ お前を殺すつもりなんてなかったんだ！」

「あっそ。仮に弾が銃に入っていたら、俺は死んでただろうね。それでも冗談のつもりかね？」

この期に及んで言い訳を続ける関口は、はつきり言って見苦しい。ますますコイツを殺したくなったよ。

おや、ちょうど休憩所の真下にゾンビが集まってきているぞ？

「・・・まあいいや。お前を離してやるよ」

「何？ 助けてくれるのか？」

「ああ。離してやる」

ああーっと！ 左手が滑ったああ！

あれれ？ 関口君を掴んでいる手が離れちゃった。するとどうなるんだ？

大きく外側に傾いていた関口の身体が、柵の外へ消えていく。俺が手を離れた瞬間、関口は何が起きたかわからない、というような表情をしていた。

関口の身体は空中で一回転し、そして1階の床に叩きつけられた。轟音と共に、関口から悲鳴が上がった。

驚くべき事に、2階から1階に叩きつけられても、関口は生きてい

た。しかし打ち所が悪かったのか、関口の無事だった右足は骨折したようで、変な方向へ曲がっている。

「・・・てめえ！俺を放すって言ったじゃねえか！」

「放す？俺が言ったのは手を離すって事だよ？ああ、君は解放される方の放すってのを期待してたのか。日本語って難しいね」

関口は1階に仰向けに倒れつつ、怒鳴ってきた。コイツは元気だな。

「ふざけんなクソヤロー！今すぐ俺を助けやがれ！！」

「どっちがクソヤローだよ。俺が君みたいなヴァカを助けると思ってるの？君を助けるなら犬を助けた方がマシだよ。それより、あんまり怒鳴るとゾンビが寄ってくるけどいいの？」

俺はそう言って指差した。関口は俺が示した方向を見て、言葉を失った。

倒れた関口の周囲に、ショッピングモール内に侵入したゾンビ達が集まって来ていた。あーうー言いながら、ゾンビ達は関口に近づく。それを見た関口は、慌てて俺の方を見上げ、懇願してきた。

「助けてくれ！今までやった事は謝る！何でもする！だから助けてくれ！！」

「やだよ。遥に乱暴した罰だ」

間を空けて、言う。

「死ね」

おーいゾンビ達！活きのいいエサが転がってるよー！

俺がそう怒鳴ると、関口は更に謝った。涙や鼻水で顔をグシャグシャにしつつ懇願していたが、俺に関口を助ける気は一切ない。

やがて、一体のゾンビが関口の足にかぶりついた。足が使えないので這って移動するしかない関口が、大きな悲鳴を上げた。

関口の移動速度が遅くなり、二体目、三体目とゾンビが関口の身体に咬み付く。その度に関口から出る悲鳴は大きくなる。

やがて関口の身体が完全にゾンビ達に覆い尽くされた。肉が引きちぎられ、咀嚼される音に混じって、関口の悲鳴が聞こえる。しかし、その悲鳴も徐々に小さくなっていく。

その様子を見た俺は、満足して警備室に向かう。

これが、コマンドー式殺害法だ。メイトリクス大佐、感謝するよ！

関口を放してやった俺は、ラインと一緒に一路2階の警備室向けて走っていた。時計を見ると、ゴリ達と別れてからすでに14分が経過していた。このままでは警備室に入れなくなる。

既に2階にも、多くのゾンビが侵入していた。道を塞ぐゾンビを撃ち、殴り、掴みかかろうとしたとゾンビの手をギリギリでかわし、スピードを落とす事無く進む。

残り時間がついに30秒を切った。ようやくその時、警備室に通じるT字路が見えてきた。

「ライン、左d・・・」

俺が最後まで言う前に、ラインはさっさと左に曲がって警備室に向かっていた。さすが犬、足が速い。というか、せめてご主人様を待ってくれよ。

ラインに続き、俺も左に曲がる。ここから警備室までは一直線だ。はるか前方に警備室が見えてきた。しかしその入り口のシャッターは、既に降り始めている。シャッターが降りてしまえば、俺は警備室に入れなくなる。

「武、走れ！後ろにゾンビがいるぞ！」

警備室の入り口に立つゴリが、俺を手招きしていた。俺の後ろにゾンビがいるという事は、警備室に入れなかったら俺もゾンビ達におしくいただかれてしまうということだ。そして、通路にゾンビが侵入したら、警備室のシャッターが開く事は二度とないだろう。

すでにシャッターは俺の身長よりも低い位置まで下りていた。まずラインが警備室に滑り込む。俺が入り口まであと5メートルという場所にきた時、シャッターは俺の腰の位置まで下がっていた。

「ぬおお！ラストゲットオオオオオ！」

ズザーッと口で効果音を出しつつ、俺はヘッドスライディングをきめた。廊下をすべりにすべり、そのままシャッターをくぐって警備室に滑り込む。もしも野球で盗塁をしたならば、確実に塁を取れていただろう。

俺が警備室に滑り込んだ直後、大きな音を立てて警備室のシャッターが下りきった。

気がつく、俺の視界が薄暗くなっていた。日差しが差し込む中カーテンを閉じたような薄暗さだ。どうやら滑り込んだ勢いのまま、何かに頭から突っ込んでしまったらしい。状況を確認する為、とりあえず前を見る。すると目の前にあったのは・・・

水色と白の、縞々模様の布だった。

なんだこりゃ？と思いつつ、さらに左右を見回す。すると、ふにと何かやわらかい物が俺の頬に当たる感触がした。見ると、俺の頭の左右に、肌色の壁が出来ていた。

突然、俺の頭上で小さな悲鳴が上がった。美雪の声だ。

これらの条件から考えるに、俺のいる場所はひとつしか思い浮かばない。

思い切って頭を上げる。ばさっという音と共に、俺の頭にかかっていた布が落ちる。

目の前には、座り込んで顔を真っ赤にしている涙目の美雪。

どうやら、俺が頭を突っ込んでいたのは、美雪のスカートの中だったらしい。

「えーと、これは、あの、あれだな」

「武・・・・・・・・」

美雪が涙目のまま、今まで俺が頭を突っ込んでいたスカートの端を押さえる。おいおい、そんな顔で俺を見るなよ。まるで俺が変質者みたいじゃないか。

「武……。アンタ何やってんの？」

不意に、後ろから殺気を感じた。恐る恐る振り返ると、そこには危険なオーラを背後に漂わせた奈津美、麻衣、亜衣が、それぞれの武器を手に立っていた。

「ま、待て。故意にやったんじゃない。これは事故だ、偶然だ」

「アンタ、とうとう変態の域を越えて変質者になったわね……」

「俺は変態じゃないよ。仮に変態だとしても、変態という名の紳士だよ！」

そう訴えつつ、助けを求めてゴリの方を見る。ゴリは両手で俺を拝むと、巻き込まれたくないとでもいうかのようにそそくさと別の部屋へ行ってしまった。

これは罠だ！ニアが僕を陥れるために仕組んだ罠だ！

そう新世界の神を名乗った青年風に叫んでみた。奈津美たちは動かない。

待て、落ち着け。これは孔明の罠だ。

そう三国志の登場人物風に言ってみた。奈津美たちは動かない。

「最後に言い残す事は？」

そう、彼女達の目が言っていた。

パニックになった俺の思考が紡ぎだした言葉は一つ。

「パンツじゃないからはずかしくないもん！！」

うわ麻衣まで刀を抜くな亜衣矢をこっちに向けるな。

奈津美パールで殴るは駄目だ。死ぬ、本当に死ぬから！！

ぎゃあああああああつ！

・・・縞パンって、いい、よ・・・ね・・・。。グハッ。

第38話 パンツじゃないからはずかしくないもん! (後書き)

次回予告

第39話..

「なるほど、わからん」

御意見、御感想お待ちしております。

第39話 なるほど、わからん（前書き）

前回のあらすじ..

縞パンっていいよね。てか現実には穿いている女の子っているの？

第39話 なるほど、わからん

奈津美をはじめとした女子陣にフルボッコにされた俺は、ボロボロの状態で警備室のモニタールームに向かった。警備室は5つの部屋で構成されているのだ。

まずはモール内の監視カメラの映像を確認できるモニタールームと、その隣の配電室。続いてダクトや空調装置などがある空調室。そして倉庫のようなただっ広い部屋が2つある。その倉庫のような部屋で、とりあえず避難してきた連中は休憩している。

そして屋上に通じる階段が一つ。しかし屋上は空調設備やら何やらでスペースが無く、救助が来たとしても着陸は出来ないだろう。

モニタールームに入ると、頭が禿げている高齢の男性が俺を待っていた。ここの警備員である田中氏である。敏は60歳前半といったところだ。

「おお来たか。まったく、どうしてこんな事になったんじゃ？」

「知りませんよ。文句があるならゾンビになったおっさんに言ってください」

「まあいい。それよりも、あちこちの監視カメラで生存者を見つけたんだが、どうするんじゃ？」

田中氏によると、モール内のいたところでゾンビが確認されているらしい。侵入したゾンビはモール内のあちこちにいるようだ。

それと同時に、逃げ出した避難民はそれぞれ散り散りになって隠れているようだ。バットやナタ、手斧、そしてヤクザ達から奪った銃器で武装してはいるが、それでゾンビの群れに立ち向かえるとは思

えない。

「とりあえず、助けるにしても休養は必要です。俺も疲れた」

「なんじゃ、軟弱じゃのう」

「そりゃあ一日中駆け回ってヤクザと戦ってゾンビと戦ってゾンビと戦って警備室に滑り込んだと思ったらフルボッコにされて、疲れない人がいますかね？」

スカートに顔を突っ込んでしまったので、俺と美雪の仲は少し気まぐずになっている。

まあ、縞パンが見れたからいいや。その代わりロックマンだったらティウンティウンしまくって、とっくに残機0の状態だけだな。

俺と田中さんが話していると、そこへ美雪達がやってきた。相変わらず美雪は涙目のままだ。そんな目で見られたら、俺が犯罪者みたいじゃないか。

「あれ、あの関口とやらはどうしたんだ？」

モニタールームに入るなり、ゴリが言った。

「ああ、あいつか。解放してやったよ」

「解放？」

「解放だよ。それで間違っていない」

ゴリが頭をかしげた。

そうさ、俺は確かに関口（の魂）を（肉体から）開放してやった。今頃あいつは地獄にでも行ってるんじゃないか？

ゴリはこうなる事を予期していたのか、溜息を吐いただけで話を切り上げた。まあ関口は殺されて当然の人間だし、あいつが死んだ

って誰も気にしないだろう。

「で、お前らどうしたんだ？」

「ええと、これからの事を話し合おうとしたんだけど・・・」

亜衣が歯切れが悪く言う。

一体どうしたんだと俺が彼女達の背後を見ると、そこにはリサさんが立っていた。チェストリグを身につけ、SG556カービンを肩にかけたりサさんは、無言で俺達を配電盤室へと促した。促されるままに俺達は配電盤室へと向かう。

配電盤室はモール内の電力供給などを調整する配電盤がいくつもある部屋で、そこそこ広い。俺達7人は床に座ると、おもむろにリサさんが話を切り出した。

「さて、岩崎君だっけ・・・？君はわたしが何か知っているのではないかと思っていたね？」

「そうです。銃を持ってるし体術だって強い。なによりあの特殊部隊員の死体の場所を知っていた。これで何も知らない方がおかしいですよ」

「そうだね、その通りだろう。だからわたしも知っている限りの事を話す。だからわたしの事も信用してほしい」

俺は皆の顔を見回す。皆はとりあえず話は聞いてみようといった感じで頷いた。

それを確認すると、リサさんはいきなり言った。

「今世界中で広がっているこのゾンビ化現象の原因はウイルスだ。君達も薄々感づいてはいたんだろう？」

「ええ、まあ。接触感染だと考えれば、ゾンビ化する原因がウイルスだってのは誰しも思いつきますよ」

「それで、だ。このウイルスを作ったのは・・・」

そこで一旦話を切り、俺の顔を見てきた。そして続ける。

「武君、君のお父さんだ」

「・・・は？」

俺は訳が分からず、それしか言えなかった。まるでバカみたいに口を開け、何か言い返そうと言葉を探す。皆もいきなり知らされた事に、口をあんぐりと開けて茫然としていた。

「・・・何言ってるんですか？確かに俺の親父は製薬会社の研究員ですが、親父が作っていたのは薬であって、ウイルスでは無いですよ。そもそも親父は3年前に死んでいる」

「わたしの言い方が悪かった。このウイルスの元を作ったのが君のお父さんだと言った方が正しいな」

「ちょっと待って下さい！仮にそれが本当だとしても、何であなたがそんな事を知っているんですか!？」

奈津美が声を張り上げた。リサさんはちらと奈津美を見ると、話を続ける。

「武君のお父さん——勝俊かつとしさんが勤めていたのはアルカディア製薬だ。そしてわたしもアルカディア製薬で働いている——非合法部門でね」

話をまとめると、こうだ。

世界シェア1、2位を争うアルカディア製薬は、裏の仕事もやっている。医薬品を作るだけでなく、生物兵器の開発も行っていたらしい。何でもリサさんの話によると、大企業の多くがそういった裏の仕事にも手を染めているのだとか。

そしてリサさんはアルカディア製薬の非合法部門——他社の新技術を強奪したり、情報漏れを阻止するために裏切った社員を暗殺したり、極秘実験で発生したバイオハザードを鎮圧するための部隊、つまり傭兵のような仕事をしていたのだそう。そしてリサさんは、俺の親父の護衛任務に就いていたらしい。

「勝俊さんは良い人だった。他の研究員が金や昇進の為に生物兵器を開発している中、一人だけ病人やけが人を治療するための医薬品を開発していた」

「だったら何で、親父は人間がゾンビ化するようなウイルスを作ったんですか！？親父はそんな事をするような人間じゃない！」

「そう、そんな事をする人間じゃない。ウイルス——TI122型治療薬を開発したのは、武君、君のためだ」

俺の為・・・・・・・・？

訳がわからない。何で親父は俺の為にそんな薬を作ったんだ？

他の皆はすでに話についていけないようで、訳が分からないというような顔をしていた。そりゃそうだ。俺だって半分わからない。

「武君。君は小学校6年生の時に事故にあい、しばらく入院していた。そうだね？」

「はあ……。たしかにそうですが」

あれは小学校6年生の夏の事だった。俺は信号無視の乗用車に撥ねられ、2ヶ月間意識を失ったままだった。

その時の傷はまだ身体に残っている。背中には手術の痕がいくつもあるし、額を切ったせいで傷が髪の毛の生え際に残っている。

だが、それがどうしたっていうんだ？

「その時からわたしは勝俊さんの護衛任務にあたっていたからわかるんだが、君はあの時重傷だった。脊髄を損傷し、半身不随どころか植物状態になっていたんだ」

「それじゃあ武は、なんで回復出来たんですか？」

美雪が口を挟んだ。

「勝俊さんは動けず、昏睡状態に陥った武君の為に必死で薬を作った。毎晩徹夜し、ようやく薬を作り上げた。それが、TI122型治療薬だ」

「・・・それって、どんな効果をもたらすんですか？」

ゴリが恐る恐るといった感じで訊く。

リサさんによると、親父が俺の為に作ったTI122型治療薬は何かのウイルスをベースにして、傷ついた組織を再生し、元通りにしてしまう効果があるそう。副次的に力が強くなる効果もあるそうだが、その度合いは個人差が出るそう。俺が筋肉モリモリマッチョマンになっていないのは、その効果が出ていなかったのだろう。その治療薬を投与された俺は、あっという間に昏睡状態から回復したそう。その間の記憶はないが、目が覚めた時、俺の身体に異常はどこにもなかった。

「・・・で、それがこのゾンビ化現象にどう関係があるってんだ？」
麻衣が訊く。

「そんな薬品を開発したら、当然アルカディア製薬の上層部の目につく。すぐに勝俊さんは治療薬を軍事転用するよう、上層部から命令された」

「軍事転用・・・？それでゾンビが？」

「いや、軍事転用したのは治療薬を生物兵器にするためではない。兵士を強化するためだ」

再び話をまとめる。

治療薬は傷ついた組織を再生し、場合によっては筋肉を強化する効果がある。それを兵士に投与すれば、死にくく、力強い最強の兵士が出来あがる——と、親父に研究を命じた上層部は考えたのだそうだ。

先進国では、兵士が何よりも高価な兵器である。歩兵一人を養成するのに数年かかり、その費用は数千万円ともいわれる。そして現代戦では何よりも歩兵が重要な役割を果たす。

正規軍同士がぶつかる戦争は滅多に、というかもう起こる事はないだろう。代わりに年々増加しているのは、正規軍とテロリスト、もしくはゲリラといった組織がぶつかる非対称戦闘だ。

テロリストやゲリラは民間人にまぎれて攻撃してくる。そういった敵を殲滅するためには、歩兵が敵が隠れていそうな場所を隅々まで搜索するしかない。つまり、接近戦を強いられるという事だ。

そういった接近戦では、いくら防弾装備を整えていても、撃たれれ

ば負傷し、死亡してしまう。防弾チョッキで弾丸を防いでも衝撃までは吸収できず、骨折したりする。ヘルメットで守られた頭部に弾丸を食らったら、衝撃で脳挫傷などを起こして死にかねない。

そういった被害を防ぐには、敵が隠れていそうな場所——つまり市街地等をまるごと爆撃するのが手っ取り早い。しかしその方法を取れば民間人が巻き添えを食らってしまう。そうなれば爆撃を行った国は国際社会から批判を受けてしまう。

近年では無人航空機からミサイルでテロリストを殺害するといった方法も取られているが、それでも民間人の巻き添えは増え続けている。確実に、敵のみを殺すには、歩兵が一人一人敵を殺していくしか方法が無いからだ。

しかし先程も言ったように、そのような方法を取れば確実に死傷者が出る。アメリカはアフガニスタンやイラク、昔はベトナムでそういった経験を味わっている。

先進国では人命が何よりも重視されている。仮に兵士が死ねば、厭戦ムードが漂い始めてしまう。

それだけでなく、兵士が死ねば政府は補償をしなければならない。日本の自衛隊がイラクに行った時は、仮に自衛隊員が一人死亡した場合、政府から出る補償金や弔慰金、保険金などを合わせると2億円が支払われる事になっていた。

つまり、現代戦を行う上で重要なのは、いかに死傷者を出さないかという事なのだ。

「アルカディア製薬はすぐさまそのアイディアに飛びついた。そして博士は研究を強制させられ、そしてついに薬は完成した」

「・・・それが、ゾンビ化の原因？」

「そうだ。実験でこの薬を投与された人間は、理性を失い、食欲のままに行動するだけの生きる屍となってしまった。力が強くて死ににくいって点では、目的を果たしていたがね」

「で、何でそのウイルスが世界中で蔓延しているんですか？」

アルカディア製薬はウイルスがゾンビ化を引き起こす事を知ると、即座にそれらの研究を封印した。しかし他の製薬会社にとって、ウイルスは未だに価値がある代物だった。

ウイルスの研究は、敵対する製薬会社——ミレニウム社に奪われた。研究を奪ったのは親父の同僚だった科学者であり、そいつは交通事故故に見せかけて親父を殺し、その後ミレニウム社に寝返ったのだそうだ。

ミレニウム社はゾンビ化ウイルスの研究を続けた。それ以降の事はよくわからないらしい。

そしてこの世界同時ウイルステロが勃発したのだ。

リサさんはアルカディア製薬上層部に命じられ、研究所のあるこの豊島市に来了。目的は、まだ研究所に残ると言われている、親父が作った抗ウイルス薬とワクチンを確保する事だ。抗ウイルス薬とワクチンを確保することで、この事態が鎮圧された後の政治的・市場的なイニシアチブを取ろうと考えているのだろう。

しかし敵対するミレニウム社もそれらを狙っていた。ミレニウム社は特殊部隊を送り込み、抗ウイルス薬とワクチンを確保する予定だったが、それを察知したアルカディア製薬はリサさんを送った。

リサさんはミレニウム社が抗ウイルス薬とワクチンを確保しないよう、研究所近くで待ち伏せた。そして特殊部隊を全滅させたが自身も深手を負い、そしてゾンビに追われてこのショッピングモールまで来た。

俺達が見たあの特殊部隊は、ミレニウム社の非合法部門の部隊だったのだ。

「だからわたしは銃も持っているし、特殊部隊員の死体の場所も把握していた。これで納得？」

「・・・多分」

とてつもない情報量で、俺の頭はパンク寸前だ。

つまり俺のせいでウイルスの元が作られ、それがゾンビ化を引き起こすウイルスに作りかえられ、そして親父が暗殺されたということか？そして抗ウイルス薬とワクチンは、この豊島市にまだある？

なるほど、わからん。

皆を見ると、俺と同じようにわかったようなわからなかったような顔をしていた。麻衣なんかは途中で聞くのを放棄し、亜衣からダイジェストで聞いている。

「ま、まあ・・・、この事を考えるのは朝になってからにしよう。もう午前3時だし、休養を取らないと」

黙り切った皆の様子を見て、リサさんが慌てたように言う。

皆が立ち上がり、それぞれ部屋から出ていく。俺も疲れていたので倉庫で寝ようと思い、立ち上がった。しかしそんな俺の前に、何かの包みを持った美雪が立ちふさがった。

「!?! なんの用だ？」

「あ、あの、武おなかすいたでしょ・・・？だから、ご飯を・・・」
「いや結構です！！！！」

美雪の地雷カレーの味を覚えている俺は、即座に断ろうとした。配電室から出ていこうとした俺を、慌てて美雪が止める。

「ま、待ってよ！今回はサンドイッチだから、余計な手は加えてないよ」

「あ、そうなの。なら安心かな」

俺はそう言って、美雪が包みから取り出したサイドイッチを受け取った。料理していないなら大丈夫だ。パンに具を挟むだけなら無害だろう。

俺はサンドイッチを一口かじった。そして・・・

目の前がブラックアウトした。

なんで？なんでパンに具を挟んだだけのサンドイッチが、こんなこの世のものとは思えない（悪い意味で）味してるの？美雪には食事を大量殺戮兵器にする特殊能力でもあるの？

食材に贖罪しろ。

俺はそれだけを思い、強制的に眠りにつかされた。

第39話 なるほど、わからん（後書き）

次回予告

第40話 番外編..

「こんなメンバーで大丈夫か？」

御意見、御感想お待ちしております。

第40話 番外編 「こんなメンバーで大丈夫か？」 (前書き)

前回のあらすじ..

一番いい説明を頼む。

第40話 番外編 「こんなメンバーで大丈夫か？」

高校生組

岩崎 武 いわさき たけし

この話の主人公、兼変態という名の紳士。最近変態という名の変態と化しつつある。

一応高校生組のリーダー。一応というのは、半ば強制的にリーダーにさせられたから。

ミリオタかつアニオタであり、（実生活では役に立たない）知識が広く深い。ミリオタなので銃の扱い方を海外のサイトで学んだり、爆薬などの作り方（違法）も知っていた。そのためパイプ爆弾や硝安爆薬などを自作し、銃器を使う。爆発が好き。

普段はボケだが、遥と一緒に居るときだけツツコミになる。

異常事態の中でだんだん頭がおかしくなっていき、平気で人間も殺せるようになってしまった。

ゾンビが発生したのは、間接的にコイツのせいとも言える。

武装..

シグSG556カービン。USP自動拳銃。P230JP拳銃。ブッシュナイフ。M67手榴弾。M84スタングレネード。

五里 頼人 ゴリ ライト

武の友人、兼筋肉モリモリマッチョマン。変態ではない。
柔道部所属。性格は常識的であり、暴走しがちな武のストッパーになる。またツツコミ役でもある。

大柄で怪力を誇り、重たい鈍器なども軽々と振り回す。ただし銃は扱いづらいそうだ。

実家が農家をやっており、手伝いで軽トラを運転していた。そのため高校生組では唯一車の運転が出来る（ただしテクニックは酷い）。

武装..

チェーンソーもしくは消防用斧。ベネリM3ショットガン。USP自動拳銃。パイプ爆弾。ハンティングナイフ。

高田 たかだ 美雪 みゆき

武の友人。

バスケットボール部所属。動きが素早く、戦うよりも逃げた方が生き延びる確率が上がる。

美雪の手にかかれば、どんな食材もアラ不思議！大量殺戮兵器になってしまふ。ちなみに食べた人間は失神する。
好きな人がいるらしい。

縞パンを着用すrうわなにをするやめ

武装..

ボール。

上田 うえだ 奈津美 なつみ

武の友人。

陸上部所属で足が早く、逃げるのに向いている。パソコンが得意なので、武の家から持ち出したノートパソコンを使って情報収集をする。

性格は常識的。武を変態扱いする（最近に変質者扱い）。

豊島第二中学校卒業生であり、武達を遥達の元まで案内した。またショッピングモールに逃げこんだのも彼女のおかげである。

貧乳要員である。・・・おや誰だろう、こんな時間に宅急便か？

武装..

金属バット。

白木 しろぎ 亜衣 あい

武と同じ高校に通う。途中から武達と合流し、以降行動を共にする。弓道部所属であり、弓矢を一式学校から持ち出していた。ショッピングモールでアーチェリー用の弓に持ち替えるが、腕は衰えていない。

大人しい性格であり、料理が得意。たまにボケる。

武装..

弓矢。クロスボウ。

白木 麻衣しろき まい

亜衣の双子の妹。途中から武達に合流する。

性格は凶暴であり、なおかつ男勝り。彼女がキレたら（物理的に）ヤバイ。よく武の変態的行動に（暴力で）制裁する。

剣道部所属。色々とアブナイ人。

武装..

日本刀。

中学生組

岩崎 遥いわさき はるか

武の従妹、兼妹成分。豊島第二中学校で武に救出されて以降、行動を共にする。

オタクであり、その知識を使ってよくボケる。ちなみに腐女子ではない。

親と連絡がつかず、そのため武に甘えている。

ショッピングモールでヤクザが暴れ始めた際、関口に乱暴されてしまっただが.....。

武装..

トカレフ自動拳銃。

緒方^{おがた}

遥の友人。助けられてから行動を共にする。

武によって2階の窓から突き落とされたり、組長に人質に取られたりと、何かと不幸である。武を将来のテロリストと呼んだ。

武装..

金属バット。

アルカディア製薬

リサ

本名不詳の女性。20代だが10代後半にも見える程若い。ハーフではないかと武は推測する。

ショッピングモールにやってきた際負傷していた。他にも銃を持っていたり体術が強いといった不審な点があり、武達に不審に思われていた。

その正体は大企業アルカディア製薬の非合法部門の傭兵であり、豊島市に来ていたのは武の父親が作ったと言われるウイルス治療薬とワクチンの確保の為である。完全武装の特殊部隊一個分隊を殲滅するほど強い。

昔は武の父親の護衛任務についていた。そのため武の顔を知っていた。

武装..

シグSG556カービン（M203グレネードランチャー装着）。
M93Rマシンピストル。コンバットナイフ。M67手榴弾。

その他

中田 なかつた 栄一 えいいち

豊島東警察署の巡查。

保護した避難民を連れてバスで警察署を脱出しようとしたが、直前でゾンビに咬まれてしまい、警察署に一人残る事を決意する。
武達と会った時にはすでにゾンビ化が進行しており、内臓を喰われ
ても痛みを感じなくなっていた。装備品のP230JP拳銃を武に
託した後、人間のまま死ぬ事を望み、武に射殺される。

田中 たなか

ショッピングモールの警備員。60代前半。ハゲ。
警備室のモニタールームで館内外の様子をチェックしている。生存
者などを見つけたら武に無線で連絡してくる。

おっさん

武達がショッピングモールに避難した際、持っていた銃や爆弾を渡すように要求する。

ヤクザが暴れはじめたらさっさとヤクザ側に寝返り、やりたい放題やっていた。そのため避難民達にリンチされそうになり、逃げようとして入り口のバリケードを崩してしまう。

ショッピングモールにゾンビが侵入することになった原因である。

関口^{せきぐち}

ヤクザの下っ端である高校生。武と小中学校が一緒であり、因縁がある。

昔はよく武をいじめていた。高校に入ってから不良であり、ヤクザになる。シンナーや薬物をやっている形跡がある。

ショッピングモールに来た際に、ヤクザの力を利用して武をいたぶる。

ヤクザが暴れ始めた際に好き放題やっていた。女子供を捕まえている途中、関口が遙に暴行を加えてしまう。そのせいで武の怒りを買って、半殺しにされた上で生き延びるチャンスを与えられたが、武を殺そうとしたためゾンビのエサにされてしまう。

組長

ショッピングモールにやってきたヤクザの組長。ゾンビがモールに侵入した原因の一つ。

銃器で武装した手下を伴い、モール内の権力を握る。酔っ払った組長の手下が暴れ始め、それにつられて他の生存者たちを殺そうとする。

劣勢になり、緒方を人質にして逃げようとしたが、慢心で武がもう一丁銃を隠し持っている事に気がつかなかった。そのため負傷して武に捕まり、指の骨を全て折られた上で安全ピンの抜かれた手榴弾を握らされる。

その後耐え切れずに手を離し、爆死。

阿部 あべ かずたか
和高

ショッピングモールの避難民で、青いツナギを着たい男。ノンケでも食っちゃもうらしい。

道下と行動を共にしており、男子トイレで度々アッー！な事をしていうようだ。またよくベンチに座って「やらないか」と男に声をかける姿が目撃されている。

武装..

ハンマー。スパナ。

道下 みちした まらうぎ
真良樹

避難民。阿部さんと行動を共にしている。

自称、普通の予備校生。しかしちょっと男に興味があるらしい。

武装..

百科事典。

老夫婦

避難していた老夫婦。ゾンビ溢れる世の中に絶望し、自殺しようとして屋上にいたところをゴリ達に救助される。

宮田^{みやた}

幼女（後述）と一緒にアミューズメントエリアのテントの屋根に避難していた男性。医師。
ロリコン疑惑あり。

武装..

ネイルハンマー

幼女

生存者。本名不明。

宮田と共にテントの屋根に避難していたところを武達に救助される。

塚地

生存者。通称ピザ。

一回で三人分の食事を食べなくては満足できない。ド○ルドに襲われて一旦逃げ出したが、落とした銃で武を援護するなど根性はある。でもメタボ体型。

ドナ○ド

某アメリカのファーストフードショップのキャラクターそっくりのピエロ。マクドナ○ドに侵入してきた生存者を無差別で攻撃してくる。

武によって手榴弾を服に押し込まれ、窓から蹴り落とされて爆殺される？

武装..

ポテトソード

ハンバーガー手裏剣

シューゾー

ウィンブルドンに出たテニスプレイヤーそっくりの男。熱い。常に燃えている。

屋上で火事を起こし、武を負傷させる。

武装..

テニスラケット

硬式テニスボール

ライン

武の飼っている雌のシェパード。武の命令が完全に理解出来る程頭がいい。

その嗅覚や聴覚を活かして、ゾンビの接近を感知できる。また突進したり噛みついたりしての戦闘も行える。しかし、御主人様である武については少し冷たい。

岩崎 いわさき 勝俊 かつとし

武の父親。故人。

大企業のアルカディア製薬の研究員であり、ゾンビ化ウイルスの元のT1122治療薬を作った張本人である。本人は武のために治療薬を制作したのだが・・・。

よく武を連れてキャンプや狩りに行っていた。そのため猟銃やブツシュナイフ、ハンティングナイフなどを所有していた。彼のおかげ

で武の豊富なサバイバル術が身につけられたといってもいい。

人間がゾンビ化するためウイルス研究を封印したが、同僚の科学者に裏切られ、交通事故に偽装して暗殺される。

第40話 番外編 「こんなメンバーで大丈夫か？」 (後書き)

次回予告..

第41話

「貧乳はステータスだ。希少価値だ」

第41話 貧乳はステータスだ。希少価値だ。(前書き)

前回のあらすじ..

Q. こんなメンバーで大丈夫か？

A. 一番いい奴を頼む。

第41話 貧乳はステータスだ。希少価値だ。

腕時計のアラーム音で俺は目が覚めた。

周りを見回すと、そこは昨日と同じく配電盤室だった。どうやら、美雪の地雷サンドイッチを食って気絶したまま、俺はここに放置されていたらしい。

美雪の料理で死ぬかと思ったが、そんなことはあったぜ！

いやはや、なんでサンドイッチが地雷料理になるんだろうか。美雪が手を触れた食材は全て大量殺戮兵器になるのだろうか？それだったら、あいつに食材を触れさせてはならない。貴重な食料が次々ダメになってしまう。

時計を見ると、時間は既に午前7時を過ぎていた。配電盤室のドアを開け、モニタールームにいた田中さんに挨拶し、倉庫に直行する。とりあえずゴリと話すことが色々あるからだ。

2つある方の倉庫の内、片方を男、もう片方を女が使う事が決まっている。俺は男の方のドアを開け、倉庫内に入った。

倉庫の中では、中学生達が床に転がって爆睡していた。中学生なので、俺達よりも体力がない。そのまま寝かせておこうと考えた俺は、静かにドアを閉じた。

倉庫にゴリの姿はなかった。まさかとは思うが、女のほうの倉庫に行っていないだろうか？そうだったらゴリはリア充認定だ、爆発

させてやる。

「おう、おはよう」

そう後ろから声を掛けられた。振り返ると、そこには屈強な筋肉モリモリマツチョマン——ゴリが立っていた。どうやら起きてからトイレに行っていたらしい。

「武、おまえ昨日は倉庫に来なかったが、どうしたんだ？」

「美雪の地雷サンドイッチを食って気絶してた。お前は食わなかったのか？」

「いや、勧められたが遠慮しといた。それにしてもお前、運がなかったな・・・」

哀れみの目で見られた。

やがて、高校生達が続々と起きてきた。空調室で朝食のサンドイッチを食べつつ（無論、美雪製ではない）、今後の行動についても話し合う。

リサさんも交えて話し合った結果、今日は食料調達をメインに行動することになった。警備室に持ち込まれた食料は少ないし、色々と欠いている物資もある。

リサさんは屋上に放置されているワゴン車に搭載された無線機を使い、救助を要請するつもりらしい。ただモニタールームの監視カメラの映像で確認した結果、ワゴン車が停まっている屋上駐車場にも既にゾンビが侵入していることがわかった。確実に戦闘になるので、しっかりと武装を整え、人数も必要だ。

今日はとりあえず、ワゴン車の無線機で救助を呼んだ後、モール内

で食料調達を行う事に決まった。救助を誰に要請するのかとリサさんに訊いたら、

「ツテがある」

と言われた。

そのツテというのは、どうやらリサさんの仲間の事らしい。同じアルカディア製薬の非合法部門で働く同僚に、軍用大型ヘリコプターの操縦士がいるのだとか。そしてそのヘリは、ちょうど物資輸送の為に日本に來ている最中だったらしい。

最近の製薬会社って軍用ヘリまで持つてるのか。おっかないね。

「そのヘリって全員が乗れるんですか？」

「たしかMH-53Eだったから、ここにいる全員なら余裕で乗れる。というか、乗せてもお釣りが来るだろうね」

MH-53Eというのは、特殊作戦用の軍用大型ヘリだ。西側世界最大のヘリコプターだ。それをなんで製薬会社が・・・？
とりあえず、軍用ヘリが救助にくるという事で、俺のテンションはマックスになる。ヒヤッハー、この世界も悪くはねえな！

・・・と叫ぶと、皆から白い目で見られた。

とりあえず、今日行動するメンバーが決まった。俺とゴリと麻衣、亜衣、そしてリサさんだ。美雪と奈津美、そして中学生組と他の避難民達は、警備室で待機してもらおう。中学生組は疲れているのか爆睡しているし、他の大人達には捕虜となったヤクザ達の見張りもしてもらわなければならない。

さて、問題はどやって警備室から出るかだ。通路はゾンビが溢れていて使えないし、屋上から下に降りるなんて芸当、俺達にはどうてい出来ない。

頭を抱えていると、田中さんが突然言った。

「ダクトを使えば問題ないじゃろ」

と。

田中さんに従って空調室に向かう。床からいくつもの太くて四角いダクトが、床に平行になるように突き出て、重低音を室内に響かせている。田中さんがダクトの蓋を開くと、そこにはしゃがめばどうにか大人でも移動できそうな空間が広がっている。

「このダクト、どこに繋がってるかわかりますか？」

「さあ。工事した時の設計図が残ってればいいんじゃないが、そんなもんここにはないぞ」

「じゃ、誰かがまず先行して通路を確かめなきゃならんのですね」

俺はそう言うと、奈津美の肩を叩いた。奈津美は訳がわからない、といった表情で俺を見る。

「奈津美、お前が行ってくれるか？」

「え？何でわたしが？」

「だってお前なら胸に余計な障害物がないし、仮にダクトが狭くなっているって通れゴフウッ!!」

最後まで言う前に、奈津美の回し蹴りが俺にクリーンヒットした。空中で数回転した俺は、鈍い音と共に床に落下する。

「蹴ったな!?! 親父にも蹴られたことないのに!?!」

「アンタ・・・、わたしの体型がスレンダーだって言いたいよね・・・?」

「別に貧乳とか気にする事はないよ。『貧乳はステータスだ、希少価値だ』とか、らき☆す○とかで良くいってるじゃなアベシッ!」

今度は踵落としが俺の頭に直撃した。「二度も蹴ったな!」と言いつつ俺は奈津美を見上げたが、次の瞬間、俺は恐怖で固まってしまった。

黒いオーラを漂わせつつ、手近な場所にあったハンマーを手に、俺に近付いて来る奈津美。それを見て、必死に土下座して謝る俺。

心からの謝罪と土下座を繰り返す事数十回、ようやく奈津美は許してくれた。オプションとして、俺の頭を何度か蹴ったが。

奈津美はダクトに入り、どこに通じているかを確認めに行った。その間に俺達は戦闘準備を整える。

話し合いが終わった後、俺は装備品を整える為にモニタールームに向かった。ワゴン車から持ち出してきた武器弾薬は、モニタールームにまとめて置いてあり、田中さんが見張っている。勝手に持ち出されたりしないためだ。

武器庫代わりのロッカーからSG556カービンを取り出し、ついでに弾倉も7個取り出す。1個はそのままSG556に叩きこみ、残りはチェストリグの弾倉ポーチに放り込む。ゴリもM3ショットガンとシエルを装備した。ちなみに拳銃はずっと装備したままだ。

ブッシュナイフや手榴弾、スタングレネードも装備した。戦闘準備

を整えた俺は一旦ゴリと別れ、遥のいる倉庫に向かう。
一応女子がいるので、数回ドアをノックした。ややあって、ドアが
開いて美雪が顔を見せた。

「武、どうしたの？」

「いや、遥に用があったんだが……。遥は？」

「寝てるわ。よっぽど疲れてたのね」

倉庫の内部をちらっと見る。壁に寄り掛かっていたり床で寝ている
女子中学生達や避難民の姿が見え、倉庫の隅で遥が横になっている
のが見えた。毛布を被っていて、どうやら寝ているようだ。

まあ仕方ない。遥は女子中学生で体力が少ないし、昨日あんなこと
があったのだ。遥と少し話がしたかったのだが、寝ているのなら仕
方がない。

俺は素直に退散し、空調室に向かう。

空調室では、既に皆が待っていた。ダクトがどこに通じているのか
を確かめていた奈津美が戻ってきていたので、さっそくダクトの経
路を訊く。

「このダクトはしゃがめば大人でも通れるわ。それと、一応2階の
女子トイレに通じてる」

「女子トイレだと！？胸が熱くなるな……」

そう言うと、麻衣に殴られた。それも刀の鞘で。

仕方がないじゃないか！男にとって女子トイレは未知のエリアなん
だ！俺は変質者じゃないから女子トイレなんて入った事はないんだ！

俺がそう言っても、皆は相変わらず疑いの目で俺を見る。止めてく

れよ。

「まあそんなことはどうでもいい。それよりさっさと行こうか」

リサさんはそう言ってダクトに入って行った。その後をゴリ、亜衣、麻衣と続き、最後に俺がダクトに入る。

ダクトは意外と広かった。しゃがんでも余裕で通れるし、巨漢のゴリでもどうにか通れる程だ。

ただ残念なのは、換気ダクトなので内部には若干の異臭が漂っていることだった。しかし我慢できるレベルなので、皆から不満の声は上がらない。

先頭のリサさんが持つSG556のフラッシュライトがダクト内を明るく照らし出す。奈津美が書いた経路図を元に、俺達は女子トイレを目指した。

第41話 貧乳はステータスだ。希少価値だ。(後書き)

次回予告

第42話..

「やらないか」

御意見、御感想お待ちしております。

第42話 やらないか（前書き）

前回のあらすじ ..

よくよく考えたら、貧乳って価値があるの？

第42話 やらないか

「よし、ここだ」

ダクトの中、戦闘を進むリサさんが言った後、バガン、と何かを蹴る音と、ガシャツと何かが落下する音がした。同時にダクト内に下から光が差し込んでくる。

ややあって、「よし大丈夫だ。降りろ」とリサさんの声が聞こえてきた。順番にダクト内を進み、皆が女子トイレに降りていく。どうやら換気ダクトの蓋を外し、そこが女子トイレに繋がっているようだ。

俺は最後尾だったので、一番最後にダクトから降りた。洗面台の上に着地する。

「おお、ここが女子トイレか！」

俺が叫ぶと、麻衣と亜衣から冷たい目で見られた。

ここはどうやら、本館の2階にある女子トイレのようだ。俺達がワゴン車を停めたのも本館の屋上駐車場なので、余計に移動する時間がかからないで済む。

女子トイレから出た俺達に、早速廊下のゾンビ達が気付いたようだ。トイレから出てきた瞬間、周囲のゾンビ達が俺達目がけて集まってくる。

しかし、動きがのろいゾンビ達は、ゴリと麻衣の敵ではなかった。ゴリが消防用斧を振るってゾンビの頭をまとめて叩き潰し、麻衣は刀でゾンビの首を次々チョンパしていた。

無駄な戦闘は避けさっさと駐車場に向かうため、俺達の進行ルート上か脅威だと思われるゾンビしか倒さない。弾薬、体力とも消耗す

るのは出来るだけ避けたいからだ。

俺とリサさんは一応銃火器が主武装ではあるが、発砲する事は少ない。弾は補充出来る見込みは無い。

ゴリと麻衣が先頭に立ち、屋上駐車場へのルートを進んで行く。ゾンビ達は相変わらずのろいので、走れば簡単に追跡を振り切れる。

そして俺達は屋上へ通じるエスカレーターを上がって行った。昨日の夜、俺とゴリがここに来たルートを逆に進んでいると考えればいい。

開店時間が来た事で、自動的にエレベーターが起動していた。利用しているのはゾンビくらいなもので、あーうー呻いているゾンビがエスカレーターで自動的に上に運ばれている光景は、シュールとか言いようがない。

特に何事も無く、3階、4階を通り過ぎた。上に行けば行くほどゾンビの数は減っていつているので、もしかしたら屋上駐車場にはゾンビはいないのかもしれない。

——という幻想は、屋上駐車場についた瞬間にぶち殺された。

「うそーん」

と、麻衣が呟く。

屋上駐車場は、ゾンビだらけだった。あちこちをゾンビが徘徊している。

昨日俺達が駐車場のシャッターをぶち壊したからかもしれない。屋上駐車場へは斜面が続いているので、ゾンビでも簡単に上に行く事が出来たのだろう。

俺とゴリが昨日乗り捨て、そして今朝武器弾薬を回収したワゴン車は、徘徊するゾンビ達の向こうに見えた。これは確実に、戦闘が始まるパターンだ。

「仕方ない。わたしが通信している間、君達は援護してくれ」

リサさんがそう言ったので、全員が頷く。そして俺達は駐車場へと足を踏み入れた。

徘徊していたゾンビ達が一斉に俺達に気付き、俺達向けて歩いて来る。まずはリサさんが、カービンにアンダーマウントされたM203ランチャーをぶっ放した。

発射された40mmグレネード弾は近付きつつあるゾンビの群れの中心部に着弾、爆発した。爆発に巻き込まれ、倒れるゾンビ達。しかしまだまだ無事なゾンビの方が多い。

続いて俺と亜衣、そしてリサさんが前に出て、それぞれ飛び道具で出来るだけゾンビの数を減らしておく。俺とリサさんはSG556カービン、亜衣はクロスボウを使い、道を切り開く。

昨日完璧にリサさんに扱い方を教えてもらったので、俺はすでにSG556を使いこなしていた。短連射くらいなら、反動を完璧に制御できる。

そしてゾンビの包囲網に僅かな穴が開いた所を、ゴリと麻衣が近接戦をしかけ、穴を大きく広げていく。この二人の暴れっぷりは、ハッキリ言ってゾンビよりも恐ろしい。

俺達は前進し、ワゴン車へと走った。途中ゾンビが俺に腕を伸ばしてきたが、カービンのストックで打撃を加え、その腕を振り払う。

ワゴン車の様子は昨日と変わりなかった。あちこちがへこみ、サイドミラーが吹っ飛び、防弾ガラスが真っ白になったままだ。ゲームだとどんな損傷を受けてもステージ移動すれば元通りなのだが、現実には厳しい。

「じゃ、しばらくの間援護を頼む！」

リサさんはそう言ってワゴン車の後部ドアを開け、車内に設置された大型無線機のマイクとイヤホンを身につけた。周波数や出力を調整しているのか、いくつかボタンを弄っている。

しばらくして相手が出たようで、すぐにリサさんが話し始めた。これは――ロシア語か？

ロシア語なんてウラー！くらいしかわからない俺は、近寄ってくるゾンビを撃退するのに専念する。俺達の臭いを嗅ぎつけたのか、下からも続々とゾンビが駐車場に上がってきている。

3分程した後、リサさんがワゴン車から降りてきた。その顔は晴れやかで、良い返事がもらえたのだろう。

しかし、俺達を取り巻く現状は良くなかった。続々と集まってくるゾンビ達が俺達の周りを取り囲んでいる。

「で、どうだったんですか？」

「良い答えを貰った。一週間後に救助に来てくれるらしい」

「そうですね。で、どうやってここから出ます？」

俺がそう訊くと、リサさんはチェストリグのポーチからスタングレネードを取り出し、安全ピンを抜いた。

「耳と目塞げ！」

と怒鳴り、続いてスタングレネードを投擲する。

慌てて耳と目を塞いだ俺達だが、バン、という空気の震えは感じ取れた。しばらくして目を開けると、ゾンビが地面に倒れてのたうちまわっている。三半規管が麻痺して、平衡感覚を失って倒れたのだ。その隙に、俺達は元来た道を引き返す。出来るだけゾンビを踏みつぶさないようにして進み、再び俺達は館内へと戻った。

「で、救助が一週間後って、本当に来るんでしょうね？救助の大型ヘリの代わりに爆撃機が核爆弾を落としていくってのはゴメンよ」

4階から3階へのエスカレーターの手すりに頬杖をついた麻衣が言った。それ、どこのエイリアンVSプレデターの続編だよ？それを聞いたりサさんは、笑って、

「大丈夫だ。パイロットはわたしの同僚だが、一番信用できる男だ。それに奴には貸しもある。義理を重んじる男だから、救助すると言ったらそれをひっくり返しはしないだろう」

と答えた。

どうやらそのパイロットはロシア人らしい。名はニコライ・何とか。アルカディア製薬輸送部門（ただし非合法部門）に勤めていて、救助に来るMH-53Eペイブローウヘリの操縦士らしい。元ロシア軍所属だとか。

そのニコライさんとやらは、どうにか上層部の目を盗みだし、一週間後に救助に来てくれるそうだ。日本にも度々仕事で来た事があるので、日本語もそれなりに話せるようだ。

救助が来るのは良いニュースだ。しかしそれまで、俺達は生き延びなければならぬ。

そのためには食料が必要だ。リサさん、ゴリ、亜衣が、食料調達に向かう事になった。

俺と麻衣は、生存者の搜索を任された。救助に来るペイブロウの収容可能人数は多く、まだまだ余裕があるからだ。この一週間の内に、出来るだけ多くの生存者を救助しなければならない。

「・・・で、何でアタシがおまえみたいな変態と一緒になんだよ？」

「何だ麻衣、不満でもあるのか？」

「大有りだよっ！」

麻衣に怒鳴られた。酷い、俺は何もしていないのに。

変態だっていいじゃない。人間だもの。byみ〇を

と俺は、急にトイレに行きたくなった。ちょうどすぐそこにトイレがあったので、麻衣に外で待っていてもらい、俺はトイレへと向かう。

うゝ、トイレトイレ。

今、トイレを求めて全力疾走している俺は、高校に通うごく一般的な男の子。強いて違うところをあげるとすれば、ミリタリーに興味があるってところかな・・・。

名前は岩崎武。

そんなわけで、近くにあった2階のトイレにやって来たのだ。

ふと見ると、男子トイレの入り口が、ベンチやカートなどで塞がれていた。

「ウホッ！ いいバリケード・・・」

って何を考えているんだ俺は。これではまるでくそみ○テクニクじゃないか。

トイレの入り口にバリケードがあるという事は、中に誰かが立て籠もっているのかもしれない。早速生存者発見か？

「誰かいますかー？ 居たら返事をしてください！」

そう声言ったものの、トイレの中から返事は来ない。俺達みたいにダクトを使って逃げたのか？ それともトイレの中でゾンビになったとか。

俺はバリケードの出っ張りや隙間を足がかりにして、バリケードを上りはじめた。てっぺんまで来たので、一気にバリケードの向こうへと降りる。

と、突然俺の耳に唸り声やあえぎ声が聞こえた。ゾンビか？

油断なくカービンを構え、小便器や個室がある方向へと進んで行く。そして、そこで俺が目にしたものは・・・。

「腹ン中がパンパンだぜ」

裸で立っている、いい男と青年だった。

「ところで、俺の○○タマを見てくれ。こいつをどう思う？」

「すごく・・・大きいです・・・」

・・・何このハッテン場？

とりあえず、見なかった事にしよう。そう考えた俺は、足音を立てずに元来た道を引き返そうとした。が・・・。

「うほっ、いい少年・・・」

すぐに見つかってしまった。青年の方が俺を見て、そう呟くのが聞こえた。

「いいのかい、ホイホイ入ってきて。俺はゾンビだってかまわずに食っちゃう人間なんだぜ？」

「待て待て待て！俺は人間ですよ、ゾンビじゃないですよ！あとノンケだけどこまわずに食われたくないですよ！？」

「男は度胸！何でもためしてみろのさ！」

そう言って、俺に近付いて来るいい男。

とっさに後ずさりする。しかし、背後には壁しかない。

絶 体 絶 命 （俺の貞操が）

「ちよ、待って待ってやめ・・・アッ————！！！」

第42話 やらないか（後書き）

次回予告

第43話..

「カプコンのゲームに出てくるヘリの墜落率は異常。というか死亡フラグ」

御意見、御感想お待ちしております。

第43話 カプコンのゲームに出てくるヘリの墜落率は異常。というか死亡フラ

前回のあらすじ..

うほっ、いい男・・・。

第43話 カプコンのゲームに出てくるヘリの墜落率は異常。というか死亡フミ

「で、この方達は？」

俺の悲鳴を聞いてやってきた麻衣が、どうにか股間を隠している2人の男を指差して言う。どうにかケツの穴を死守した俺は、男達が服を着るのを待って答えた。

「そちらの青いツナギを着たい男は阿部^{あべ} 和高^{かずたか}さん。自動車修理工だそう。で、そっちが道下^{みちした} 真良^{まらき}樹さん。予備校生だって」

「阿部だ。よろしく」

「どうも・・・、道下です」

俺に続き、阿部さんと道下君が自己紹介する。麻衣は最初に会った時に阿部さん達が全裸だったためか、遠巻きに阿部さん達を眺めている。

阿部さんはホモらしいから、女の麻衣に「やらないか」と声をかけることはないだろう。道下君もどうやら男に興味があるらしいので、危険なのは麻衣よりも俺（の尻の穴）である。

阿部さんと道下君は、警備室が安全と聞くと二つ返事で俺達に同行する事を決めた。自動車修理工の阿部さんは外見にぴったりの大きなスパナ、道下君は辞書を武器代わりに持っている。辞書の角は金属板で補強され重量もかなりあるので、角で殴られたら頭蓋骨陥没を起こすかもしれない。

「そうだ。ところで君、訊きたい事があるんだが」

「なんですか？」

外に出るためトイレのバリケードを崩す直前、阿部さんに呼び止められた。

「警備室って、トイレとベンチはあるか？」

「・・・ベンチに座って声をかけた男の人と、トイレでハッテンするのは御遠慮願います」

ベンチやカートで出来たバリケードを崩すと、早速ゾンビ達が待ち構えていた。

「だらっしゃあああ！」

麻衣が奇声を上げて、ゾンビの群れに切り込んでいく。その後を俺達はついていく。銃を持つ俺は、一向にゾンビが近づかないよう全方位を警戒しなくてはならない。

「いいのかい、ホイホイ近づいてきて。俺はゾンビだってかまわずに食っちまう人間なんだぜ？」

阿部さんがそう言って、近寄ってきたゾンビの頭にスパナを振り下ろす。「アッー！」とゾンビが呻いて倒れたのは、気のせいだと思いたい。

というか阿部さん、あなたの最終兵器はその股間のエクスカリバーなんじゃないですか？

本館の2階にはいくつか店が並んでいる。食料調達に向かったリサさん、ゴリ、亜衣と事前に決めてある、大きな書店に俺達が入った。店内は広く、またゾンビも侵入してはいない。いくつも本棚が並び、文庫本やハードカバーの本が並べられている。

腕時計を見ると、そろそろ合流する時刻と決めた12時が近づきつつある。下手に動くと合流自国に間に合わなくなるので、俺達は一端ここで休憩することを決めた。

「ウホッ、いい男・・・」

道下君はそう言って、商品のグラビア誌（ゲイな男性向け。なぜこんな場所に？）をパラパラと捲っていた。阿部さんはスパナの調子確かめており、麻衣は店内をうろついていた。

せっかく書店に来たのだし、何か警備室の皆や遥にお土産として持って行こう。俺はそう考え、腰を上げた。

ライトノベルを数冊、コミック誌もリュックに詰めていると、唐突に書店の入り口のドアが開いた。

リサさん達だった。全員無事で、途中で救助したらしい老夫婦を連れている。彼らの背負ったリュックサックは、食料が詰め込まれているのか大きく膨らんでいた。

「おう武、無事みたいだな」

「よおゴリ、そっちも全員異常なしか？」

そう言って、俺とゴリはハイタッチをする。

「あのツナギを着たいいい男とひ弱そうな青年は？」

「自動車修理工の阿部さんと予備校生の道下君だ。トイレに避難してたから連れてきた」

「・・・お前、掘られたのか？」

「いや、ギリギリセーフだった。大丈夫だ、問題ない」

その後ゴリから話を聞いた。何でもゴリ達が連れてきたあの老夫婦は、ゾンビ溢れる世の中に絶望し、自殺しようとして屋上にいたのだという。そこをゴリ達が説得し、警備室に同行するのを決めたそうだ。

他にも生存者は沢山いるだろう。昨日ヤクザを倒した際に奪った銃器で武装している避難民は何人も見かけたし、上手く隠ればゾンビから逃れることも可能だ。ただし今回は阿部さん、道下君、そして老夫婦を救助しただけで、一端警備室へと帰る予定だ。

10分後、十分な休息をとった俺達は、再び行動を始めた。警備室まで救助者を護衛していかなければならない。

阿部さんは近接戦が得意そうで戦力になるが、道下君は自分の身を守るのが精一杯。老夫婦に至っては、素早い動きをするのは無理で、戦う事など論外だ。

なので老夫婦と道下君を中心に、前をゴリと麻衣、側面を俺とリサさん、そして後ろを阿部さんと亜衣が守る。

「よし、行こうか」

リサさんがそう言い、書店のドアを開けた。ゴリと麻衣が外に飛び出て、付近のゾンビを一掃する。近くの脅威が去ったのを確認した後、前進する。

老夫婦は歩く速度も遅かった。疲れている云々の問題ではなく、年

のせいかもしれない。

仕方ないので、俺はゴリと阿部さんが老夫婦を背負ってはどうかと提案した。両手が塞がるのでゴリ達は戦えなくなるが、代わりに移動速度が向上する。一々ゾンビと戦うよりも、走って逃げた方が体力も武器も温存できる。

力持ちのゴリと阿部さんは、老夫婦を軽々と背負った。全力でダッシュすることは出来ないだろうが、ずっと移動速度が速くなる。

残った俺とリサさんがゴリ達の前に立ち、道を切り開く。亜衣と道下君は、後方の警戒をする。

麻衣が刀でゾンビの首を切断し、俺とリサさんがカービンを連射して数体をまとめて倒す。老夫婦を背負ったゴリと阿部さんが続き、泣きそうな顔をした道下君といつもの冷静な表情の麻衣が、後ろを警戒しつつ走る。

幸いな事に、今いる場所と空調室に繋がるダクトのある女子トイレの距離は近い。数分もしない内に、俺達は女子トイレにたどり着く事が出来た。

「よし、持ち上げるぞ」

洗面台に立ったゴリがおばあさんを持ち上げ、ダクトの中の阿部さんがそれを引き上げる。すでに亜衣と道下君とおじいさんはダクトの中に入り、今頃は空調室向けてダクト内を移動しているだろう。ダクトの中は暗いが所々にケミカルライトを置いてあるので、簡単に通路がわかるはずだ。

おばあさんを持ち上げた後、ゴリもダクトの淵に手を掛けると、懸垂の要領で一気に身体を持ち上げた。そしてそのままダクト内に這

い上がる。続いてリサさんもダクトに上がり、麻衣もそれに続くとする。

「おい、武」

「なんだね麻衣？」

「ぜったい！上見るなよ！」

一番最後にダクトに上がることになっている俺は、「なんで？」と思って洗面台の方を振り返った。するとすぐさま、麻衣の蹴りが飛んできた。

倒れた俺が顔を上げると、顔を真っ赤にした麻衣がスカートを抑えていた。ああなるほど、俺が上を見たら麻衣のスカートの中が見えてしまうからか。

「ああ大丈夫だよ問題ないよ。俺は紳士だから女子のスカートの中を覗こうとか邪な考えは持ってないよ」

麻衣は「信用ならん」という顔をしたまま、ダクトへと上がっていた。ちらちらとスカートがめくれ、下着が見えそうに・・・いかにいかん。こういうときは素数を数えて落ち着くんだ。

2・3・5・7・11・13・・・。

103まで数えたところで、ようやく俺の番が来た。洗面台の上になり、ダクトの淵に手をかけ、一気に身体を持ち上げる。数秒間かかってようやく、ダクト内に上がる事が出来た。

麻衣は俺を待っていてくれたようで、俺がダクトに上がると「行くぞ」といい、俺の先を歩き始めた。

「それにしても、救助のヘリ、ちゃんと来るのか？」

「そんな事言われても困るんだけど。ま、これがカプコンのゲーム

だったら、ヘリイコール死亡フラグだけどね」

「ああ、あるある」

ゲーマーの麻衣には、俺の言わんとしていることがわかったようだ。バイオハザードを例にしてみよう。

STAR Sブラボーチームのヘリ・・・不時着。ブラボーチームの隊員はゾンビやクリーチャーに襲われる羽目になる。

ラクーン市警のヘリ・・・屋上で警官を救助しようとした際、ゾンビと戦っていたその警官が撃った流れ弾がパイロットに命中。墜落。UBCSのヘリ・・・ジルを救助しようとしたらネメシス（クリーチャー）にロケットランチャーで撃墜される。

合衆国のヘリ・・・ガナードと戦うレオンを援護するが、ロケットランチャーで撃墜される。パイロットは直前に死亡フラグを建設していた。回収乙。

BSAのヘリ・・・クリスを上空から援護していたら、クリーチャーの攻撃にあい墜落。別のストーリーでも対空ミサイルで撃墜。

・・・バイオハザードって毎回毎回ヘリが墜落してるな。

ついでにデッドライジングというゲームでも、終盤に主人公を救助に来たヘリにゾンビが乗っていて、それに気づかなかったパイロットがゾンビに殺されてヘリが墜落する。カプコン、ヘリに恨みでもあるのか。

「そういや、最近のコール・オブ・デューティシリーズもヘリを墜落させたり、プレイヤーキャラクターを殺すのが好きだよな」

「コール・オブ・・・なんだって？」

どうやら麻衣はコール・オブ・デューティシリーズ（以下COD）

を知らないらしい。よし、解説してやろう。

プレイヤーが乗るヘリが墜落する回数は、こんなにもある。

COD4モダンウォーフェア・・・一回目は対空ミサイルで撃墜。
二回目は核爆発で墜落（この際僚機も大量に墜落）。この際プレイヤーキャラクターも死亡。

COD・・・モダンウォーフェア2・・・奇跡的に一回しか墜落しない。
対空ミサイルで撃墜（ただし作中で敵味方問わず大量に撃墜されている。最後の方は電磁パルス攻撃で全ての航空機が墜落）。しかしこの作品、プレイヤーキャラクターが2人死ぬ。

COD・・・ブラックオプス・・・一回目は主人公がラペリング降下中に対空砲で撃墜。2回目はヘリが墜落した状態でステージが始まり、川に水没。三回目は主人公が操縦している時に、対空砲によって撃墜。ベトナム戦争を描いた作品なので、作中で墜落しまくっている。

いやはや、CODシリーズも恐るべし。俺としては、このようにヘリが墜落しないのを願うばかりだ。

そんな話をしている内に、俺達は空調室に帰ってきていた。

第43話 カプコンのゲームに出てくるヘリの墜落率は異常。というか死亡フラ

次回予告..

第44話

「ビューティフォー…」

第44話 ビューティフォー…（前書き）

前回のあらすじ…

武..「俺のSG556が火を噴くぜ！」

阿部さん..「俺の股間のマグナムが火を噴くぜ！」

男子一同..「アッー！！」

第44話 ビューティフォー…

救助した老夫婦は、とりあえず倉庫に案内しておいた。俺は警備室にSG556カービンを置いていき、ひとまずトイレに向かう。阿部さんとイロイロあったので、未だに用が足せていない。空調室の隣にある警備室を出て、トイレに行こうとドアを開けたその時だった。

「あ……」

廊下の脇にある倉庫から出てきた遥と、かち合わせてしまった。突然の事だったのでお互いに心の準備が出来ていないので、俺と遥は気まずい雰囲気になってしまい、無言になる。無言の時間が5秒も経った頃、俺は慌てて口を開いた。

「あ、そうだそうだ。これを持って来たんだ」

俺はそう言って背負ったりユックを下ろした。そして中から書店から持ってきたライトノベル数冊を取り出す。

「暇つぶしになるかなって思って、持って来たんだが」

「あ、ありがとう……」

遥はそう言っておずおずとライトノベルを受け取った。そして、再び無言の時間が流れる。

やはり昨日あんな事があったから、お互いに何を話していいのかわからないのだ。俺は遥を傷つけないから、下手な事は言えない。

下手に慰めるのも逆効果だろう。

無言の時間が30秒経過し、とうとう耐えきれなくなった俺は、

「じゃ、じゃあな！俺トイレに行くから！」

そう言って、トイレの方向に歩きだす。遥は何かを言おうとしたようだったが、結局無言のままだった。

トイレで用を足し、手を洗って廊下に出てくると……。

「やらないか」

トイレの前にあるベンチには、青いツナギを着たウホッ！いい男が座っていた。阿部さんである。

阿部さんはツナギのジッパーを下ろし、その逞しい身体を俺に見せつけてくる。ウホッ！いい男……。

しかし俺はそんな誘いにはホイホイとついていかない。俺のスルースキルは日々上達しているのだ。

阿部さんの（俺の知らない世界への）誘いをスルーし、屋上へ向かうとした俺だが、再び阿部さんが声をかけてくる。

「やらないか」

「いや、遠慮しておきます」

「男は度胸！何でも試してみるのさ！」

「いや、俺ノンケなんで」

「俺はノンケでもかまわずにくっちゃもう人間なんだぜ」

「それは止めて下さい!!」

やばい、このままでは阿部さんと一緒にトイレの個室に行く羽目になってしまう……。

ちょうどその時、倉庫から緒方が出てきた。どうやら俺と同じくトイレに来たようだ。

俺は緒方を手招きし、ノコノコ近付いてきた彼を阿部さんに献上する。

「ああ、彼ホモなんで。どうぞ阿部さん」

「ちよっ、武さん! アンタ何を言って……」

緒方が最後まで言い切る前に、阿部さんが彼の腕を掴んだ。阿部さんは満面の笑みを浮かべて、緒方を男子トイレへと引き摺って行く。

「えっ、ちよっ! 武さーくん! たーすーけーてー!!」

阿部さんの腕を振りほどいて逃げようとした緒方だったが、遅い阿部さんのホールドを振り払うことは出来ないようだ。両手を合わせて緒方を拝み、俺は逃げ出した。

絶望の表情に染まった緒方の顔がトイレの中に消えた後、

「うわっ! 何を……ちよっと待った俺はそういうことは……
・アッー!」

悲鳴が廊下にこだました。

緒方、君の犠牲は忘れない……。10秒くらいの間は。

緒方を生贄にして屋上に出た俺は、そこでリサさんと会った。リサさんはM14 EBRライフルを構えて屋上の淵に寝そべり、そこからゾンビを狙っていた。

リサさんが発砲する度に、駐車場を埋め尽くしているゾンビが倒れる。どうやらライフルの調子確かめているらしい。

「どうかしたのか？」

リサさんはM14 EBRのスコップを覗いたまま、俺に声をかけてきた。さすが凄腕の傭兵、俺の存在は見なくても察知できるということか。

M14 EBRを持って立ち上がったリサさんは、俺の方を向いて手招きした。何かと思ってリサさんの傍に行くと、突然M14を渡された。どうやら狙撃の特訓をしてくれるそうだ。

7・62?弾の詰まった弾倉を数個地面に置くと、俺はその内の一つを手にし、M14に装着した。ボルトを引いて薬室に初弾を装填し、屋上にうつ伏せになる。

装着された2脚を立て、転落防止用の柵の隙間から銃身を突き出す。手始めに、まずは動いていないゾンビを狙う事にした。

機関部の上方のレールに取り付けられたスコップを覗きこむ。十字線の中央を、駐車場の片隅にしゃがみ込み、人間の腕らしきものにかぶりついているゾンビの頭に合わせた。

引き金を引く。SG556よりも大きな銃声と銃火が発生し、俺は一瞬スコップから目を離してしまった。

慌ててもう一度スコップを覗くと、さっき狙ったゾンビは相変わらず腕をおいしそうに食っている。どうやら外れてしまったようだ。

その証拠に、しゃがみ込んだゾンビのすぐそばのアスファルトには、弾痕が穿たれていた。

「あー、外れたね。もう少し姿勢をしっかりしないと」

双眼鏡を覗いて俺の傍らに立っていたリサさんが呟く。そして双眼鏡をしまうと、いきなり俺に覆いかぶさってきた。

「ちょ、リサさん。何を・・・」

「はい、腕をもう少し伸ばす。頬をしっかりチークピースに当てる」

そう言って、身体を密着させて俺の姿勢を正していく。ちょ、背中に何か柔らかい物が二つ当たってるんですけど・・・。

だがリサさんはそんな事に構わず、俺の腕を取ってM14EBRを構えさせた。

「息を吐いて、呼吸を止めた時に撃って。銃声に驚かないように」

リサさんはそう言って俺から離れた。せっかく女性と密着していたのに、ああ残念だ。

そんな事を考えつつ、再び動いていないゾンビを狙う。狙いはさつきと同じ奴だ。

息を大きく吸い、吐く。もう一度吸い、半分ほど息を吐いたところで呼吸を止めた。

風は・・・止んでいる。狙撃するには絶好のチャンスだ。

十字線の中央をゾンビに合わせ、撃った。

今度は命中した。人間の腕にかぶりついていたゾンビの頭が半分吹っ飛び、ゾンビの身体が倒れる。

ビューティフォー…。

俺の脳内でそんな声が聞こえた。それを言ったのは、恐らくモリゾーとか緑のムックと呼ばれるマクミラン先生だ。

「ナイスショット！じゃ、次は動く標的を狙ってみようか」

双眼鏡を覗いていたりサさんが、俺の戦果を確認して言った。俺も銃身を動かし、駐車場をさまようゾンビの一体の頭部に照準を合わせる。

女のゾンビだった。両手を前に突き出して、のろのろと駐車場をさまよっている。

移動している目標なので、ただ頭部に狙いを定めればいいというものではない。目標の移動速度と向かっている方向を勘案し、狙いを微調整しなければならない。

女ゾンビの進行方向ちよい前を狙い、引き金を引く。銃声と共に、スコープの中の女ゾンビの頭が砕け、脳味噌やら頭がい骨といった頭の中身が駐車場にぶちまけられる。

屋上に伏せたまま、素早く銃身を動かして目標する。もう一体のゾンビをスコープの中心に収め、撃つ。命中。

ビューティフォー…。

「上手いな。このままいけば、長距離の狙撃も出来るかもな」

リサさんにそう言われた。これで今日から俺も、モリゾーや緑のムックの仲間入りだ！！

M14 EBRには連発機能も付いてはいるが、出来るだけ使わないようリサさんに言われた。これはこの銃が7.62×51NATOという強力な弾丸を使っていて、さらに連発するには向かない構

造をしているからでもある。

この銃は曲銃床という構造をしていて、銃床が銃身より下に位置する構造となっている。そのせいで発砲すると、反動が下に来て銃身が跳ね上がってしまうのだ。

この状態で連発すれば、銃身が撃つ度に上を向いて照準も糞もなくなってしまう。今アメリカ軍が採用しているM14シリーズも、フルオートで発砲出来る奴は少ない。

二脚を折り畳み、ストックを縮めて元に戻す。リサさんに返却しようとしたら、俺が警備室に戻しておくように言われた。どうやらリサさんは用事があるようだ。

「どこ行くんです？」

「ちよつとワゴン車に行つて無線で連絡を取らなきゃならないんだ。本社と」

そうだった。リサさんは元々アルカディア製薬の研究所に用があつて豊島市に來たんだつた。本当の目的はワクチンと治療薬を確保することであつて、俺達を助ける事ではないのだ。

おそらくワゴン車の無線機を使って、アルカディア製薬の上層部と連絡を取り、今後の行動方針について協議するのだろう。

「じゃあ一緒に行きますよ、危ないですし」

「大丈夫だつて。わたしを見くびらないでほしい。何かあつても無線機で連絡を呼ぶから」

そう言つて、リサさんは装着してあるヘッドセットを叩いた。一応俺達も特殊部隊から回収した無線機を持っているので、相互の通信が可能だ。

リサさんはSG556カービンを肩にかけると「じゃあ」と言つて

警備室に通じる階段を下りて行った。リサさんを見送り、俺はもう少し狙撃の練習を続けた。

10分間の練習で消費した弾薬は50発。何体か胴体に当ててしまったので、一撃必殺とまではいかなかった。ゾンビは頭を破壊しないと動きが止まらないからだ。

これがFPSゲームか何かなら、俺はとっくにレベルアップしている頃だろう。兵科はもちろんスナイパーだ。

そんな事を考えつつ、次のゾンビを狙おうとしたその時だった。

「おい武、大変だー！」

その声で振り返ると、ゴリが走って階段を上ってくるところだった。一体何が起こったんだ？

第44話 ビューティフォー…（後書き）

次回予告

第45話..

「ステンバーイ…ステンバーイ……」

第45話 ステンバーイ・・・ステンバーイ（前書き）

前回のあらすじ..

モリゾー

チエルノブイリ近辺で目撃される謎の生物。「緑のムック」とも呼ばれる。

モリゾーに狙われた人間は、その腕を食いちぎられてしまうという噂がある。過去にザカエフさんという商人がその被害にあった模様。

・・・そういえば、今日で連載開始から一周年です。今まで応援してくれた方々、ありがとうございます。これからも頑張っていくので、生暖かい目で見守っていただければ幸いです。

第45話 ステンバーイ・・・ステンバーイ

ゴリと共にモニター室に向かう。階段を下りる途中に、何が起きているのかを訊いてみた。

「男の人と小さな女の子が、ゾンビの群れに取り囲まれてる」
「何っ！？ 幼女だど！？」

無意識の内に、小さな女の子↓幼女と変換されてしまう俺の思考だが、俺は決してロリコンじゃないよ。だからアグネスが来ても平気だよ。

モニター室に入ると、室内の皆が1つのモニターを睨みつけていた。

「どれ？」

「左から3列目、上から2段目のヤツ」

俺がゴリに言われたモニターを見ると、確かにそこには人影が2つ映っていた。いや、ゾンビのも含めれば無数の人影が映し出されている。

アミューズメントエリアの防犯カメラの映像らしい。中央に大きなテントが一つあり、男性と幼女はそのテントの上に立っていた。どうやらイベントなどでよく使われる、内部にガスや空気を送り込んで膨らませるビニール製のテントのようだ。

そしてテントの屋根に立つ彼らを、無数のゾンビが取り囲んでいた。腕を男性と幼女向けて掲げ、ゾンビの身体が当たる度にテントが大きく揺れている。彼らはテントの屋根を吊るしているロープに必死に捕まっている。

「やばいのう・・・」

田中氏が呟いた。確かにその通りだ。このまま放置していれば、何かの弾みでテントに穴が開いたら、あつという間にテントがしぼんで男性と少女はゾンビの群れの真ただ中に放り出される事になる。それ以前に、疲労が限界に達してロープを掴んでいる腕を離してしまっただけでも、彼らは落下してしまう。

早急な対応が必要だ。

「よし、助けに行こう」

「武・・・。アンタまさか、少女だからさっさと助けようって感じやないわよね・・・？」

奈津美が変質者を見る目で俺を見てくる。よく見ると、室内の女性の目が全て奈津美と同じ目をしていた。蔑まれるような視線を浴びると、何か興奮してくるな。

「え？ 少女だから助けるのかって？ 気のせいだよ。俺はロリコンじゃないよ、紳士だよ」

「その発言が棒読みな時点で、武はロリコンだって言ってるようなもんよ」

「いやいやいや。仮に俺がロリコンだったら、この小説規制されちゃうよ。アグネスちゃんとか石原都知事とか来ちゃうよ」

皆は相変わらず変態を見る目をしていたが、今は少女達を助けるのが最優先だと判断したようだ。それぞれモニタールーム内に積み上げてる武器を点検し、装備していく。

本当ならリサさんも同行してほしいところだが、生憎彼女は今いない。彼女がいるのは本館の屋上駐車場で、そこはアミューズメント

館からかなり離れた場所にある。

それに、リサさんにはリサさんの仕事がある。俺達がそれを邪魔してはいけない。

今回はいつも使っている（といってもまだ使い始めて1日経ってないけど）SG556ではなく、さっきまで練習していたM14EBRを持って行く。下手に乱射して流れ弾がテントに当たってしまったら、テントがしぼんで少女と男性を死なせてしまうからだ。俺は今回は前面に出ず、後方からの狙撃支援を行う。テント直近のゾンビを撃つのは俺の腕前では不安なので、直接救助に向かう麻衣達の援護をする。

とその時、大きな音を立てて緒方がモニタールームに飛び込んできた。

「なにになになんですか！？生存者の救助に行くんですか！？」

「ああ・・・そうだが。それよりお前、阿部さんに掘られてなかったっけ？」

「何とか服を脱がされたところで脱出できたんですけど・・・。そんなことより俺も連れてってください！！」

なぜそんなにハイテンションなのだろう。

そう訊きかけた俺は、緒方の視線が部屋の片隅に積み重ねられた銃器に向いているのに気付いた。

「お前、もしかして銃を撃ちたいだけなんじゃね？」

「イヤーハハハソナコトハナイデスヨ」

「何故カタカナ。そして棒読み？」

どうやら図星らしい。

少しは緒方に銃の使い方を教えてある。だからといってホイホイ貸すわけにはいかない。しかし戦力が欲しい。

どうするかと思った俺の目に、ウィンチェスターライフルが飛び込んできた。俺が今まで使ってた銃だが、特殊部隊の装備を回収してから放置されてたものだ。これなら俺の持つM14と弾薬が共通だし、連発も出来ないで持たせておく分には問題ないだろう。

ついでにヤクザから強奪したトカレフを拾い、緒方に押し付ける。俺達が持つてるものと同様のものを持たせてくれると思ってたらしい緒方は、古臭い銃火器を与えられて不満そうな顔をしていた。

「えー、これですか？」

「なにか問題でもあるのかね？文句があるならバットだけでももらおう」

「はいはいわかりましたよ・・・」

そういうつつ、緒方は早速銃を弄繰り回している。「暴発させるなよ」と念を押した後、ついでに俺は金属バットを革のケースに入れて肩に掛けた。

出来るだけ弾薬を消費しないように心がけなくてはならない。そのためにはゾンビが少数の場合、出来るだけ接近戦で片づける必要がある。しかし銃火器で殴るのは得策とは言えないので、ホームセクターから持ち出したバットを一緒に携行する。

それぞれが武器を装備したのち、空調室に向かう。ダクトの点検口は開きっ放しになっており、そこから俺達はアミューズメント館へと向かった。

アミューズメント館に向かうダクトは、やはり女子トイレに繋がっていた。ここを設計した人は、ヘンタイだったのだろうか？アミューズメント館の女子トイレ付近にはゾンビは居なかった。おそらく殆どのゾンビは、幼女達に引き付けられているのだろう。

「じゃ、事前の打ち合わせどおりに」

俺がそう言うと、皆は頷き、3手に別れて行動を始めた。ちなみに俺と一緒にいるのは緒方だ。

美雪、奈津美、麻衣はゾンビに取り囲まれている幼女と男性を救助に向かう。亜衣がそれを少し離れた場所で弓で支援し、ゴリがその護衛。そしてさらに後方から、俺が狙撃支援を行い緒方はその護衛。こういう構成になったのは、今回はスピードが重要だからだ。男性と幼女の疲労を考えるとゾンビを全て倒す暇はなく、素早く動ける女子3人をさっさと突入させる必要がある。ゴリは接近戦に優れているものの、俊敏とはいえない。女子3人が行動しやすいよう、俺と亜衣は障害となるゾンビの排除を行う。

M14を背中に背負い、金属バットを構えながら俺と緒方はアミューズメント館を進んでいく。途中ゾンビが数体襲い掛かってきたが、相手にする暇はないので回避して狙撃地点に向かう。

階段を上り、2階の渡り廊下に出た。これは階の端と端にある廊下をつないでいる場所で、ここから幼女と男性のいるテントが見えるほど見晴らしがいい。ここを狙撃地点とする。

渡り廊下の上には何体かゾンビがさまよっている。こればかりは倒すしかないので、俺と緒方はそれぞれ金属バットをゾンビの頭に振り下ろした。

「つか俺達、ただの不良にしか見えなくなっていないか？」

ゾンビを排除し終わったので、俺はM14EBRの2脚を立て、床に伏せた。

「いいか、ゾンビが近づいてきたら俺に言うんだぞ。あと銃は出来るだけ使うな」

「わかってますよ、そのくらい」

そう言って緒方はM70ライフルを手に、周囲を警戒しはじめた。緒方は見張るだけでいい。もし近づいてきたら、俺が排除する。

ライフルのスコープを覗き込み、テントを確認する。防犯カメラのモニターで確認した時よりもゾンビの数は増えており、無数の腕が幼女と男性向けて突き出されている。

腕が疲れてしまったのか、幼女は男性に抱きかかえられるようにしてテントの上に立っていた。親子連れかな？ 仮に親子連れじゃなかったら、あの男性は路理魂^{ロリコン}認定だ。

^{たましいごとわりみち}
魂の理の路。略してロリコンだ。自分でも何を言ってるのかわからないが、とりあえずいい事を言った気が・・・する。

「・・・にしてもあのゾンビの数、戦艦に乗ってる元特殊部隊の戦うコックさんとか、未来からやって来た殺人口ボットか元コマンドー部隊の筋肉モリモリマツチョマンの大佐か、弓矢でヘリコプターも撃墜するベトナム帰還兵でもない限り突破するのはキツイだろうな」

『「沈黙の戦艦」のステイブ・セガールと「ターミネーター」と「コマンドー」のアーノルド・シュワルツェネッガーと「ランボー」のシルベスター・スタローンかよ』

無線を通して、麻衣が呆れたように言ってきた。せっかく著作権対策をして作品名と役者名を出さなかったのに・・・。

「麻衣、お前って奴は・・・。まあいい、配置に着いたか？」

『ああ。亜衣、そっちはどうだ？』

『こっちも準備完了よ。いつでもいける』

イヤホンから次々準備完了の声が流れてくる。俺もM14EBRの安全装置を解除し、引き金に指を掛ける。

待ってる少女とおっさん。今助けてやるよ。

「ステンバーイ・・・ステンバーイ・・・」

『それ、どこのマクミランだよ！』

ゴリがツツコミを入れてきたが、構わず俺は続けた。

「ゴー！！」

同時に引き金を引き、スコープの中央に捉えていたゾンビの頭が弾け飛ぶ。亜衣たちがそれを合図に走り出し、救助作戦が始まった。

第45話 ステンバーイ・・・ステンバーイ（後書き）

次回予告

第46話..

「胸が熱くなるな・・・」

御意見、御感想お待ちしております。

第46話 胸が熱くなるな・・・(前書き)

前回のあらすじ..

ステンバーイ…ステンバーイ…

…ゴー!!

第46話 胸が熱くなるな・・・

俺の銃声で戦闘は始まった。まずは麻衣達を通りやすいように、彼女達の進行ルート上をうろついているゾンビを狙撃する。テンポよく、なおかつ正確にだ。

スコープの中で次々とゾンビの頭が弾けて行く。これが人間だったらこんなに簡単にヘッドショットを決められない。相手がのろくてあまり動かず、なおかつ距離もそんなに離れていないからこそ出来る芸当だ。

途中から亜衣も弓をつかい、麻衣達を援護していく。ゾンビを倒して体力を浪費することなく、麻衣達は幼女と男性がいるテントまで到着した。

これからは麻衣達に任せるしかない。下手に撃って流れ弾がテントに当たったら、テントがしぼんで幼女達がゾンビの群れの真ただ中に放り込まれてしまう。

なので俺は、テントから少し離れた場所にいるゾンビを狙撃している。麻衣達の方を見ると、麻衣が刀でスパスパゾンビの首をぶった切り、美雪はボールで殴りつけ、奈津美は突き出されるゾンビの腕を避けつつ的確にゾンビの頭を潰していく。

テントを取り囲むゾンビの数は段々と減っていき、ゾンビの海に穴が開く。その瞬間を見逃さず、屋上に立っていた幼女を抱えた男性がそろそろと降りてくる。スコープで覗いてみると、それが武器なのか男性はネイルハンマーを持っていた。麻衣が男性を援護し、幼女と男性がこちらに走ってくる。

『こちら美雪、男性と少女を救出！これからそっちに戻るわ！』

「りょーかい。俺も狙撃を再開する」

『こちら亜衣。わたしもゴリくんを連れて戻る』

無線機を通じて皆が報告してくる。

ようやく狙撃支援を再開できるようになったので、俺は幼女（と男性）を守るべくM14EBRを撃つ。幼女を抱える男性に手を伸ばそうとしたゾンビを狙撃し、弾倉が空になったので弾倉のすぐ後ろにあるレバーを押し、空弾倉を排出する。弾倉も無駄に出来ないの
でチェストリグの大きめなポーチに空の弾倉を放り込み、床に置いておいた装填済み弾倉をたたき込み、レバーを引く。

再び狙撃をしようとしたその時、緒方の情けない悲鳴が後ろから聞こえた。

「た、武さん！！後ろにゾンビが！」

振り返ると、階段を上ってゾンビ達が俺と緒方向けて歩いて来ていた。5、6体といったところなので、俺はM14EBRを床に置き、代わりにバットを掴んで立ち上がった。

ライフルを掴んで震えている緒方にバットで応戦するよう伝え、ゾンビ達向けて走る。走ってきた勢いをプラスして金属バットを振り下ろし、ゾンビの頭が大きく歪む。

けっこうすぐ潰れるんだね。仕方ないね（森の妖精風に）。

緒方と手分けして6体のゾンビの頭を潰し、狙撃をしようと戻ろうとしたその時、

うめき声と共に、階下からゾンビの群れがやってきた。

その数に、緒方が情けない声をあげる。これだけの数をバットで倒しきる自信はないので、俺はホルスターからU S P拳銃を抜いた。地面にへたり込む緒方に怒鳴る。

そう言いつつ、U S Pを撃つ。ゾンビが壁のように迫ってきているので、どこを撃ってもゾンビに当たる。

M 1 4 E B Rは置いてきてしまった。後で拾ってから後退しなければ・・・。

緒方も勇気を奮い起し、M70ライフルを撃つ。さっきまで銃を持
ててテンションが上がっていた姿はどこへ行ったのやら、情けない
顔をしつつも俺が教えた通りの姿勢をとり、撃つ。

USPを連射し、弾倉が空になったので再装填。俺が無防備になっ
ている間を、緒方がM70ライフルを撃って援護する。

奈津美から通信が入る。

『待ってて、今から救助に……』

「いやいい。俺達は非常手段を使って下に降りるから、先に女子トイレに行ってくれ！」

俺はそう言って通信を切る。無我夢中でM70を撃つ緒方を呼び、

先程まで狙撃をしていた渡り廊下に戻る。そこにあったM14EBRを拾い、うろたえる緒方を軽く叩いて落ち着かせる。

「た、武さんこれからどうするんでくあwse d f r t g yふじっこ l p ; @ ..」「!!」

「落ちつけ。ちゃんと「ふじこ」って言えてないぞ」

「だってゾンビが来てるんですよ!?! しかも廊下の両端から!! 逃げ場はないですよ!!」

緒方の言うとおりに、渡り廊下の左右からゾンビが来ていた。階段を上り、1階のゾンビが次々と俺達めがけてやってくる。2階には逃げる場所はない。

・・・「2階には」、な。

「逃げ場はあるじゃないか」

「どこにですか!?!」

無言で俺は下を指差す。その意図を察したのか、緒方が無意識に俺から一歩後ずさりする。

中学校で俺に窓から突き落とされたトラウマが、未だに強く残っているらしい。

「待って待って待って下さい!まさか、飛び降りろとは言いませんよね?」

「大正解!後で飴玉くれてやる。だからさっさと降りろ」

「いやですよおおおおお!!」

「大丈夫だ、問題ない」

「問題おありですよ!」

「いや大丈夫だって、下にちょうどソファがあるだろ?そこに着地すれば怪我しなくて済む。それにゾンビは俺達に俺達にひきつけ

られてるから、1階には少ないし」

「そういう問題じゃ・・・」

ウダウダ言う緒方にイラッときた俺は、問答無用で緒方を放り出した。悲鳴と共に緒方が2階から消え、続いてボスッと何かが落下する音がする。

1階を見てみると、緒方は1階に置いてあるソファーに上手く落下していた。大きな怪我はなさそうだ。

周囲を見回すと、渡り廊下にいるゾンビの数が増えている。俺の8メートル前まで押し寄せて来ている。

救いはないんですか!?!と普段の俺なら叫んでいただろう。だが今の俺は、昔の俺とは違って冷静なのさ!

M14EMRのセレクターをフルに合わせ、ゾンビに向けて連射した。強力な7.62?弾のせいで銃が暴れ回り、どうにか跳ね上がる銃身を抑えつける。

あっという間に20発の弾倉は空になった。だがそのおかげで、迫って来ていたゾンビの群れが大きく数を減らす。

弾倉が空になったが、最早再装填している暇はない。俺は空のM14EBRを肩に担ぐと、チェストリグからM67手榴弾を取り出した。

廊下の手すりの上に立ち、追いつがってくるゾンビの群れの中に手榴弾を放り込む。そして・・・。

「アーイ、キャン、フラーイー!!!」

そう叫び、俺は柵を蹴った。1階に置かれたソファーに着地する直

前、渡り廊下のゾンビの群れが手榴弾で吹き飛ばされた。

傍目から見れば、挨拶すると背後で派手な爆発が起きる、よくある戦隊物を思い浮かべる人が多くいるにちがいない。

無理矢理脱出した俺と緒方は、警備室に通じるダクトがある女子トイレに向かった。1階のゾンビは俺達にひきつけられていたせいか、殆ど姿が見えなかった。

女子トイレでは既に、救助に向かっていた美雪達が待っていた。それに救助した少女と男性も。

ネイルハンマーを持っていた男性の名前は宮田。医者をやっているらしい。昨日のヤクザの暴動が起きた際に少女と一緒に逃げ、続いてゾンビが襲ってきて逃げ場がなく、テントの上にいたそうだ。

少女の方は名前を覚えてくれなかった。俺が変態だからだろうか。

宮田氏と少女には血のつながりは無いらしい。たまたま避難する途中で一緒になっただけ、というのが真相だ。
このロリコンめ。

「じゃ、警備室に行きましょう。君、今から安全な所に連れてってあげるからね」

「連れてってあげる」だけだとただのロリコンな誘拐犯にしか聞こえないが、俺は紳士だから少女に手を出したりはしない。

美雪が少女を持ち上げ、ダクトの中の奈津美に渡そうとした時、少女が俺の方を向いて言った。

「ありがとう、おにいちゃん」

・・・胸が熱くなるな・・・！！

ロリパワーで精神力を回復した俺は、ダクトの中を通って警備室に戻った。腕時計を見ると既に午後6時を過ぎており、今日はこれ以上動かない事にした。

ゴリと亜衣が給湯室に向かい、夕食を作る。給湯室にはガスコンロと水道があるので、簡単な料理くらいなら作れる。

俺は空調室の床に倒れ込み、目を瞑った。

次に目が覚めたのは、午後8時だった。どうやらダクトから出て寝転がった際、そのまま眠ってしまったらしい。

警備室にライフルを戻しに行くと、何やらいい香りが漂ってきている。その臭いにつられていくと、給湯室でゴリ達がラーメンを作っているのが見えた。

ビニール袋に収まった生麺を使ったラーメンだ。チャーシューやメンマ、野菜も豊富にトッピングされている。

「おお、うまそー！」

「何だ武、ようやく起きたのか。もう皆ラーメン食ったぞ」

さすがに十数人分のラーメンを同時に作る事は出来ないので、出来あがり次第皆で食べていたらしい。今作っているのは今までグース

カ眠っていた俺と、ラーメンを作っていたゴリと亜衣の分らしい。
発砲スチロールの椀に入ったラーメンを持ち、給湯室前にあるベン
チに俺とゴリ、亜衣は腰かける。「いただきます」の掛け声と共に、
楽しい夕食が始まった。

びゃあ、あ、あうまひい、いい、

それが正直な感想だった。

貧弱な施設でよくぞこんな高クオリティのラーメンが作れたもんだ。
本格的な調理場で作ったらどれだけのモノが出来るのだろうか。

「おまえら、店が開けるレベルの腕前だぞ、これは」

「ありがとう武、でもこれ作ったの、殆どゴリくんなのよ」

「マジか！？ゴリおまえすげえな！」

「わっはっは、もっと褒めろ！」

箸が進み、あっという間にラーメンの入っていた椀は空になった。
スープも一滴残さず飲み干し、空の椀を給湯室に戻し（洗って再利
用するため）俺達は別れた。

今日はもうやる事もないし、トイレにでも行って寝るか。そう考え
てトイレに向かったが、男子トイレの中から男のうめき声と嬌声が
聞こえてきたので止めた。どうせ阿部さんと道下くんがハッテンし
ているに違いない。

トイレに行くのを諦め、大人しく寝ようと廊下のソファに腰掛け
る。固い床で寝るよりは寝心地はいいだろう。最近色々頑張っ
てるので、これは自分への御褒美だよ。

などと考えていると、女性が避難している倉庫から遙が出てきた。

「おにいちゃん、ちょっと時間ある・・・？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

そう答えると、遥はおずおずと俺に近寄り、そしてソファーに腰掛けた。

何だ、何がしたいんだ遥は？俺は遥の心のケアが必要だとは思っているが、それは同性の俺がやるより美雪達のほうが向いているんじゃないか？

そんな事がぐるぐると頭の中を駆け巡り、そんな俺の手を遥がそっと握ってきた。

「ねえ、お兄ちゃん。これからずっと、わたしと一緒にいてくれる？」

そんなことを言ってきた。

ずっと一緒に？無論だ。遥は俺の大事な従妹だからな、俺が守ってやらねば。

「ああ、もちろんだ。お前をずっと守ってやるよ」

「そう・・・？じゃあ、ずっとわたしの傍にいてくれる？」

「当然だ。俺はお前と一緒にいてやるよ」

「そう、良かった・・・」

遥はそう言うと、俺に身体を預けてきた。俺によりかかった遥が、

「お兄ちゃんは、わたしのものだからね・・・」

と小さく言うのが聞こえた。

その声音は、冷たかった。

第46話 胸が熱くなるな・・・（後書き）

次回予告

第47話..

「らんらんー！！！」

第47話 らんらんるー(前書き)

前回のあらすじ..

鳥になって来い!! (MGSネタ)

第47話 らんらんるー

救助ヘリが来るまで、あと6日。つまり2日目。

俺達の行動方針は大体決まった。何人かを常時モール内に配置しておき、生存者を警備室のカメラが発見したらその場所へ向かうというものだった。

男子高校生、つまり俺とゴリは単独行動。女子陣は数名で固まって行動する。

一日中ショッピングモールをうろつくのは体力的にもきついので、2交代制を取っての行動だ。

一方リサさんと言うと、どうやら本社から任務続行の命令が下されたらしい。3日目までは俺達の生存者救助に付き合うが、4日目には本来の目的地であるアルカディア製薬研究所に向かうそうだ。

腕時計の針は正午を指した。午前中はゴリ、奈津美、亜衣プラス中学生で使える奴のシフトだったので、今度は俺達の番だ。

既にゴリ達は3名程生存者を救助していた。田中氏はずっとモニターの前に座り込み、ゾンビ以外の人影が映らないかチェックしている。時々女子中学生達も、田中氏を手伝ってモニターの監視をしている。

昨日救助した宮田氏は医者なので、警備室に避難している人間の体調管理をしていた。

阿部さんと道下君はというと・・・・・・相変わらずハッテンしている。

昼飯のおにぎりを食べ終わり、俺は警備室のモニタールームに置いてある武器を取りに行った。いつものSG556に弾倉を装着し、予備弾倉もいくつか持って行く。

近接専用金属バットも持った。これはゾンビ相手に銃弾を使っていったらあつという間に無くなってしまいうので、ゾンビが少数の場合には鈍器で対応する事を決めたからだ。バットをケースに入れば背負えて片手が塞がらないし、重さも許容できる範囲だ。

空調室のダクト前でゴリ達が帰ってくるのを待つ。ダクトは人が並んで歩ける程の幅はなく、もし空調室と女子トイレの両方から同時に入っていけば、どちらかがバックして戻らなければなくなる。

数分も待つと、ゴリ達がぞろぞろとダクトから出てきた。生存者らしき少年もいる。これで、今日救助したのは4人だ。

入れ替わりに、俺達もダクトに入っていく。「気をつけろよ」とゴリに言われたが、動きがのろいゾンビなんて大量に押し寄せてでもこないかぎり、楽々逃げるか鈍器で倒せる。

ダクトを通り、女子トイレへ。すっかり経路も覚えてしまったので、ライトを使わずともどこを曲がればいいのかわかる。

美雪と麻衣と女子トイレで別れた俺は、早速フードコートへ向かっていた。一流のレストランやファーストフード店が並んでいるフードコートだが、飯を食いに行くのが今回の目的ではない。そもそもシェフや店員はいないので、自分で勝手に料理を作るのでもなけれ

ば飯は食えない。

フードコートをぶらぶらと歩き、警備室の田中氏から生存者の目撃情報が入ってくるのを待つ。案の定、10分も待っていれば早速無線機のイヤホンに連絡が入った。

『あー、武か？フードコートに生存者が居るぞ』

「どこです？どんな奴です？」

『2階にある男子トイレの近く。すごいメタボな体型だな』

「りょーかい、これから向かいます」

そう言って通信を終える。メタボな奴か……。動きが鈍かったら連れていくのが厄介だ。ゾンビに追いつかれないように逃げ切れればいいが。

言われた通りの場所に向かって走る。フードコートにいるゾンビの数は少ないので、俺は戦うことなくさっさと進んで行った。

男子トイレの前には、一人の肥満体形な男がいた。年齢は武とあまり変わらないだろうか、片手に木製バットを持って、辺りをうろついている。

「ちょっと、アンタ」

「わっ！何だ、人間か……。君もここに逃げてきたのかい？」

「いやいや。俺はあんたを助けに来たんだよ」

「僕を助けに？助かるよ、ありがとう！！僕の名前は塚地つかじっていうんだ」

俺は塚地に事情を説明した。警備室は安全で、武器も豊富にそろっているからゾンビが侵入する恐れが無い事。それを聞くと、塚地はすぐに俺について行くと行った。

塚地はどうやら、ヤクザ達が暴れた時にフードコートに逃げ込んだ

らしい。そしてショッピングモール内をゾンビがうろつき始めるようになる、今度は男子トイレに立て籠もっていたのだとか。

「じゃ、行こうか」

俺はそう言って歩き出したが、何故か塚地は立ち止まったままだった。

「どうした？」

「・・・おなか、減った・・・。もう動けない・・・」

同時に、塚地の腹が空腹でうなる。物凄い音だった。

「一日くらい飯を抜いたっていいだろう！良いダイエットになるじゃねえか！」

「だって・・・、僕は3人前食べなきゃ満腹にならないんだ・・・」

「これからめえの愛称はピザに決定だ！行くぞピザ野郎、でなきゃ、お前をゾンビ達のランチにするからな！」

そう言うと、ようやくピザは歩き出した。

ただしかわいそうなので（同時に足を引っ張られたら困るので）、ピザを警備室に連れていく前にフードコードで食事をしていく。どうやらピザはマクドナルドでアルバイトをしていたことがあるらしく、余り物の商品を食いまくっていたらこんな体型になってしまったようだ。

2階の窓に面した場所に、マクドナルドはあった。周囲には牛丼屋やラーメン店も並んでおり、簡単な食事ならここで取れる。イスやテーブルがいくつも並び、幸いそこにゾンビの姿は見えなかった。ピザがまっすぐマックに入っていく、ややあって機械が唸る音が鳴りはじめた。肉を焼き、ポテトを揚げているようだ。

しばらくしてからピザがマックの中から戻ってきた。手にはハンバーガーの包みやポテトの入ったカップの乗ったトレイがある。どうやら俺の分も作って来てくれたようだ。

「それ、賞味期限大丈夫？」

「多分大丈夫。パンはしばらくは大丈夫だし、^肉パティもポテトも冷凍だから」

「ふーん。まあありがたく頂くよ」

そう言って、トレイに山積みされたハンバーガーの中から1つ取る。味はやはり、普通のハンバーガーである。

俺の隣でピザは、次々と包みを開いてハンバーガーを食べていく。さっきまで山になっていたハンバーガーが、あっという間になくなっていく。

10分もすれば、トレイの上には包みしか残っていなかった。ピザは腹をさすり、満足そうな顔をしている。

「よし、こんだけ食ったならもう満足だろ。さっさと行くぞ」

「待って、腹休めしないとおなかが痛くなるんだ僕は。ちょっと休もうよ」

「・・・・・・」

こいつ、食って動いてないからこんなメタボリックな体つきになったんじゃないか？

俺がそう言おうとした瞬間だった。

「らんらんるー！」

どこからともなく、そんな声が聞こえた・・・気がした。生存者か？ドナ○ドの真似をしやがって。

「誰かいるんですか？助けに来ましたよ！」

俺がそう叫んでも、返事は返ってこない。聞き違いか？
そう思ってマクドナルドの方を見ると、そこにはピエロがいた。

いや、ピエロではない。

服は黄色の上下。つま先が異様に長い靴を履き、顔は真っ白。髪は真っ赤。身体は紅白の縞々模様である。

ド○ルドがそこにいた。

「○ナルドです」

そう律儀に挨拶するドナル○。しかし俺とピザは、突然現れたド○ルドに驚き、咄然と見ていた。

俺達の前でドナ○ドは、どこからともなくポテトの形をしたプラスチックの棒と、同じようにハンバーガーの食品サンプルみたいな物を取り出した。

何をやるんだろうと俺がじっと見ていると、再び○ナルドが言った。

「ドナ○ドは今、ダンスに夢中なんだ」

「はあ・・・、そうですか」

「皆も一緒にやってみようよ。いくよ・・・」

ドナル〇はそう言うのとハンバーガーの食品サンプルを振りかぶり、そして手裏剣のように俺に向けて投げてきた。

「らんらんるー☆」

イタズラか？面倒くさい奴だな、食品サンプルだって当たれば痛いぐらいわからんのか。そう思って俺は、投げられたハンバーガーをひょいと避けた。

直後、

ガッ！と、ハンバーガーの食品サンプルが俺の背後にあった壁に突き刺さった。

「・・・は？」

なんでハンバーガーが壁に刺さるんだ？呆然としながらも俺が壁に刺さったハンバーガーを見ると、パンとパンの間のプラスチックから、まるで手裏剣のように金属の刃が突き出ていた。

俺がゆっくりとド〇ルドの方を振り返ると、今度はポテトの形をしたプラスチックの棒を振りかざし、襲ってきた。

「勝手にハンバーガーを食べちゃう子は、おしおきだー☆」

そう言って、俺にポテトを振り下ろしてきた。間一髪でそれを避けたが、ポテトの直撃をくらったテーブルが真っ二つに折れた。

このポテト、どうやら中に重い物（例えば金属とか）が芯として入っているらしい。その証拠に、テーブルにぶつかった時、金属音が響いていた。

さらにそのポテトには、ケチャップのような赤い染みがいくつもついていた。しかしケチャップではなく、どこからどう見ても人間の

血の痕である。

血は時間が経つと茶色く変色してしまう。だがまだ真っ赤ということとは……。

「お前、人を殺したのか・・・？」

「ドナルドは嬉しくなるとつい殺^やっちゃうんだ」

そう言ってドナルドは、ポテトソード（命名、俺）を振りかざし、俺に襲い掛かってきた。

俺はテーブルを蹴飛ばしてドナルドの前に障害を築き、そしてピザに叫んだ。

「逃げろピザ！コイツはやばい、俺が食い止めてる間に逃げろ！！」

ピザもただならぬ気配を感じ取ったのか、慌てて立ち上がって走り出した。ドナルドは懷からハンバーガー手裏剣（命名、やはり俺）を取り出すと、ピザ目掛けて投げようとした。

が、そうはさせない。俺はドナルドから距離を取り、そしてSG5 56を構え、撃った。こっちがやられるかもしれないので、これは正当防衛だ。

だがしかし、ドナルドは俺の撃った弾丸を、どこからともなく取り出したフライパンで受け止めた。ガンガンギン！！と金属音を立てて、フライパンから火花が散る。驚いた事に、5. 56mm弾が全く貫通していない。

だが俺が発砲したことで、再びドナルドの注意が俺に向いたようだ。俺は発砲しつつ後退し、ピザが逃げ切れるまでの時間を稼ぐ。それにしてもピザはメタボな体型なため、逃げるのにも一苦労しているようだ。

俺はライフルをフルオートで、ドナルド目掛けて撃った。だがドナ

ルドは放たれた弾丸を全て避けるか、手にしたフライパンで防御してしまおう。なんてヤツだこいつは、人間じゃない。

あ、ドナルドか。

「ハンバーガーが、4個分くらいかな」

ドナルドはそう言って、ポテト手裏剣を4つ取り出し、俺に投げしてきた。しゃがんだり横に跳ねたりしてどうにか投げられたポテト手裏剣を全て避けたが、その隙にドナルドは俺に近づいてくる。

「ドナルドは今、男子に夢中なんだ」
ダンス

「知るか！あそこにゾンビな男子なら沢山いるだろ！そっちに相手してもらえ！！」

悪態をつきつつ、俺はライフルの代わりにブッシュナイフを手にとった。順手に構え、振り下ろされたポテトソードを受け止める。

ドナルドは二度、三度とポテトソードを振り下ろし、その衝撃に耐え切れず俺はブッシュナイフを手放してしまった。金属音を立て、ブッシュナイフが遠くへ転がっていく。

だが俺は後ろに飛び、再びライフルを手にした。距離は10メートルもない。これなら当てられる！

しかしドナルドは、驚くべき方法を取った。

「ドナルド弩奈瑠怒流奥義、らんらんるー乱々流！！」

ドナルドがそう言うのと突然、身体がビデオを早送りしたみたいに拘束で動き、俺の撃った弾を全て避けてしまった。

啞然とする俺の手からライフルを蹴り飛ばし、ドナルドは言う。

「ドナルドはダンスに夢中なんだ」

ブッシュナイフに続いてライフルも失った俺は、さらに後ろへ移動しながらUSPを抜き、撃つ。並べられたテーブルや椅子が障害物となつて、思うように身動きが取れない。

「ほらねえ、自然に身体が動いちゃうんだ!!」

ドナルドはそう言つて、再び超スピードで動き、弾丸を全て避ける。こいつ、バケモノか・・・!?

「ドナルドです」

ドナルドは俺の思考を読み取ったのか、そう自己紹介してくる。俺の知ってるドナルドは動画投稿サイトないじゃ教祖扱いされてはいるが、こんな風に襲つてはこないぞ。

再びドナルドの長い足が蹴りを放ち、俺の手首にクリーンヒット。襲ってきた痛みで、USP拳銃まで取り落としてしまった。

最後の武器であるバットを取り出そうとしたが、ドナルドが動く方が早い。ドナルドは再びポテトソードを振り下ろしてきた。俺は一か八かと、振り下ろされたポテトソードを頭に当たる直前で両手で握って押さえつけた。いわゆる真剣白刃取りというやつである。

上手くいくとは思っていなかったが、死を免れる代わりに俺もドナルドも動けなくなった。ギリギリとポテトソードが頭に迫ってくる。

「俺を、殺すのか・・・?」

「もちろんさあ」

「もっとオブラートに包んで言えよ!」

「Donaldのことが好きだなんて嬉しいなあ」

「俺が好きなのはニコ動上でのDonaldであって、殺人鬼のDonaldじゃねえよ!」

「Donaldは君のことも知ってるよ、驚いた?」

「知るか!」

Donaldは片手で俺の抑えるポテトソードを握ったまま、もう片方の手でハンバーガー手裏剣を取り出した。俺が両手で押さえているのに、Donaldはラクラクと俺の頭にポテトソードをぶつけようとしている。

ハンバーガー手裏剣を持ったDonaldは、俺にハンバーガー手裏剣を近づけてくる。手裏剣の刃は鋭いようで、刃で俺を切り裂こうとしているのだろう。

だがそれを受け止めようと手を離したら、ポテトソードが頭にめり込む。手を離さなかったら、手裏剣で多分首筋を切られる。

俺が死を覚悟した、そのとき。

銃声が響き、Donaldのハンバーガー手裏剣を握る手から血が流れた。

予想外のことだったので、俺もDonaldも銃声のした方を見た。するとそこにはいつの間に戻ってきていたのか、ピザが俺の落としたSG556を構えていた。

子供がエアガンで遊ぶような構え方をしているピザの握るSG556の銃口からは、硝煙が立ち昇っている。一端逃げたが、気になって戻ると俺がピンチだったので、落ちていたSG556を拾って無我夢中で撃ったといったところか。

ドナルドの左腕が裂け、血が流れている。だがそんなことを気にする素振りも見せず、ドナルドは俺を切り裂く予定だったハンバーガー手裏剣を、ピザ目掛けて投げようとした。どうやらまずピザを殺すつもりらしい。

「悪い子には、おしおきだー☆」

だが俺は、ドナルドの注意がピザに向いたその隙を見逃さなかった。ポテトソードを握る手を離し、同時に身体を傾けて落下してくるポテトソードを避ける。

チェストリグのポーチから手榴弾を取り出し、ドナルドの着ているチョッキに襟から押し込む。チョッキはぴっちりとしてドナルドが着ているため、押し込んだ手榴弾は裾から落下せず固定される。安全レバーが外れ、起爆まであと4秒。

安全ピンを引き抜き、タックルをかけて一瞬棒立ちとなっているドナルドを窓際まで押していく。広いガラス窓には、さっき俺が発砲したせいで弾痕があちこちにあり、大きくひび割れていた。

呆然として窓際に立っているドナルドの胴体に、俺は思いっきり蹴りを入れた。ドナルドは背中からガラス窓にぶつかり、そして窓が衝撃に耐え切れず割れ、ドナルドは空中に放り出された。

「らんらんー☆」

視界からドナルドが消え、駐車場へ落下していく最中にそう言ったのだろう。ドナルドの最期の声が尾を引きつつ遠ざかっていく。

そして、爆発が起きた。俺が押し込んだ手榴弾が爆発したのだ。

大きく割れた窓から身を乗り出して下を見ると、爆発で引火したのか駐車場の車が燃えていた。ドナルドの死体は木端微塵になったか、あるいは炎に包まれているのかどこにも見当たらない。

爆発が館に延焼せずにすみそうだ。俺はそう判断し、死んだであろうドナルドへ言った。

「またのご来店をお待ちしてます」

窓際に座り込んだ俺にピザが駆け寄ってきた。途中で俺の落としたライフルやら拳銃やらブツシュナイフも拾ってきていたピザは、さきほどまでと比べて動きが素早いように見えた。

「これで、僕がただのデブってことじゃないのがわかった？」

「ああ、愛称をピザからピザ太に変更してやる」

「それ、殆ど変わってないよね」

そう言いつつ、塚地は俺の手を取って立ち上がらせた。塚地の援護がなければ、俺は今頃ポテトソードで頭をがち割られていたか、あるいはハンバーガー手裏剣で首をスッパリ切られていただろう。

「お前、見直したよ」

「そりゃどうも。それより、大事な事があるんだけど・・・」

「なんだ？」

俺が訊くと、塚地はマックの方を見て、言った。

「さっきすごい走ったから、またおなか減った」
「やっぱりお前の愛称はピザのままだ!!!!」

第47話 らんらんるー(後書き)

次回予告

第48話..

「もっと、熱くなれよおおおおお!!!」

御意見、御感想お待ちしております。

第48話 もっと、熱くなれよおおおお!!!! (前書き)

前回のあらすじ..

るあああんるああああんるうううううう!!!!

注※今回もネタ回です。いやな人は戻るボタンを押してブラウザバツクしてね!

第48話 もっと、熱くなれよおおおお!!!

救助ヘリが来るまであと4日。つまり3日目。

俺は北側の屋上駐車場向けて走っていた。

昨日のように田中氏から生存者発見の知らせを待つてモール内をうろついていたところ、案の定警備室から通信が入った。ただし生存者の情報ではなく、北屋上駐車場に停めてあった乗用車が火事を起こしているとの事だった。

『もしかしたら延焼が広がるかもしれん。他の奴も行かせてるが、一番近くにいるのはお前だけじゃ』

そんなこんなで太郎は近くにあった備えつけの消火器を引っつかみ、屋上駐車場に向かっているのだ。

太郎が駐車場に到着した頃には、停めてあった乗用車が4台ほど炎上していた。出火原因はわからないが、仮に燃料が燃えているなら水をぶっかけて消し止めるなんて手段は取れない。水と油は混ざらないので、水をかけたら熱せられた水が周囲に飛び散ることになる。とりあえず持つて来た消火器を使って、さらに延焼が広がるのを防ぐ。だが消火器1つで4台の車の火事を消せるわけではない。

持つて来た消火器の中身が空になった頃、美雪と麻衣がやってきた。それぞれ2本ずつ持っている。

「もっと消火器持って来てくれ！あ、消火器^{それ}は置いてって」

俺がそう叫ぶと、二人は頷いて持って来た消火器を置いて館内に戻っていった。ショッピングモールの中には消火器を売っている店もあるので、多分そこへ向かったのだろう。

俺は邪魔になるカービンやバットを置くと、代わりに消火器を掴んで戻った。まだ燃えている車に、次々消火剤をぶっかけていく。さすがに4つも消火器があれば、火の勢いは大分収まってきた。

最後の消火器を空にした時には、既に火は小さくなっていた。幸いガソリンなどには引火していないようで、シートなどが燃えているだけだった。これなら水をかけただけで消えるだろう。

ほんと俺が一息ついた時、どこからか声が聞こえてきた。

「もっと熱くなれよ・・・」

俺は驚き、周囲を見回した。駐車場は車だらけなので、隠れる場所はいくらでもある。

その声はだんだん俺に近づいている。

「熱い血燃やしていけよ・・・」

「一番になるって言っただろ・・・」

「過去のことを思っちゃダメだよ」

「未来のことと思っちゃダメ」

「あはぁん」

不安に駆られた俺が、さっき置いてきてしまったカービンとバットを取りに戻ろうと、後ろを向いたその瞬間だった。

俺の前に、テニスウェアと短パンを着用した男が立っていた。

熱い。まるでストーブにでも当たっているかのような熱気が男から発せられている。

無意識の内に一歩後退する。男はそんな俺を見て、言った。

「諦めんなよ・・・」

「・・・はい？」

「諦めんなよお前！もう少し頑張ってみろよ、応援してる周りの人達のことだってみろって！」

・・・

訳がわからないよ（某QBさんキュウベえ風に）。

とは言え、誰だよこの熱苦しい人？格好と発言からして、今度はシューゾーさんか？

関わらないようにしよう。そう判断し、こっそりショッピングモールの中に戻ろうとした、その時だった。

「もっと、熱くなれよおおおおお！！」

瞬間、シューゾーの背後にあった乗用車が数台爆発した。

・・・！？

何が起こった？まさか修造の熱気に当てられてガソリンが爆発したのか？

俺が熱気で思わず顔を覆っていると、シューゾーはどこからかテニスラケットと硬式テニスボールを取り出した。そしていきなり、ラケットでボールを俺に向けて打ち込んできた。

とっさに身体を捻り、飛んできたボールを避ける。さっきまで俺が立っていた場所をボールが通過し、停まっていた乗用車のフロントガラスに直撃した。大きな音を立ててガラスが粉々に碎ける。

テニスボールと言えども硬式ボールである。剛速球が直撃したら骨折する事もある。しかもあのシューゾーが打った球は異常なまでに速い。もし頭に当たったら、頭蓋骨陥没するかもしれない。

畜生、またこの展開かよ・・・！！

俺はそう毒づき、レグホルスターからUSP拳銃を抜く。カービンは消火活動の邪魔になるから置いてきてしまった。美雪と麻衣が早く戻ってきてくれれば、俺達が有利になる。

「ZO！」

シューゾーは叫び、次々ボールを打ってくる。姿勢を低くしてボールをかわし、狙いを外した硬式ボールが次々俺が隠れている車に直撃し、バコンベコン！と音を立てて車体がへこむ。

ボールが飛んでくる合間を縫って立ち上がり、拳銃を撃つ。するとシューゾーは「チャッ！」と奇声を発して下がり、車に隠れる。立ち上る炎と黒煙で、修造の姿が見えなくなってしまった。

拳銃を油断なく構えつつ、周囲を見回す。どこだ、どこから襲ってくる！？

次の瞬間炎の壁を突き破って、シューゾーが一気に近づいてきた。

「ZO！」

再び奇声を発し、今度はラケットを振り下ろしてきた。ラケットはテニスの道具だろ！武器にしちゃいけないだろ！

とっさに拳銃で振り下ろされたラケットを受け止める。手首に強い衝撃が走る。

「一番になるっていったよな？日本一になるつつたよな？ぬるま湯なんか浸かってんじゃねえよお前！」

言ってます。

俺はそうツツコミたくなった。

にしても凄い熱気である。修造は火力発電に変わるエネルギー供給源になるんじゃないだろうか。

そんなことをちらっと思いつつ、片手で伸縮式警棒を抜く。一振りして伸ばし、横からシューゾーを殴りつける。

「チャッ！」

再び奇声を発して修造が一步後退し、警棒が空を切る。すかさず拳銃を構え、素早く動くシューゾーを撃つ。シューゾーは銃弾を全て回避し、また車の陰に隠れてしまった。

俺が戦っている事は防犯カメラを通じて警備室の皆知っているだ

ろう。早く誰か来てくれ。

周りを見ると、火がかなり燃え広がっていた。狭いスペースに沢山の車が駐車しているので、次々と引火しているのだ。このままここに留まっていたでは、一酸化炭素中毒で死ぬ。もしくはこんがり焼かれて死ぬ。ミディアムかレアか、あるいはウェルダンか。

ここは一旦退こう。そう判断し、館内に戻ろうとした俺のすねに、炎の中から飛んできたボールが直撃した。

「つつてええええええ！」

呻き、足を押さえて地面をのたうちまわる。学生服のズボンの裾を捲ってみると、ボールが当たった場所が真っ赤に腫れていた。

幸い骨折はしていないようだが、しばらくは走れない。くそ、どうする・・・！？

パニックに陥った俺の視界に、悠然と近づいてくるシューゾーの姿が見えた。腕を持ち上げて拳銃を連射したが、痛みとパニックで狙いは目茶苦茶。一発も掠らなかった。

弾倉内の弾丸を全て撃ちつくし、予備弾倉を取り出そうとした俺の腕をシューゾーが踏み付けた。軽く踏んでいる状態ではあるが、俺は身動きが取れなくなった。

「俺だつてしじみがトウルルって頑張ってるんだよ！あの川のように、君の心もピュアだったじゃねーか」

ここでしじみは取れないし、川もかなり離れた場所にしかないよ。そうツツコミを入れる気力も残っていない。

シューゾーはラケットを頭上に掲げた。そのまま俺の頭に振り下ろすのだろう。どっちにしろ、痛みで冷静に物事を考えられない。

観念した俺が、瞼を閉じようとした、その瞬間だった。

銃声と共に、眼前に立っていたシューゾーが吹っ飛んだ。

一酸化炭素を吸ってフラフラの頭をどうにか動かし、銃声のした方向を見る。するとそこには、銃口から硝煙を立ち上らせるベネリM3を構えたゴリが立っていた。その後ろには、消火器の積まれたシヨッピングカートを押す美雪と麻衣の姿も見える。どうやらゴリが、修造を撃って俺を助けてくれたらしい。

「遅えよ、お前・・・」

「悪かったな。こっちも色々立て込んでてな」

ゴリはシヨットガンの銃口を下ろし、美雪と麻衣が駆け寄ってきた。俺の肩を支えて立たせる。

「大丈夫、武!？」

「いんや。足は痛いし一酸化炭素中毒寸前だ」

「にしては元気そうだな。でも、あいつは一体何なんだ?」

麻衣はそう言って、倒れているシューゾーを見る。ここからは並んだ車の合間から、倒れたシューゾーの足が見えるだけだ。

「ゴリ、このままじゃ火事が広がっちゃう。悪いけど消してくれ」
「あいよ。ここは俺に任せて、お前は休んで・・・」

ゴリの言葉が途絶えた。ゴリは啞然として、俺達の背後を見ている。恐る恐る俺達が振り返ると、そこには修シューゾーが立っていた。

さっき撃たれたはずなのに・・・！

「本気になれば、全てが変わる」

馬鹿な……。精神力で、撃たれても大丈夫だというのか・・・！？

「元気ですかーっ！？元気があれば、何でも出来る」

「それアントニオ猪木だよね！？」

「諦めたら、そこで試合終了ですよ」

「安西せんせーい！」

俺は間髪入れずにツツコミを入れ、ゴリがショットガンを再び構える。が、俺はシューゾーの足元を見て銃撃をやめさせる。

シューゾーの足元には水溜まりが広がっていた。そしてその液体は、燃料タンクに穴が空いた車から流れ出ている。恐らく流れ弾が当たったのだろう。

ガソリンは勢いよく流れ出し、シューゾーの足元を浸して燃え盛る自動車の方に向かっていく。もしあのガソリンに引火すれば、屋上駐車場ごと吹っ飛んでしまう。

「もっと・・・もっと・・・」

「やばいゴリ、逃げるぞ！！」

俺は叫び、俺に肩を貸している美雪と麻衣が必死に足を動かす。足を怪我して上手く走れないのがもどかしい。

どうにか屋上から館内への入口に飛び込んだ直後、

「もっと、熱くなれよおおおおお！！」

流れていたガソリンが、燃え盛る車に触れる。
瞬間、轟音と共に世界が白く染まり、俺は意識を失った。

気がつくと、俺は警備室のソファアーの上で横になっていた。気絶したあと、ゴリが運んでくれたようだ。

美雪によれば、屋上駐車場の火事はどうにか消し止められたようだ。爆風で炎が大分吹き消され、それ以上延焼が広がることはなかったらしい。

それはそうと、シューゾーの死体は見つからなかったらしい。あの爆発の中で生き残るのは無理がある、爆風で死体は遠くに吹っ飛んだか、あるいは直前に逃げ出したか。

どっちにしろ、リサさんは明日に研究所に向かうそうだ。足の痛みは大分引いたが、俺は同行することが出来ない。

にしてもシューゾー、大分手強い相手だった……………。

第48話 もっと、熱くなれよおおおおお!!!! (後書き)

次回予告

第49話..

「あれ? ヤバくね?」

第49話 あれ?やばくね? (前書き)

前回のあらすじ..

もつと、熱くなれよおおおおお!!

第49話 あれ?やばくね?

救助ヘリが来るまであと3日。つまり4日目。

13..00

「じゃ、行ってくる」

リサさんはそう言って、ダクトの中に消えていった。それを見送った後、俺は警備室の廊下にあるソファに戻る。

リサさんは豊島市に来たのは、アルカディア製薬豊島研究所にあると言われる、親父の開発したゾンビ化ウイルスのワクチンと治療薬を確保するためだった。そして一昨日リサさんがアルカディア製薬の上層部から受けた指令は、「任務の続行」だった。

俺達としては一緒にいて欲しかったのだが、無理に引き止める事は出来ない。リサさんには何度も助けてもらった恩があるし、もし任務を放棄したら、あとあとリサさんに報復がくるかもしれない。

それならば一緒に行く、と俺達は言ったのだが、リサさんはそれを断った。これは自分が受けた任務で、もしかしたらミレニアム社の妨害を受けるかもしれない。危険過ぎると言い張ったのだ。

俺としては死んだ親父が関わっていたことなので、リサさんが何と言ったのもついて行きたかった。だが俺は昨日のシューゾーとの戦闘で足を負傷しており、歩くことは出来るが全力疾走は無理だった。診察した宮田氏によると骨は折れていないが、しばらく走るのは厳禁、だそうだ。

ついて行っても足手まといになるだけなので、渋々俺はモールに残

ることになった。

リサさんは俺達が乗ってきた特殊部隊のワゴン車で研究所に向かうという。いざとなったら無線で連絡してくるそうだが、リサさんが危険な状態に陥っても助けに行けないのがもどかしい。

ならばせめて、ショッピングモール内の生存者の搜索を、とも思っただが、皆に寄ってたかって止められてしまった。足の怪我を悪化させないよう今日は寝てろ、と皆は言って、生存者の救助に向かった。仕方なく俺は警備室に残り、本やマンガを読んで暇を潰そうとした。だが俺は身体を動かしていないと落ち着かない性分らしく、すぐに悶々としてソファアーの上で何度も寝返りを打つことになってしまった。

暇だ、本当に暇だ。ケータイのマイクロSDに録画してあるアニメは何度も見て、あらすじからセリフまで完璧に覚えてしまっている。携帯ゲーム機のソフトはギャルゲーばかりだし、それだって既に全キャラ全ルートを攻略してしまった。

暇だ、暇で死にそうだ。

今までは戦いばかりでゆっくり休める時間がなく、休憩出来る時間を渴望していた。ところが欲しがっていた休息を手に入れたら、今度はモーレツに働きたくなる。皆が働いているなか、一人だけ休んでいるという罪悪感もあったからかもしれない。

とうとう耐え切れなくなり、俺はモニター室に向かった。椅子に座

ってモニターと向き合っていた田中氏は、いきなり入ってきた俺にぎよっとしたようだ。

「おい武、おまえあんまり身体を動かしちゃいかんって言われとるじゃろう」

「身体は動かしませんよ。屋上でゾンビを狙撃するから、銃と弾を取りに来ただけです」

屋上は狭く、救助ヘリが着陸するスペースはない。必然的に外の駐車場からヘリに乗ることになるが、駐車場はゾンビがわんさかいる。今の内に数を減らしておく———と言うと、田中氏は「持っけて」と許可してくれた。

モニター室の片隅に立て掛けてあったM14EBRと弾倉を数個取り、屋上に向かう。弾は豊富にある、十発二十発撃ったって問題ない。

歩く度に左足に痛みが走るが、我慢出来る程度の痛みだ。途中でヒマそうにしていたラインを連れて階段を上り、屋上に出た。空は雲に覆われ、何だか雨でも降ってきそうな天気だ。

屋上の端まで移動し、M14EBRの二脚を立て、ストックを伸ばして伏せる。安全装置を解除し、スコープを覗いてゾンビの頭を十字線の中央に納めた。

移動速度や方向、位置、高低差を勘案し、狙いを微調整する。ここだと思った瞬間、引き金を引く。

銃声とともに7.62mm弾が発射され、駐車場をふらついていた男のゾンビの頭を吹き飛ばす。まずは1体。

次々と引き金を引き、あっという間に20発を納めた弾倉は空になった。空の弾倉を外し、装弾済みの弾倉を差し込む。ボルトを引いて撃てる状態になり、狙撃を再開する。

弾倉を3つばかり空にした時、遠くから風に乗って銃声が聞こえた。研究所がある方向から聞こえるので、リサさんが戦っているのかもしれない。ま、どっちにしても俺に出来ることはない。リサさんが無事に帰ってくるのを祈るだけだ。

持ってきた弾倉を全て空にした俺は、大人しく警備室に戻ることにした。ここでゾンビを撃ち続けるのもいいが、あまり弾を使いすぎでは後々困るかもしれない。まだ銃弾は豊富に残っているが、弾が多いことに越したことはない。

二脚を折り畳み、ストックを縮めて戻ろうとする。すると階段を上って美雪が屋上にやってきた。

「何してたの？」

「ライフルの調整さ。俺も結構ヘッドショットできるようになっただぜ」

「ふーん、そうなんだ・・・」

なぜか美雪はそわそわしているようだ。しきりに周囲を確認し、真剣な表情で言った。

「武、わたしは」

「ん？なんだね？」

「あ・・・あなたのことが好きなの!!」

・・・は？

俺は一瞬何を言われたのかわからなかった。「スキ」という言葉が、なかなか頭の中で漢字に変換されない。

美雪は顔を真っ赤にして、俺の言葉を待っているようだ。

十数秒後、ようやく「スキ」という言葉が、頭の中で「好き」と変換された。俺は思わず、

「……………ドッキリ？」

と返していた。

「違う、ドッキリじゃない」

「ああなるほど。じゃあ罰ゲームか何かか。おまえ勝負事に弱いしな」

「違うわよ！本気で言ってるの！わたしはあなたが好きなの！！」

目をつむりながら、顔を真っ赤ににして美雪が叫ぶ。その様子に、俺も美雪が本気で言っているらしいとようやくわかった。

「……………何で今頃、いきなり言うんだよ？」

「いきなりじゃないわよ。わたしはずっと武が好きだった。今日自分の気持ちを伝えようとずっと決めてた」

「……………実はジョークでしたー』ってオチは？」

「ないわよ！わたし本気よ、武のことを好きなの！」

美雪は顔を真っ赤にしつつも、精一杯言っていた。

だが俺は今でも、美雪が言っていることは嘘なんじゃないかと疑ってしまう。だって俺オタクだし、変態（紳士）だし、前は目立たないような奴だったし。

そう言うと、さらに美雪は言った。

「世界がこんなになってから、武は変わったよ。リーダーとして皆を導いてくれたし、危険な時は戦って皆を守ってくれた。そんな武を見てわたしは好きになったの」

「・・・それ、多分『吊橋効果』ってヤツだと思うぞ。危険な状態に陥ると、近くにいる奴がどんな奴でも格好よく見えて好意を抱くってヤツだ」

「それでもッ！わたしは武が好きだし、これからもずっと好きでありつづけるよ。今すぐとは言わない、返事はいつでもいいから。あなたを好きな人がいるってことだけは忘れないで」

美雪はそう言って俺に背を向けると階段を下り、警備室に戻っていった。

俺は美雪を追うことも出来ず、屋上に立ち尽くしていた。そりゃそうだろう。今まで友達と生きていたやつから、いきなり「好きです」なんて言われちゃあな・・・。

美雪が嫌いというわけではない。むしろ美人だし、あんな彼女がいればいいなと思った事はある。

だがそれはあくまで「たら、れば」の話であり、実際に彼女になって欲しいというわけではない。そもそも俺は二次元の彼女しか出来たことはないし、実際に自分が告白されるなんて思ってもいなかった。

・・・どうすりゃあ、いいんでしょうな？

俺がどんな返事をしようと、これからの美雪との関係は変わるだろ

う。ていうか、残り3日間、気まずい雰囲気で過ごさなきゃならんのか……？

俺が頭を抱えていると、再び誰かが階段を上がってくる音がした。美雪かと思っで一瞬身構えてしまったが、現れたのは遥だった。

「なんだ、遥か……」

「どうかしたの？ お兄ちゃん？」

「いや、ちょっと美雪といろいろあってな」

「……いろいろ？ いろいろって何お兄ちゃん？」

その瞬間、遥の声が氷のように冷たく変わった。その声にぞっとしつつも、俺は続けた。

「その……、美雪に告白されてな」

「告白！？ 告白って何よお兄ちゃんッ！？」

「え？ おい待てよ遥、なんでそんなに……」

「まさか美雪さんと付き合うのお兄ちゃん？ お兄ちゃんはずっとわたしと一緒にいてくれるって言ったよねッ！？」

遥は目を見開き、凄まじい形相で叫んだ。俺の学生服の襟首を掴み、前後にがくがくと揺する。まるで鞭打ち症になりそうな勢いだ。

「ち、ちょっと待て遥。なんでそんなに怒ってんだよ？」

「お兄ちゃんはずっとわたしと一緒にいてくれるんでしょッ！？ なんで美雪さんと付き合うのよッ！？」

「待て遥、俺はまだ付き合うとは一言も言っていない。返事はよく考えた後にする予定だ」

「……ああそうなの。ならよかった」

いきなり遙の表情が元に戻った。遙は笑顔を見せ、警備室に戻っていく。

ただ、目は笑っていなかったが。

「……………一体全体、今日は何なんだよ？」

俺はそう呟き、屋上に寝転がった。

美雪からは好きだと言われ、遙からは付き合うなと言われる。俺はどうすりゃいいのさ。

隣に陣取るラインに話し掛ける。

「なあライン、俺どうすればいい？」

ラインは欠伸をすると、ごろんと寝転がった。まるで、「痴話喧嘩に巻き込むな」と言っているみたいだ。御主人様に対して冷たいヤツだ。

屋上に寝転がって空を見上げていると、携帯無線機から繋がるイヤホンから、通信が入ったことを示す音がなった。受話ボタンを押し、相手が送話してくるのを待つ。

相手はリサさんだった。リサさんは運転しながら通信しているらしく、微かにだがエンジン音が聞こえてくる。

リサさんは切羽詰まった口調で言った。

『武か！？今どこにいる！？』

「皆に言われた通り、警備室の屋上で大人しくしてますよ。てかりサさん、運転しながらの通話は道交法違反ですよ」

『なら今すぐモール内の皆に連絡して、すぐに警備室に戻るよう言っただ！』

「ちよっとちよっと、何があっただんですか？まあ、言われた通りにしますけど」

俺は一旦リサさんとの交信を終了し、代わりに皆すぐに戻ってくるように連絡した。皆無線機を携帯しているので、すぐに連絡は取れた。

皆に連絡を終え、再びリサさんと交信を再開する。屋上からも自動車のエンジン音が微かに聞こえてきた。リサさんも近いところに戻って来ているのかもしれない。

「言われた通りにしましたけど、どうしたんです？」

『今屋上にいると言ったな？ならすぐにわたしの乗るワゴン車が北側から見えるはずだ！いいか、絶対にゾンビを警備室に入れるなよ！！』

リサさんはそう言って交信を終えた。聞こえてくるエンジン音はどんどん大きくなってくる。まるで何かに終われているかのように。

・・・何かってなんだよ？ゾンビは鈍いから簡単に振り切れるはずだし、特殊部隊に終われているならば、わざわざ敵をショッピングモールまで引き連れてくるはずがない。何としても振り切るか、あるいはリサさんなら撃退するだろう。

M14EBRの銃身を手摺りの上に乗せ、リサさんの言った通り北側をスコープで覗く。倍率を最大にすると、すぐにワゴン車が見えた。

どうもワゴン車は何かに追われているようだった。何がワゴン車を追っているんだろう？あのリサさんが振り切る事も撃退する事も出来ないなんて、やはり特殊部隊の生き残りか？

突然、今まで寝ていたラインが起き、鼻をひくつかせて大きく吠えた。ラインには珍しく、それは何かを恐がっている時の吠え方だった。

「・・・・・・・・・・は？」

ワゴン車を追っているものの正体をスコープ越しに確認した俺は、思わずそんなマヌケな声を出してしまった。

ワゴン車を、何か走るものが追っていた。それは人の形をしており、キビキビシャキシャキと手足を動かしてワゴン車の後ろにピッタリとついていく。しかも一人や二人ではなく、十数もの人影が見える。それだけだったらまだオリピック選手クラスのアスリート達がワゴン車を追っているんだと無理矢理納得出来たが、その人影達はどれほどこがおかしかった。

肌が土気色をしていたり。

片腕がもげていたり。

腹が裂け、内臓がはみ出ていたり。

顔面の表皮が剥がれていなかったら、それらは健康的な人間に見えない事もなかっただろう。

俺はワゴン車を追っているものの正体を知り、呻いた。

「オイオイ……。。ゾンビはいつから全力疾走して、追いか
けっこをするようになったんだよ……。」

ワゴン車を追っていたのは、俺が自宅で「出たりしないよな」と冗
談混じりに言った、「走るゾンビ」そのものだった。

第49話 あれ?やばくね? (後書き)

次回予告

第50話..

「岩崎武最大の失敗」

第50話 岩崎武最大の失敗（前書き）

前回のあらすじ..

武が美雪に告白されました。ゾンビが走り出しました。

第50話 岩崎武最大の失敗

救助ヘリが来るまであと2日。
5日目。

警備室の中は、重苦しい空気で満たされていた。誰もが無言となり、下を向いて座り込んでいる。

リサさんは任務を果たし、研究所から治療薬とワクチンを持ち帰ってきた。アタッシュケースに入ったそれらは5組あり、今はモニター室の隣にある配電板室で嚴重に保管されている。

その他にも重要なデータをいくつかメモリーに移して持ち出してきた。もしかしたらこのゾンビ発生の原因を探ることが出来るかもしれない。モニター室に置いてあるパソコンでデータが解析中だ。

研究所に備えつけられていたという大量の武器弾薬もある。グロツク17自動拳銃、MP5短機関銃、M870MCS散弾銃、SCAR-L突撃銃、MSG90狙撃銃など、日本で持っていたらテロリスト認定間違い無しの軍用銃火器がそれらの大量の弾薬と共に20丁以上ある。リサさんによると研究所の警備員用の武器らしい。リサさんのベレッタといい、大企業お抱えの特殊部隊といい、本当にここは日本だよな？

だが、得たものよりも失ったものの方が大きい。

走るゾンビは、既にショッピングモールに侵入していた。数は普通のゾンビに比べて格段に少ないが、脅威度は走るゾンビの方が上だ。リサさんが研究所に到着した時、そこに人はいなかったのだという。不審に思いながらも研究所の中を進み、目的の治療薬とワクチンを

手に入れ、帰ろうとワゴン車に乗り込んだ時に地下の駐車場から走るゾンビがわらわらと現れてきたのだとか。どうやら誰かがゾンビ発生後も研究を続け、走るゾンビを生み出した後に開放したらしい。

その走るゾンビを作り出したのは誰なのか、走るゾンビは最初に現れたゾンビの進化系かはたまた全くの別種か、何体いるのか、感染経路など全くわからない。リサさんを追っていた走るゾンビはワゴン車で轢いて全部倒したが、他にも研究所から出て来たらしい走るゾンビ数十体が、既にショッピングモールに侵入している。

そのせいで俺達は生存者の搜索を諦め、警備室に立て籠もるしかなかった。怪力のゾンビが走るようになったのだ。前からいるのろいゾンビなら簡単に回避出来るが、走るゾンビに発見されたら逃げるか戦うしかない。逃げてても猛スピードで追いかけてくるから逃げ切れるかわからないし、戦うといっても動きが俊敏だから接近戦は危険だ。銃は上手く当てられるかわからない。

そんな訳で、俺達は警備室に引きこもる羽目になったのだ。

俺は屋上への階段に腰掛け、手にしたSG556の分解清掃をしていた。ここ数日暇な時にリサさんの指導を受けていたので、内部構造や分解方法などはわかっている。

何も出来ないことが悔しかった。足の痛みは引いたのに、俺達に出来る事は何も無いのだ。

「……………武、また銃弄ってるの？」

一通り清掃を終えたころ、倉庫から奈津美が出て来た。奈津美の顔にも疲労の色が見える。

「まあな、銃は身体の一部にしておかないと」

「ふーん。それはそうと、アンタ、美雪に告られたんでしょ？返事はしたの？」

動きが止まる。なんで奈津美は俺が告白されたことを知っているんだ？俺は遥にしか言った覚えがないのに。

「だって私、美雪からアンタについて相談受けてたし。武を好きなんだけど、どうすればいいのかって」

「・・・・・・・・いつから」

「んーと、確かアンタと五里くんがヤクザを鎮圧して、ゾンビが侵入してきた日の夜かな」

それもそうか。奈津美は美雪の親友だし、何かあったら真っ先に相談するだろう。奈津美がその事情を知っていてもおかしくない。

奈津美の目を見る。その目は他人の恋愛話で盛り上がり冷やかすような目ではなく、真剣に俺がどのような決断を下すか待っているような目だった。

その目を見続けることが出来なくなり、思わず視線を背けてしまう。

「・・・・・・・・んなこと言われたって、俺にだってわからんよ。だいたい、三次元リアルの女子に告白されるの初めてだし」

「あーもう！アンタ美雪を好きなの？嫌いななの？」

いきなりそっちの結果を求めるんかい。そう思ったが、ツツコまずにおく。茶化すほど、俺にも精神的な余裕はないのだ。

美雪は嫌いではない。友達としてはいい関係を築いていると思っている。出来ればこのような関係をずっと続けていきたいと俺は願っている。

だが告白された事で、そんな関係は終わりを告げた。これからの俺と美雪の関係は、非常に近くなるか遠ざかるだろう。それは俺が望むものではない。

美雪は美人だし、性格もいい。学校では（懐かしいな、この響き）よく男子生徒から告白されていたと噂で聞いたし、本人から相談されたこともある。あの人から告られたんだけど、どんな人なの？教えてくれない……？

そういや俺、美雪が誰かに告白されたって聞いたり本人から相談される度、なんか嫉妬してたな。高校に入学してから知り合ったというのに仲良くなれたからか？

もし俺が本当に嫉妬していたなら、俺は美雪を好きなことになる。

「嫌いじゃない。むしろ好き………なんだと思う」

「ならオーケーしなさいよ。美雪はいい子よ、わたしが保証するわ」

「まだわかんないんだよ、付き合うってのがどういうことか。俺みたいなヤツが美雪に釣り合うのかどうか」

俺がそう呟くと、奈津美はわざとらしく大きな溜息を吐き、ずい顔顔を近づけて言った。

「あのねえ、これが普通の学校生活だったらいつまでも悩んでいてもいいわ。でもね、今はゾンビがあちこちにいてわたし達はいつ死ぬのかわからないのよ？そんな状況でいつまでもウダウダ言ってるなら、屋上から放り出すわよ？」

「……………」

確かにその通りかもしれない。

もともと大量にいたゾンビに加え、走るゾンビまで出て来たのだ。俺達が生存したままここを脱出出来る可能性は大きく減ったと言っている。

いや、今こうして生きているのが奇跡なのかもしれない。俺達が生き延びてきたのは豊富な武器と個人個人が強いことが理由なのだ。その幸運も長くは続かないだろう。だったら、思い切って素直になるのもいいんじゃないか？

・・・それに、一度三次元の彼女も欲しかったし。

「わかった。明後日、ここから脱出する時に美雪に返事をするよ」

「それ、死亡フラグってヤツじゃないの？」

「何言ってるんだよ。フラグはへし折るもんだ」

俺がそう答えると、なつは呆れたような顔をしつつも、

「しっかりやんなさいよ」

と言って倉庫に戻っていった。

さて、色々と心の中の問題も片付いたことだし、リサさんとここからどうやって脱出するか相談しようと立ち上がった時だった。

「・・・・・・・・・・どういうことよ、お兄ちゃん？」

ぞっとするような冷たい声とともに、俺の腕が背後からがっちりと

掴まれた。

振り返ると、そこには遥がいた。

「お兄ちゃん、ずっとわたしと一緒にいてくれるって、言ったよね？」

「あ、ああ……」

ヤバイ、なんかヤバイ。

俺は遥がいつもと違うことを感じ取り、無意識の内に後ずさりしようとした。だが遥は俺の腕を強く掴んで放さず、全く動けない。

爪を立てるような強さで腕を掴まれていた。遥の指の爪が肌に突き刺さり、小さな痛みを感じる。

「お兄ちゃんはわたしと一緒にいるって言ったのに、どうして美雪さんのことを好きになってるの？ねえどうして？答えてよ」

「……別に俺が誰を好きになろうと、俺の勝手だろ」

そう言ってしまったのは、俺に余裕がなかったからかもしれない。とにかく俺の頭の中は色々なことで一杯で、言い方は悪いが遥のことを考えている暇なんてなかったのだ。

俺の言葉を聞いた遥は豹変した。

「ダメなのっ！お兄ちゃんはずっとわたしと一緒にいるの！他の女の人を好きになるなんてわたしが許さない！！」

大声で叫び、俺の腕を握る力が強くなる。

「確かに俺は遥と一緒にいるって言った。だがそれは親戚として一緒にいるって意味で、遥と一生を添い遂げるって意味じゃない」

「……………嘘つきっ！わたしはお兄ちゃんの事が好きなの！愛してるのっ！だからお兄ちゃんもわたしを好きにならずちゃダメなんだからっ！！」

何だよその謎理論。いくら親戚で年下の女子とはいえ怒るぞ。

「ねえお願い、ずっとわたしと一緒にいるって言ったでしょ。わたしのお父さんもお母さんも死んだかもしれない、頼れるのはお兄ちゃんだけなの……………」

「困った時には助けると約束する。だがお前が好きになるべき相手は俺じゃない、もっと別の相手だ。ソイツを心の支えにしろ」

「……………お兄ちゃんは、わたしを愛していないの？」

俺は一瞬答えに詰まった。

遥は両親と連絡がつかず、さらに関口に乱暴されてしまった。俺が傍にいたと言ったのは、精神が不安定だった遥を安心させるためだ。もしここで俺が遥の願いを聞き、ずっと一瞬にいたと言った場合、遥の俺への精神的な依存度はますます高くなる。こんな壊れた世界で俺はいつまでも生きていけるとは思えない。もし俺が死んだら、遥は何も出来なくなってしまう。

だから今の内に、遥には自立しておいてもらわねばならないのだ。多少キツイことを言っても、遥には俺から離れてもらわなければならない。

「……………当たり前だ。お前を親類としては好きだが、恋愛対象だとは思っていない」

そして俺は、その判断が間違っていたのを知る。

「……ハハハ、そうだ、これはお兄ちゃんじゃないんだ。
お兄ちゃんはおたしにこんな酷いことは言わないんだから」

「お、おい遙……」

「お兄ちゃんはおたしにそんな酷い事は言わないもん！ こんなのわたしのお兄ちゃんじゃないっ！！」

次の瞬間、俺の前に黒光りする金属の固まりが突き付けられていた。
その先端には、黒々とした穴が空いていた。

俺は、遙に拳銃を突き付けられていた。

なんで、遙が銃を持っているんだ……？

俺は目を見開いたままそう考え、すぐにその原因を思い出した。

一週間前、関口に遙が乱暴されたとき、俺は遙に何を渡した？ 関口から没収したそれを、俺は遙に渡したじゃないか。

——弾が入ったままのトカレフ自動拳銃を。

「こんなのわたしのお兄ちゃんじゃないお兄ちゃんの顔をしたゾン
ビなんだお兄ちゃんはおたしにこんな酷いことは言わないんだお兄
ちゃんはおたしを愛してるんだ」

遙は壊れてしまったかのように、無表情のまま口だけを動かして呟

いた。

いや、遥はとつくに壊れていたのかもしれない、関口に乱暴されたあの時から。遥は俺に全面的に依存する事で精神的な均衡を保っていた。俺が遥を愛している、だから自分を守ってくれるのだと。だが俺がその幻想を破壊してしまった。

「お兄ちゃんじゃないなら殺してもいいよね……」

「待て、落ち着け遥。銃を下ろせ」

銃口から目を離せないまま、俺は言う。

遥の人差し指はすでに引き金にかかっている。遥がほんの少し俺を殺そうと思うだけで、俺の頭は7・62mmの高速弾で撃ち抜かれる。俺に復活する能力はないし、死者蘇生のカードは現実にはない。つまり、死ぬ。

遥を説得するか、トカレフを取り上げなければ。俺がそう考え、口を開こうとしたその時だった。

「……岩崎さん？」

その声は、遥の背後から聞こえた。遥は振り返り、俺にも声の主がわかった。

咄然としてこっちを見ていたのは、倉庫から出て来た緒方だった。緒方は「何やってんのあんたら」とでもいうかのように、俺達を見ている。

銃を構えたまま振り返った遥は、当然銃口を緒方に向けていた。銃口を突き付けられたことに気づいていないのか、はたまた何が起き

ているのかわからないのか、緒方はその場から動かなかった。

「緒方——」

逃げる。俺がそう言う直前に、

遥のトカレフから、火が噴いた。

トカレフの銃口の先に立っていたのは緒方だった。

放たれた弾丸は、まっすぐ緒方の胸を貫いた。一瞬遅れて（俺にはそう見えた）、その背中から貫通した弾丸と血が噴き出す。

緒方は一瞬血を噴き出す自分の胸を見た後、何が起こったかわからないといった表情のまま床に崩れ落ちた。

「緒方あ——っ！！！」

俺は絶叫し、倒れた緒方に駆け寄る。廊下の床に、緒方から流れ出る血溜まりが急速に広がっていく。

「しっかりしろ緒方！意識を保て！」

「…………あれ、武さん。俺、何が起きたんですか……………」

そう言いつつ、自分の胸を見た緒方は、それでも何が起きたかわからないようだった。

当然だ。同級生に撃たれると予想しているヤツがどこの世界にいる？

「どうした！？何が―――」

銃声を聞いたのか、モニター室からリサさんが飛び出てきた。リサさんはまず床に倒れる緒方を見、続いて視線を上に向けて拳銃を構える遥を見た。

リサさんも何が起こったのか瞬時に判断出来ないらしく、呆然と立ち尽くす。

やがて銃声を聞いたのか、倉庫の扉を開けて皆が廊下の様子を見た。あちこちで悲鳴が上がり、連鎖的に悲鳴が広がっていく。

その中で俺は、一生懸命緒方の止血をしようとしていた。銃剣を抜いて学生服を切り裂き、傷口を露出させる。

弾丸は緒方の右肺を貫通したようだった。胸壁が破れて肺が傷ついたらしく、緒方が水から飛び出た魚のように口をパクパクと動かして、必死に呼吸しようとする。

胸壁が破れて肺が気圧で収縮しているのだ。上手く呼吸が出来るわけがない。たちまち唇が青紫色に変色する。

「どいて!!」

倉庫から飛び出してきた医師の宮田氏が俺を押し分け、早速応急手当を始める。俺の居場所がなくなり、遥の方を向いて怒鳴る。

「なんで撃ったんだ!？」

銃口が俺の方を向いている事は関係なかった。これが事故だとしても、俺は怒鳴らずにはいられなかった。

遥はしばらく無表情のままだったが、俺の怒鳴り声で我に帰ったようだった。まず手にしたトカレフを見て、続いて床に倒れた緒方を見、最後に床の血溜まりを見た。そして、自分が何をしたのか気づいたようだった。

「・・・・・・・・え、あ、嘘。わたしはそんなつもりじゃ・・・・・・・・」

「

さきほどまでの殺気は消え失せていた。遥はいつもの遥に戻り、そしてがたがたと身体を震わせる。

「違う、違う、わたしはこんなことをしたかったんじゃない――」

「おい、遥・・・・・・・・」

俺は急に遥が心配となり、声をかけた。だがそれより先に、遥は、

「いやああああああああああっ!!」

遥は叫び、銃を床に落とし、踵を返して駆け出した。遥の先にあるのは――。

「遥ちゃん！そっちはダメっ！！」

倉庫から出て来た亜衣が叫んだ。が、それより早く、遥はそのシャッターを開いてしまう。

ゾンビが徘徊するモール内と警備室を隔てる、唯一の障害を。

無我夢中で壁のボタンを押した遥は、シャッター充分な高さまで上がった瞬間に警備室から飛び出た。シャッターは頑丈でゾンビに破られる心配はなかったのだ、バリケードなどは全く築いていなかった。

ボタンを押すだけで、シャッターが開く状態だったのだ。

「ヤバイ、早くシャッターを………」

麻衣が叫び、シャッターを閉めようと駆け出した瞬間だった。

呻き声と共に、警備室へゾンビの群れが侵入してきた。

遥が飛び出て行った時、廊下の前にゾンビはいなかった。だがシャッターが開いたことによって俺達^{人間}の臭いがゾンビに届き、それに釣られてやってきたのだろう。

一際大きな悲鳴が上がり、皆が倉庫に慌てて戻っていく。

「撃って！ゾンビを近づけさせるな！！」

リサさんが叫び、M93Rマシンピストルを抜いて発砲する。三点バーストの射撃音とともに、ゾンビが頭を撃ち抜かれて斃れる。

俺やゴリもUSP拳銃を抜き、向かってくるゾンビに発砲する。警備室の廊下は狭く、刀や斧といった長物を振り回すのには適していない。

いや、そんなことよりも走るゾンビの方が心配だ。今侵入してきているのは以前からいるのろまなゾンビだが、走るゾンビが警備室に入ってきたら、阿鼻叫喚の地獄絵図が繰り広げられることになる。

USPを撃って撃って撃って、気づいた頃にはゾンビはすべて床に倒れて動かなくなっていた。数は20体以上いたのだろうか。

そんなことよりも遙が心配だった。遙は警備室を飛び出していったきり、戻ってこない。

今すぐ追いかけていたいところだったが、警備室の皆も心配だ。緒方はぴくりとも動かず、宮田氏が懸命に救命処置を施している。

だが周りを見ると、皆はすでに武器を手にとり、戦う準備を整えている。何事かと思って美雪にきく。

「何って、遙ちゃんを追いかけるんでしょ！！」

告白したことによる気まずさはどこへいったのやら、美雪は俺に怒鳴った。

そんな俺へ「武、これを！」とリサさんがベネリM3散弾銃を投げてきた。ついでにシエルの収まったケースも受け取り、俺もようやく遙を追う決心を固めた。

「皆離れんなよ！走るゾンビは真っ先に倒すんだ！」

俺はそう言って、上がったままのシャッターからモール内へと飛び出した。俺のあとに皆が続き、遥を助けるべく走る。

警備室のすぐ近くには服屋がいくつも並んでいる。そしてモールのあちこちをゾンビが徘徊していた。

俺達の臭いに気づいたのか、ゾンビ達が呻きながらフラフラと近寄ってくる。のろまなゾンビなので脅威度は低く、俺達は相手にせず遥を追う。

『遙ちゃんはアミューズメントエリアに向かっとなる！早く追いつくんじゃ！』

無線機から監視カメラで遥を追跡している田中の声が聞こえたが、その声は途中で麻衣の叫び声に掻き消された。

「走るゾンビの団体さんが来たぞ！！」

その声で振り返ると、角を曲がって何かが吠えながら俺達を追ってきているのが見えた。

キビキビシャカシャカと両手を振り、猛然と走ってくるそれは、昨日からモールへと侵入している走るゾンビだった。しかも一体や二体ではなく、十数体が俺達目掛けて殺到してくる。

亜衣が弓に矢をつがえ、麻衣が刀に手をかける。ゴリが散弾銃に初

弾を装填し、奈津美と美雪が短機関銃をそれぞれ構える。俺もベネリM3を構えたが、美雪に怒鳴られた。

「行って！ここはわたし達がなんとかするから、武は遙ちゃんを追いかけて！！」

美雪の言葉に皆が頷いた。俺は皆を信頼し、「後は任せた！」と再び走り出す。

「お前ら、死亡フラグを回収すんなよ！！」

「フラグはへし折るもんだってあんたも言ってたでしょう！！」

奈津美が元気に答え、俺はアミューズメントエリアへ向かう。背後で激しい銃声が響き始めたが、俺は振り返らずに走り続ける。

アミューズメントエリアにいるゾンビは少なかった。俺は田中氏の連絡を聞きつつ、指示された方向に走る。

廊下を走り、階段を上ろうと角を曲がった時だった。注意せずに角を曲がった俺は、そこにいたゾンビと出会い頭にぶつかりそうになった。

そのゾンビはぶつかりそうになって初めて俺に気づいたようで、俺の姿を見るなり吠え、目を見開いて走りだそうとした。

「よりによって走る方がよ……！！」

俺は呻き、掴みかかろうとしてきた走るゾンビを散弾銃の銃床で殴りつける。銃床の一撃を顔面に食らったゾンビが姿勢を崩したところに、すかさず抜いたブッシュナイフを頭に突き立てた。

クリスマスケーキの板チョコよろしく頭をがち割って突き刺さった
ブッシュナイフを抜き、階段を駆け上がる。

遥はどうやら屋上に向かったらしい。自殺とか考えてくれるなよ・
・・・!!

俺が息を切らしつつ屋上へ上がると、遥の悲鳴が聞こえた。

「いやーっ！来ないでっ！！お兄ちゃん助けてっ！！」

その声で再び身体に力がみなぎる。屋上に通じるドアを開いた俺が
見た光景は、ゾンビに取り囲まれて屋上の淵に立っている遥の姿だ
った。

運の悪いことにアミューズメントエリアの屋上は工事中で、転落防
止用の冊が無かった。遥はこれ以上後退することが出来ないらしい。
バランスを崩したら5階の高さから地上へ真っ逆さまだ。

「伏せろ、遥！！」

叫び、ベネリM3を構える。ポンプアクションでは時間がかかるの
で、セミオートに設定する。

遥がその場にしゃがんだのを見るやいなや、俺は引き金を引いた。
強い反動と共に散弾が吐き出され、遥を取り囲むゾンビの群れに襲
い掛かる。

セミオートでの発砲なので、一々ポンプアクションをする必要はな
い。次々引き金を引き、ゾンビの壁を削っていく。

だがその分弾が無くなるのも早かった。弾が無くなったベネリをそ
の場に置き、歩きながらUSPを抜き、撃つ。

遥に釣られていたゾンビが何体かこちらを向く。その頭に9mm弾

を叩き込み、空になった弾倉を交換。さらに近づいていく。

だが後少して遥の周りのゾンビがいなくなるという時に、俺が射殺したゾンビの一体が遥の方へ倒れ込んだ。

それに驚いた遥は、思わず姿勢を崩してしまった。身体が大きく後ろに傾く、後ろには何もない。

「きゃああああっ!!」

「遥っ!!」

俺は叫び、遥のもとへ走った。ついいつものクセでUSPを右太股のホルスターに納め、転落した遥をギリギリのところで掴む。

遥は今や宙ぶりの状態だった。俺は右手で遥の手首を掴み、左手で屋上の縁を掴んで身体が持つて行かれるのを防ぐ。俺の右手を支点に、遥の身体が空中で大きく揺れた。

「遥、手を離すな!!」

「お、お兄ちゃん……」

俺は歯を食いしばり、右腕の激痛に堪える。遥の全体重を右手だけで支えているのだ、肩か手首が脱臼してもおかしくない。

ずるずると屋上の端へ引きずられながらも、必死に足を動かして踏ん張る。左手で俺と遥の全体重を屋上に留めるのは激痛を伴う。

「ごめんなさいお兄ちゃん! わたしが変なこと言って、皆をめちゃくちゃにして、緒方くんにも酷いことを……」

「そんな事今はいい! 警備室に戻って後で皆に謝ろう。だから、絶対手を離すなよ!!」

「お兄ちゃん……」

遥はそう言って目を潤ませた。どうやらすっかり正気に戻ったらしい。いつもの遥に戻ったことに安堵しつつも、身体に力を込め、少しずつ遥を引き上げようとする。

だが、その時、

背後から、足音が聞こえた。

恐る恐る背後を振り返る。

そこには、ゾンビが一体立っていた。

よりによってこんな時に・・・・・・・・！！

ゾンビは俺の姿を見るなり、こちらへ駆け出した。走るゾンビだった。

距離はわずか十数メートル。一步ゾンビが足を踏み出す度、距離が縮まっていく。

距離が数メートルを切った。俺は無我夢中でU S Pを抜き、片手で狙いもつけずに撃つ。

一発目は外れた。二発目がその脇腹をえぐり、三発目が右肩を貫く。四発目でようやく頭が撃ち抜かれ、情性で走ったゾンビは屋上から虚空へとダイブしていった。

「よし！遙、今引き上げ……」

俺はそこで、自分が最悪の間違いを犯したことに気づいた。
俺の頭の中で、もう一人の俺が呆れたように言った。

よう大馬鹿野郎、てめえに質問がある。耳かっぽじってよく聞けよ。

質問その一。今拳銃を握っているのはどっちの手だ？

質問その二。さっきまで遙を掴んでいたのはどっちの手だ？

「そんな——そんな——俺は——」

その呟きに、頭の中の俺が言った。

答えは両方とも「右手」だよ、このクソヤロウ。

目の前に、遙はいなかった。

これは嘘だ。夢だ。恐る恐る屋上から下を見る。

下の駐車場に、少女が倒れていた。手足が変な方向に折れ曲がり、赤い液体が頭を中心に放射状に飛び散っている。

あれは遥だって、いい加減認めろよ大馬鹿野郎。自分の命を優先するがあまり、従姉妹の手を離すなんて本当にマヌケだな。

俺はゾンビを倒すことを考えるあまり、遥の手を離して拳銃を撃っていたのだ。

「あ、あ、あああああああああああああつ!!!!」

俺の絶叫が、周囲にこだました。

第50話 岩崎武最大の失敗（後書き）

次回予告

第51話..

「幻覚」

第51話 幻覚（前書き）

前回のあらすじ..

遥、死亡。

第51話 幻覚

『ねえ………なんでわたしを死なせたの?』

違う、俺はお前を助けようとしたんだ。あんなことになるなんて思っ
てはいなかったんだ。
わざとじゃない、あれは事故なんだ、遥。

『ねえ、なんで? ねえ?』

その言葉と共に、遥が顔を上げた。

その顔はスイカのように砕け、乱れた髪の中から血が滴っている。
手足は変な方法に折れ曲がっていた。

『どうしてわたしを殺したの? おにいちゃああああああんっ
っ!!?』

そう言って、遥は俺に飛び掛かってきた。

「うわああああああっ!？」

俺は叫び声とともに飛び起きた。

身体中が汗でグシャグシャだった。荒い息と共に周囲を見回し、ここが警備室の配電盤室だということを知る。

「大丈夫、武? うなされてたみたいよ?」

俺が起きたのを見て、部屋の隅でうずくまっていた美雪が顔を上げた。心配そうに手を伸ばしてきたが、俺は呼吸を整えつつ言う。

「俺は——いつからここに?」

「武が戻ってこないのを心配して見に行ったら……その……」

俺は遥の手を離した以降の記憶がない。放心状態で何があったのかもわからない。

美雪が言うには、屋上で呆然としていた俺をゴリが運んできたのだという。そしてその際、下の駐車場で遥が死んでいるのを見た。

俺が遥を死なせた一部始終は、屋上に設置されていた監視カメラの映像を見て皆が知っているという。皆は事故だということがわかってるので、俺を責めてはいないと美雪は言った。

「そうだ。緒方は……緒方はどうなった」

俺が尋ねると、美雪は力無く首を横に振るだけだった。

——俺のせいで、二人も死んでしまった。

「——クソツタレ!!!」

その事実には、俺は思わず壁を思い切り殴りつけていた。拳がじんじんと痛み、鈍い音が配電盤室に響く。

その様子を見て、慌てたように美雪が言う。

「武、あれは事故だったんでしょ？ だったら」

「・・・悪いけど、しばらく一人にしてくれ」

「でも・・・」

「頼むからっ!!」

そこでしばらく間を開け、続ける。

「心を、整理させてくれ」

俺の言葉を聞いて、美雪は渋々といった感じに立ち上がり、心配そうにこちらを見つつ配電盤室から出ていく。

ようやく一人になったことで、今まで堪えていた涙が溢れ出した。

「・・・っ、く、う・・・」

外にいる皆に気づかれないよう、歯を食いしばるが、声を抑えるのは難しかった。

俺のせいで二人も死んだ。いや、俺が殺したようなもんだ。

遙を追いつめておかしくさせたのは俺だ。そしてその遙に銃を撃たせ、緒方が死ぬ羽目になったのも俺のせいだ。

そして俺は自分の身を優先するあまり、遙の手を離してしまった。
遙に「手を離すな」と言ったばかりだったのに――！！

遙は、俺が手を離れたのを見て、最期に何を思っただろう？手を離した俺への怒りか？恨みか？信賴していた人間に殺されることに絶望したまま死んだのか？

言い訳するつもりはないが、片手で遙を掴んだまま、寝そべった状態で拳銃を抜くのは無理だった。左手で右足の拳銃を抜くのは、身体の構造上難しい。左手で拳銃を抜いたら、支えを失って遙もろとも俺は転落していた。

だが、もっといい方法があったんじゃないか……！！？

俺は拳を強く握りしめ、手の甲で涙を拭った。だが、後から後から涙は溢れ出し、床にいくつものシミが出来る。

もし銃があったなら、今すぐ頭を撃ち抜いていただろう。だが俺の武器はナイフなども含めて全て取り上げられていた。俺が自殺するのを防ぐために、リサさん達が回収したんだろう。

俺は唯一の親類を失った。もう俺には、守るべきものは何もない。

『よう、クズ。お前のヘマのせいで二人も死んだな』

その言葉で俺は顔を上げた。そしてそこに、いるはずのない人間がいることに気づく。

『あーあ、お前に俺も殺されたし、これでお前が殺したのは何人になるんだ？ああ？』

「なんで、お前が……」

配電盤室の壁にもたれ掛かり、俺を嘲笑っているのは、死んだはずの関口だった。

そんな、お前は俺が殺したはずだ。なんでここにいるんだ!?

『あ、そうだっけ。俺はお前に殺されたんだよな』

関口はそう言って、俺を指差す。

関口は壁から離れ、配電盤室の中をうろつきはじめた。

『間抜けで傲慢なお前は、俺の存在を認めたくはないんだな。本当にクズだな』

「・・・・・・傲慢だと?」

『ああ、傲慢だな。皆を守るとか息巻いておきながら、自分の従姉妹を自分で殺すなんてな。しかも自分が生き残るために』

「あれはわざとじゃない!!」

俺は関口へ怒鳴った。だが関口は、呆れたように続ける。

『故意にしろそうでないしろ、お前が殺したのは事実だろ? しかも「手を離すな!」とかカッコつけときながらさ』

「黙れよっ!!」

叫び、そして関口に殴り掛かる。

だが俺の拳がその頬をえぐる直前に、関口の姿はふっと掻き消えた。目標を失った俺の拳は、勢いよく壁にぶちあたる。

俺が慌てて周囲を見回すと、関口は俺の背後に移動していた。

『俺すら殴れないお前が、他人を守るなんて傲慢以外の何物でもないだろ? あ?』

「黙れつつってんだろ!!」

そこでもうやく俺の叫び声に気づいたのか、ゴリが配電盤室に飛び込んできた。

「どうした武!？」

「あそこ・・・あそこに関口が・・・」

俺はそう言いつつ、関口を指差した。だがゴリは俺の指し示した方向を見て、怪訝な表情をする。

「・・・関口? あいつはお前が殺しただろ? 関口なんていないぞ?」

「いるだろ、あそこに!」

『はい関口です。やあ、クズな岩崎の友人その1』

関口は笑顔で手を振りつつ、辛辣な言葉を浴びせ掛けてくる。
「なんでだ!?! 関口はあそこにいるだろう、なんでわからないんだ!?!」
関口に殴り掛かろうとした俺を、ゴリが慌てて抑えた。柔道をやっているゴリががちり抑えているので、俺は動けない。

「あそこに関口がいるんだ! 放せゴリ! 奴をぶっ殺してやる!!」

「落ち着け武! 関口なんてどこにもいない!!」

「あそこにいるだろ! なんでわからないんだよ!?!」

ゴリのホールドを逃れようと暴れる俺。騒ぎに気づいたのか、リサさんや美雪達も集まってきた。

どうやらここにいる人間の中で、関口が見えているのは俺だけのようだった。しばらくして落ち着いた俺を、リサさんがモニター室に

呼ぶ。

配電盤室を出ていく直前、関口はこう言った。

『皆を守るだあ？自分一人を守るために大事な従姉妹を殺したお前に、誰かが守れんのかあ？なあクズ？』

モニター室にはリサさんしかいなかった。どうやら美雪達には出て行ってもらったらしい。

幸いなことにリサさんは、「大丈夫か？」ときいただけで、遥の一件のことは何も尋ねてこなかった。

「・・・・・・・・大丈夫です」

そう答え、俺を呼んだ訳を尋ねた。

どうやら今回のゾンビ発生事件の首謀者らしき人間がわかったらしい。そんなこと俺が知ってどうなる？遥と緒方が帰ってくるんですか？そう言おうとしたが、やめた。

俺のヘマのせいで遥と緒方は死んだ。今そんな事を言ったら、リサさんへの八つ当たり以外の何物でもない。

「わたしが研究所で入手したデータの中に、アルカディア製薬上層部による調査報告と警告があった。どうやらゾンビ発生後も上層部は犯人の調査を続けたらしい」

リサさんはそう言ってノートパソコンの画面を俺に向けた。

画面にはPDF形式の文章がズラツと並んでいた。ところどころに画像の添付データがある。

「『……以上の点から、ミレニウム社所属研究員である前^{えだ}田 クリスが実行犯である可能性が高い」。……で、これが俺と何の関係があるんですか？」

「関係があるも何も、彼女は以前、君のお父さんの部下だった研究員だ。そしてTI治療薬が人間を変化させることがわかって研究を封印した時、研究を持ち逃げしてミレニウム社に移籍したんだ」

それを聞いて、若干その女への興味が湧いた。親父のことを知っていて、尚且つこのゾンビを発生させたかもしれないなら、俺にはそこから話を聞く義務と権利がある。

ゾンビが発生したことで多くの人間が死んだ。遙や緒方も、ゾンビさえいなければ、死なずに済んだんだ。

——俺が罪の意識から逃げるための、口実でしかないのかもしれないのだけど。

だが、今更それを知ったところでどうなるんだ？

「前田クリス」と書かれたファイルの画像データを開く。すると画面には美人な若い女性が映し出される。

名前や顔写真から判断して、どうやら日系人らしい。年齢は25とある。

「で、コイツをどうやって捜すんです？こんなゾンビだらけの世界で？」

「多分この女が走るゾンビを作ったんだろう。証拠に、この一週間で豊島市内で目撃されたとある」

「確証はないんでしょう？もう移動してるかもしれない。ムダですよ」

そう投げやりに言った俺に、リサさんは溜め息を吐いて言った。

「君はいつからそんなに無気力になったんだ？あんな事があってショックだとはいえ、いつまでも自分を哀れんでいる暇は無いんだ」
「自分を哀れむ、ですって？そりゃあ無気力にもなりますよ。俺が遥を殺したんだ、犯人がわかったところで遥と緒方は戻って来ないんだ！！」

最後の方では、俺は思わず叫んでいた。

リサさんに言われた通り、俺はもう何に対しても気力が出ない。死んでもいいとすら思っていた。

どうせ俺なんか、口だけの男だ。皆を守るなんて息巻いておきながら、自分で守るべき遥を死なせた。緒方も巻き添えになった。我が身可愛さに生き残ることを優先してこのザマだ。

俺がいなくなつて、皆は生き残れるだろう。何たって俺より身体能力が優れている、俺みたいなヘマをする心配もない。

だから俺はいなくなつて構わないんだ。むしろ、いてはいけないんだ。そうリサさんに叫んだ。

すると、いきなり頬をひっぱたかれた。

叩かれた痛みに驚き、呆然とリサさんを見た俺に、リサさんは言っ

た。

「甘えるのもいい加減にしろ！もう世界は以前と変わり、死と暴力で満ち溢れている、君はもう子供ではいられないんだ！いつまでもウダウダ言っているようなら、自分だけでなく皆を死なせる事になる！！」

リサさんは俺の襟首を掴むと、壁に身体を押し付けた。顔を近づけて、続ける。

「いいか、死にたいんなら一人で死ね。皆を巻き込むな。それが嫌なら現実を受け止めて、起きた事にいつまでも悩まずに、前だけを見て進むんだ」

リサさんの言葉により、ようやく俺は目が醒めた。

俺がいくら泣きわめき、悩んだところで遙と緒方は戻ってはこない。俺は二人を死なせた現実を認めるしかないのだ。

そして二人分の命の重みを背負い、過ちを糧にして進んでいくしかないのだ。失敗を二度としないよう、その経験を活かす責任がある。

『な〜に勝手に納得しちゃってんの、お前？』

その声で背後を振り返る。また関口が、空いている椅子に腰掛けていた。

『お前が人を殺したことに変わりはないだろ。俺だってお前に殺されたんだぜ、他にもいっぱい。それを美化したいだけだろ?』

「黙れ、俺はお前とは違う。俺は皆の死を背負って、生きていく。だから皆の死は無駄にしない!」

いきなり俺が叫んだことに、リサさんがぎょっとしたように関口の方を見た。そして怪訝な顔をする。

おそらく関口の姿は俺しか見えていないのだろう。つまり幻覚だ。これで俺も、精神異常者の仲間入りか。

『ま、そんな傲慢なお前がこれから何人死なせるか、楽しみだよ。これから何度でも、俺は姿を見せてやる』

関口はそう言って、ふっと姿を消した。

俺のこれからの生き方は決まった。俺は死を受け止める。死を受け止めたうえで、前を向いて進むしかないのだ。

傲慢だっていい、皆を守る。その思いが重要なのだ。

立ち止まるな。振り返るな。前だけを見ろ。過去にこだわらず進め。

『――頑張ってね、お兄ちゃん』

どこかで、遙の声が聞こえた気がした。

第51話 幻覚（後書き）

次回予告

第52話..

「謎の女」

あと数回でこの物語は終了します。

第52話 謎の女（前書き）

前回のあらすじ..

武、精神に異常あり。

第52話 謎の女

ヘリが来るまであと1日。

6日目。

遥と緒方の死を受け止め、皆と生きていく決意を新たにした俺は、早速皆に謝った。今まで俺は甘えていたのだ。

だがもう俺は子供じゃない。遥と緒方の死は俺の考えを変えた。もう俺は迷わない。

皆はそんな俺に、以前のように暖かく接してくれた。遥を死なせた事も責めなかった。そのおかげで俺は、皆を守る意思がより固くなる。

今の時刻は午後6時。午前中は皆疲れていたので休みとし、十分な休養を取った上で明日の脱出計画を練っている。

以前の計画ではニコライ氏が操縦するヘリがモールに到着するのを待ってから、モール内を移動し、俺とゴリが以前使った家具館の商品搬入所へ向かう。そこにあるマンホールから下水道に降下してモールから離れ、駐車場の外にあるマンホールから外に出る。ゾンビはモールに惹かれていたので駐車場の端にはおらず、安全に着陸したヘリに乗り込む――ということだった。

仮に（というか確実に）ゾンビに気づかれてもその動きはのろく、倒すなりスルーするなりの対処ができた。そもそも駐車場は広く充分な距離があるので、ゾンビが到達する前に離陸することが出来ただろう。

だが走るゾンビがその計画を台なしにした。

まず家具館へ向かうことが出来ない。20名近くの生存者を護衛しながら移動するのは困難だ。こちらには特殊部隊や研究所、さらにはヤクザから回収した生銃が生存者に行き渡る分あり、また使い方も教えてある。

だがオリピック選手並の速さで走り、頭を撃ち抜かない限り死なないゾンビを数十、そしてのろまながらも怪力で臭いを辿ってどこまでも追いかけてくるゾンビが万単位でいるのだ。こんな中を脱出出来るのは、それこそセガールかスタローンかシュワルツェネッガーくらいしかないだろう。

仮に下水道にたどり着いても、地上に出た時点で再びゾンビが追いかけてくる。着陸したヘリにすぐに殺到してくるだろう。

はい、終了。ゲームオーバー

なので俺達は代案を練っていた。警備室の屋上は狭くて着陸出来ない。ペイブローヘリコプターは大型で、着陸出来そうな屋上の駐車場を持つ場所にはゾンビが徘徊している。

このショッピングモールは大きく、自動車販売店もある。だがそこにある車に乗り込み、外に飛び出したところで、あっという間に走るゾンビに追いつかれる。走るゾンビは車に追いつくことが可能なのだ。そうなればあっという間に車は怪力で横転させられる。

「ヘリからロープで救助してもらうってのは？」

「それは難しいだろう。ずっとホバリングしていると結構燃料を食う。往復でかなりの距離を移動するんだ、燃料不足になる」

ゴリの提案をリサさんが却下する。すでにいくつもの案が出ていたが、それらは様々な面で問題があり、実現が困難だった。強行すれば確実に大量の死人が出る。

だからといって、いつまでもこのモールに立て籠もる訳にはいかない。ここはすでに死者の楽園と化している上に生存者^{俺達}の拠点が狭い警備室しかないのだ。

「爆弾投げまくりながら、ゾンビの海を突破する？」

「アホか？手榴弾とパイプ爆弾の威力は弱いんだし、しかも数が少ない。全部使ったところでゾンビの10分の1も殺せないさ」

「だよなあ……」

そう麻衣とゴリが言葉を交わすのを聞きつつ、俺は足りない脳を最大に使用して懸命に脱出方法を考えていた。

遥の命を犠牲にしてまで生き延びたんだ、俺は生きなければならぬ。死ぬつもりなんてこれっぽっちもない。

考えろ、考えろ、考えろ……。

どうやったらこの動く死体溢れるモールから脱出出来る？俺はいくらかの危険を伴ってでも、ここから皆を脱出させなければならぬ。

そこで俺は、さっきの麻衣の言葉を思い出した。

『爆弾投げまくりながら、ゾンビの海を突破する？』

・・・爆弾？

だが爆弾を使ったところで、ゾンビを少し減らすことしか出来ない。道を切り開いてそこに自動車で突っ込んでいっても、走るゾンビに追いつかれるのがオチだろう。

だが走るゾンビを何か別のものに誘導出来たら？そうすれば自動車での脱出が可能となる。

だが走るゾンビを誘導する「何か」が問題だ。この場合の「何か」は確実に「人間」だろう。わざわざ走るゾンビを引き寄せるような真似、自殺以外の何でもない。

——だが、やるしかない。

「皆、聞いてくれ。これは皆が絶対反対する提案かもしれない。だが、俺はこのアイディアで多くの人を無事に脱出出来ると確信している」

「・・・そのアイディアって？」

美雪が不安そうにきいてきた。だが、最初から反対するようなことはしない。俺の発言を皆が待っている。

俺はこの周辺の地図を広げた。ショッピングモールの北側へ数キロ行った所に公園がある。充分ペイブロウが着陸出来る広さだ。

そしてここから7キロほど南には、豊島高校がある。俺達が最初にゾンビに遭遇し、死ぬような思いで脱出した思い出（というより悪夢か）の場所か。

学校なので、もちろんグラウンドがある。普通にペイブロウが着陸出来る。

「まず誰かがバイクか何か機動性が高い車両に乗り、派手にショッピングモールから飛び出す。この時点で走るゾンビの多くが引き付けられてバイクを追うだろうから」

「ちょ、ちょっと待ってよ武！そんなの自殺行為だよ！」

美雪が俺の話を遮った。

「美雪、黙って聞いてくれ。これしか方法はないんだ、お前が何かアイデアがあるなら話は別だが」

「・・・・・・・・ゴメン。話を続けて」

美雪がそうバツが悪そうに謝ったので、俺は話を続けた。余計な時間はないのだ。

走るゾンビを引き付けたバイクはひたすら豊島高校目指して走る。

その間に生存者達は自転車販売店から車に乗る。

ショッピングモールを取り囲むゾンビの群れは、俺が自作した硝酸アンモニウムの爆弾を使って数を減らす。問題は硝安爆弾が資材館に置きっぱなしだということだ。

ゾンビが侵入してきたドサクサで、美雪達が硝安爆弾を持ち出す暇は無かったのだという。だからまずは硝安爆弾を回収する事が最優先だ。

そしてゾンビの海を突破したのち、車に乗った皆は北に向かう。そして公園でヘリに回収しもらう。仮に走るゾンビが残っていても数は少数だろうから充分対処出来るし、普通のゾンビは余裕で振り切れるだろう。

「バイクには俺が乗る。昔友達に原チャリ運転させてもらった事が

あるし、運転くらいなら出来る。無免許だけどな」

「待て武、それはかなり無理がある計画だ」

今度はゴリが口を挟んだ。

「その計画だと、公園に向かう生存者は無事にヘリに乗れる。だがお前に危険が全部行く事になる。バイクは生身だから少しでも追いつかれたら終わりだ。そもそも高校にはまだゾンビがいるかもしれない」

「でも、これ以外にいい考えを俺は思いつかない。全員が無事に脱出するのは無理なことだ、だが一人を危険に曝す代わりに残りの全員が無事にヘリに乗れるんだ。なに大丈夫だ、俺もまだ死ぬ気はない」

俺はそう言うってから、皆に意見を求めた。皆俺が一人バイクに乗るのに反対したが、俺は一人一人説得していった。

俺を好きだと言ってくれた美雪は強く反対した。だが俺の根気強い説得に折れ、渋々納得してくれた。

すると突然、リサさんが協力を申し出た。

「わたしがバイクに乗る。君が危険に曝される必要はない」

「いや、リサさんが行くなら俺も行きます。これは俺がやらなきゃならないんだ」

「邪魔になる。それに遙ちゃんを犠牲にして得た命だ、ここで無駄にしてはいけない」

「だからこそです。皆を守るのが俺の義務です、ここから皆を安全に脱出させるって言ったのは俺だからです。それにリサさん一人で運転しながらゾンビに対処するのは難しいでしょ？」

リサさんは俺もバイクに乗ることに難色を示した。だが俺も粘り強く説得していく。

仮にリサさんがゾンビを振り切れないまま高校に到着した場合、確実に戦闘になる。そうなったらリサさんは一人きりでゾンビの群れに立ち向かわなければならぬ。そうなったら、いくらリサさんといえども勝ち目はない。

だが俺がバイクに同乗すれば、リサさんは運転に専念し、俺が走るゾンビに対処する事で危険を排除することが出来る。高校に着く前にゾンビの数を減らせるだろうし、ゾンビが残ったままでも二人なら何とかなる。

俺がそう言うと、最後には苦笑しつつリサさんは同行を許可してくれた。

「武、君は変わったな」

「はい、もう俺は前の俺じゃありません。それにリサさんが昨日ガツンと言ってくれたから、俺は変わったんですよ」

そうだ。俺は変わったんだ。

遥の命を犠牲にして生き残った事を昨日は後悔した。自殺しようと思っただけだ。

だが今は違う。前だけを見て進むしかない。ここまで俺を信じ、ついて来てくれた皆に報いるため、俺は皆をここから脱出させなければならぬのだ。それが俺が遥に出来る供養でもある。

危険？そんなものは百も承知している。だがリサさんが昨日言ったように、この世界にもはや安全な場所などない。

だったらせめて、他の皆の危険を減らすしかない。その結果俺が危険な目にあっても、俺は後悔しない。

脱出計画は、俺の案が採用された。皆が生存者達に計画を伝えたり、武器や道具の調整をしようとした時だった。

今までショッピングモール内の様子を映し出していた監視カメラのモニターが、一斉にブラックアウトした。

「っ！？何があったんです田中さん！？停電・・・・・・・・じゃなさそうですね」

奈津美がすぐさま尋ねた。俺も一瞬停電を疑ったが、天井の蛍光灯は煌々と灯ったままだ。停電が起きたなら、この蛍光灯も消えているはずだ。

警備室の主である田中さんがすぐさまモニターを操作し、映像を復旧させようとする。だが田中さんの努力もむなしく、モニターはブラックアウトしたままだった。

「ゾンビに破壊された訳じゃなさそうね。一斉に消えたし、監視カメラが破壊されたら画面が砂嵐に切り替わっているはずだし」
「そうだな。つか、ゾンビにカメラを破壊するような知恵なんてないだろ」

真っ暗な画面を眺めて、亜衣と麻衣が言葉を交わす。

と次の瞬間、一斉にモニターが復旧した。
だが映っているのはモール内の光景ではない。全てのモニターに、
同じ映像が映っていた。

モニターの中心には一人の若い女が映っていた。やけに美人だった。

あれ？この女どこかで・・・・・・・・。

「・・・前田クリス!!」

リサさんの言葉で、ようやく俺は女の顔を思い出した。

不敵な笑みを浮かべモニターに映っている女こそ、昨日の調査報告
書にあった前田クリスそのものだった。

突然、俺達の装着していた無線機のイヤホンから、女の声が流れた。

『はい生存者の皆さん、わたしは前田クリスです♪この通信を聞
いているんですよ?』

まるでバラエティー番組に出ているアイドルのような、能天気な口
調だった。なんかイラツと感じるのは俺だけではないだろう。

どうやら前田は俺達の無線機の周波数を知っているようだった。監
視カメラをハッキングかなんかして使用不能にさせ、逆に映像を送
ってきているのだろう。

俺達は顔を見合わせ、どうするかをアイコンタクトで相談した。と
りあえずリサさんが皆を代表し、通信に応答する。

「――あなたは誰ですか?」

『茶番は止めようよ♪どうせ知ってるくせにさ。そっちは研究所

からワクチンと治療法を持ち出した、アルカディア製薬の作業員さんでしょ？ いるのはわかってるんだよ♪』

・・・イラッ。

室内にいる全員がイラッとしたのがわかった。

それはそうと、リサさんの事を言い当てたことから、どうやらこの前田とやらは、こっちの様子を知っているらしい。

とりあえずリサさんが皆を代表し、通信に答えつつける。

どうやら前田はこのショッピングモールにいるようだ。というのも、前田の背後にショッピングモールの外壁が映っている。空が見えるので、屋上の駐車場にいるらしい。

「用件は？」

『そっちに岩崎武くんはいるかな？ 岩崎博士の息子さんだけど。いるのはわかってるんだよ？』

前田がそう言った直後、再びモニターの画面が切り替わった。

こんどは監視カメラの映像だった。数日前のもので、画面に生存者を捜してモールをうろつく俺の姿が映っている。

前田は俺に用があるらしいので、さっさと無線に出ることにした。居留守を使ったところで、事態がどう変わるといってもない。

「・・・岩崎武です。何の用でしょうか？」

『やあやあ岩崎くん。ちょーっと君に会いたいと思ってね』

「俺とあんたに何か関係があるとは思えませんが」

『君のお父さんについての話に興味はない？』

「ないです。親父には悪いけど、今は死人に構っている余裕はないんです」

俺がそう言うと、画面の中の前田が大きく溜息を吐いた。同時に、イヤホンからも前田の溜息が聞こえてくる。

『そんなにバツサリと切り捨てないでよ。来たらいいこと教えてあげるからさあ』

・・・イラツとする。無線機を握り潰したくなってきたぞ。

俺は無線機のマイクを押さえつつ、リサさんにどうすればいいか尋ねた。リサさんも含めた室内の全員が、妙なテンションの前田に困惑しているようだった。

「頭イカレてんじゃないの？」

奈津美が簡潔にまとめる。うん、俺も同意見だ。

「武はどうしたいんだ？」

「ハッキリ言って危ない雰囲気しかないけど、まあ行ってみようと思います。何か有力な情報が得られるかもしれないし」

「危険だ。外には走るゾンビがウヨウヨいるんだぞ」

ゴリがそう言ったが、直後、再び前田からの通信が入る。

『あ、そうそう。モールの中のゾンビは全部片付けておいたから、安心して来ていいよ』

またモニターが切り替わった。今度はモール内の監視カメラの映像だ。しかも今現在の映像だ。前田の言った通り、監視カメラの映像にはゾンビが全く映っていない

い。いくつもあるモニターのどれにも、ゾンビは見当たらなかった。昨日までは常にモニターにゾンビが映っていた。この数分の間に百単位、単位でウヨウヨいたゾンビが全部、手品のように消え失せていた。

「田中さん、カメラに細工されてるって事は？」

「どのカメラもエラーを表示しとらん。ま、ハッキングかけてモニター乗っ取るような奴なら簡単に合成とかの映像に差し替えられると思うがの」

田中さんが「お手上げ」とでも言うかのように手を挙げた。

つまり、モール内にゾンビはいるかもしれないし、いないかもしれないということだ。前田がこちらの回線に割り込むような芸当をしている以上、監視カメラの映像に信憑性はない。

——だが。

「俺、行ってくるよ」

そう言うと、一斉に皆が俺の方を向いた。俺、何かヘンな事言ったか？

「本気か武？この映像は偽物で、今もゾンビがさ迷っている可能性があるんだぞ！罠かもしれない」

「ダクトを使って移動するから大丈夫だよ。ゾンビが一体でもいたり、なんかヤバイ雰囲気を感じたらすぐに引き返すから」

俺が言うと、渋々といった感じでゴリは頷いた。今度は美雪が、声を挙げる。

「武が行くなら、わたしも」

『あゝそうそう、武くん一人で来てね。監視カメラの映像はこっちも確認してるから、仮に誰かがついて来てたらすぐにわかるから』

美雪の声を途中で遮り、前田の能天気な声が流れる。セリフをブツ切りにされた美雪が、舌打ちをしたのは気のせいではないだろう。

前田の指定した場所は、北館の屋上駐車場。先日俺がシューゾーと激戦を繰り広げた場所だ。あそこには今も、燃えて黒焦げになった乗用車がいくつも放置されている。

皆は俺を一人で行かせたくはないようだったが、前田の言う通りこちらの動きは全て監視されている可能性がある。一人で来いと言われている以上、その通りに出向くのが男ってもんだろう。

武器や弾薬を装備した俺は、空調室の換気ダクトの前に立った。傍らには、心配そうに俺を見つめる美雪がいる。

「気をつけてね、武」

「わかってる。俺はまだまだここで死ぬ訳にはいかないんだよ」

俺がそう力強く答えると、美雪は小さく笑って「頑張って」と言ってくれた。

足元には一緒についてこようとするラインがいる。だがダクトを移動するのでラインは連れて行けない。俺はラインの頭を撫で、そして床をみた。

換気ダクトのすぐ傍には、昨日死んだ緒方の遺体が毛布をかけられ

て安置されていた。他に安置する場所がないため一時的に空調室に安置しているだけだが、俺にはまるで緒方が見送ってくれているように感じた。

そういえば、緒方という時は楽しかったな。あいつをいろいろいる事が出来たし、まるで弟が出来たみたいだった。

緒方は俺を恨んではないだろうか？

・・・いや、考えるのはよそう。もう過去は振り返らないって決めたんだ。

「行ってくるぜ、緒方」

俺はそう言って、換気ダクトへ入り、進んでいった。

第52話 謎の女（後書き）

次回予告

第53話..

「前田クリス」

第53話 前田クリス（前書き）

前回のあらすじ..

終盤に入ってまさかの新キャラ。

第53話 前田クリス

換気ダクトの中をフラッシュライトの明かりを頼りに進み、女子トイレに到着した。下でゾンビが待ち構えているかもしれないので、念のため穴から顔を出して周囲を確認する。幸い、女子トイレの中にはゾンビはいない。

もう少し降りるのを待つ。俺の臭いに釣られたゾンビがやって来るかもしれないからだ。

2分待ってもゾンビは現れなかった。つまり、周囲にゾンビはいない。

俺は意を決してダクトから降りた。着地と同時にSG556を構え、いつでも撃てるように安全装置を外して引き金に指を掛ける。いくら前田が「ゾンビはいない」と言っても、「はいそうですか」とホイホイ信用する俺ではない。

死んだばっちゃんも「知らない人を簡単に信用しちゃいけないよ」って言ってたしね。

女子トイレが出た俺は、早速違和感を覚えた。

今までもはや背景の一部と化したと言ってもいい無数のゾンビが、そっくり消えていたからだ。周囲で見当たるのは血痕や死んだ（元々死んでるって何回言えいいのか？）ゾンビだけ。しかも自然死とかそういう原因で死んだのではなく、以前俺達が倒してそのまま放置したゾンビの死体だ。

ゾンビは共食いをしない。ならあれだけいたゾンビはどこに行った

？ハーメルンの笛吹男でもいるのか？

だが移動の障害となるゾンビがいなくなったのは好都合だ。実は俺の周囲にいないだけで、館内の別の場所に移動した可能性もあるもので、用心深く銃構えたまま北館の屋上駐車場へと向かう。

誰もいない店内を小走りで進んでいく。今は夕方なので、壁や天井の窓から光は差し込んでこない。

思えば、俺達がこのショッピングモールにやってきた時もこんな雰囲気だったな。モール内をうろつく生存者は少なく、少し離れた場所に行けばすぐに一人になれた。誰もいない館内を、BGMがむなしく流れていたのも。

床の血痕やゾンビの死体を除けば、モールの中は俺達が来た時そのままだ。

まだ平穏だったと言ってもいい過去を少し懐かしんだ俺は、気を引き締めて前へ進む。さっさとあの前田とやらから情報を入手し、可能なら捕まえて警備室に戻る。それが今の俺の仕事だ。

警備室のある本館から北館に移動しても、ゾンビの姿は一切見えなかった。もはや怪しいどころではなく罌の臭いがしてきたが、かといって引き返すわけにもいかない。

進むしか、選択肢がないのだ。

以前はゾンビが勝手に上へ上へと運ばれていくシユールな光景を繰り広げていたエスカレーターにも、ゾンビの姿はない。エスカレーターを乗り継ぎ、俺は屋上駐車場にたどり着いた。

どこから前田が襲ってくるかわからない。SG556を油断なく構え、ゆっくりと前進する。

ドアのガラス越しに駐車場をそっと見る。駐車場は照明で照らされていたが、どこにも人影は見当たらない。もっとも、その照明もシューゾーとの戦闘でいくつか壊れ、駐車場は薄暗いのだが。

俺は覚悟を決め、堂々とドアを出て駐車場に入った。あのシューゾーも「もつと堂々としてろよお前！」と言ってたし。

「前田クリス！言われた通りに一人で来たぞ、さっさと出てこい！」

俺は威勢のいいことを言いつつ、若干ビビっていた。もしかしたら次の瞬間には、暗闇から銃弾が飛んで来るかもしれない。

するといきなり、背後から声が聞こえた。

「いらっしや〜い」

という能天気な声が。

おいおい、今俺がここに来たばかりなんだぞ？周囲に誰も（ゾンビ含め）いないことを確認した。

なら、今俺に話し掛けた奴は、一体どこから湧いて出た？

俺は恐る恐る、後ろを振り返った。するとそこには、パソコンのP.D.Fに添付されていた写真の女がいた。前田クリスだ。

前田は白衣姿で、しかも拳銃を俺に向けている。

俺は振り返ったことを後悔した。振り返らなければ、銃口を向けられている事に気づかずに済んだのに。

拳銃を向けた前田は、俺に微笑んだ。

「やあやあ、ちゃんと言われた通りに一人で来てくれたんだね。感
心感心」

「・・・・・・俺的には、銃口を向けられたまま会話するのは厳し
いと思うんですが」

「だって、こうでもしないと君はわたしを撃ち殺そうとするでし
よ？」

うん、殺したいね。話してるとイラッとするから。

「じゃあまず、銃を置いて貰おうかな。そうしてくれたら、わ
たしも銃を下ろしてあげる。お互い平和に話し合いたいでしょ？」

そっちが拳銃突き付けてる時点で、話し合いもクソもないと思うん
ですが。てか、上から目線で話を進めるのかよ。

とりあえず、言われた通りにSG556とUSPを地面に置く。い
くらコイツから話し合いと言っているとしても、今の俺には前田が
イカれた危険人物にしか見えない。

だって、拳銃突き付けて話し合おうなんて言う奴がいるか？そんな
事をする奴、俺はアメリカ合衆国くらいしか知らない。

言われた通りに銃を地面に置いたところで、少しその場から離れる。
銃が俺の手に届かないくらいまで離れたところで、前田も銃を下ろ
した。俺をボディチェックすることはない。

「じゃ、何から話そうか。何から聞きたい？」

「お、選択肢があるのか。じゃあまず・・・・・・」

- ↓
1. ゾンビを発生させたのはお前か？
 2. 親父を殺したのは誰だ？
 3. ミレニアム社はこのゾンビ発生事件に絡んでいるのか？
 4. 何で豊島市にいる？
 5. 走るゾンビは何？

よし、ここはサクッとしよう。

「じゃあまず質問その1。このゾンビ発生事件にお前は絡んでいるのか？」

「んゝ絡んでるっちゃ絡んでるけど、質問の仕方が悪いね。それと、お前呼ばわりはやめてちょーだい」

「なら、お前がゾンビを作ったのか？」

前田の願いは敢えてスルー。

「ゾンビを作ったのはわたしじゃないよ。岩崎博士が薬の発展型の実験をした時点で、ゾンビが発生したから」

「実験・・・？ああ確かアルカディア製薬の上層部が、薬を軍事転用しろとか実験を強要したとかいうアレか」

「そーそー。君が大怪我した時に作った薬はうまく人を治療出来たんだけど、それを軍事転用しろってのは無理があってねえ。都合よく筋力強化だの痛覚麻痺だの治癒力向上だの出来る訳ないんだよ」

「たまたま出来た奴を無理矢理軍事転用しようとした結果、ゾンビが出来てしまったと」

「イエス、ザッツライ！！」

・・・イラッとする。殴っていいよね？

話を聞く限り、実験の際発生したゾンビは全部倒されたのだという。

しかもアルカディア製薬はその後同様のバイオハザード事件を何度か起こし、薬は使い物にならないどころか危険だと判断され、封印されてしまったのだとか。

どうやらアルカディア製薬の実験が直接の原因ではないらしい。

「じゃあ質問を変える。ゾンビ発生事件で、お前はどんな役割を担った？」

「うーん。ウイルス作ってそれを世界中のテログループに配ったくらいのことかな？」

・・・それって、お前がゾンビ発生の原因ってことかよ。

俺は前田を殴りたい衝動を必死に抑えた。コイツのせいで世界中で沢山の人間が死んだんだ。

そして、遥と緒方も・・・・・・！！

遥達を直接死に追いやったのは俺だ。だがゾンビさえいなければ、遥はと緒方は、いや、ここにいる俺も含めた全ての人が以前と同じような生活を送っていたんだ。

こんな死と暴力に塗れた、世紀末的な世界へ放り込まれることもなかった。

「・・・なんでそんなマネを？」

「だってえー、せっかくミレニウム社にウイルス手土産に移籍したのに、わたしを冷遇したんだもん。それに、天国のあの人にわたしが優秀だって見せつけたかったんだもん」

「・・・あの人？」

俺がおうむ返しに尋ねると、前田はまるで何かのアイドルのように、笑顔で答えた。

「君のお父さん、岩崎博士だよっ」

「……俺の親父が？」

リサさんによると、前田は親父の部下だったらしい。二人でさまざまな研究を行い、そして親父がTⅠ治療薬を作った際も、その手伝いをしていたそう。

そしてここからはさっきリサさんから聞いた事だが、親父が事故死した直後、前田は未完成の軍事転用した治療薬を手土産にミレニアム社に移ったのだという。

「わたしね、君のお父さんが大好きだったんだよ。あの人のためなら何でも出来たのに、あの人は一向にわたしの方を向いてくれなかった。奥さんはいないのに、わたしとの関係は上司と部下のままだった。君のお母さんって浮気していなくなったんだっけ？」

「ああ、俺が10歳の時に出て行った。だから親父は俺のために一生懸命働いて、俺にいろんなことを教えてくれたんだよ」

「ふーん。で、君のお父さんがアルカディア製薬の上層部から治療薬を軍事転用するよう強要された時、わたしは研究をするように勧めたよ。『この件でもっと上層部に食い込んで、会社を変えていこう』ってね。でもあの人はそれを拒んだ」

「だからあんたが、親父のために研究を進めたのか？」

前田は「大正解！」と言って微笑んだ。

俺はその様子を見て、ある疑念が確信に変わった。最後の一押しをするため、それを尋ねる。

「親父を殺したのは、お前か？」

前田は満面の笑みを浮かべて、答えた。

「そうだよっ」

瞬間、俺の頭の中で何かが切れるブチッという音がした。

それを聞いた俺は素早くしゃがみつつ、学生服のズボンの裾をめくった。そこにある「それ」を掴み、思いっきり引っ張る。

ベリベリという音を立てて「それ」が俺のすねから剥がれた。「それ」に着いていたガムテープの切れ端を引きはがしつつ、前田に向けて構える。

前田はいきなりの俺の行動に驚いたらしく、全く身体を動かしていない。俺は前田の構える拳銃の射線上から逃れつつ、「それ」――P230JP自動拳銃――の銃口を向けた。

こんな奴に威嚇はいらん。俺はその思いで引き金を引いた。

軽い銃声と共に発射された32ACP弾は、射線上にあった前田の左膝に突き刺さった。

前田は激痛に顔を歪め、地面に倒れ込んだ。俺は立ち上がって、前田にP230JPの銃口を向けたまま近づいていく。

前田が取り落とした拳銃を拾う。ベレッタのPX4か、コイツも銃刀法違反者だな。

「・・・まだ、銃を隠し持っていたとはね・・・」

「あん？きちんとボディチェックしなかったそっちのミスだろ」

俺は前田から強奪したP x 4を腰に挿し、ついでにさつき地面に置いたUSPとSG556を拾い上げる。

まだ前田は銃を隠しもっているかもしれない。俺はP230JPを右手に構え、左手で身体を探っていく。

「やん、エッチ♪」

「黙れ。次変な事言ったら全身にありったけの銃弾をぶち込んでやる」

「ぶち込むって、君はヘンタイさんだね」

ああそうさ、俺は変態だ！それがどうかしたか、何か文句でもあんのか！？

そんな事を思いつつ、ボディチェックを続ける。白衣のポケットに入っていたベレッタの予備弾倉を回収した俺は、膝を撃ち抜かれて地面にしゃがむ前田を見下した。膝を撃たれたというのに悲鳴すら上げないとは、よっぽど我慢強い奴らしいな。

「この拳銃はな、俺が警察署で出会った瀕死の警官から貰ったんだよ。腹をかつさばかれて内臓を食い尽くされても死ぬことが出来ずに、ゾンビになりたくないから殺してくれって最期にその人は言ったんだよ！！」

最後の方は叫んでいた。前田は黙ったまま、俺の話を聞いている。

「なんで親父を殺した？」

「だってあの人、わたしを受け入れてくれなかったんだもん。挙句

の果てにわたしの作ったウイルスを『悪魔の研究』呼ばわりして告発しようとしたし。だからわたしはあの人を殺したんだよ、わたしを好きになってくれないならそんな人はいらない」

淡々と語る前田に、俺は目眩を覚えていた。何故だか前田に、遥の姿が重なってしまったからだ。

俺も親父も、歪んだ女の愛で酷い目に遭ったということか。親父は母親に浮気された事もあるし、うちの家計は女運がないのかもしれない。

「いいかクソアマ、俺はいますぐお前をぶっ殺したい気持ちなんだ。俺がもう一回ブチ切れる前に、質問に全部答えろ」

「あれ？ 死んだ人に構ってる暇はないんじゃないの？」
「黙れ」

俺はUSPに持ち替え、前田の身体から数センチ脇を撃った。駐車場のコンクリートがえぐれ、瞬間に破片が飛び散る。

「親父を殺したと言ったな？ 親父は交通事故で死んだと俺は聞いたが」

「交通事故なんてよくある暗殺方法だよ。調べれば交通事故で何十人も重要人物が死んでるから、調べてみれば？」

次の質問に移った。

前田は世界中のテログループにウイルスと偽った生理食塩水を渡した。ワクチンと称したウイルスの入った注射器と共に。

元々世界にはテロを起こしたがつている集団がいくらでもいる。パキスタンで9・11テロの首謀者をアメリカ軍が殺害して以降、大問わずにイスラム系のグループによる報復テロが頻発していた。

前田がウイルスを渡したのも、そういった報復テロを計画していたグループなのだろう。あるいは宗教には感心がない、ただ便乗しただけの小規模なグループも。

前田が渡したウイルスは、時間をかけて人間をゾンビ化させるようになっていた。ウイルスが活性化していない状態で渡したのだ。

そして前田が「ワクチン」と偽って渡したウイルスを、テログループの実行犯は自ら打ってしまった。

自らウイルスに感染したテロリストは、指定された場所でバイオテロを起こすべくとウイルスを撒こうとしたのだろう。だが前田が「ウイルス」と称したのはただの生理食塩水だった。無論、撒いても何も起きない。

だが感染したテロリストは、前田の望んだ通りの場所でゾンビと化した。前田にバイオテロを持ち掛けられた世界中のテロリストが一齐にゾンビ化したため、世界で同時多発的にゾンビが発生したのだ。ゾンビと化したテロリストは、周囲にいた人々に次々襲い掛かった。最初、襲われた人達は酔っ払いに噛まれたとでも思ったのだろう。誰も自分が感染したことに気づかずに動き回り、そして感染を拡大させていった。

人が人を襲う。その事がわかった時には、既に手遅れだったのだ。

話を聞かざりだと、ミレニウム社はどうやらウイルステロには直接関わっていないようだ。豊島市に特殊部隊を送り込んできたのも、ワクチンと治療薬確保のためだけらしい。この混乱の最中ウイルスを確保してあちこちに恩と名前を売り、治安が改善されたら一気にいろいろな方面に進出するつもりだったらしい。

つまり、この事件はほとんど前田が単独で行ったと言ってよいものだった。手足としてテロリストを使ったが、彼らもまた前田に騙さ

れていた。

走るゾンビを作り出したのは前田らしい。元々前田が完成させたウイルスに感染すると、1000体に1体程走るゾンビが生まれることがアルカディア製薬の実験でわかっていたらしい。というかその統計が出ているってことは、アルカディア製薬は研究を放棄するまでに、人間を1000単位でゾンビ化させたってことかよ。

前田は走るゾンビが生まれる事を知り、そちらにも興味が湧いたらしい。そこでゾンビが世界中で発生している最中、わざわざ豊島市にあるアルカディア製薬の研究所に行き、その研究員を実験に使った。リサさんが研究所に行って誰もいなかったのは、前田が研究員を使って実験をしていたからだ。

前田は研究所で少しウイルスに手を加え、走るゾンビを生み出した。前田が作った走るゾンビが人間を噛むと、人間が走るゾンビと化する確率があがるらしい。走るゾンビが生まれる確率が、1000分の1から50分の1になったという。

前田はリサさんが研究所に来たのを知り、走るゾンビ達を解放した。これが走るゾンビが現れた原因だ。

ちなみにリサさんが回収したワクチンと治療薬でも、前田が手を加えたウイルスの感染を防ぐことが出来るらしい。普通のやつと前田が手を加えたやつでは効果に違いはあるが、ウイルスの根っこの部分は同じなので、どちらのウイルスも無力化できるという。まあこんなイカレた奴の話、ホイホイ信用するわけないが。

「次の質問だ。なんでショッピングモールにたくさんいたゾンビが、綺麗さっぱりいなくなってる？」

「いなくなったというか、わたしが外に誘導したんだよね。ある特定の周波数の音波を流すと、ゾンビはそっちの方に行っちゃうんだよ。目の前に人間がいたとしても、興味がなくなっちゃうの」

ついでに前田は、いろいろとゾンビの習性について話した。

まずのろまな、前からいる普通？のゾンビ。こっちは俺の考察通り、臭いを頼りに人間を探すのだという。嗅覚は犬並らしい。目が潰されていても、人間の臭いをどこまでも追ってくるという。

続いて走るゾンビ。こっちは全ての感覚器官が人間並らしい。目を使って獲物を探し、一度見つければ目を潰したりどこかに隠れでもしない限り追い続けてくる。幸いなことに、臭いを辿ることは出来ないらしい。つまり、走るゾンビの視界に一度も入りさえしなければ、俺達が見つかることはない。

ただし走るゾンビはのろまなゾンビが多くいる場所にいるという習性があると前田は言っている。つまりのろまなゾンビに臭いを嗅ぎ付けられたら、同時に走るゾンビも俺達を見つけてしまうということだ。やはり走るゾンビとの戦闘は不可避なようだ。

そしてここからが重要だ。前田の話では、ゾンビに特定の周波数の音波を浴びせれば、その音波の発信源についついゾンビは向かってしまうのだとか。これを利用して、前田はショッピングモールからゾンビを追い出した。

見れば、下のショッピングモールの駐車場に一台のトラックが停まっていた。荷台にはスピーカーのようなものが積まれ、そしてトラックの周囲をゾンビが埋め尽くしている。まるで地面に落ちたお菓子に群がるアリのような光景だった。

あれを利用すれば、ゾンビを効率よく倒していけるんじゃないか？
例えば広い所にスピーカーを設置して音波を流し、ゾンビが群がってきたところを爆撃するとか。

「おい、その周波数とやらを教えろ」

「頼み方がなってないよ、岩崎くん？」

ムカついた俺は、その顔向けて右ストレートを叩き込んでいた。鈍い音とともに、前田が地面に倒れる。

その髪を掴み、乱暴に引き起こした。顔を近づけて、精一杯ドスを利かせて言った。

「いいか、俺はいますぐお前をぶち殺したい気分なんだ。だがお前を殺したら重要な情報がなくなるから生かしておいてるだけだ。何も言わないなら、いますぐお前をここから放り出して、ゾンビの餌にしてやってもいいんだぞ？」

「……無駄だよ、そんなこと」

撃たれ、顔面を殴られたにも関わらず、前田は笑っていた。俺はその壊れたような笑顔にぞっとして、思わず手を話してしまっていた。

「最後にいいこと教えてあげるよ。わたしがなんで豊島市にいまする？」

「……気まぐれだろ？」

「ブブー、残念でした。答えは君がこの街にいたからだよ。なんたってあの人の息子だからね、わたしも死なせたくはないし」

なんだ？ つまり俺がいたから豊島市にいたのか？

俺は親父じゃない。俺が息子だとしても、お前とは何の接点もない。

いくら俺に親父を重ねようとしても、それは無駄なことだ。

「ねえ、わたしと一緒に来ない？ 君は岩崎博士の息子だし、一緒に安全な場所に連れて行ってあげるよ？」

「ふざけんな！ 俺は親父じゃない！ それに誰がお前みたいなイカレた女について行くか！！」

そうだ。もしかしたらあの世に連れていかれるかもしれないし。そもそも、俺は前田を一切信用していない。

それに、コイツのせいで多くの人が死んだ。だから俺にはコイツを警察なり自衛隊なりに引き渡し、裁きを受けさせる義務がある。

それを聞いた前田は、

「残念だよ」

と言って、

普通に立ち上がった。

・・・・・・は？

俺がさつき膝を撃ったんだぞ？ いくら威力が弱い32ACPだって、足を撃たれば誰だって痛がる。立ち上がるのだって無理だ、そもそも足の骨が折れているはずだ。

じゃあ、なんで、

コイツは普通に立ち上がって、しかも痛がっていないのか？

馬鹿みたいに口を開け、啞然としている俺の前で、前田はしゅっと手をショッピングモールの外壁向けて突き出した。次の瞬間、驚くべきことが起きた。

前田の手首から白い糸が飛び出し、20メートルほど離れた南館の壁に張り付いたのだ。

まるで、「正義の味方、スパイダーマッ！」で知られるあのヒーローみたいだった。俺が我に返った時には、前田は数歩の助走と共に大きく宙に舞い上がっていた。

そしてそのまま糸が張り付いた南館の外壁に振り子のような動きでたどり着き、次の瞬間には、クモのように壁を上り始めていた。

俺はこれが現実なのかどうなのか混乱しつつも、ホロサイトを覗いて壁を上る前田へSG556を発砲した。重要人物なので逃がすわけにはいかないのだ。

だが壁を上る前田は、俺が放った弾丸をことごとくかわした。まるで背中に目でもついているかのように、俺が撃った瞬間にひよいと身体を動かし、弾着地点から逃れてしまうのだ。

フルオートで撃った30発の弾丸は一発も前田に当たらず、南館のコンクリートの外壁に穴を開けただけだった。空になった弾倉を外し、別の装填済み30発入り弾倉を取り出した時には、前田の姿は見えなくなってしまうていた。

「クソッ!!」

俺がそう自分を罵った時、突然無線機に通信が入った。
警備室の誰かが俺のだらしなさを見て通信してきたのか？俺はそう
思い、少し落ち込んだ気分では通信に出る。

『やっほー、さっきは大胆だったねー。弾が当たるかと思っちゃっ
たよー♪』

「前田・・・・・・・・！」

俺に通信してきたのは、今人間離れた動きで逃げ出した前田クリ
スだった。

「何のようだこのバケモノ」

『バケモノとは酷いねー。君達には興味が湧いたから、このままシ
ョッピングモールの中にはゾンビを入れないで置いてあげるよ。こ
こに立て籠もるなりなんなり、頑張ってねー！じゃー♪』

「あつ、待てこのアマ・・・・・・・・！」

前田からの通信が途絶えた直後、駐車場から大きな爆発音が上がった。
た。

なんだと思っ慌てて駐車場の端に駆け寄ると、前田が乗ってきた
らしい大きなスピーカーが搭載されていたトラックが、回りに集ま
っていたゾンビを巻き込んで派手に燃えていた。どうやら前田はト
ラックを回収されて周波数を特定されるのを防ぐため、あらかじめ
爆薬をセットしておいたらしい
音波の周波数さえわかれば、それを使ってゾンビを誘導し、安全に
ここから脱出出来たのに。俺は結局危ない橋を渡る羽目になったこ
とに歯がしりした。

するとまた、通信が入った。

「前田か!？」

『わたしよ武、亜衣よ』

「なんだ亜衣か・・・」

『今の言葉、ちょっとグサツと来たわよ。それよりさっき駐車場で爆発があったようだけど、一体何があったの?』

「世界を救う方法が、少し遠退いていったのさ」

少し格好つけて言うのと、『バカなの?』と冷たく言われた。ありがとうございます、我々の業界では御褒美です。

「あ・・・ありのまま、今起こった事を話すぜ! おれは前田に銃を構えていたと思っていたら、いつの間にか前田はスパイダーマツ! と化していた。な・・・何を言っているのかわからねーと思うが、おれも何をされたのかわからなかった・・・頭がどうにかなりそうだった・・・催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなものじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ!」
『な、ナンダッテ! ? とでも言うと思った? アホなこと言う暇あったら、さっさと戻ってきてわかったことを全部話してちょうだい』
「・・・はい」

亜衣が通信をしている理由は、今他の皆が出払っているからだという。モールの中からゾンビがいなくなって行動の障害がなくなったため、入り口を塞いで再侵入を防ぎに行ったのだとか。無論、明日脱出するために必要な硝安爆薬も回収したという。

俺はとりあえず前田から聞いた話をざっと亜衣に話した。亜衣もに

わかには本当かどうか判断出来ないらしく、『早く戻ってきて』と言っただけだった。

下を見れば、さっきまでトラックのスピーカーに引き付けられていたゾンビ達が、再びモールに集まってきている。

ただし唯一出入りが自由だった資材館の入り口は、今やリサさん達によって再びシャッターが閉じられていた。ヤクザ達が暴れた時におっさんがパニックって逃げ出そうとしたから、ゾンビがモールに入ってくる羽目になった。だから、ようやく以前の状態に戻ったと言える。

俺は夕焼けの空を眺めた。陽は大きく傾き、東の空が濃紺に染まっている。

どっちにしても、明日には救助のヘリコプターが来るのだ。そうしたらここからおさらばして、それで……

それで？

ここから脱出して、その後はどうなる？

ゾンビ溢れるこの世界で、安静な場所なんてあるのか？脱出したところでゾンビが駆逐され、治安が回復しない限り、俺達は地獄に放り込まれたままだ。避難所があったって安全や衛生面で完璧とはいえないだろうし、某北斗神拳を受け継いだ7つの痕を胸に持つ男が主人公のアニメみたいな世界が来るだろう。

つまり、ここから脱出したところで安全になるわけじゃない。むしろ

ろ、人間と人間が殺しあうような世界が――――。

いかんいかん、悲観的になってどうする。

きつと自衛隊がゾンビどもをお掃除して、治安が回復するさ。そうすれば、冬のコミケまでには世界は元通りになるさ。

俺はそうポジティブに考え、警備室に戻るべく歩き出した。

――夕焼けに染まった空を見て血の色みたいだと思ってしまい、そして少し鬱になりながら。

第53話 前田クリス（後書き）

次回予告

第54話..

「メタルギアソリッドシリーズの終盤っぽい展開だね。仕方ないね」

第54話 メタルギアソリッドシリーズの終盤っぽい展開だね。仕方ないね（前

前回のあらすじ..

スパイダーマッ！！

第54話 メタルギアソリッドシリーズの終盤っぽい展開だね。仕方ないね

7日目。

ヘリコプターがやって来る当日。

その日の朝から警備室は慌ただしかった。

最低限の自分の荷物をまとめ、リュックに入れていく者。割り当てられた持つて行くべき武器や食料を背負う者。銃を手にし、武者震いしている者――。

その中に俺達高校生グループも混ざっていた。

麻衣は自分の刀の刃を確かめ、亜衣はアーチェリーの矢を筒に入れて肩に担ぐ。奈津美はパソコンをリュックに入れ、ゴリは体格と怪力を活かして大量の荷物を担いでいた。

俺も屋上への階段に腰掛け、銃の調子を確かめていた。SG556カービンの5.56mm弾を30発装弾した弾倉をチェストリグに納め、USP拳銃に弾倉を叩き込む。

今回は近接戦闘用として、さらにTMPサブマシンガンも携行することになっていた。それらの弾倉も携行するとなると、俺の着用するチェストリグは銃弾の重みでずっしりとする。

前田の言った通り、あの後ゾンビがショッピングモールに侵入してくる事はなかった。念のため全ての出入口に爆薬などが仕掛けられていないか調べたが、そんな事もなかった。あんな世界同時バイオハザード事件をやらかした奴なので、銃やら爆薬やら何やらを楽々

調達できるだろうから油断はしない。

ゾンビは再び俺達の臭いに釣られてショッピングモールを取り囲んでいる。モール内のゾンビはいなくなったが、これでは安全に脱出出来ない。そもそも、まだ走るゾンビがたくさん残っている。だから当初の下水道を使った脱出作戦は行えない。

なので昨日俺が提案した作戦を実行しなければならない。すなわち、俺とリサさんが囷になり、ショッピングモールから走るゾンビを引き離れた後に皆が乗った車が出発するのだ。

ショッピングモール内からゾンビがいなくなったことにより、避難民の一部からは「このままここに留まってもいいのでは？」という声が上がった。ゾンビの脅威がモール内から去った今、入口を塞いで以前のように立て籠もり、ゾンビが腐るか自衛隊が市内のゾンビを全部制圧するのを待つという考えた。というか、ゾンビって腐るの？

つまり消極的な生存方法ということだ。

もちろん俺達は説得した。もしかしたら自衛隊が来るのはずっと先、あるいは来ないかもしれない。いくら物資が豊富とはいええ大人数で食料がそれまで保つとは限らない。明日来るヘリコプターに乗らなければ、二度とここから脱出出来ないかもしれない。

その言葉で避難民のほとんどが納得したが、まだ数人がここに残ると言っている。だから俺はここから彼らに最後の説得を行う。もしそれでも脱出するのを拒むなら、俺達は無理強い出来ない。

最初はゴリ達が助けた老夫婦だ。

「本当に、ここに残るんですか？もう脱出するチャンスはないかもしれないんですよ？」

「かまわんよ。わしらは年寄り、皆に同行すると迷惑がかかる」

「それにわたしたちは老い先短いの。避難所で窮屈な思いをするより、ここで二人でのんびり余生を過ごしたいわ」

老夫婦がそう言ったので、俺は彼らは同行しないだろうと確信した。このご時勢に安全な場所がいくらでもあるわけがない。おそらく避難所は生存者でいっぱいになっているだろう。

だったらそんな所で日々ゾンビの脅威に怯えて窮屈に過ごすより、この（とりあえず）安全なショッピングモールで二人で最期を迎えたいのだ。この老夫婦がここから出る時は、豊島市内のゾンビが一掃された時だろう。

彼らがそう決めたのなら、俺には止める事は出来ない。俺は老夫婦と別れの挨拶をする。

「じゃあ俺達は行きます。あなたがたも気をつけて」

「すまん、せっかく助けてもらった命なのに」

「いえいえ、俺にはあなたがたの行動を決める権利はないですから」

そう言って二人と握手をした俺は、次の残留者の説得に向かう。背後で老夫婦が「今時珍しい、いい少年だな」「将来が楽しみですね」と言葉を交わすのを聞きながら。

次の残留希望者は、阿部さんと道下くんだった。二人はここで、二人の楽園を作りたいらしい。

「俺達はこので樂園エデンを作る。一緒にやらないか」

「阿部さん、あなたと道下くんはどちらも男ですよ。アダムとイヴならぬ、アダムとアダムじゃないですか。あとあなた達の場合、出来るのは樂園エデンじゃなくて天国ヘブンだと思うんですが……」

「ぼくは、阿部さんと一緒にいます。だってまだアンナ事やコンナ事を試してないし……」

「道下くん、君はここに残ってナニをする気なんだね？」

俺は溜息を吐きつつ、この二人もここから出て行かないだろうなと思った。外の世界に阿部さんと道下くんヘブンの（ハッテン）場所はない。ここが二人のゲイヘブンの樂園になり、二人は毎日ヘブン状態！になるだろう。

うん、俺としてはここに残りたくはないな。尻の穴を毎日阿部さんに狙われそうだし。

結局、最後まで残るのは老夫婦、そして阿部さんと道下くんの4人だった。彼らはこの地獄で生き延びることは出来るだろうか？阿部さんは手当たり次第にゾンビを掘りまくりそうだが。

俺達脱出組は武器弾薬に加え、食料も持って行く事にした。避難所の食料事情は最悪の恐れがある。もしかしたらずっと少ない食料を配給されるかもしれない。そうなった時に備えて出来るだけ食料を持ち出すのだ。

武器弾薬もあるだけ持って行く。外が無法地帯と化していたら、身を守るために武器が必要となる。武器は多ければ多い方がいい。

無論、ここに残る4人の分の食料や武器弾薬は置いていく。どうか持ち運べる分が少ないので、ショッピングモールに残った食料などは俺達が持つて行く分よりも多い。恐らく、3〜4ヶ月は保つだろう。それに園芸館の肥料や野菜の種を使って屋上で野菜など

を育てたら、食料はもっと増える。彼らの心配は必要ないだろう。

腕時計を見ると、既に17時少し前だった。ヘリがやって来て公園に着陸するのは17時30分。ここから公園までは車で20分ほどかかる。公園でヘリを待つ間にゾンビが集まって来ないよう、ギリギリに到着する算段だ。

俺は脱出の時間が迫ってきたことで、緊張を紛らわせるために大きく息を吸って吐いた。俺とリサさんが出発するのは17時05分、5分後の17時10分に皆は出発する。

「武、ちょっと来て」

亜衣が俺を呼びに来た。なんだと思って亜衣について屋上に行くと、そこでは高校生グループ全員が揃っていた。

「おまえら、そろそろ出発だぞ。準備は出来たのか？」

「出来てるぜ。それより、最後のミーティングやろうぜ」

麻衣が言ったが、俺にはミーティングなんてやった記憶はない。そんな事を言うと、皆から「細かいことは気にしない！」とつつこまれた。

どうやらこの豊島市を離れる前に、最後の顔合わせをやっておきたいようだ。仮にヘリに乗ってここから脱出しても、この先皆がバラバラに分散する可能性がある。一緒にいられる内に、反省会的なことをしようというのだ。

まずゴリから始めた。

「じゃあ、まず武には礼を言う。お前のおかげでここまで来れた。お前がいなかったら、多分高校で俺は死んでいただろう。本当にあ

りがとう。

それと亜衣、お前の料理は美味しかった。俺も精進してお前みたいな料理を作りたい。

麻衣、お前と俺はいつも一番前に立って戦っていたな。これからもよろしく。

奈津美、実を言うと、俺はお前みたいな奴がタイプなんだ。

美雪、お前の料理は化学兵器並の酷さだった。だから俺がこれから料理を教えてやる」

ゴリの「奈津美がタイプ」発言に、皆がゴリと奈津美を冷やかす。ゴリは顔を真っ赤にして、「言わなきゃよかった・・・」と後悔しているようだ。

次は奈津美だ。

「武、お疲れ様。あんたのおかげで高校で死なずにすんだ。礼を言うわ。

美雪、あんたはわたしの最高の友達よ。これからもよろしくね。

五里くん、あなたは縁の下の力持ちだよ。まるでお父さんみたいだった。あとあたしをタイプって言ってくれてありがとう。

亜衣、高校でゾンビに囲まれてたあたしを助けてくれてありがとう。

あんたがいなきゃあたしは死んでたわ。

麻衣、実を言うと最初あんたを不良だと思ってた。でもそんなことはなかったわね。いつも一番前で戦ってくれてありがとう」

亜衣が「どういたしまして」と微笑みながら返す。確か高校から脱出する時、奈津美はゾンビの目の前で転んだんだ。んでゾンビの餌になる直前に、部室棟から飛び出してきた亜衣と麻衣に助けられたんだっけ。今思えば、あの時は結構焦ったな・・・・・・。続いて麻衣が口を開く。

「武、実を言うと最初はお前の事が嫌いだった。オタクだし、ただの口だけの野郎かと思ってた。だけど違ったんだな、お前は立派な男だよ。」

美雪、お前はもう少し料理の腕を磨け。

奈津美、お前がいたからショッピングモールに逃げ込めたんだ。あといろいろな情報を集めて皆をサポートしてくれて助かった。

ゴリ、お前は男の中の男だよ。強いし、皆を心配してくれたし……。

亜衣、これからもよろしく。それだけだ」

麻衣は最後、照れ臭そうに言った。自分の家族に礼を言うのはやはり恥ずかしいのだろう。俺に家族はいないので、それが本当なのはわからないが。

確かに麻衣にはいろいろと罵倒されたり叩かれたりしたな。ま、俺にはM属性があるから全く問題はなかったが。むしろ御褒美だね。麻衣のあとには亜衣が続いた。

「武、あなたはいい人ね。皆のために知恵を尽くしたり武器を取りに行ったり戦ったり……。本当に言葉で言い表せないわ。美雪、武とお幸せに。もし料理を習いたいならいつでも言ってみよう。うだい。彼女になるなら必須の技能でしょ？」

奈津美、あなたを助けた時からなんだか仲良くなれそうな気がしてた。これからも仲良くしてね？

五里くん、あなたの料理も美味しかったわ。またあのラーメン作りましょう。

麻衣、これからもよろしく」

亜衣はいい女だな。クールビューティーっていうのか？料理も美味かったし、いい嫁になるだろう。

この文字通り腐った世界で、亜衣の作る料理は俺に希望を与えてく

れた。出来ればもっと食べたいものだ。

そして美雪の番がやってきた。美雪はなんだか恥ずかしそうに俺の方を見つつ、感謝の言葉を述べはじめた。

「奈津美、あなたは最高の友達よ。これからよろしくね。

五里くん、いろいろとありがとう。なんだかお父さんみたいな頼れる人ね。

麻衣、あなたの元気さはわたしも見習いたいくらいよ。一緒にいたらこっちも元気になるくらいにね。これからもそのままいてね。

あ、でも暴力はダメよ？

亜衣、あなたの料理の腕前に辿り着けたらいいな。わたしも少しは自信があっただけど……。これからいろいろな料理を教えてね。

そして武。前にも言ったけど、わたしはあなたが好き。多分世界がこうなった時からあなたに惚れてたんだと思う。いい返事がもらえれば……。でもそれはあなたが決めることだもんね。わたしはどんな結果でもそれを受け入れるわ」

……。またまた美雪に告白されてしまった。しかも皆の前で。皆がヒューヒューと美雪と俺を囁し立て、美雪は顔を真っ赤にしつつ「もう！ からかわないでよ！！」と照れ隠しに奈津美を軽く叩いている。

「さあ、武は何て返事するんだ？俺は付き合う方に10000円賭けるね」

ゴリの言葉で、皆が「イエスに5000円！」「美雪と付き合うに10000円！」「付き合えよ！15000円賭けるぜ！」と口々に勝手な事を言い出す。というか、それじゃあ賭けにならん

だろ………。

皆がそう圧力をかけるから、余計に緊張してきたじゃないか。というか、俺が美雪と付き合わなかったら、賭け金は全て俺がもらっているのか？

………ま、そんなことはしないがね。

俺も美雪が好きだ。この地獄の中、これから美雪を守りたい。もしいつかゾンビがいなくなって平和な世界がやってきたら、俺は彼女と一緒に暮らす。出来れば、結婚もしたい。

いや、するんだ。俺達は生きて生きて生き延びて、こんな地獄からオサラバするんだ。

皆が囃し立てるなか、俺は大きく咳ばらいをして口を開いた。

「まず皆、今まで俺と一緒にいてくれてありがとう。正直言って、俺はリーダーとしての器じゃなかった。でも皆は俺を信じてくれた。それが一番うれしい。」

ゴリ、お前は俺の心の友だ。いつもお前が冷静にサポートしてくれたから、俺はここまで来れたんだ。戦闘の時も常に一番先頭で戦ってくれて、何度も助けられた。本当にありがとう」

俺がそう言うと、ゴリは笑いながら、

「こっちこそ。お前もいろいろ頑張ってくれたよ、親友！」

と言って手を差し出してきた。俺は差し出された手をがっちり掴み、力強い握手を交わした。言葉は少ないが、それで十分だった。俺とゴリは心の友だから、何も言わないでいい。

ガチホモ
・・・身体の友にはなりたくないがね。

「奈津美、お前にも世話になった。お前がネットでいろいろな情報を手に入れてくれなければ、俺はいきあたりばったりな行動を取っていたかもしれない。

それにお前が豊島第二中学校の場所を知らなかったら、俺は遥や緒方、それに他の中学生達の命を助けられなかった。遥と緒方はもういないけど、こんな地獄であいつらに会えて本当によかった。ありがとう」

奈津美はいたずらっぽく、

「ふふふもつと褒めなさい」

と笑った。奈津美とも握手を交わし、今度は麻衣に向き合う。

「麻衣、お前がいなきや俺達はとっくの昔に死んでたかもな。お前は猛獣なみに強いやつだよ。本当、世話になりまくった。

何度か酷い目にも遭わされたけど、まああれはほとんど俺が悪いよな。変態的な行動をとった俺が悪かった。ま、漫才みたいで楽しかったぜ」

そう言いつつ手を差し出す。麻衣は、

「おう。これからは変態じゃなくて紳士になれよな」

と言って手を握ってくれた。

「亜衣、お前はいい弓の腕前をしてる。お前には何度助けられたことか。本当に感謝している。お前のおかげで俺達は余計な戦闘を回避して、豊島第二中学校に辿り着けたんだ。

あとお前の料理は最高だ。絶望ばかりのこの地獄で、美味しいお前の料理が俺や皆に生きる希望をくれたんだ。これからもお前の飯が食いたいよ」

亜衣は微笑みながら、

「わたしからもありがとう。これからもよろしくね」

と言って握手に応じてくれた。

最後に俺は、美雪に向かい合った。皆は冷やかすのを止め、俺の言葉を待っている。

俺は言いたいことが有りすぎて、何から言えばいいのかわからなかった。でも、それでよかった。ありのままの思いを言える。

「美雪、お前は本当にいい女だ。お前の笑顔がなけりゃ、俺はもつと殺伐としていただろうな。お前の笑顔が俺に希望をくれたんだ。あと、俺を好きだって言ってくれてありがとう。俺は今まで三次元の女の子から好きだって言ってもらったことがなかった。それを最初に言ってくれたのがお前みたいな美人で性格もいい奴なんて、俺は本当に幸せ者だよ。もしかしたら、一生分の運を使い切っちゃまったのかもしれない」

俺はそう言って手を差し出した。が、美雪が俺の手を握る前に、奈津美が声を上げた。

「ストーリーップ!! 武、あんた告白の返事はどうすんのよ!? まさかまだ迷ってるんじゃないわよね? そうだったらあんたをぶっ飛ばすわよ!？」

「落ちて奈津美、返事はちゃんとするさ。ここから脱出して、皆でヘリに乗ったらその時に言うよ」

「待て武、それは死亡フラグだ!」

ゴリが素早いツツコミを入れてきた。

戦争映画でよく、

「俺、この戦争が終わったら結婚するんだ……」

という兵士が出てくる。ソイツはほとんどの場合、戦争終結直前に死亡してしまう。俺の今の言葉も死亡フラグとゴリは受け取ったのだろう。

だが死亡フラグがどうしたっ!? フラグはへし折るものだ!! (ただし生存と恋愛フラグを除く)

だから俺は死なない。いや死ねない。俺は生きて陽動任務を終え、そして美雪に返事をする!

俺がそう宣言すると、皆は苦笑で受け止めてくれた。美雪は「楽しみにしてる」とだけ言った。

俺の希望である、とびっきりの笑顔で。

そろそろ出発の時刻だ。耳を澄ませば、遠くからヘリのローター音が聞こえてくる。ニコライ氏の操縦するMH-53Eが近づきつつあるのだろう。

俺達は屋上で肩を組み、円陣を作った。そして俺が音頭を取って叫ぶ。

「よっしゃあ、生きてここから脱出すんぞーっ！！」

「「「「おーっ！！！！」」」」

「ゾンビなんか負けてたまるかーっ！！」

「「「「おーっ！！！！」」」」

「高校生なめんなよーっ！！！！」

「「「「うおーっ！！！！」」」」

最後に皆で足を一步踏み出し、円陣を解いた。そしてお互いに肩を叩いて「じゃあ後で」と言い、それぞれが自分の持ち場へと向かっていく。

俺も階段を下りて警備室に戻った。自宅から脱出した際に持ち出してきた私物はごくわずかで、それらはゴリが車に積んでへりに運んでくれる予定だ。

警備室では様々な人が俺を応援してくれた。警備員だった田中氏、俺達が助けた中学生達、幼女、宮田医師、ピザ。そしてここに残る老夫婦と阿部さんと道下くん。皆が「頑張つて」と言ってくれた。

最後に俺は屈んで、足元に寄ってきていたラインの頭を撫でた。バイクにラインを乗せる事は出来ないのです、皆と一緒に車でへりに行つてもらう。

いつもは俺に対してそっけないラインなのに、今日だけは別だった。警備室から出て行くとする俺を何度も追い掛けようとし、しまいには別れるのが悲しいとでもいうふうに吠えはじめた。

俺はラインの頭を撫でつつ、安心させる。

「大丈夫だってライン。一旦皆と別れるだけで、またへりで会えるさ。なに、俺はまだ死ぬ気はないから心配すんなくて」

俺がそう言いつつわしゃわしゃーっと頭を撫でると、ようやくラインは吠えるのを止めた。

「じゃ、行ってくる。ライン、皆の言うことをちゃんと聞くんだぞ？」

そう言うラインは返事をするかのように「ワン！」と吠えた。その声を合図にして、俺は警備室から飛び出して行く。

もはや館内にゾンビはいないので、ダクトを使って移動する必要もなかった。俺は誰もいないショッピングモールの中を走り、リサさんの待つ西館の屋上駐車場へと向かう。

途中、少しだけ寄り道をした。このショッピングモールは口の字に建物が並び、その真ん中は小さな公園となっていた。

その公園の一角に、真新しく掘り返された跡があった。そこは、死んだ遥や緒方、そして避難民やヤクザ達の墓地だった。

遥の遺体は昨日、前田の手によってゾンビがトラックに引き付けられている間にリサさんが回収してきてくれた。そして空調室に安置されていた緒方の遺体とともにここへ埋葬したのだ。

ショッピングモールで死んだ全ての人がここで弔われていた。遺体が回収出来た人は埋葬し、遺体が見つからない人は名前だけを墓標代わりのプラスチック番に油性ペンで書いた。

ゾンビとなって俺達に倒された人も、身元がわかった人は一人一人埋葬した。身分証明が出来るものがなかった人は、性別や外見、年齢層、服装などをプラスチック番に書いてから埋葬した。

皆、前田がバイオハザード事件を起こさなければ幸せであっただろう人生を送っていた人間だったのだ。ただ俺達は自分達が生き延びるために、彼らを殺さざるを得なかったのだ。

だから生き残った俺達には死者を弔い、そして墓を作る義務があった。動物は死んだらそのまま他の動物に食われるが、人間は墓を作って死んだ人の死を悼む。

つまり俺達は、こんな地獄の中であっても、まだ人間でいたいのだ。

俺は遥と緒方の墓の前にしゃがんだ。そして、目の前に二人がいるかのように墓に話し掛ける。

「遥、緒方、今日でお別れだ。俺達はここを離れ、二度と戻ってくることがないだろう。本当はお前達も連れていきたいが、それは出来ないんだ。

どうか俺を許してくれ。お前達が死んだのは、俺に力が無くて甘かったからだ。・・・本当なら、今頃お前達も、車に乗ってここから出たら何をするかとか、皆でいろいろ語り合っていただろうに・・・」

墓に話し掛けていると、目から涙が溢れ出てきた。頬を伝った涙は地面に落ち、そして染みを作る。

だが俺は前だけを見て、進み続けなければならない。それが俺が殺したとも言える二人への、精一杯の供養だった。

俺は乱暴に涙を拭うと立ち上がり、そして別れの言葉を告げる。

「もう時間だ、行かないと。いつかゾンビがいなくなって、また前みたいな平和な世界に戻ったら、俺はまた来るよ。ちゃんとしたお墓も作ってさ。

だから、その日まで待っていてくれ。あのおじいさんおばあさん、

阿部さんと道下くんがここに残るらしいから、しばらくは寂しくないだろ？

じゃあな。いつか俺が死んだ時には、あの世の案内でもしてくれよ」

俺はそれだけ言うとは墓に背中を向け、再び走り出した。

いつか俺が死んであの世に行った時、遥と緒方に笑われないよう、俺はこの地獄でも生き延びなければならない。

西館の屋上駐車場にたどり着くと、すでにリサさんがバイクに乗って俺を待っていた。リサさんの乗ってるバイクはデカイ。

よく見てみると、トライアングルのボンネビルT100だった。

「T100ですか、いいセンスだ」

「なんだ武、バイクに詳しいのか？」

「いや、このバイクについてだけですよ。『メタルギアソリッド4』ってゲームにこのバイクが出てたんで、詳しくなっただけです」

俺が言うと、リサさんはわかったようなわからなかったような顔をしていた。まあいいさ、俺はオタクだからな。誰にもわからんようなマニアックなネタを出しまくるのが性分なんだ。

それにしてもMGS4でこのT100が出てきたシーンって、確か街中を敵に終われながら陽動するってミッションだったな。うん、なんかテンション上がってきた。

耳を澄ませば、さっきよりも聞こえてくるヘリのローター音が大きくなっている。もうすぐそこまで来ているのかもしれない。

俺はリサさんの後ろに跨がると、左腕でリサさんの身体を掴んだ。

普通男女逆だと思うのだが、リサさんは俺よりもバイクの運転に長けているだろうからおとなしく後部席に座っておく。頭部保護のためにヘルメットを装着し、俺はしっかりとリサさんの身体を掴んだ。うわあ、なんだかオラワクワクしてきたぞ（女性の身体をしっかりと本人許可の上で抱きしめているから）。

右手でTMPを掴むと、ボルトを引いて初弾を装填した。駐車場から出て行けばすぐゾンビがいる。後部席の俺の役目は、近づいてくる走るゾンビや障害となりそうなゾンビをサブマシンガンで撃ち倒すことだった。

865Cパラレルツインエンジンが唸りを上げ、エンジン音が周囲を満たす。

リサさんと俺の乗ったT100は、地上へ向かうべく螺旋状の通路を下りて行った。

第54話 メタルギアソリッドシリーズの終盤っぽい展開だね。仕方ないね（後

次回予告

第55話..

「生き延びろ」

第55話 生き延びろ（前書き）

前回のあらすじ..

スパイダーマツ！

第55話 生き延びろ

俺とリサさんが乗ったバイクは螺旋状の通路を下りて行き、地上に向かう。

「そういえば武、君はワクチンを打ったか？」

「ええ………いやないと、思うんですがね」

俺はそう言って学生服の袖をめくり、二の腕に出来た真新しい注射痕を見せる。

危険な陽動を行う俺とリサさんは、感染を防ぐワクチンを打っていた。俺としてはいやな思いだったのだが、皆に打てと言われて仕方なく注射した。注射は嫌いなのに。

ワクチンは注射してから10分もすれば効果が出てくる。今の俺とリサさんは、ゾンビに噛まれても大丈夫ということだ。

ワクチン、治療薬ともそれぞれ5本しかない。そしてワクチンと治療薬を研究して増産するためにはそれぞれ最低2本ずつは必要であり、ワクチンは残り1本しか使えない計算となる。

ちなみに、残ったワクチンと治療薬は全部車両で脱出する皆に渡してきた。仮にへりに乗る直前にゾンビに噛まれても、意識を失う前に治療薬を注射すればゾンビとならずにすむ。だから先にへりに乗る皆は、3人まで噛まれても大丈夫という計算になる。

でもゾンビに噛まれるってことは、よっぽどゾンビが近づいてるということだ。ゾンビに掴まれたら振りほどくのは困難だし、そうになったら死ぬまで俺は身体をガブガブされ続ける羽目になる。

ま、そんな展開に陥る気は全くないけどね。

バイクは一階と二階の間の通路まで下りてきた。俺達の臭いを嗅ぎ付けたのか、早速ゾンビの皆さんが通路の入り口を塞ぐ格子状のシッターを叩きはじめる。

「今からでも車で脱出する皆のところに合流できる。陽動はわたしだけでもいいんだぞ？」

「ここまで来て、今更何を言ってるんですか？皆とリサさんを生きて脱出させるためには、俺がリサさんと一緒に動くほうがいいんですよ。それに俺は、皆を無事に脱出させるには何でもやるって誓ったんです」

「……………君は、いいやつだな」

リサさんは呆れたように言いつつも、嬉しそうに笑った。

そうだ。ここまで来て引き返せるかってんだ。ここで逃げたら、遥と緒方に顔向けできない。

作戦は次の通りだ。

まずシッターを開いて俺とリサさんは駐車場に出て、適当に走り回って走るゾンビを引き寄せる。駐車場にいる走るゾンビを引き付けたら、駐車場から出ていく前に自動車販売店の前の駐車場に硝安爆弾を置いていく。

ショッピングモールの外には人間の臭いに引き寄せられたゾンビ達が集まっている。当然自動車販売店の前にもゾンビが集まっているので、爆弾でそれらを一掃するのだ。

俺とリサさんが駐車場から出て行った後、爆弾が爆発してゾンビが倒された後、自動車に乗った皆が販売店から飛び出す。皆は自動車に乗ってそのまま北に向かって公園でヘリに乗り込む。

一方俺とりサさんは走るゾンビを倒しつつ、豊島高校に向かう。走るゾンビを全部倒したら、俺とりサさんもヘリに乗って豊島市から脱出する———というものだった。

事がうまく進むという保障はない。だが何度も議論しての結果がこれだから、俺達にはこれ以上いい方法は思いつかない。

俺は無線機を起動し、自動車販売店にいる美雪に連絡をとる。

「こちら岩崎。美雪、準備が出来た。そっちはどうだ？」

『皆車に乗ったわ。荷物も全部積んだし、いつでも行ける。・・・』

あと、阿部さんと道下さんが見送りに来てるんだけど』

「ハッテンしてないか？」

『なんか二人で絡み付いてるわ』

「よし、見るな美雪」

俺はそう言った後、カウントダウンを始めるように言った。警備室にいる老夫婦が、美雪の合図でシャッターを上げてくれるはずだった。

「じゃあ美雪、カウントダウン始めるぞ」

『わかった。・・・武？』

「なんだ？」

『ヘリで、告白の返事を聞くからね。待ってるから』

俺は最後の言葉で、ついニヤニヤしてしまう。大丈夫、言う言葉は決まってるさ。

ヘルメットのバイザーを下ろし、しっかりりサさんにしがみつく。カウントダウンが始まった。

『5』

TMPを右手で保持し、安全装置を解除する。

『4』

前を見据え、シャッターの向こうに集まっているゾンビを睨みつける。

『3』

リサさんが手榴弾を取り出し、安全ピンを抜いた。

『2』

安全ピンを抜いた手榴弾を、リサさんは前に放り投げた。

『1』

手榴弾がシャッターに当たり、俺とリサさんは爆発に備えて顔を飛ばした。

『0』

瞬間、シャッターが上がりはじめた。大人が余裕で通れそうなほどシャッターが上がり、ゾンビが一斉に通路になだれ込んで来ようとする。

だが最初のゾンビが通路に足を踏み入れる前に、リサさんが放った手榴弾が爆発した。ゾンビが何体か倒れ、爆発が起きた地点を中心に空間が出来る。

「リサさん!!」

「行くよ!!」

バイクがエンジン音を高らかに響かせ、一気に走り出す。俺は左手でリサさんの身体を掴みつつ、右手に構えたTMPの引金を引いた。軽い反動と銃声と共に、再び集まりつつあったゾンビ達が頭から血を流して倒れる。そしてその間に、バイクは駐車場に飛び出していた。

俺達が駐車場に出たのを見て、早速何体かゾンビバイクを追い掛けてきた。リサさんはスピードを上げ、他の走るゾンビも引き付けるべく駐車場を疾走する。

うろつくゾンビや泊められた車を交わしつつ、バイクは駐車場を進む。吹き付ける風で俺の学生服がはためいている。

「何体集まってきた!?!」

「30体はいますよ!!」

俺はそう答えつつ、後ろを振り返って走るゾンビ目掛けてTMPを撃つ。取り付けられた照準補助用のホロサイトを覗きもせず、大体の見当をつけての射撃だった。バイクとゾンビが両方走っている状態なので命中させるのは難しいが、連射力を活かして弾幕を張る。運悪く9mm弾を頭に食らったゾンビが、バイクを追うレースから脱落していく。

前方に自動車販売店のシャッターが見えてきた。シャッターの向こうでは、すでに皆が商品の自動車に乗って、いつでも飛び出せるように待機しているはずだ。

「美雪、今から爆弾を仕掛ける!!」

美雪にそう伝え、リサさんがバイクをシャッターに向けて走らせる。後ろには今だに走るゾンビが数十体、俺達を食おうと追い掛けてくる。

自動車販売店のシャッターの前にたどり着き、リサさんがバイクを停めた。途端に走るゾンビ達との距離が縮まってくるが、リサさんは慌てず焦らずハンドルを切って車体を一回転させ、走るゾンビ達に向き合う。

「早く爆弾を仕掛ける!!」

リサさんはそう言ってベレッタM93Rを抜き、近づいてくるゾンビに向けて弾丸を浴びせ掛ける。

その間に俺はバイクの後輪脇のラックに収まっていた、ずっしりと重い二つのポリタンクを地面に置いた。ポリタンクの中には俺様特

製の硝安爆弾が収まっている。

起爆用の雷管がない事で今まで放置されていた硝安爆弾だが、リサさんが手榴弾の信管やら何やらを流用して雷管を作り上げたことに爆発させる事が可能になった。

ポリタンクの口からはコードが伸び、側面にガムテープで固定された目覚まし時計に繋がっている。リサさんは何と、目覚まし時計と雷管を組み合わせて時限爆弾を作り上げてしまったのだ。傭兵って怖いね。

目覚まし時計のタイマーを5分後にセットし、地面に置く。これば爆発すれば、シャッター前に集まっているゾンビは根こそぎ吹っ飛ばされるはずだ。

「美雪、爆弾をセットした！リサさん！」

「わかった！」

『武、気をつけて！！』

美雪との通信が終わり、リサさんがM93Rをホルスターに戻し、アクセルレバーを引いて勢いよくバイクを発進させる。走るゾンビとの距離は10メートルを切っていた。

俺はリサさんに掴まりつつ、右手でTMPを前方に連射する。バイクの進路を塞ぐように近づいて来ていたゾンビが倒れ、その隙間をバイクは通り抜けた。

すれ違いざまに身体を掴まれそうになったが、身体をひねって突き出された腕を交わす。バイクは駐車場を出て、豊島市街に向かう道路を南下していく。

「ゾンビは？」

「たくさん追い掛けてきますよ！」

「じゃあ倒してくれ！捕まったら終わりだぞ！」

俺はリサさんの言葉で後ろを向いた。今だに30体以上の走るゾンビがバイクを追い掛けてきている。

道路の上には放置されたり事故を起こした車が多数転がっており、さらにのろまなゾンビもさ迷っている。それらにぶつからないように走るのは困難で、走るスピードを落とさざるを得ない。

バイクの速度が落ちたので、たちまち走るゾンビとの距離が縮まってくる。TMPの弾倉を交換した俺は、後ろのゾンビ達目掛けて金を引いた。

「うおーっ！来るんじゃねーぞゴルアアアアア！！」

最後だけなぜか不良っぽく叫びながら、銃口を左右に振ってゾンビ達に弾丸を浴びせ掛ける。弾丸を食らったゾンビが一体、また一体と（俺とリサさんの）死をかけたレースからリタイアしていく。

「武、前だー！！」

リサさんの叫び声で前を見ると、そこにはゾンビが集まっていた。道路の片方は放置された乗用車で塞がれ、もう片方の車線はなんと事故を起こしたのか横転した乗用車が転がっている。そして塞がれた道路の上に、待ち構えているかのようにゾンビ達がいた。

「どうするんです！？通れませんか！？」

「なに、まだ道はある！」

リサさんはそう言って、ハンドルを左に切った。バイクが縁石に乗り上げて一瞬大きく跳ね、そして狭い歩道に入る。

ん？今なんか左手で柔らかい物を掴んでしまったな。手の位置的に俺が掴んだ物の正体は大体わかるのだが、今はそれについて深く考

えないことにする。

歩道に乗り上げたバイクは自動車の脇を通り抜け、更に南へ向かう。道路を塞いでいた自動車がなくなったあたりで再び車道に戻った。道の脇には田畑が延々と広がっている。そういやショッピングモールに来るときに、ここを通ったな。

まだ走るゾンビ達は追い掛けてくる。ただし車道の障害物が少なくなったためリサさんがスピードを上げ、徐々に距離が開いていく。

腕時計を見ると、爆弾を仕掛けてからちょうど5分が過ぎたころだった。直後、北の方から物凄い爆発音が響いてきた。

同時に美雪から通信が入った。爆弾はちゃんと爆発し、今ショッピングモールから脱出したのだという。これから避難民の乗った車列は北に向かい、公園でニコライ氏が操縦するMH-53Eに乗り込む手筈だ。走るゾンビは俺達に引き付けられているので、彼らは無事に公園に辿り着けるだろう。のろまなゾンビが途中いるかもしれないが、倒すなり避けるなり出来る。

「問題は……」

リサさんがそう言って、運転しながら後ろを振り向く。走るゾンビ達は今だに俺達のことを諦めていないらしく、追い続けていた。

バイクを走らせていると、道の脇に線路が見えてきた。この線路を辿って行けば、俺達が二日目の夜を明かした薬局のある駅周辺に向かえるはずだ。

バイクは線路に沿って走り、駅へ向かう。途中、偶然変化したらしい走るゾンビが数体、バイクを追い掛けてきた。さらに駅に近づくにつれ、再びゾンビの数も増えていく。

「リサさん、もっとスピード出せないんですか!？」

「これ以上出せばコントロール出来なくなる! 猛スピードで道端に放り出されてもいいのか!？」

「イヤでーす!！」

「ならゾンビを倒せ! その為について来たんだろう!」

後ろを向き、再び追い掛けてきた走るゾンビに弾丸をばらまく。バイクの速度が落ちてきたので、再びゾンビとの距離が近づいてきた。途中、あの薬局の前を通り過ぎた。あれからまだ2週間も経っていないのに、薬局に泊まった事が随分昔のように感じる。

あの頃の武装は拳銃とライフルだけで貧弱だったなど、少し懐かしく感じた。

駅前を通り過ぎても、走るゾンビはまだ追い掛けてくる。すでに死んでるから疲れないし、火事場の馬鹿力を常時発揮しているようなものなので、足の筋肉がズタズタになるまで走っていられるからだ。生身の人間がやったら、とっくの昔に二度と走れない身体になっている。

途中で俺達を見つけたのか、他の走るゾンビも追い掛けてきた。というか、ショッピングモールを出た時よりも増えている気がするんだが。

前田の話によると噛まれた人間は1000体に1体くらいは走るゾンビになるらしいので、増えた奴らは突然変異で発生したのだろう。豊島市の昼間人口は10万人単位でいるから、全人口の10パーセントがゾンビ化したら10体単位で走るゾンビがいることになる。ゾンビを撃ち、跳ね飛ばし、俺とリサさんの乗ったバイクは進む。

これなんてGTA?^{標き逃ゲ}と思うくらいだ。

バイクは今度は豊島第二中学校に向かっているようだ。俺が遥と緒方を助けたあの場所へ、着実にバイクは近づいていく。リサさんはおそらく最短ルートを走らせているだけなのだろうが、俺は何だか運命のようなものを感じる。

途中で進路がゾンビで塞がっていたので、左折して中学校の方向へと向かう。右側に中学校が見えてきた。

そして一瞬だけ、遥達がいた2階の音楽室が見えた。俺が叩き割った窓はそのまま、真下にある駐車場に停められた乗用車の屋根が大きくへこみ、フロントガラスが真っ白にひび割れている。俺が脱出する際に音楽室からダイブし、着地したせいだった。

中学校に沿ってバイクを右折させたので、グラウンドが見える。相変わらずゾンビは校庭をうろついていて、俺達が倒したゾンビはそのまま残っていた。

道路の先に何か光り輝くものが落ちていた。そのすぐ傍を通った時、それがライフル弾の薬莢だとわかる。そういえば、俺がライフルを手に入れて初めて発砲したのもここだった。

相変わらずゾンビはバイクの後ろを追走してくる。いい加減諦めてくれよと、俺はそう呟いた。

途中ゾンビがいたので何度かルートを変更した結果、俺とリサさんはあの傾斜がキツイ階段のある道に来てしまった。俺とゴリがガスボンベを使い、坂の下のゾンビ達をバルスした場所である。道は一本だけだった。後ろからゾンビが追い掛けて来ているので、今更引き返すことは出来ない。

「リサさん、この先階段ですよ！？まさかバイクを捨てて徒歩で逃げるんですか！？」

「まさか。安心しろ！」

再びアクセルを全開にして、坂を下りていく。下り坂なのでスピードは上がるが、それはゾンビも同じらしい。

とその時、美雪から通信が入った。

「こちら岩崎。美雪、そっちの状況は!？」

『なんとか全員ヘリに乗ったわ。公園にゾンビがたくさんいて、乗る時に何人か噛まれた人もいたけど……』

本当にヘリの中から通信しているらしく、無線で美雪の声に混じって規則正しいヘリのローター音が聞こえている。

「何人噛まれた？」

『3人よ。既に宮田さんがワクチンを打ったし本人達もなんともないわ』

「そうか、よかった……」

俺は安堵の溜息を吐いた。これで皆の心配はしないで済む。3人も噛まれたのは想定外だったが、ワクチンを打ったのなら問題ない。ワクチンは3本までしか使えないので、4人噛まれていたら大変なことになっていた。

だが問題は俺達の方だ。今バイクに乗る俺とリサさんは、後ろにパラッチの如くついて来るゾンビを引き連れ、回収地点の豊島高校に向かっている。どうにかしてヘリがたどり着く前にゾンビを全滅させなければ、ヘリは危険で着陸させられない。

『武、頑張ってね!』

「ああ、わかってるさ」

俺はそう言って通信を終え、リサさんに皆がヘリに乗った事を伝え

た。リサさんは頷き、

「じゃ、こっちも頑張らないとな！」

と力強く答えた。

TMPに新しい弾倉を装着する。走るゾンビを倒すために連射しまくったので、予備の弾倉はあまりない。

だが、何とかなるさ。俺はそう楽観的に考え、再び引金を引く。

バイクは坂を下り終え、今度は警察署へ向かうルートを走っていた。警察署にはいい意味でも悪い意味でも思い出がたくさんある。俺が初めて銃を手に入れ、そして安楽死とはいえ人を殺した場所だ。

中田巡査の遺体は給湯室に放置されたままだった。あの時の俺達に、遺体を埋葬する余裕なんてなかった。

追ってくるゾンビをTMPで撃ち倒す。途中、警察署の正門の前を通り抜け、俺は一瞬そちらを見た。

やはり2週間前と何も変わらない。パトカーや消防車は放置されたままだ。そういえば、ここで遙達を助けに行くか行かないかで揉めたんだよな。あの時ばらばらに行動することになってたら、俺は遙を助ける前に死んでいたかもしれない。本当、皆には頭が上がりない。

市街地に来た時には、追ってくる走るゾンビの数は10体程度までに減っていた。だがTMPの残弾も少ない。

市街地は大混乱に陥ったためか、あちこちで事故を起こした自動車が乗り捨てられていた。ビルに突っ込んでいるやつ、玉突き事故を

起こしてあちこちへこんでいるやつ、火災を起こしたのか黒焦げの骨組みだけになっていたやつ……。

初日に俺達がここを通った時は阿鼻叫喚の地獄絵図が繰り広げられていた。今でもその痕跡が、大通りのあちこちで散見される。

そして道路上の障害物が多いせいで、必然的にバイクのスピードは落ちた。ゾンビがバイクに一気に近づき、手を伸ばせば届くような位置にいる。

「俺は！ここで！死ぬわけにはいかんのだよおおおおお！！」

絶叫しつつ、最後の弾倉に詰まった9mm弾を走るゾンビにばらまく。何体か頭に風穴が開けられ、情性で少し走った後に道路に倒れた。

フルオートで撃ったので弾倉の弾は3秒もしない内になくなった。

俺はUSPを抜き、撃つ。だが俺とゾンビの双方が走っている状況では、単発の拳銃なんてほとんど役に立たない。

高校まで後500メートルを切った。リサさんが道を大きく塞いでいたタンクローリーを避けようとスピードを更に落とした。だが一瞬の隙にゾンビの一体が走る速度を上げ、俺は拳銃を構えていた右腕を掴まれてしまう。

物凄い握力で掴まれた腕に激痛が走り、思わず拳銃を取り落としてしまった。乾いた音を立てて道路に落ちたUSPが、あっという間に後方に通り過ぎていく。

「武、大丈夫か！？」

「コイツは俺が何とかします！リサさんは運転に集中してください

!!」

「だが………!!」

リサさんは俺が腕を掴まれたと知って、スピードを落とすかどうか迷っているようだった。振り切ろうとスピードを上げればゾンビに掴まれたままの俺がバイクから転落するかもしれない。かといって減速すれば、走るゾンビ達に追いつかれてしまう。

走るゾンビは残り5体。どうしてもここで倒さ泣ければ………!!

「オラ、離しやがれこの腐れゾンビ!俺は食ったって美味くはないぞ!!」

そう怒鳴って掴まれた右腕を振り、どうにかゾンビを振りほどこうとする。だがゾンビの握力は強いので、そんなことで揺らぎもしない。

左手はリサさんを掴んでいるので使えない。もし左手を離せば、バイクから転落するかもしれない。

と、そこで名案が閃いた。

ゾンビが俺に食らいつこうとその顔を突き出してくる。俺は思いっきり右腕を引いて、敢えて俺を掴むゾンビを引き寄せた。

「必殺!殺人石頭アタック!!」

そう叫び、今まさに右腕にかぶりつこうとしていたゾンビの頭にヘルメット越しに頭突きをかます。ゾンビの肉は腐っているので、ぐ

ちゃっという音がしてその頭から髪が生えた表皮や肉が剥がれ落ちる。ヘルメットのバイザーに血や腐った肉片が付着した。頭突きの衝撃で一瞬頭が真っ白になった。頭突きをくらったせいか力は弱まったが、ゾンビはまだ俺の腕を掴んでいる。

「君がッ！俺の腕を離すまで！頭突きをやめないッ！！」

そうジョジョりながら、何度も頭突きを食らわせる。その度にバイザーが血で汚れていき、しまいにはFPSゲームで撃たれて瀕死になっている時のように真っ赤になってしまった。

6回ほど頭突きを食らわせたところで、ようやくゾンビが俺の右腕を離れた。自由になった右手で血や肉片で視界がさらに悪くなったヘルメットのバイザーを上げ、背中側のベルトに挟んでいたP230JPを抜く。

「銃弾でも食らいやがれ、ファッキンゾンビ！！」

そう叫んでいたのは、俺の脳内麻薬的なサムシングが危険で大放出されていたからかもしれない。とにかく、俺は目の前のゾンビに銃口を突きつけ、撃った。

いくら威力が弱い32ACP弾でも、弱点である頭を撃ち抜かれてはゾンビはひとたまりもない。まずさっきまで俺に食らいつこうとしていたゾンビの頭に風穴が開いた。

続いて残りの4体を撃った。驚くべきことに走るバイクの上からだというのに、俺が放った弾丸は全てゾンビの頭を貫いた。

全ての走るゾンビがレースから脱落した。追うものがなくなった道路の上を、俺とリサさんの乗ったバイクがエンジン音を響かせて進んでいく。

P230JPのスライドが後退したままになっていた。度重なる戦いで残っていた32ACP弾は5発にまで減っていた。そして残弾は全て、今ゾンビを倒したことで使い果たしてしまった。

中田巡査から受け取ったこのP230JPにはいろいろと活躍してもらったな。ゾンビを倒したり、音楽室の窓を割って脱出したり、ヤクザの組長から緒方を助けるのに使ったり……。

中田巡査、ありがとう。

俺はそう小さく呟き、そしてP230JPを再びベルトに挟んだ。もう弾はないが、何度も命を救われた銃だ。捨てることなんて出来ない。

視線を前に戻すと、すぐそこに豊島高校の正門が見えていた。

俺は帰ってきたのだ。

俺達にとって、この地獄が始まった地に。

第55話 生き延びろ（後書き）

次回予告

第56話..

「INSANITY」

第56話 IN SANITY (前書き)

前回のあらすじ..

石頭アタック！

それはそうと、いつの間にか100万アクセス突破していました。
ありがとうございます。

第56話 I N S A N I T Y

正門は開きっ放しだった。俺達が脱出する時に閉めたのだが、もしかして他にも残っていた生徒が脱出したり、逆に誰かが避難してきたのかもしれない。一応この高校は高台にあって緊急時の避難所に指定されているから、生真面目に避難しようとしてきた市民が開けたのかもしれない。

どちらにしろ、校庭にはゾンビがさ迷っている。学生服やセーラー服を来たゾンビ達が、俺とリサさんの臭いを嗅ぎ付けたのか近づいてきた。

その中にかつての友人らしいゾンビの姿も見える。ただし顔は土気色をしていて、ぐずぐずに表皮が崩れているが。

「――やれるか？」

バイクを停めたりリサさんが、心配そうに俺にきく。つまり、かつての友人を殺せるか、という事だろう。ならば答えは一つだ。

「もちろん」

校庭のゾンビを排除しなければ、ヘリが着陸出来ない。俺とリサさんはバイクを下り、そしてSG556を構えた。

校庭のゾンビは20体もない。俺とリサさんはSG556をセミオートで撃つ。ホロサイトの赤い光点をゾンビの頭部に合わせ、引金を引く。のろいゾンビなので、一発で頭を撃ち抜けた。

距離が離れているので、落ち着いて撃てた。銃声が周囲に響き渡るなか、ヘリのローター音が聞こえはじめた。

校庭に残っていたゾンビを全て排除し、北の空を見上げる。指の先ほどの黒い点が、ローター音が大きくなると共にその姿がはっきりと見えてきた。

MH-53E「ペイブロウ」へりだ。5枚のローターを猛然と回転させ、ペイブロウは高校に近づきつつある。

『よお、そっちはまだ生きてるみたいだな』

突如、無線機から男の声が流れた。一緒にローター音が聞こえているから、おそらくペイブロウのパイロットであるニコライ氏だろう。リサさんがヘッドセットのマイクを口元にあて、通信に出る。

「おそかったじゃないか、ニコライ」

『まあそう言うな。こっちだって本社の命令にギリギリ引っ掛からない範囲で来てやったんだ。しかも俺一人で。これでイラクでの借りはチャラだな』

「イラクの貸しはなくなったけど、アフガンとパレスチナでの貸しが残ってる」

『げ、まだ覚えてやがるのかよ。――っと、そこに岩崎博士の息子さんはいるか？聞いているならわかりやすいように日本語で会話してるんだが』

イラク？アフガン？パレスチナ？リサさんとニコライ氏は一体どこで何をやっていたんだ？てかニコライ氏、そんなに借りを作ってるのかよ。

リサさんは俺に通信に出るように言った。マイクを手で抑え、送話ボタンを押す。

「はじめまして、岩崎です」

『よお、ニコライだ。君の事はいろいろリサから聞いたぞ。すごいじゃないか、高校生なのにこんな世界で銃を手にして生き残ってきただなんて。アルカディア^{ウチ}製薬で働かないか?』

「非合法部門以外でなら、考えときます」

『ハハハ、賢明な判断だ。それじゃ、これより着陸する』

通信が終わり、ペイブロウが段々と高校に近づく。距離は200メートルもない。

西側世界最大のヘリは、やはり着陸場所も広くなければならない。ペイブロウは高校の上空を旋回しつつ、どこに下りるか慎重に見極めていたようだった。

飛行中のヘリを追って視線を動かしていると、何かが頭の片隅に引っ掛かった。先程までなかった何かが見えた気がした。

何だ? 何が、どこに? 俺はその違和感の正体を突き止めようと、学校をぐるりと見回した。そしてすぐに、その違和感の正体がわかった。

校舎の屋上に人影が見えた。最初はゾンビかと思ったが、俺はそれがゾンビではない事に気づいた。

その人影は、何か細長い筒を肩に担いでいた。

まるで映画によく出てくる、携帯式の地对空ミサイルを担いだ兵士のように。

「――ミサイルだっ!!」

俺は叫び、直後、屋上から白煙が上がった。

白煙を裂いて噴煙を吐き出しつつ、細長いミサイルが飛んでいくのが見えた。その先にあるものは、いままさに着陸しようとしていたペイブロウだ!

ニコライ氏が何かロシア語で罵り、そしてペイブロウの胴体から花火のようにチャフとフレアが放出される。フレアは赤外線探知ミサイル、チャフはレーザーロック式ミサイルをかわすための欺瞞装置だ。

ペイブロウが急上昇した直後、放出されたフレアに引き寄せられたミサイルが爆発した。爆炎で校庭が赤く照らし出される。

『クソッ、ここはアフガンかよ!?!』

「ニコライ、待避して!!」

『言われんでも!ミサイルを潰してくれ!!』

ニコライ氏がそう言った直後、ペイブロウがチャフとフレアを盛大に放出しながら速度を上げる。そしてミサイルの射程範囲から逃れるため、急速に高校から遠ざかっていく。

一方リサさんは素早くSG556を構えると、屋上の人影に向けて発砲した。リサさんが放った弾丸は次のミサイルを構えようとしていた人影に命中したらしく、人影が大きく身体を揺らす。

――だが。

撃たれたにも関わらず、その人影は身体を大きく揺らしたただけだった。ミサイルを手放したものの人影はいまだに屋上に立っており、そしてその手元から閃光と共に連続した銃声が響き渡る。

「がッ・・・・・・・・！！」

俺達の周囲に弾着の土埃が上がり、直後、リサさんが何かに殴られたかのように地面に倒れ込んだ。

リサさんの腹部を見ると、チェストリグが引き裂かれてそこから血が溢れ出していた。今の奴に撃たれたのだ！

「このヤローっ！！」

叫び、怒りに任せて屋上の人影目掛けて発砲する。弾は当たっているはずなのに、そいつは何事もなかったかのように平然と立っている。

そしてその手元が再び光る。俺の周囲を何かが高速でかすめ、そしてあちこちに穴が開く。地面が高速弾でえぐられ、校庭に植えられた桜の木が弾けて木っ端を撒き散らす。校庭を取り囲む鉄柵に銃弾が命中し、甲高い金属音と共に火花を散らした。

だが俺には一発も弾は当たらなかった。リサさんには当てたのに、まるでわざと外して楽しんでいるみたいだ。

「クソッ！！」

この日何度目かわからない罵り声を上げ、そして倒れたリサさんのもとに駆け寄る。

リサさんは呻きながら撃たれた腹を抑えつつ、必死に立ち上がろう

としていた。俺はリサさんのチェストリグの背中側を掴み、近くにある体育倉庫まで引きずっていく。左手でリサさんを引っ張り、右手でSG556を撃つ。反動で照準は目茶苦茶だったが、撃つことが大切だった。せめて牽制して、銃撃を止めさせなければならぬ。だが屋上の人影は分厚い防弾チョッキを来ているのか、はたまた単に俺の銃弾が命中していないだけなのか、堂々と屋上に立って俺達に弾丸を浴びせ掛けてくる。軽機関銃でも使っているのか、やたらと銃撃が続く時間が長い。

まるで俺を追い立てているかのように、俺の足元を銃弾がえぐる。だが俺には一発も当たっていない。奴は遊んでいるのだ！なめやがって！！

銃弾が襲い掛かってくる中負傷したりリサさんを引きずり、ようやく俺は体育倉庫の陰に隠れる事が出来た。

体育倉庫はその名の通り、体育で使用する用具をしまっている。プレハブで出来ているから楽々銃弾は貫通するだろうが、ひらけた場所で突っ立っているよりかはマシだ。

ゾンビ発生時は体育が行われていたため、体育倉庫のドアの鍵は開けたままだった。ドアを開けて、埃っぽい倉庫の中に転がり込む。なぜか、銃撃が止んだ。

「リサさん、大丈夫ですか!？」

俺は撃たれたりリサさんの手当てを始める。チェストリグを脱がして来ていたTシャツをナイフで裂き、傷口を露出させる。

右の脇腹に直径6mm程の穴が空き、そこから血が溢れていた。背中を見ると同じく穴が空いており、出血している。使用されたのはフルメタルジャケットらしく、幸いなことに貫通したようだった。

これがホローポイント弾頭とかだったらさらに傷は広がっていた。ホローポイントは人体に着弾したら弾頭が潰れ、体内を目茶苦茶に掻き回しながら進むので内臓がズタズタになってしまうからだ。だが出血量は素人目にもやばいと感じられるほど多かった。リュックを開けてガーゼを取り出し傷口に当てたが、見る見る内に真っ赤な塊になってしまう。

「わたしは・・・大丈夫だ・・・。。君はヘリと連絡を・・・」

リサさんが呻きながら自分で手当てを始めつつそう言ったので、俺は無線機を起動しようとした――が、イヤホンからはノイズすら聞こえてこない。

見れば腰のベルトに装着したイヤホンとコードで繋がった無線機の本体が真っ二つに割れていた。どうやらさっきの銃弾が命中したらしい。俺に怪我はないが、無線機は使えなくなった。

リサさんの無線機を借りてヘリに連絡を取る。

「こちら岩崎、現在銃撃を受け体育倉庫に立て籠もっている！そちらの状況は！？」

『こちらニコライ、どうやらミサイルの射程範囲から逃げきったみたいだ。リサは？』

「撃たれて負傷しました！出血が激しい、どうすれば！？」

そう言うと、またニコライ氏がロシア語で怒鳴った。多分「クソッ」と言ったのだろうが、俺はロシア語がわからない。

『よしいいか、君がああミサイルを撃った奴を仕留めるんだ。ミサイルが無力化されない限りヘリはそちらに近づけない』

「わかりました！燃料はどのくらい余裕がありますか？」

『長くて40分とところだ。それまでにミサイルが無力化されなければ、俺は君とリサを置いていくしかない』

「頑張ります！」

『ああ、神の御加護を！』

無線機をリサさんに戻し、俺は体育倉庫から飛び出して行こうとした。だが寸前でリサさんに足を掴まれる。

「待て……どこに行くつもりだ………?」

「あいつを倒すんです！でなきゃここから脱出できない」

「なら、わたしも……」

「怪我人が何を言ってるんですか!? リサさんはここで待っていて下さい！絶対に動かないで!!」

リサさんが自分で行った応急処置で、出血量は少なくなっていた。だが完全に出血が止まったわけじゃない。早く医者に見せないとヤバイレベルだ。

リサさんが言うには40分保つと言う。歴戦の兵士が言うのだから、その通りだと俺は信じる。

「………頼んだ。生きろよ」

俺が出ていく直前、リサさんは途切れ途切れにそう言った。顔には脂汗が浮かび、激しく呼吸している。

俺は無言で頷き、そして体育倉庫から飛び出した。

飛び出した後、すぐに銃弾が飛んできた。まだお遊び気分なのか、大きく俺から外している。

いいぜこの野郎。誰だか知らないがぶっ飛ばしてやる！！

校舎目掛けて全力で校庭を走る。飛んで来る銃弾は俺の足元をえぐるだけなので、俺はビビらずに校庭を駆け抜ける。

10秒近くかけて校舎にたどり着き、1階の教室の窓ガラスを叩き割って室内に侵入する。

廊下に出る。ゾンビが何体かうろついていたが、俺は構わずに階段に向かった。

射撃手はさっきまで屋上にいた。この校舎は4階建てで、4階から屋上に上がる階段は一つしかない。その階段で鉢合わせしなければ、奴はまだ屋上にいるのだろう。

「どけ！」

俺はそう怒鳴り、階段を塞いでいたゾンビをSG556のストックで殴りつける。ゾンビは頭から階段を滑り降りて行った。

走りつづけて十数秒、ようやく4階から屋上に上がる階段にたどり着いた。SG556を構え、足音を立てずに一段一段階段を上がっていく。

階段と屋上を隔てるドアは開きっ放しになっていた。転落防止のために普段は鍵が掛かっていたのだが、誰かが屋上に避難していたのだろうか？

ドアの脇に立ち、呼吸を整える。ミサイルにマシンガンまで持った奴がいるかもしれないのだ。そりゃあ俺だって怖くなる。

だかあいつを排除しなければ、ヘリは高校に近づけない。負傷したリサさんをいつまでもここに置いておくわけにはいかない。

俺は一気に飛び出し、屋上に出た。

「動くな！武器を捨て・・・・・・・・」

屋上にいた人を見て、俺は息を飲んだ。

そいつは女だった。白衣を纏い、手には軽機関銃を持ち、俺の方を振り返る。

「やあ、また会ったね。豊島市は狭いなあ」

「・・・前田クリス！！」

そいつは昨日会った、俺の親父を殺し、そして世界同時バイオテロを引き起こした前田クリスだった。昨日俺が足に一発銃弾を撃ち込んだのに、ミニスカートの裾から見える膝には傷一つ見えない。

俺は問答無用でその両足を撃った。5.56mmの高速弾が両膝を貫き、前田は屋上にひざまづく。

「ライフル弾なら傷は大きいだろう？武器を捨てろ、次は腹を撃つ」

俺はそう言いつつ、前田が取り落とした軽機関銃を取り上げようとした。シンガポール製、CISウルティマックス100軽機関銃だ。100連発のドラムマガジンが装着されている。

とその時、俺は前田の背後にゾンビが何体か倒れているのが見えた。頭が半分吹き飛ばされているので、前田によって射殺されたのだろう。でも、なんで屋上にゾンビが？

だが俺が一步踏み出した瞬間、前田は奇妙な笑い声と共に立ち上がった。ライフル弾で膝を撃たれたんだぞ！？立ち上がるどころか一生歩けない身体になってもおかしくないのに！？

「ハハハハハハハハハハッ！無駄だよ、君にわたしは倒せない」

「黙れっ！！」

俺は叫び、そして宣言通り右の脇腹を撃った。今度は死んでもおかしくない位置を撃った、激痛と出血で立ち上がることは出来なくなるはずだ。

――が、前田は上半身を大きく揺らしただけで、何事もなかったかのように立ったままだ。

俺は驚愕に目を見開き、前田の腹部を見た。出血量が異常に少ない。リサさんも同じ位置を撃たれたのに、なんで出血が少ないんだ？

「だから無駄だって言ったでしょ？」

前田はそう言って、足元のウルティマックス100を取ろうとした。あいつに銃を持たせたら、俺が撃たれる。俺は恐怖に陥り、無我夢中で引金を引いた。

銃声とともに、前田の頭の左上半分が吹き飛んだ。

俺が放った弾丸は、前田の頭に命中した。高速弾がぶち当たったせいで、スイカのように頭が砕けてしまった。

撃たれた反動で前田の身体がゆっくりと傾ぎ、そして屋上に仰向けに倒れた。周囲に血や脳の一部と思われるピンク色の肉片、そして白い頭蓋骨のかけらが飛び散っていた。

俺は肩で大きく息をしつつ、屋上に倒れた前田を見た。頭を吹き飛ばしたんだから、今度こそ死んだよな？

前田は死んだ。この世界を地獄にし、自分勝手な理由で俺の親父を殺した女は死んだ。

出来れば殺したくはなかったが、正当防衛だ、仕方ない。そもそも生きて捕まえたって、確実に裁判で死刑になる。

「……なんだよ、頭吹っ飛ばされりゃちゃんと死ぬんじゃねえか・
・・・・。ビビらせやがって」

俺はそう呟き、こんどこそ前田が持っていた武器や通信機などを取り上げようと一歩踏み出した。

前田の身体が、小さく痙攣した。

俺は足を止めた。

屋上に倒れた前田の上半身が起き上がった。頭は半分碎け、脳みそやら頭蓋骨が露出している。

おい・・・頭が半分無くなってるんだぞ？

なのになんで、前田は起き上がってるんだよ・・・・・・？

言いようのない恐怖に包まれ、俺の身体がぐくぐくと震えはじめる。俺は恐怖で身体を動かせず、ただ前田を見ていることしか出来なかった。

前田は立ち上がった。そして頭の上半分がなくなっている状態で口を開いた。

「酷いなあ、死ぬかと思ったじゃない」

そして俺は、自分の目を疑った。

まるで映像を高速で再生するかのようになり、前田の頭が修復し始めた。ピンク色の脳みそが盛り上がり、再生し、白い頭蓋骨が脳を覆っていく。続いて筋肉が頭蓋骨を包み、最後に表皮が周囲から寄せられて元通りになり、髪が生えはじめる。

20秒もしないうちに、半分なくなっていた前田の頭は元通りになっていた。

まるで何かの映画を見ているかのような感覚だった。俺は自分の見たこと

が信じられなかった。

少なくとも俺は、今まで頭を吹っ飛ばされても生きていた人間を見たことはない。ゾンビだって頭を潰されれば動かなくなる。

ならなんで、前田は頭を吹っ飛ばされても立ち上がれるんだ？これは夢なのか？

「化け物・・・・・・・・！！」

俺が震える声で呟くと、前田は頭を掻きながら答えた。

「化け物なんて酷いなあ、わたしは人間だよ？」

「嘘だ！お前は一体なんなんだ！？なんで生きてるんだよ！？」

半ば絶叫しながらそう言うと、前田はいたずらっぽく微笑んだ。だが今の俺には、その笑顔が悪魔の笑顔にしか見えない。

「化け物ねえ……。じゃあ、これはどう？」

次の瞬間、俺は驚くべき行動をとった。

なんと前田は背後で倒れていたゾンビの傍にしゃがむと、いきなりその身体に食らいついたのだ。

腕を引きちぎり、ありえないほど口を大きく開けて指先から飲み込んでいく。咀嚼なんてしない、ただ腹の中に押し込んでいくだけだ。次は足を飲み込んでいく。ゾンビの腹をかつさばき、内臓を食らう。皮膚を剥いで口に押し込む。

ゾンビを3体解体して腹に納めた前田の腹は、異常に膨れ上がって

いた。当然だ、人間3体分の物体を食ったのだから。美しかったその顔は血と肉片に塗れていた。着ていた白衣は血で真っ赤に染まっている。

そして前田の身体に変化が起きはじめた。

バキバキという音を立てて、膨れ上がった腹から何かが生えてきた。同時に皮膚が黒くなり、硬く角ばっていく。

ミニスカートが裂け、生えてきたものの正体がわかった。皮膚と同様に硬く黒いそれは、まるで昆虫の足のようなだった。

元々あった足も昆虫のように変化し、下半身全体が変化していく。昆虫のような外骨格が前田の身体を覆っていた。頭の皮膚が裂けて、脱皮するかのように髪がついたままの皮膚がはがれていく。

1分もしないうちに、俺の目の前に化け物が現れた。いや、現れたというより変化したと言うべきか。

かつて前田だったその物体は、もはや人間の形や面影をほとんど残していなかった。

下半身全体が変化し、2本しか生えていなかった足は6本に増えていた。昆虫のような外骨格の足が、動く度にかちかちと音を立てる。変わったのは下半身ではなかった。上半身も外骨格に包まれ、白衣の残骸のボロキレがまわりついている。

美しかった顔は、もはや人間のそれではなかった。顔の皮膚は黒く硬く変質し、長かった髪は元々生えていた皮膚ごとにはがれ落ちて周囲に散らばっている。

顔は、すこしだけ前田の面影を宿していた。だが本来あった2つの目以外に、全包围を睨みつけるかのように新たに6つの目が現れていた。

それはまるで、人間と蜘蛛の合いの子のような感じだった。

咄然として前田が変化していく様子を見ていた俺は、前田を撃つかさそうといった選択肢はまったく思いつかなかった。

いや、頭のどこかでわかつていたのだ。撃つても無駄だと。

前田だったそれは、落ちていたウルティマックス100軽機関銃と弾薬が入っているらしきシオルダーバッグを取り上げた。8本の手足が動く度、いやな音を立てる。

シオルダーバッグを肩にかけ、前田は両手でウルティマックス100を構えた。そして口を開く。

「たーけーしーくーん、いっしょにあそびましょー!!」

第56話 INSANITY（後書き）

次回予告

第57話..

「nightmare」

第57話 **n i g h t m a r e** (前書き)

前回のあらすじ..

いっしょにあそびましょー!!

第57話 **n i g h t m a r e**

「たーけーしーくーん、いっしょにあそびましょー!」

俺はその言葉を聞いて、思わずSG556を構えた。絶叫とともに、フルオートに設定した引き金を引く。連続した銃声と共に肩に強い衝撃が走り、前田だったクモ女に銃弾が突き刺さる――。

とはずだった。俺が撃った30発近い5.56mm弾はクモ女に当たりはしたが、その外骨格に当たって火花を散らしただけだった。その身体には傷一つついていない。

「嘘だろ・・・? チートだ、反則だ!!」

思わずそう叫んでいた。

クモ女はウルティマックス100を構えつつ、一步一步歩きだした。外骨格の足がコンクリートに当たり、かちかちと音が響く。

「無駄だって言ったじゃん。わたしは身体の半分が残っていれば死なないし、細胞が無事ならいくらでも再生できるんだよ? あきらめて死になよ?」

クモ女がそう言った直後、その手元から閃光がほとばしった。同時に連続した銃声が響き、俺の周囲のコンクリートの壁や床が碎ける。

「クソツ………!!」

俺はクモ女に背を向け、走って校内に降りる階段に飛び込んだ。階段を駆け降り、全力でクモ女から逃げる。

あんな外骨格のクモ女と一人でやり合えるかってんだ。撃った弾は弾かれるし、向こうはマシンガンを持っている。とりあえず逃げて、態勢を立て直してから再度――。

その時、上からかちかちと音が響いてきた。走りながら振り返ると、そこには一番会いたくない奴がいた。

クモ女が6本の足を猛然と動かし、階段を降りてきていた。その様子を見て、思わず台所の隅をかさかさ^Gと動き回る黒いアレを連想してしまう。

「あははは！逃げるつもり？」

うぎゃああああっ!!なんだアレ!? キモい、まじキモい! やめろ来んな寄るな走るな!!!!

階段を降りるのをやめ、3階の廊下に出る。廊下を走るのは校則違反だが、非常事態なので仕方がない。

クモ女が走りつつ、再びマシンガンを連射してくる。音を立てて弾が俺のすぐ傍を掠めた。外れた弾は壁をえぐり、窓ガラスを次々割っていく。

「クソツたれ!!」

走りながらSG556の弾倉を交換し、そして前方に別の階段が見えて来たのでそちらに向かう。チェストリグのポーチから手榴弾を取り出し、安全ピンを引き抜いてから足元に落とす。

俺を追って廊下を走るクモ女が手榴弾の真上を通った時、ちょうど爆発が起きた。直前に俺は廊下にある柱の陰に飛び込んでいたので、飛んできた破片で傷つかずにすむ。

クモ女がいた場所は爆発で発生した煙で何も見えなくなっていた。すかさずもう一つ手榴弾を投げ込み、再び柱に隠れる。

二回目の爆発が起き、俺は柱から飛び出てSG556を構え、煙の向こうへ連射した。いくら外骨格といっても手榴弾の爆発を2回食らい、さらに銃撃を浴びせればいくらなんでも傷つくだろう。

弾倉は3秒もせずに空になった。素早く装填済みのものと交換し、再び銃弾を撃ち込む。

実に弾倉3本分、90発もの銃弾を俺は叩き込んだ。クモ女の凶体はでかいから、確実に弾のほとんどは当たっただろう。さきほどまでやかましかったクモ女の声や足元は聞こえない。徐々に煙が晴れていく。

「・・・・・・・・やったか？」

そう俺が呟いた直後、煙の向こうから再び銃声が響いた。狭い廊下の壁で反響した銃声に、俺は思わず身を竦めた。

「まだ生きてるのかよ・・・・!!」

再びクモ女に背を向けて、階段を駆け降りる。また後ろから、あのかさかさかちかちという足元が追ってくる。

3段飛ばしで階段を降り、俺は1階にたどり着いた。そして昇降口から外に出て中庭へと走る。中庭には植木が沢山ある。まずはそこに隠れて、クモ女に不意打ちを食らわせてやる。

植え込みに隠れた俺は、クモ女が近づいてくるのをじっと待った。頭を撃たれた時はあいつはしばらく動かなかった。だからまずは頭を撃ち、それから最後の手榴弾をその身体にたたき付けてやる。身体を動かすために外骨格と外骨格の間には隙間がある。そこに手榴弾を押し込めばさすがにかなりのダメージを食らうだろう。というか、食らってくださいお願いします。

「たーけーしーくーん、いっしょにあそびましょー!!」

そう言いつつ、クモ女が昇降口から出て来た。さっきの手榴弾の爆発と銃撃でさすがにダメージを食らったのか、外骨格の表面があちこち傷ついている。足も1本もげていた。

だがそれらのダメージは急速に元通りになりつつある。もげた足が徐々に生えていき、外骨格の表面が盛り上がりつつ傷を消していく。それを見て今すぐ攻撃したい気持ちになった。だが焦るな、クールになれ、俺。今飛び出したら蜂の巣だ、クモ女が近づいてくるのを待つんだ。

6本の足を動かしつつ、クモ女が俺の隠れる植え込みに近づいてくる。まだ見つかつてはいないようだ。もし見つけていたら、即座に銃撃してくるだろう。

やがてクモ女はここに誰もいないと判断したのか、背を向けて別の場所に向かおうとした。俺はその隙を逃さず立ち上がり、その無防備な後頭部に照準を合わせた。

だが、

「みいつけた♪」

俺が引き金を引く直前、その言葉と共にクモ女が振り返った。同時にウルティマックス100が火を噴く。

なんでばれた！？音は出していないのに――！！

無我夢中で殺到してくる銃弾から逃れ、俺は北西にある教員用駐車場にたどり着いた。別に深い考えがあって来たわけではない、ただ銃弾が飛んで来ない方向に命からがら逃げただけである。

駐車場には10台ほど教師が通勤に使用していた乗用車が停められていた。乗ろうとした直前にゾンビに殺されたのか、ドアが開き放しのプリウスがあった。運転席の足元には血まみれのキーが落ちている。教師は死んでからゾンビ化したのか、車内は血だらけだったが死体はなかった。

とりあえずそのプリウスにもたれかかり、前田が追ってきていないことを確認する。前田はいまだにお遊び気分なのか、はたまたヘリの燃料がなくなるまで待っているつもりなのか。多分その両方だろう。

あいつは圧倒的優位に立っている。撃っても傷つかないし、あいつの言う通りなら身体の半分を破壊しなければいつまでも再生する。しかもマシンガンを持っている。

一方俺はボロボロだ。武器もSG556しか持って、な、い・・・・・・・・？

俺はそこで、持っていたSG556が異様に軽くなっているのに気

づいた。そしてSG556を見て驚愕する。

SG556のハンドガードから半分先が無くなっていた。さっき俺が逃げる時に弾が当たったらしく、ハンドガードが割れて中から折れた銃身や部品が見えている。逃げるのに必死だったから、銃が壊れた事に今まで気づかなかったのだ。幸運なことに俺には一発も当たらなかったが、最も威力が大きい突撃銃を失ってしまった。

俺は舌打ちをしてガラクタとなったSG556を投げ捨てた。5.56mm弾はまだ残っているが、撃てない銃はただの荷物だ。

そしてレッグホルスターからUSPを抜こうとして、自分か最悪の状況に置かれたことに気づく。

USPはさっきゾンビに追われていた時に落としてしまったのだ。P230JPは弾がないし、TMPにいたっては途中で弾がなくなり、リサさんと一緒に体育倉庫に置いてきた。

あれ？俺終了のお知らせじゃね？

まるで悪夢を見ているようだった。弾はあっても銃はない。武器はブッシュナイフとサバイバルナイフだけ。こんな接近戦用武器で校内を徘徊するゾンビや人外の化け物と戦わなければならないなんて、悪夢以外の何物でもない。

救いはないんですか！？

ショッピングモールで見たリサさんが研究所から持ってきたパソコンには、前田が生物兵器の研究開発の専門家であることが記されていた。おそらくその技術を理由して、前田はあんな人外のクモ女に

なってしまったのだろう。

それで俺が前田に背後から奇襲をかけようとした時に発見された理由もわかる。前田がクモの要素を取り込んでいるなら、あの頭部に現れた6つの目も使えるはずだ。クモは獲物を発見するために異常に目がいい。しかも全包围をカバーできるから、少しでも動いたらあつという間に発見されてしまうのだ。

少しでも見つければマシンガンが銃弾を嵐のように浴びせ掛けてくる。武器は接近戦用のみ。マシンガンとナイフではお話にならない。

車に乗って逃げるか？ふとそんな考えが思いついた。

バカか。大体これに乗った時点で前田に気づかれる。駐車場から校外に出るには正門を通るしかない。その前にマシンガンで銃弾を雨霰と浴びせ掛けられて車ごと穴だらけになる。

そもそもそれではリサさんを見捨てて逃げる事になる。まだ体育倉庫の方から銃声は聞こえていないから、リサさんはまだ生きてるだろう。前田は負傷したりリサさんは後でいつでも殺せると思っているのかもしれない、だから敢えてまだリサさんを殺さないのだ。

しかし早く医者に手術してもらわなければならない傷だ。そのためには対空ミサイルを所持している前田を倒し、ニコライ氏に戻って来てもらわなければ。

ニコライ氏はあと40分は余裕があると言っていた。残り時間は30分を切っている。

このまま逃げているだけでは、ヘリは俺とリサさんを置いて行ってしまう。そんな展開はお断りだ、俺は生き残って、美雪に好きだと言わなければならない。だから俺は前田を倒す！！

以前の俺ならさっさと諦めてしまっただろう。だが今の俺には好きな人がいる。そいつを守るために、俺は戦うんだ。

ここで諦めては、死んだ皆に顔向けできない。皆やりたい事がいっぱいあるのに前田の手によって理不尽な死を迎えてしまったんだ。幸運にも生き残っている俺が生きていることを諦めるのは許されない。

・・・それに俺にはM属性があるからな。厳しい展開であればあるほど燃えるってんだ。

まずは作戦を立てなければならぬ。無謀な戦いは死をもたらす。俺はまだまだ死ぬ気はない。

だが所持している武器はブッシュナイフとサバイバルナイフだけだ。どうやって戦う？バンザイ突撃なんてのは死しか待っていない戦法だ。

身近な者を使って戦うのが俺のやり方だったはずだ。初めてゾンビと遭遇した時も机と椅子を使って戦ったし、中学校ではギターを使ってゾンビをSATSGAIした。冷静になれば、いくらでも周りに武器になるものはある。全てはチャンス！！

俺は駐車場の隣に建つ管理棟を見上げた。管理棟は音楽室やコンピュータ室、理科室などがあり、そういった実習系の授業を行う時に使う。

俺は突然いいアイディアを思いついた。多少、いやだいが危険だが、うまくいけば前田を倒せる。ほとんど不死身と自称するあいつを葬り去ることも可能だ。

その作戦を行うために必要な物は管理棟にある。俺は立ち上がり、管理棟に乗り込んで行った。

授業で管理棟に移動する時は、教室棟と繋がっている渡り廊下を使う。管理棟にも入口はいくつかあるが、上履きに履き変えるのを面倒臭がって土足で出入りする生徒が続出したため、管理棟に立ち入る時は渡り廊下を使う規則になったのだ。元からあった入口は今では非常経路に指定されていて、普段は教師くらいしか使用しない。そしてゾンビが入り込んできてパニックに陥った生徒達が逃げだそうとしたのか、1階の入口は開いていた。ドアノブが血まみれで、管理棟の中に入ると腐敗臭がした。

頭を食われたせいで、殺されてもゾンビ化せず腐っていた女生徒の死体が転がっていた。たしかゾンビが発生した時は1年生は選択授業が行われていて、女子の大半が家庭科の授業を受けに管理棟にいた。廊下を見れば、女生徒のゾンビがさ迷っている。

俺に気づいたのか、女生徒のゾンビ達が俺に近寄ってくる。今まで一度もモテ期なるものが来た経験はないが、女とはいえゾンビにモテモテになるのは嫌だ。近づいてくるのも俺の身体が目当てなんだろうし（エサ的な意味で）。

うっとうしいが、ゾンビは倒さずに進む。もし前田が管理棟に入ってきた場合、ゾンビの死体が転がっていれば俺がいる事に気づいてしまうからだ。

ブッシュナイフを右手で構えつつ階段を上がり、2階にある物理室に向かう。物理室には、今回使う物がすべて揃っている。

物理室の前の廊下にもゾンビが何体かいる。だがそれらを全てスルーし、俺は開いたままのドアから物理室に入った。

物理室はゾンビが入って来た時のままの状態のようだ。慌てて立ち上がったのか椅子がいくつも倒れ、床にシャーペンやノートが散乱している。あちこちに茶色く変色した血痕が残っている。窓は開けられたままで、カーテンが風で揺れていた。

黒板の脇にある扉を開け、物理準備室に入る。

物理準備室は物理室の半分くらいの広さで、壁に沿って棚が並んでいる。棚には実験で使用するビーカーやガスバーナー、そして危険なものが入まっている鍵の掛かった金属製の箱がある。

目当てのものは、その棚の一番下に並べられていた。俺は選択授業で物理を取っていたので、物理準備室に置いてあるものの配置は大体わかる。学校では真面目（＋陰気）キャラで通っていたので、度々物理教師の手伝いもしていたからよく準備室には出入りしていた。そしてゾンビが発生する前日の授業で、物理教師が次の日に実験をする事を予告していた。結局物理の授業は学校ごと潰れたが、実験に使う「それ」はちゃんと用意してあったようだ。

「それ」はいくつもの金属製の円筒形の容器に収まっている。容器の側面に張られたシールには、「保存期間17日」とある。実験の前日に補充したはずなので、ギリギリまだ使えるはずだ。

よし、これを使って……………。

俺が重たいその容器の一つを持ち上げた時、駐車場の方から、

「たーけーしーくーん、いっしょにあそびましょー!!」

という声が聞こえてきた。

その声を聞いて思わず容器を取り落としそうになり、そして慌てて棚に戻す。窓から出来るだけ身を曝さないようにして、目だけを出して駐車場を見る。

駐車場には前田がいた。止められた乗用車の間を歩き回り、そして6本の足で地面を蹴って跳躍し、屋根に飛び移ったりしている。ここまで来やがったか。どうする、逃げるか？ いや、今下手に動いたら……。

俺が迷っている内に、階下から窓ガラスが割れる音が響いてきた。続いてマシンガンの銃声が聞こえてくる。前田はどうやら窓を叩き割って侵入してきたようだ。

そして廊下の方からかちかちと足音が聞こえてくる。しかも、どんな足音は大きくなっているので近づいて来ているらしい。

どうする？ 今廊下に出ていたら確実に見つかる。物理室に隠れるしかない。

だが、どこに隠れる？

清掃用具のロッカーに隠れるか？ いやダメだ。ロッカーは学校でかくれんぼをした時に真っ先に搜索される場所だ。当然前田も調べる。教卓は？ アホか！ 前を通ったらすぐにわかる。

いっそカーテンに包まるか？ いやいや、物理室に入った瞬間に見つかるだろ。

机の下？ 遮蔽物がねーよ。地震の時ならいい隠れ場所だが。

そうこう迷っている内に、足音が物理室の前で止まった。もう考えている暇はない。俺は思い切って、開いたままの窓から外に飛び出た。

窓の外にはベランダなどない。だが30センチほど霧除け庇が突き出ている。俺は霧除け庇の淵を掴み、そしてぶら下がった。

直後、

「ここかなあ？」

という声と共に、ドアに何かを思いっきりたたき付けるような轟音が響いた。続いて何かが倒れる音。どうやらドアをぶち破ったらしい。あの図体ではスライドドアから入れないのだ。

その音と共に、俺は手を離して地に降り立った。ぶら下がった状態から降りたため、落下する距離も少なくて済んだ。

着地すると同時に移動し、さっき前田が叩き割った窓から再び管理棟に侵入する。

「あれえ？どこにいるのかなあ？」

という狂気じみた女の声が2階から聞こえてくる。見つかったらどうなっていたのかは想像したくない。

室内は弾痕があちこちにあった。そして頭を撃ち抜かれたゾンビが床に転がっている。邪魔だったらしいので殺したようだ、女って怖い。

床に散乱していたガラス片を拾い上げ、階段を上がって再び物理室に向かう。無論、足音は立てずに。

2階についた俺は廊下の角に立ち、そしてさっき拾ったガラス片を少しだけ突き出す。ガラス片に物理室前の廊下が写った。

と、前田がドアがぶち破られた出入口から出て来た。前田は「あそびましょー！！」と叫びつつ、かちかちと6本の足を動かして教室棟に繋がる渡り廊下の方へ向かっていく。

ガラス片に写る前田が角を曲がって完全に見えなくなったのを確認し、俺は物理室に駆け込んだ。

残り時間は25分。さっさと準備を整え、前田を倒さなければなら
ない。

俺は「それ」が入った重い金属製の容器を持ち上げ、駐車場へと向
かった。

いいぜ、前田。てめえが不死身っていうなら、まずはその幻想をぶ
ち殺す！！（某カミジョーさん風に）

第57話 n i g h t m a r e (後書き)

次回予告

第58話..

「血戦」

第58話 血戦（前書き）

行動目標..

「前田クリス」を倒す。

第58話 血戦

腕時計を見ると、既に時刻は5時40分にさしかかっていた。ヘリの燃料の余裕は後20分もない。もう躊躇している暇はなかった。全ての必要なものを素早く集め、準備を整えた俺は、校舎に沿って移動してグラウンドが一望出来る位置にいた。前田はさっきからグラウンドをウロウロしていて、たまに暇潰しをするかのようにグラウンドに出て来たゾンビをマシンガンで撃っていた。

リサさんのいる体育倉庫には近づこうともしない。そのうち出血で死ぬか、いつでも殺せると高をくくっているのだろう。クソッ、なんか生殺与奪の権利を他人に握られてるってのは気に入らない。

俺は一個だけ残った手榴弾と物理室にあった器材を使って即席の武器を作っていた。もっと時間をかければさらに威力が強いものが作れるだろうが、いろいろと管理棟を回って器材を集める暇はなかったのだ。

俺は深呼吸して心を落ち着かせた。こっちは丸腰に近く、敵はマシンガンで武装している。死ぬ確率は非常に高い。

だがこれしか手段はないのだ。あんな人外の化け物とこんな場所に取り残されるなんてお断りだ。だから俺は前田を倒して、こんな地獄からさっさとおさらばするのだ。

覚悟を決めて、前田が俺の近くまで来るのを待つ。手榴弾を改造した武器は投擲しなければならないので、よほど近くまで寄らなければならない。

だが幸いなことに、前田はすぐに俺が隠れている校舎のそばまでやって来た。

「出て来なよー。遊んであげるよー♪」

という不気味な声が聞こえてくる。

いいぜ、遊んでやる。俺は手榴弾を取り出し、安全ピンをそつと引き抜いた。手榴弾は物理室で調達した何本かの茶色の瓶にビニールテープで固定されている。そしてその瓶の中には、同じく物理室で入手した液体が入っている。

前田が俺に背中を見せた瞬間に校舎の陰から飛びだし、前田に向けて思いつき何本も瓶がついた手榴弾を投げつける。距離は20メートルも離れていない。頭の背中側についた目が俺の姿を捉え、前田が振り返って俺にマシンガンの銃口を向ける――――。

だがその直前に、俺が放り投げた手榴弾が爆発していた。手榴弾はうまい具合に前田の足元に落下しており、その足元を割れた瓶から漏れた液体が浸している。

爆発が起き、無数の手榴弾の破片で前田の外骨格が傷つく。同時に足元の液体に火がつき、前田の身体を炎が包んだ。

瓶の中には物理室にあったアルコールランプで使うアルコールが入っていたのだ。割れて空気に触れた瞬間に大部分が蒸発しただろうが、それでも前田の身体に付着したアルコールが爆発で起きた火に引火した。

手榴弾が爆発したのを見たのもつかの間、俺は駐車場へ向けて全力で走り出した。手榴弾＋アルコール火炎瓶はあくまでも前田の気を逸らすため、あれだけで倒そうとは微塵も思っていない。というか手榴弾で殺せるなら苦労しない。

すぐに、背後から銃声が響いてきた。同時に俺の周りを無数の銃弾

がかすめ、植木や校舎の外壁に突き刺さる。どうやら手榴弾と火炎瓶ではあまり行動を封じることが出来なかったようだ。

「待ちなよ」

という声と共に、あの気味の悪い足元が俺を追い掛けてくる。振り返ってはダメだ。走るスピードが落ちるし、何よりあのGが走るようなキモい光景を目撃してしまう。

銃弾を食らって折れた木の枝やコンクリート片、粉々になった窓ガラスが舞い散る中を俺は走った。前田との距離を確認するため、一度だけ後ろを振り向く。そしてすぐに後悔した。

100メートルほど後ろから、前田がすごい形相で俺を追い掛けて来ていた。爆発のせいか足が一本ちぎれかけていて、そのせいで走るスピードが落ちているようだ。マシンガンを乱射しつつ、前田は俺を追い掛けてくる。

教室棟の建物の角を曲がると、そこは駐車場だった。駐車場にはさっき俺が見つけたプリウスが、ドアが開きっ放しの状態で駐車してある。あのプリウスはこの作戦の要で、後部席には既に物理室にあったいくつもの金属製容器が積み込まれている。

前田との距離を保ったまま、俺はプリウスの運転席に飛び込んだ。既に血まみれのキーは差し込まれており、キーを捻ってエンジンを始動する。

直後、前田が駐車場にやってきた。ちぎれた足は既に再生している。前田の背後には教室棟がそびえている。

今だ！！

「うおおおおおおおおおおっ!!!」

俺は絶叫し、アクセルを思いっきり踏み込んだ。エンジン音が大きくなり、勢いよくプリウスが発進する。

すぐに前田は俺に気づいた。ウルティマックス100を構え、俺の運転するプリウスへと発砲してくる。

銃弾の嵐に飛び込んでいくようなものだった。ボンネットに火花と共に穴が空き、続いてフロントガラスが何発も銃弾を受けて粉々に砕け散る。サイドミラーが吹っ飛び、破壊されたのかヘッドライトの明かりが消えた。

銃弾が顔のそばを何発も掠めた。だが減速も方向転換もしない。少しでも怯んだら俺の負けだ。

自分向けて突っ込んでくるプリウスとの距離が20メートルにまで縮まった時、ようやく前田は逃げ出そうとした。だが俺はハンドルを切り、進行方向の中心に前田を捉え続ける。

そしてついに、ドンという激しい音と衝撃と共に、前田がプリウスのバンパーにぶち当たった。前田は体重が重くなっているので跳ね飛ばされることはなく、プリウスに押されるまま地面を削りながら進んでいく。

目の前、ボンネットの上に前田の上半身があった。前田は猛スピードでプリウスにぶち当たった上押されているというのに、苦痛の表情を見せていない。それどころか、轢かれながらも俺の顔へと手を伸ばしてくる。

目の前に外骨格に覆われた黒い前田の手が来ても、俺はビビってス
ピードを落とすような事はしなかった。ナイフのようなその爪が右
頬を裂き、血が溢れ出たのがわかった。

「死ぬえええええええええええええええつ!!!」

教室棟の壁に突っ込んだ瞬間、一瞬だけ意識が飛んだ。

衝突したせいでひしゃげ、歪んだドアを蹴る。ドアの付け根は衝突の衝撃で壊れていたの、蹴り一発であっさりドアは外れた。

プリウスは衝突でほとんど原形を留めていなかった。車体の金属板がまるで紙のように歪み、シワが出来ている。歪みあるな。だらし

ねえな。でも最高速度で突っ込んだんだから仕方ないね。

つーか俺、車がこんな状態になったのに生きてたのか。日本の自動車の安全技術は世界一イイイイ！

ボンネットのカバーが外れ、エンジンの部品があちこちに散乱していた。そしてその先、大破したプリウスと教室棟の壁に挟まるようにして前田がもがいていた。

衝突で下半身が潰されてはいたが、前田はまだまだ元気だった。プリウスのボンネットを掴んで前後に揺ると、驚くべきことにプリウスの車体が少しではあるが動いた。なんて怪力だよ。

前田が持っていたウルティマックス100は奴の足元に落ちていたが、前田は挟まれた状態から脱出することを優先しているらしい。俺を見ても機関銃を拾おうとしない。まだ前田は俺が奴を殺せないと思っているようだ。

まずその幻想を（ry

俺は後部席のドアを開け（というより手をかけたらあっさり外れてしまった）、車内に散乱していた金属容器を取り出す。幸い中身は漏れていないようだ。

その容器だけで3キロ、中身は6リットル以上入っていて非常に重く、全ての容器を外に出すのには苦勞した。そのうちの一つを抱えて、俺はプリウスと壁に挟まれている前田に近づいた。

前田は俺が近づいてくるのを見た瞬間、足元のウルティマックス100に手を伸ばそうとした。だが身体を挟まれている状態なので、拾い上げることは出来ない。

俺は前田に代わってウルティマックス100を取り上げた。拾ったのはただ単にコレを前田に持たせたら俺が殺されてしまうからで、機関銃を使って前田を倒そうという考えは毛頭ない。

「・・・わたしは銃弾なんかじゃ傷一つつかないわよ？」

機関銃を取り上げた俺を見て前田が言った。その声にはまだ余裕ぶっている響きがある。

「んなことわかってるさ。確かお前、細胞が生きている限りいくらでも再生できるんだよな？なら、こいつはどうかな？」

安全のため物理室にあったぶ厚い革の手袋をして、俺はそう言っ
て容器の蓋を開けた。開けると同時に容器の中から白い気体があがる。
前田はすぐに、中に入っている液体の正体がわかったらしい。プリ
ウスを動かそうと必死にもがく。

前田の必死な顔は初めて見たな。じゃ、やるか。

「食らえっ！！エターナルフォースブリザード！！！」

この技を受けた相手は死ぬ。

そう叫び、容器をひっくり返して中身を前田の下半身にぶちまける。
液体が前田の固い外骨格に触れた瞬間、一気に白煙が上がった。そ
して前田の外骨格が凍りつく。

その瞬間、前田の口からこの世のものとは思えないような絶叫が上
がった。

俺が物理室から持ち出し、そして今前田にぶちまけたのは液体窒素だった。皆でん〇ろう先生の科学番組とかで見たことがあると思うが、液体窒素は物体を急激に冷やす。その結果バナナで釘が打てるようになり、花は握ると粉々になってしまう。

俺はゾンビが発生する前日、物理の授業で液体窒素を使用することを知らされた。それで液体窒素を利用することを思いついたのだ。問題は量だったが、幸いなことに前田を凍らせるには十分な量が準備されていた。物理の授業は他のクラスでもやるし、科学部がついでに備品として大量に発注していたのだ。

それに液体窒素を使用するのにはもう一つ意味がある。それは前田の細胞を完全に破壊することだった。

難病で死亡した人の遺体を液体窒素で冷凍し、保存して未来で技術が発達した時に研究しようという動きがある。他にも人体を冷やして冷凍睡眠の研究などもあるが、それらはうまくいっていない。

細胞を冷凍してしまうと、細胞の一番外側を覆う細胞膜という部分が損傷してしまうのだ。栄養分や不要分、イオンや物質はこの細胞膜を通して移動する。だが細胞膜が壊れるとそれらの移動が出来なくなり、細胞も死んでしまう。

———ということを、俺は物理の教師に聞いた。

だから俺は液体窒素を使って前田の動きを封じると同時に、その身体を構成する細胞も破壊してしまおうと考えた。

実際、効果はてきめんだった。前田は悲鳴を上げて注がれる液体窒素から逃れようとしたが、すでに俺が30リットル近い液体窒素をかけていたので、前田の下半身は完全に凍りついていた。

無理に身体を動かしたせいで、凍りついた部分がぽっきりと折れてしまった。すでにプリウスと壁の間に挟まっていた6本の足は折れ、地面に転がっている。試しに踏んでみると、ザクツという音と共にバラバラに砕けた。

カッチカチやぞ・・・。

という冗談はさておき、液体窒素は確かに効果があるようだ。さっきまで怪我をしても足の一本や二本ならすぐ再生していたのに、折れた前田の足が生えてくる事はない。

いまや形勢は逆転していた。全ての足を失い、両手で地面を這って逃げる前田。そして液体窒素の容器を抱え、無情にも追い撃ちをかける俺。

俺は7本目の容器に入った液体窒素を前田にぶっかけた。絶叫とともに前田の背中が凍りついていく。

「おらおらどうしたあ？ さっきまでの威勢はどこに行ったあ？」

そう言いつつ空になった容器を捨て、その背中に蹴りを入れる。カチカチに凍りついていた外骨格が砕け、中から赤い筋肉が覗いた。

別の液体窒素が入った容器を取りに行こうとした時、遠くから爆発音が聞こえてきた。南の市街地の方向からだ。

南を見ると遠くで黒煙が上がっていた。爆発が起きた場所は近い、多分前田の仕業だ。

「おい、てめえ何しやがった？」

そう聞いても、前田は悲鳴を上げているだけだった。しかしその右手から、ばきりと何かが碎けるような音がしたのを音は聞いた。

言いたくないなら仕方ない、実力行使だ。ということで大破したプリウスから持ってきた8本目の液体窒素を、前田の右肩に垂らした。再び前田が絶叫する。外骨格がはがれおち、そこにブッシュナイフを振り下ろす。外骨格の中身は普通の人間のままらしく、2、3回ブッシュナイフをたたきつけたただけであっさり切断出来た。

切断した前田の右手を拾い上げ、固く握りしめられていた手の平を解く。するとそこには、握り潰されたらしい無線機の残骸があった。どうやら無線機で信号を送って何かを爆破したらしい。証拠かなにか、回収されたらまずい物でもあったのだろうか。

「何を吹っ飛ばした？ 言え!!」

だが前田は、残された左腕で地面を掴み、必死に俺から逃げようとしていた。

「はっはっは! どこに行こうというのだね? (某ラピュタ王風に)」

そう言って前田を追い掛ける。とはいっても芋虫のようにはいずる前田に追いつくのは簡単だった。歩くだけでいい。

「3分間待ってやる!・・・なんて言うんでも思ったか?」

液体窒素を残っていた左肩にかける。前田の絶叫と共にたちまち左肩は凍りつき、そして無理に動かそうとしたせいで圧力がかかり、ぽっきり折れた。

前田は両手両足(足は6本あったけど)を失った。もうこいつは動くことは出来ない。俺の思うがままだ。

動けなくなった前田の傍らにしゃがみ、言う。

「はい何か言うことはありますか？俺の機嫌がよかったら聞いてやるよ」

「・・・・・・・・助けて」

何を言ってるんだコイツ？今まで散々俺を殺そうとしてたろ？つかコイツのせいでリサさんは重傷を負ったんだ。

俺は無言で立ち上がり、前田を見下した。

「却下。ゆっくり死んでいてね！」

そこからは、暴力の連続だった。今まで溜まっていた恨みを晴らすかのように、俺は動けない前田を徹底的に痛め付けた。

蹴り飛ばす。踏みつける。ブッシュナイフを突き刺して外骨格を引っぺがす。8つある目を全てえぐる。

夕暮れの学校に絶え間無い前田の悲鳴が響いた。前田が苦しむ様子を見て、さらに痛めつける。

普段は自他共に認めるM体質なのに、この時ばかりは違った。俺は無抵抗の前田を痛めつけることを楽しんでいた。

いや、この世界自体が好きになり始めていた。身を守るという理由ならどんな武器を持っても、いくらでも暴力を行使出来る世界に俺は惹かれていた。

以前の平和な世界では、俺は虐げられる側だった。関口を始めとし

た力にすぐ訴えるような連中が蔓延り、それが正当化される世の中だった。その中で俺のような弱い者は武器を持って立ち向かうことも出来ず、ただ我慢することしかできなかった。

だがこの世界では違う。俺が関口を殺したように、力の強さなんて大したことはない。より強い武器を持ち、知恵のある奴が全てを制す世界だ。まさに弱肉強食、前の世界の地位や頭の良さ、力の強さなんてものさしはリセットされ、皆平等な状態から生をつかみ取っていく。

いいねいいね最高だねえ!! へりに乗ってこれから脱出するのが残念だよ!!

残り時間は15分を切っていた。さっさとへりを読んでリサさんと乗り込み、早くリサさんを医者のところ连接到いかなければならない。

俺は残り2つとなった液体窒素の容器を地面に置いた。前田は徹底的に痛めつけられたというのに、急速にその傷を修復させていた。無理矢理はがされた外骨格が元通りになり、えぐられた眼球が再生してくる。ただし、液体窒素をかけられて切断された手足は生えてこない。細胞自体が死んでいるからだ。

前田は恐怖に染まった目で俺を見上げた。

「助けて………!」

答えはもちろん、

「ノーだ。あの世でこの2週間に死んだ世界中の人に詫び続けろ」

そう言って、容器をひっくり返す。

「もう終わりだあ！この世界から出て行けえ！！」

前田の顔は、悲鳴を上げて口を開けたままの状態で凍りついた。2本ある容器に入った液体窒素、合計12リットルを残っていた上半身と頭部に注ぐ。

一際多く白煙が上がり、それが晴れた時には前田はカチンコチンに凍りついていて、身体表面に霜が降り、まるで精緻に作ったマネキンのようなだった。

ブッシュナイフを抜き、その首に振り下ろす。何度かブッシュナイフを叩きつけると、バキッという音と共に前田の頭が胴体に別れを告げた。

切断した頭をサッカーボールのように転がしながら、教室棟の壁に向き合う。

そして思いつき、その頭を蹴った。蹴った時の衝撃で少し砕けたが、前田の凍りついた頭は回転しながら教室棟の壁にぶつかった。

皆雪が降った時に、雪の玉を壁に投げつけたことがあるだろう。それと同じようなことが起きた。

壁に赤いシャーベット状の物体が少しだけへばりついた。頭の残りは碎けて地面に散乱していた。明日の朝になったら文字通り粉々になった肉片や骨が散らばるバイオレンスな光景が広がっているだろう。

念のため、残った胴体の部分も踏んで粉々にしておいた。これでも奴は復活しないだろう。というかこれで死ななかったら、核攻撃でもしなけりゃならん。

前田が持っていたウルティマックス100と予備の弾倉が入ったシヨルダーバッグも拾っておいた。学校にまだまだゾンビはいる。ヘリが来るまでリサさんを守るためにも武器は必要だった。

足元に何かが滴った。右の頬を撫でると、血がべったりとついていった。頬がざつくりと裂けている。がた興奮しているせいかな、あまり痛みを感じない。

これは痕が残る傷になるかもしれないな。ま、勝利の証として残しておくのもいいか。

とその時、いきなり俺の足元が暗くなった。だいぶ傾いたが、陽はまだ出ている。

だったら、俺の後ろで太陽光を遮る「何か」があることになる。

だが今まで、俺の背後には何もなかった。つまりその「何か」、動く物体だということだ。

俺は恐る恐る振り返り、そして気絶しそうになった。

俺の目の前に、トラックサイズの蜘蛛がいた。

第58話 血戦（後書き）

次回予告

第59話..

「end
game
」

第59話 e n d g a m e (前書き)

行動目標..

「巨大蜘蛛」を倒す。

第59話 e n d g a m e

俺の目の前には、馬鹿でかい蜘蛛がいた。そのボーリングの玉みたいな目が俺の方を向いている。

前田が人間と蜘蛛の合いの子だとするなら、こっちは純粋に蜘蛛をそのままでかくしたようなものだ。俺は昆虫には詳しい方だと思っているが、図鑑でも肉眼でもこんなサイズの蜘蛛なんて見た事はない。

こんな馬鹿でかい蜘蛛が繁殖していれば、あっという間に生態系のバランスが崩れる。というか、絶対に学者に発見されている。

まさか、さっきの前田が作った生物兵器……？

だとしたらさっきの爆発音は、コイツを解放するために？市街地の地下鉄の構内だったら充分収まるサイズだ。もしかして、今まで地下で飼ってたのか？そして俺に殺されそうになったから地下鉄を爆破し、この巨大蜘蛛を解放した？

などという考えが次々沸いて来たが、そんなことはこの際重要ではない。問題は、どうやってこのトラックサイズの蜘蛛から逃げるかどうかだ。

蜘蛛は動く物体によく反応すると言われている。ならこのままそつと後ずさりして、リサさんの隠れている体育倉庫へ……。

即座にその案を実行する。俺、蜘蛛に関するトラウマがあるから、蜘蛛って嫌いなんだよ。親父が生きている時にキャンプに行って、気づかない内に俺の身体をはい回られた時から大嫌いになった。ゆっくり、ゆっくり、少しずつ後ろへ。そうやって蜘蛛から10メートルほど離れたところで、

盛大にコケた。

巨大蜘蛛の目が俺の方を向く。その瞬間、俺は脱兎の如く逃げ出した。

直後、カサカサという音が背後から追い掛けてきた。その音を発する物の正体は何なのか、俺の背後でどんな光景が繰り広げられているのか考えたくない。

ウルティマックス100を携えたまま、俺は校門へと走る。とりあえずここから巨大蜘蛛を遠ざけ、その間にリサさんがヘリを呼んでくれれば万事解決・・・・・・・・。

いや何一つ解決しねえよ！？校庭にヘリが着陸しても、この巨大蜘蛛に追い掛けられている俺はどうなる？まさか巨大蜘蛛を引き連れてヘリに乗り込むのか？アホか？ヘリに乗り込んだところで、離陸直前に巨大蜘蛛がヘリに突っ込んで行ったらヘリが確実に大破する。しかもこんな化け物を放置しておくのか？コイツが仮に繁殖したら、人類はゾンビに加えて化け物蜘蛛の脅威にさらされることになる。どうやら、また蜘蛛の化け物を倒さなければならぬらしい。本当に今日は、蜘蛛に関係がある一日だな。つか俺、さっきの前田と

の戦いでクタクタなんだが。

校門を出たところで振り返る。すると俺の視界に、8本の足をせわしなく動かして走って来る巨大蜘蛛の姿が見えた。

ぎゃああああっ！キモい、マジキモい！キモすぎる！足に毛が生えてるっ！キモいよーっ！！本能的に嫌悪感を感じ、同時にウルティマックス100を連射する。銃口から銃火がほとばしり、巨大蜘蛛の表面に次々と穴が開く。ウルティマックス100の反動はそこまで強くなく、連射しても銃口が暴れ回るというような事はない。

巨大蜘蛛は前田と違い、不死身でも再生能力も持っていないらしい。銃弾が命中する度にその身体表面がえぐれ、緑色の体液が飛び散る。

だが巨大蜘蛛に少ししかダメージを与えられていないようだ。銃弾を食らいつつも、巨大蜘蛛は俺向けてカサカサ走って来る。マジでキモい。

「救いはないんですか！？」

そう叫び、再び走り出す。どこに逃げるか、どうやって倒すか。そんな事は逃げながら考える！

下り坂を活かして普通より速く走り、出来るだけ蜘蛛から距離を取ろうとする。時々振り返り、ウルティマックス100を連射して巨大蜘蛛に少しでもダメージを与えようとする。

100連発のドラムマガジンが空になった。さっき前田から奪ったシオルダーバッグに入っていた別のドラムマガジンを取り出し、装填する。ウルティマックス100はアサルトライフル感覚で扱える軽機関銃なので、今まで機関銃に触ったことがない俺でも撃つことができた。

ただ、ドラムマガジンはこれで最後だった。前田の奴、バカスカ撃

ちやがって。後々のことも考えとけよ（主に俺のために）。

SG556用の30発弾倉も使用可能だが、その場合機関銃の利点である連射が出来なくなる。機関銃は長時間連射をするために作られている。たった30発の弾丸ではあつという間に撃ち尽くしてしまう。

——だが、やるしかない。

俺は装填が終わったウルティマックス100を構え、道路に仁王立ちになって巨大蜘蛛へ5.56mm弾を浴びせ掛ける。銃身が加熱しないよう少しずつ間をあけ、機関銃を連射する。

50発ほど巨大蜘蛛に食らわせたところで、ようやく巨大蜘蛛の動きが遅くなってきた。

「やったか!？」

そう言い、さらに機関銃を連射する。5秒もしないうちにドラムマガジンは空になった。

実に200発近いライフル弾を浴びた蜘蛛は、全身に穴が開いてそこから緑色の体液を垂れ流していた。空のドラムマガジンを外し、30発入り弾倉に交換した俺は、油断せずに巨大蜘蛛に照準を合わせつづける。

だが巨大蜘蛛は再び立ち上がった。弾は当たっているが、身体がデカすぎるので銃弾が内部まで届いていないのだ。

舌打ちし、引き金を引こうとした俺の目の前で、この日何度目かわからない気持ち悪い光景が繰り広げられた。

なんと蜘蛛の腹が裂け、そこから大量の子蜘蛛がはい出てきたのだ。

キモい、キモい、もういやだ。俺は大量の子蜘蛛を見て思った。

小さいと言ってもその子蜘蛛は小学生くらいの全長だ。それが一斉に20体ほど、俺に向かって這ってくる様子は悪夢以外の何物でもない。

俺は必死に走って逃げた。あんな化け物共を相手にしていたら、あつという間に俺が死ぬ。逃げるが勝ち。三十六計逃げるにしかず。そんな言葉で言い訳し、俺は化け物蜘蛛の集団から逃げる。

が、走る俺の足元が急に暗くなった。嫌な予感がして振り返り、上を向く。

すると空中に、俺向けて落下してきている巨大蜘蛛がいた。高度は20メートルだろうか。

そういえば蜘蛛の中にハエトリグモって種類がいたな。確か巣は張らず、その名の通りハエとかに飛び掛かって捕食するという。

——などというどうでもいい知識は、今の状況に何の役にも立たなかった。俺は呆然と立ち尽くし、ジャンプした巨大蜘蛛が俺向けて落下してくるのを見ている事しか出来なかった。

巨大蜘蛛は現在高度10メートル、あんなのに押し潰されたら即死する。

俺の心が恐怖で一杯になった、その時。

俺向けて飛び掛かってきている巨大蜘蛛の腹部で、突如爆発が起きた。

緑色の体液を撒き散らしつつ、爆発の勢いで落下コースが変わり、巨大蜘蛛は俺の5メートル脇に着地（というか墜落）した。着地点にあった放置されっ放しの乗用車が、巨大蜘蛛に押し潰されてグシャグシャに破壊される。

今の爆発は何だ？ 戦隊物の悪役でもないし、まさか自爆装置を仕込んでいた訳でもあるまい。俺は爆発の正体を探るべく、周囲を見回した。

すると高校の校門前に、SG556を構えたりサさんがいた。リサさんの持つSG556にマウントされたM203グレネードランチャーから発砲煙が上がっており、俺はリサさんがM203を使って巨大蜘蛛を攻撃してくれたのだとわかった。

だがリサさんの足元を見ると、そこには真っ赤な水溜まりが出来ていた。さっき腹を撃たれたのに、俺を助けるために来てくれたのか？

「リサさん、戻って下さい！ それ以上戦ったら出血で死んじゃいますよ！？」

俺はそう叫んだが、リサさんは体育倉庫に戻ろうとしなかった。それどころか新たなグレネード弾を装填し、再び巨大蜘蛛を撃つ。

リサさんが出て来たので、子蜘蛛達がそちらに向かい始めた。リサさんは近寄ってくる子蜘蛛達を撃ちつつ、俺に叫んだ。

「コイツらはわたしがやる！君はそのデカブツを！！」

「そんな・・・、どうやって倒せばいいんです！？」

「タンクローリーがある！！それを・・・」

リサさんはそう言った直後、口から血を吐いて倒れそうになった。だがSG556を杖代わりにしてどうにか姿勢を維持し、気合いの叫び声と共に子蜘蛛達を撃つ。

リサさんは重傷を負っているのに、わざわざ俺を助けに来てくれたのだ。自分の怪我也省みずに助けてくれたリサさんがいるんだ、俺も精一杯頑張らなければならない。

無駄な足掻きだろうと何だろうと、最後までやってやろうじゃないか！！

俺はウルティマックス100を撃ちながら後退する。あれだけいた子蜘蛛はほとんどがリサさんに狙いを変更したようで、俺を追ってきているのは巨大蜘蛛と子蜘蛛数匹しかない。巨大蜘蛛の方は銃弾とグレネード弾を食らって動きがのろくなったものの、まだまだ元気だ。一方子蜘蛛は生まれたばかりだというのに、元気に走り回って俺に飛び掛かってくる。

まずは子蜘蛛を殲滅しなければならない。だがちょこまかと動く子蜘蛛を倒すのは難しかった。

坂の下には俺とリサさんがバイクで来る時に見た、道を塞ぐように停まっているタンクローリーがある。あれに巨大蜘蛛をおびき寄せ、銃撃で爆破して燃やす。それが俺の考えだった。

巨大蜘蛛に銃撃を加えて注意を俺の方に向け、少しずつタンクローリーに誘導していく。ヘリの燃料の余裕は残り10分を切った。さっさと巨大蜘蛛を倒さなければ。

飛び掛かってくる子蜘蛛を交わし、避けられないと判断した奴はブッシュナイフを抜いて切り付ける。子蜘蛛が片側の足を全て切断され、キーキーと耳障りな声を発する。そして動けなくなったところに銃弾を浴びせ、殺す。

その作業の繰り返しだった。最後の子蜘蛛を倒した時には弾は1弾倉分、30発しか残っていなかった。

高校の方からはまだ銃声が聞こえる。リサさんはまだ生きていて、子蜘蛛と戦っているらしい。

俺は巨大蜘蛛と向き合った。距離は20メートルほど。この距離を保ったまま、巨大蜘蛛をタンクローリーまで誘導しなければ。

巨大蜘蛛は度重なる銃撃で弱っているらしい。もしかしたら銃で倒すことが出来るかもしれないが、俺とリサさんの残弾では全部コイツに叩き込んで到底足りないだろう。だから、タンクローリーごと燃やして倒すのだ。

疲れてへとへとだったが、俺は走り出した。巨大蜘蛛を俺を追って移動を始める。

俺はタンクローリーのガソリンが入っているタンクの、上の部分を狙って撃った。よくゲームでは一発撃ただけでタンクローリーや燃料タンクが爆発するが、爆発を引き起こすにはあらかじめ燃料が適度に気化していなければならない。

銃撃でタンクに穴が開き、そこから勢いよく燃料が漏れ出す。周囲にガソリンの臭いが漂い、俺はタンクローリーへと走った。

タンクローリーと道の両端に並ぶブロック塀との間には1メートルほどの隙間があった。俺はそこを通って道の反対側に抜ける。巨大蜘蛛はトラックサイズなので隙間を通れず、俺を追いつけるにはタ

ンクローリーの上を通るしかない。その瞬間を狙ってさらにタンクローリーに銃撃を加え、弾着の火花を気化したガソリンに引火させるのだ。

巨大蜘蛛がタンクローリーを上り始めた。かなりの重量があるらしく、ガソリンの入ったタンクが歪み、さらにガソリンが漏れていく。

今だ！ そう思った俺が引き金を引こうとしたその時、

背後から何かが、ものすごいスピードでぶつかってきた。

俺は地面に投げ出されつつも、同時に振り返った。

そこにいたのは、走るゾンビだった。今まで全部倒したと思っていたのに、まだ残っていたのか！？

走るゾンビは再び、俺に向けて突進してきた。俺は思わずゾンビ目掛けて、絶叫と共にウルティマックス100の引き金を引いてしまう。

気がつくのと、走るゾンビは穴だらけになって俺の隣に倒れていた。すぐにタンクローリーの方を見る。巨大蜘蛛はタンクローリーを乗り越え、今まさに俺に向かって来ようとしていた。

その巨体は漏れたガソリンをたっぷりと浴びていた。今火を着けたら盛大なキャンプファイヤーが出来るだろう。

俺は引き金を引いた。

だが銃口から弾は出ず、銃声の代わりにカチリという音がした。

待て、どういふことだ！？何で弾が――。

俺はそこで、自分がとんでもないミスをした事に気づいた。

今の走るゾンビを倒した時、俺は残弾を全て使ってしまったのだ。SG556とウルティマックス100の連射速度は違う。弾が残るように撃ったつもりでも、連射速度が速いウルティマックス100ではあつという間に弾倉が空になってしまったのだ。

もうライフル弾はない。ウルティマックス100はただの金属の塊と化した。

絶好の機会なのに、何でこう肝心な時に必要な物が無いんだ！今奴はガソリンまみれなのに、時間が経てばすぐにガソリンが気化してしまう。

さっきまで聞こえていたリサさんの銃声も聞こえなくなった。もう、終わりなのか？こんな虫に俺は殺されるのか？

——いや、そんな未来は認めない。

考えろ、何か使えるものはないか。周囲に何かがあるか。どうやって奴を倒せるか。

俺は倒れている走るゾンビを見て、ある事を思い出した。そしてチェストリグを探る。

弾は、まだある。

俺は5・56mm弾が無くなったウルティマックス100を捨て、タンクローリーへと走った。銃は無く、弾もほとんどないので、俺の身体は身軽だった。

巨大蜘蛛はタンクローリーのすぐ前にいる。タンクローリーとブロック塀の隙間を通るには、巨大蜘蛛の目の前を通らなければならない。

俺は全力で走った。巨大蜘蛛は餌がわざわざ突っ込んでくるのを待つかのように、タンクローリーの前から動かない。

そして俺は、タンクローリーと塀の隙間に飛び込んだ。その瞬間、背中に激痛が走った。

巨大蜘蛛が俺を捕まえようと、その足を勢いよく伸ばしたのだ。鋭い爪がチェストリグと学生服を一直線に切り裂き、俺の背中の肉が少しばかり持って行かれたのを感じる。

激痛で力が抜け、その場に倒れ込みそうになる。だが歯を食いしばって痛みに耐え、ひたすら走る。巨大蜘蛛も俺を追って、再びタンクローリーを上り始めた。

走る俺の前に、L字型の金属とプラスチックで構成された黒い塊が見えた。俺はそれを、まるで野球選手のようにスライディングを決めて掴む。

それはバイクに乗って高校に向かっていた途中、走るゾンビに追われて腕を掴まれた時に手放してしまったU S P拳銃だった。弾はまだ入っている。

俺は片膝立ちになり、両手でU S Pを構えた。出血と背中 of 激痛で、U S Pを握る手が震える。

だがそんな事は問題なかった。相手はトラックサイズの蜘蛛と、動かないタンクローリーだ。目を閉じていても当たる。

「――終わりだ、クソツタレ!!!」

俺は叫び、そして引き金を引いた。

発射された9 m弾は、瞬く間にタンクローリーに突き刺さった。

タンクも金属製なので、弾着で火花が生じる。

タンクローリーの周囲には、タンクから漏れたガソリンが広がっていた。ガソリンは空気に触れて気化していた。

そこに、弾着で生じた火花が引火した。

瞬間、轟音と共に俺の身体は宙に浮いた。

10メートルほど爆風で吹っ飛ばされた俺は、背中からアスファルトの道路に叩きつけられた。一瞬目の前が真っ暗になったが、傷ついた背中が激痛を發したせいで意識を失わずにすんだ。

どうにか上半身を持ち上げた俺は、耳が変になってるのに気づいた。キーンと耳鳴りがする。爆発音のせいだろう。

立ち上がって、タンクローリーがあった場所を見る。タンクローリーは積んであったガソリンが引火し、文字通りの火の車と化していた。ガソリンが引火したまま飛び散ったのか、周囲に火が広がっている。

そしてその火の海の中を、巨大蜘蛛は変なダンスを踊るかのようにならうちまわっていた。俺を追ってタンクローリーを乗り越える時にたっぷりガソリンを浴びていたせいで、その身体が炎上している。巨大蜘蛛は燃え盛る炎から必死に逃げようとしていたが、爆発で吹き飛んだのかその身体には一本しか足が残っていない。ほとんど胴体のみになった巨大蜘蛛はしばらくもがいていたが、やがて完全に動かなくなった。

周囲にはガソリンの臭いや、何かが焼ける焦げた臭いが充満していた。

俺は、勝ったのだ。

「……っしやああああああっ！見たか虫野郎！俺の勝ちだった。」

「！！！」

俺は、喜びで叫んでいた。

第59話 end game (後書き)

次回予告

第60話..

「paradise lost」

第60話 **p a r a d i s e l o s t** (前書き)

行動目標..

M H - 5 3 E 「ペイブローウ」ヘリコプターに乗り込む。

第60話 p a r a d i s e l o s t

巨大蜘蛛の丸焼きを作った俺は、急いでリサさんのところに向かった。さっきから銃声は聞こえていない。リサさんが子蜘蛛を全て倒したのか、あるいは銃声リサさんの発信者が死んだか。後者でないことを俺は祈った。

校門の前に、死んだ子蜘蛛の群れに囲まれているようにして倒れているリサさんの姿があった。子蜘蛛は全部が銃弾を食らって動かない。

「リサさん！大丈夫ですか！？」

「・・・わたしのことはいい。早く、へりを・・・」

「いいわけないでしょう！掴まってください、今から校庭に運びます！」

俺はそう言って、リサさんに肩を貸して立たせた。だがリサさんは俺の支えがなければすぐに倒れてしまいそうで、よほどヤバイ状況であるのが俺にもわかる。

リサさんの顔色は蒼白だった。一步步く度にリサさんが呻き、地面に血の跡が続く。出血量が多すぎる、早く輸血しなければ死んでしまう。

SG556は撃ち尽くしたらしく、リサさんはベレッタM93Rだけを持っていた。周囲に無数の空薬莖と弾倉が落ちていることから、子蜘蛛との戦闘が激しかったことがうかがえる。

リサさんの腰に取り付けられた無線機を拝借し、ヘッドセットを着する。俺の無線機は前田の銃撃で破壊されてしまったからだ。

「こちら岩崎！ニコライさん、聞こえますか！？」

そうマイクに怒鳴る。だが、返事は返ってこない。

何かあったのか？そう思ったのもつかの間、ペイブローウヘリのローター音がはっきり聞こえてきた。なんだ、驚かしやがって。近くに戻って来ていたなら返事してくれよ。

リサさんの肩を支え、必死に着陸地点の校庭に向かう。俺は頬と背中に大きな切り傷をこさえ、リサさんは腹を撃たれた。二人ともロボロだ。

リサさんは歩くのも辛そうだった。腹を撃たれて大量出血している状態で移動しているのだ、そりゃあ辛い。

俺も一歩踏み出す度、巨大蜘蛛に切り裂かれた背中への傷が激痛を訴えた。正直言って、もう一歩も動きたくはない。だが俺がリサさんを連れて行かなければ、俺もリサさんも死んでしまう。

腕時計を見れば、すでに残り時間は3分しかなかった。ボクシングでは1ラウンドが終了し、カップラーメンにお湯を注いで待機し、ウルトラマンが戦える制限時間だ。

自分でも何を言っているのかわからないが、つまり時間がないってことだ。もどかしいほど、歩くスピードが遅く感じられる。

ようやく俺とリサさんはグラウンドの真ん中にたどり着いた。すでにリサさんは出血で意識が朦朧としている。ヘリはまだか！？

俺はリサさんの着用しているチェストリグのポーチを開け、そこから発炎筒を取り出した。俺の持っていた発炎筒は、またしても前田が放った銃弾が身体を掠めた際、ポーチに穴が開いてどこかに行ってしまった。

キャップを外して本体に点火し、俺は発炎筒を持って大きく振った。ヘリに俺とリサさんの現在地を知らせる必要があるからだ。

ペイブローは高校に近づいて来ていて、肉眼ではつきり見える位置まで近づいていた。ペイブローが指先ほどの大きさに見える。俺はよりいっそう発炎筒を大きく振り、必死に自分達の場所を伝える。風が強いのか、ペイブローがふらふらと揺れながら飛んでいる。無事に着陸してくれよ、と俺は願った。

「……………なあ、武。頼みがある」

リサさんがそう言ったので、俺は発炎筒を振りつつ振り返った。リサさんは震える手でM93Rを持ち上げ、俺に差し出してくる。

「……………これを、受け取ってくれ……………。……………君ならうまく、使いこなせるだろう……………」

「何言ってるんですかりサさん！形見のつもりですか？形見つてのは死んだ人からもらうモンですよ！俺はあんたを生きてここから連れ出す、だからそんな真似はしないで下さい！！」

俺の言葉に、リサさんはわずかに苦笑を浮かべた。今や笑うのも辛そうで、俺は見ていて悲しくなってくる。

そうだ。俺とリサさんはここから生きて脱出する。だから形見なんていらない。俺達は生き続ける。決して誰にも殺されたりはしない。だがリサさんは、まだM93Rを俺に渡そうとしている。

「……………じゃあ、しばらく預かってってくれ……………。わたしはしばらく戦えそうに、ないから……………」

「……………わかりました。でも預かるだけですよ？あんたが回復したら絶対に返しますよ！？」

俺はそう言って、受け取ったM93Rをベルトに差した。なぜだか、ひどく重く感じた。

「ああ・・・・・・・・。その日が来るのを、楽しみにしている・・・・・・・・」

リサさんはそう言って、眠るかのように瞳を閉じた。

オイオイ死んでくれるなよ！？俺はまだあんたに死んでもらっちゃ困るんだ。これから俺は皆を守るため、戦い方とかいろいろな事をあんたには教えてもらわなきゃならないんだ。だからまだ死ぬな、俺のために死ぬな・・・・・・・・！！

だが首筋に指を当てると、わずかだが脈があった。こんな状況で寝るなんて、後でいっぱい愚痴ってやる。

ペイブロウはすでに、高校から数十メートルの位置まで近づいていた。騒音レベルのローター音が周りの音を掻き消し、ペイブロウから発せられる風でグラウンドから砂埃が舞い上がる。俺は短くなつた発炎筒を捨て、大きく両手を振った。風のせいかな、まだペイブロウの機体が揺れている。

「おい！！俺達はどこだーっ！！」

ローター音に掻き消されるのはわかってはいたが、そう叫ばずにはいられなかった。まだニコライ氏は無線に出てくれない。前田のミサイル攻撃のせいで、ペイブロウの無線機が壊れたのだろうか？

パイブロウは機首を俺達に向け、まっすぐ進んでくる。操縦席が見えた。

――――操縦席が見える？

地上にいる俺から操縦席が見えるということは、パイブロウは機首を下げて飛んでいるということだ。操縦席は機首の上半分にある。ヘリコプターは着陸するときは機首を上げ、スピードを落としながら高度を下げる。機首を下げると前進してしまうからだ。だから本当なら、俺から見えるのは機体の下部でなければならないのだ。

だったら、なんで、パイブロウはおよそ着陸には向かない姿勢で近づいて来ているんだ？

俺の頭の中にある警報装置が、アラームを最大音量で鳴らしていた。

なんで着陸直前なのに、速度を落としていないんだ？
なんでさっきからパイブロウはふらついているんだ？
なんで無線に誰も出ないんだ？

なんで着陸地点を確認しようと上空を旋回せず、まっすぐ突っ込ん

でくるんだ？

「—————なんで、操縦席の窓に、真っ赤な液体がべったりついているんだ？」

俺がその事に気づいた時、ペイブローウがさらにスピードを上げ、高度を下げてきた。

それはまるで、俺達向けて、墜落してくるかのよう。

「————ヤバイ！！」

俺は叫び、リサさんを抱えて走り出した。ペイブローウは俺達目掛けて突っ込んでくるコースを取っていた。着陸ではない、墜落する姿勢だった。

リサさんを抱えた俺がどうにか墜落コースから逃れた直後、背後でドーンという激しい音が響いた。俺はリサさんをかばうかのように地面に倒れ込む。

金属と金属がぶつかり、潰れ、壊れるような激しい音がした。同時に俺とリサさんの頭上を、破壊された様々な部品が飛んで行く。

ザクッ！という音が頭の真横でした。恐る恐る音がした方を見ると、俺の頭の数十センチ脇にローターの破片らしき金属板が地面に突き刺さっていた。

俺は必死にリサさんを抱きしめ、飛んでくる金属片からリサさんをかばった。

何かが壊れるような激しい音は、すぐに収まった。俺は背後を振り向き、

そして絶望が全身を包んでいくのを感じた。

ペイブロウが、グラウンドのど真ん中に墜落していた。

グラウンドが数十メートルにわたって直線に削られていた。そして変わり果てたペイブロウが、その先に鎮座している。

5枚あったメインローターのブレードは、ほとんどが折れ曲がるか根本から無くなっていた。機体の周囲に、折れたブレードらしい細長い金属の板が散らばっている。1枚だけ原型を留めたままのローターブレードが、惰性でゆっくり回転して地面を削っている。

数十メートルにわたって削られた地面の周囲に、機体の破片が散乱していた。着陸ギアらしき金属棒が着いたタイヤが落ちていて、まると外れた予備の燃料タンクがごろんと転がっていた。

俺は墜落したペイブロウへ走り出していた。火災は発生していない。まだ機内に生存者がいるかもしれない。

……そんな者はいないと、冷静な自分が訴えていたのを無視して。

機体後部に近づいて行く。兵員室のテールランプは、墜落の衝撃で外れていた。

突然、兵員室の中から犬が吠える声が聞こえた。同時に機内から一匹の犬が飛び出してくる。

そいつはラインだった。ラインは一直線に俺の足元に駆け寄り、激しく鳴く。墜落で怪我はしていないようだが、興奮してひどく吠えていた。

何があったんだ！？まさか燃料切れ？ありえない、燃料の余裕はギリギリあるはずだ。だいたい燃料が切れるまでここに留まるはずがない、墜落する前に俺とリサさんを置いて行くだろう。

ヘリにゾンビも乗っていた？だったらニコライ氏はミサイル攻撃を受ける前にジョークを飛ばすか？そもそも美雪は全員無事だと言っていた。

そこまで考えて、俺は美雪や仲間達の事を思い出した。

彼らは無事だろうか？俺は恐る恐る、兵員室の中を覗いた。

「………嘘だ」

機内では、人々が折り重なるように倒れていた。

「こんなのは嘘だ」

彼らや兵員室の床の上に、いくつもの武器が落ちていた。

「ありえない」

至るところに、それらの銃器から吐き出されたとおぼしき空葉莢が散らばり、鈍く輝いている。

「こんな事があってたまるか」

機内には、あちこちに穴が空いていた。

「嘘だああああああああっ！！！！」

俺はそう絶叫し、地面に崩れ落ちた。

ペイブロウの兵員室の至るところに、赤い液体がべったりついていた。

そして床には、血まみれで倒れている人々。機内の床には彼らから流れ出た血が池を作り、そして壊れた兵員室のテールランプから外へと流れ出ていく。

倒れた人々は皆、頭や胸を撃ち抜かれて死んでいた。

まるで、機内で殺し合いでも行われたかのように。

第60話 p a r a d i s e l o s t (後書き)

次回予告

「c h e c k m a t e」

展開に色々と批判があるかもしれませんが、展開についての批判は受け付けません。ご了承ください。

第61話 **c h e c k m a t e (前書き)**

行動目標 ..

生存者を搜索する。

第61話 c h e c k m a t e

嘘だ。こんな事があってたまるか。

俺は目の前の光景を見ても、一切現実感が感じられなかった。まるで映画かゲームを見ているかのようだった。

俺は皆を無事に脱出させるためにここまで来たんだ。走るゾンビに追い掛けられ、銃もないのに前田に立ち向かい、そしてリサさんと一緒に巨大蜘蛛を倒した。

なのに、こんな展開はないだろ？

文字通り俺は血を流し、戦ってきた。何度も死にかけた。時には人間相手に戦い、今だって化け物を倒した。

だったらここで待っていなければならないのは、無事にヘリが着陸し、皆が「よく頑張った」と笑顔で出迎えてくれるような展開だ。

なあ、これは冗談だよな？

だが、これは紛れも無い現実だった。

ひどく頭が痛かった。ラインを外に待たせ、俺は一步一步、ペイブロウの兵員室へと足を踏み入れた。

強烈な鉄の臭いがした。スニーカーの底が床にたまった血で滑った。兵員室の床には、足の踏み場もないほど、人々が折り重なって倒れている。

俺はしゃがみ、一番近くに倒れていた人の肩を揺すった。しかし、その人が起き上がる事はない。

頭に穴が開いているから、当然だった。

俺は死亡を確認した人を、次々機体の外に運んで行った。たちまちグラウンドに、人々の死体が並んでいく。

もう俺の頭は麻痺していた。ただ淡々と死体を運び出していく。まるで自分でない誰かが、俺の身体を使って作業しているかのように。

兵員室の真ん中まで来た時、俺は亜衣と麻衣を見つけた。二人は固く手を繋ぎ、死体に埋もれるようにして倒れていた。

「亜衣、麻衣！しっかりしろ！！今助け・・・・・・・・」

俺はそう言って亜衣の身体を抱き抱えたが、亜衣は起き上がる事はなかった。俺が身体を揺すっても、力無く首が揺れるだけだった。麻衣の手を取り、死体の中から引っ張り上げた。普段だったら「痛いなコノヤロー！」と殴り掛かってくるはずなのに、麻衣は無言のままだった。

見れば、二人のセーラー服の胸の部分の布に小さな穴が開き、白いセーラー服が真っ赤に染まっていた。俺はそれを見た瞬間、二人に声をかけるのを止めた。そして二人を、グラウンドに横たわらせた。

俺が見つけたのは死体ばかりだった。生きている人はいなかった。兵員室の前部まで来た時に、床に倒れていた奈津美を見つけた。今度は声をかけ、生死を確認する必要もなかった。

奈津美の後頭部が消失していた。額に小さな穴が開いて、そこから

流れ出た血が奈津美の美しい顔を汚している。

奈津美は虚ろな目をしていた。まるで自分が死んだことにも気づいていないかのようだった。

俺は無言で、奈津美も運び出した。

兵員室の最前部にまで来た。そこにはゴリと美雪がいた。

ゴリは兵員室と操縦席を隔てる仕切りにもたれ掛かっていた。学生服の右腕の部分の布が無くなり、裂けた皮膚から赤い筋肉や白い骨が覗いている。

そしてゴリは左手で拳銃を握っていた。拳銃の銃口付近は血で真っ赤に染まっていた。

その理由はすぐにわかった。ゴリの顎と頭に穴が開いていたからだ。顎に銃口を押し当てて引き金を引き、自殺したのだろうか。

操縦席では、一人の白人男性が死んでいた。男性は座席ごと背後から胸を撃ち抜かれていた。

おそらく彼がパイロットのニコライ氏だろう。ニコライ氏は操縦桿を握ったままだった。まるで最後までへりを飛ばそうとしていたかのように。

「・・・っ。・・・武？」

その時兵員室から声が聞こえた。まだ誰か生きていたのだ！！

俺は急いで兵員室に戻った。すると壁に寄り掛かるようにして、誰かが立ち上がっていた。

美雪だった。

「美雪！大丈夫か！？怪我は！？どこか痛むか！？」
「・・・わたしは大丈夫。・・・ほかの皆は？」

俺は力無く、首を横に振った。その瞬間、美雪は子供のように泣き出した。

俺も泣きたい気分だった。なのに、涙は出てこなかった。どうしてだろう？親友達が大量死んだのに、なんで何も感じないんだろう？どうやら俺の感情は麻痺してしまったらしい。人間はあまりにつらいことが起きると、心が感情を遮断してしまうと聞いたことがある。

俺は美雪に肩を貸し、墜落したヘリの外に連れ出した。結局、生きていたのは彼女だけだった。俺はゴリとニコライ氏も運び出し、グラウンドに横たえた。ヘリから出て来た俺を心配するかのように、ラインが足元に擦り寄ってきた。心なしか、ラインも悲しそうな目をしているように見えた。

美雪は怪我をしているように見えなかった。ヘリが墜落した時の衝撃で彼女は気絶してしまったのだろう。

「・・・何があった？」

「わたし、武に3人だけ噛まれたって言ったよね？噛まれた直後に治療薬も注射したって」

「ああ」

「・・・実はね、4人目がいたの」

俺は目を見開いた。

研究所から回収した治療薬とワクチンは5本ずつ。研究してワクチンを生産するためには、最低2本ずつ残しておかなければならない。

つまり、治療薬とワクチンは3本ずつしか使えない。

「なんで、早く言わなかった？」

俺が言うと、美雪は再び泣いた。

彼女はごめんなさい、ごめんなさいと繰り返していた。その言葉を俺に言っているのか、それとも死んだ皆に謝っているのか、あるいは自分自身に言っているのかはわからない。

「一度わたし達、前田って女にミサイルで攻撃されたよね？それで高校から離れて20分くらい経った時、噛まれていた一人がゾンビになった」

噛まれていたのは3人家族の小さな男の子だったらしい。ヘリに乗り込む直前に、公園にいたゾンビと生存者達は戦った。予想外に数は多く、数人が噛まれた。

男の子は噛まれていたが、両親がそれに気づいたのはヘリが離陸した後だった。すでに治療薬は3本使われていた。

だから彼の両親は、男の子が噛まれていたことを黙っていたのだ。治療薬はもう使えず、噛まれているのがわかった今、下手に名乗り出たら放り出されるかもしれないからだ。

そして男の子は両親以外に噛まれた事を気づかれないまま、ゾンビになった。

皆地獄からあと少しで脱出できるということで気が緩んでいたのだろう。たちまち、数人がゾンビ化した男の子に噛まれた。首を噛まれた男の子の両親は、ウイルスがすぐに脳に到達してゾンビとなった。

機内は大パニックに陥った。狭い機内なので逃げ場はほとんどなく、

あつという間に生存者の半分がゾンビ化した一家に噛まれた。ゴリも皆を助けようと戦っていた最中に、腕を噛まれてしまったのだという。

美雪や奈津美、ゴリ、亜衣と麻衣が戦い、機内のゾンビを全て倒した。だが、問題はそれからだった。

「噛まれた人達がね、治療薬を渡せて宮田さんに殴り掛かったの。わたし達は止めようとした。でも……！」

医師である宮田さんに、俺達は治療薬とワクチンを渡していた。自分が噛まれたことを知った生存者達は、治療薬を渡せと宮田さんに迫ったのだという。だが宮田さんはその要求を拒否した。

当然だった。残りの治療薬は全てしかるべき研究機関に渡して、研究して大量生産されなければならない。ここで使ったら、治療薬の研究が出来なくなってしまう。

だが恐怖とパニックに陥っていた生存者達は、冷静に物事を考えられなくなっていた。すぐに銃を抜き、宮田さんに突き付けて脅した。へりに乗っていた生存者は30人。そのうち噛まれたのは15人。

すぐに、噛まれた15人と噛まれていない15人が銃を向けあう事態となった。

噛まれた15人は、たった2本しかない治療薬が欲しかった。噛まれていない15人は、いずれゾンビと化す彼らを恐れた。

「その時、間違って誰かが引き金を引いちゃったの……。それで、皆が……！」

たちまち機内では銃弾が飛び交った。パニックと恐怖で我を忘れていた生存者達は、自分が銃口を向けている相手が人間だとは思っていなかった。

奈津美、亜衣、麻衣は噛まれた生存者達に撃たれて死んだ。ニコライ氏は流れ弾が当たりながらも、必死にヘリを操縦した。

自身もゾンビに噛まれていたゴリは皆を止めようとしたが、皆聞く耳を持たなかった。ゴリは戦う生存者達を、泣く泣く撃った。

気がついた時には、全てが終わっていたのだという。30人いた生存者は、美雪とゴリだけになっていた。ニコライ氏は瀕死の状態で、どうにかヘリを高校に着陸させようとしていた。

「五里くんは自分が噛まれたことを知っていた。世界を救うために治療薬は使えない。だから、自分で………」

『武、美雪。俺達に分まで生きろよ』

それがゴリの最期の言葉だったそうだ。ゴリは美雪にそう言った直後、ゾンビになることを拒否して自らの頭に銃を向け、引き金を引いた。

ニコライ氏はヘリを高校に着陸させようとしたが果たせず、出血で死んだ。パイロットを失ってコントロール不能になったヘリは、高校に墜落した。

美雪の話聞き終えた時、いつの間にか俺は泣いていた。

皆あと少しで助かったのに、こんなのってねえよ。絶対ねえよ。皆人間同士で殺しあって死ぬなんて、そんな結末ってねえよ……・！！

俺は何のために戦ってきたんだよ。皆を助けるために戦ったのに、こんな終わり方ってあんのかよ……！！

俺は、

俺は、

！！
こんな結末バットエンドを手に入れるために戦ってきたんじゃない……

ゴリ、奈津美、亜衣、麻衣。

お前達は最期に何を思って死んだんだ？絶望か？悲しみか？憎しみか？

奈津美、亜衣、麻衣。お前達は同じ人間に殺されるなんて思っていなかっただろうな。最後まで争いを止めようとした結果がこれ死なんて、死んでも死に切れねえよな。

ゴリ、お前は最期まで人のために戦ったのか。自分も噛まれていたのに、争いを止めるために引き金を引き、そして最期はゾンビになって美雪や俺に襲い掛かるのを拒否して自決した。やろうと思えば治療薬も使えたのに、なんで最期まで人の事を考えてるんだよ。

お前達は皆馬鹿だよ。自分の命より他人を優先して、こんな報われない最期を迎えるなんて、本当に馬鹿だよ・・・・・・・・！！

俺はお前達に言ったよな？皆で生きて帰るって。

なんで勝手に約束破るんだよ。俺達は親友だろうが！！

親友なら約束は命懸けで守れよ！なんで死んだんだよ！？

「・・・・・・・・クソツタレ！！！」

俺はそう叫び、地面を殴りつけた。拳の皮が剥け、小石が指に食い込んだ。

俺は美雪に向き合った。皆が死んだ今、せめて美雪だけでも助けなければならぬ。

俺はグラウンドに倒れたままのリサさんに駆け寄った。倒れたリサさんの顔を、ラインが舐めている。

「リサさん、起きて下さい。早くここを離れないと・・・・・・・・」

だがリサさんは目を開かなかった。いくら身体を揺さぶっても、リサさんは起き上がらない。

首筋に人差し指を当てる。さっきまで弱々しく脈打っていた血管の感触は、ない。

リサさんを仰向けにして、口を開いて耳を近づける。呼吸をしていなかった。

見れば、リサさんの周りの地面が真っ赤に染まっていた。上半身を抱き寄せると、その身体は異常なまでに軽かった。

リサさんも、逝ってしまった。

あんたも勝手に死んだのかよ、オイ。あんたは絶対に生きるって約束で、俺にこれを預けたんだろ^{M93R}うが。

あんたも勝手に約束を破るなよ！このベレッタは、いつ、誰に返せばいいんだ？俺に預けたまま死んでもらっちゃ困るんだよ！！

だが、蘇生措置は無駄だとわかっていた。人口呼吸も心臓マッサージも無駄だ。ここで輸血でもない限り、リサさんが目を覚ます事はない。そして救急車が来てくれる事もないのだ。

俺は涙を拭い、美雪の手を取って立ち上がらせようとした。とにかくここから離れなければ。いつまでもここに留まっていれば、ゾンビの群れが寄って来るかもしれない。俺は全身怪我だらけなので、いつものように戦える自信はなかった。

だが美雪は、地面にしゃがみ込んだまま立ち上がらない。体育座りの姿勢のまま、悲しそうな目で俺を見上げてくる。

「・・・立ってくれよ。早くここを離れないと」

「駄目だよ。わたしは武と一緒に行けない」

「何言ってるんだよ!？俺にはもう美雪しか残ってないんだよ!俺はこれ以上、誰も失いたくないんだ!！」

俺がそう叫ぶと、美雪は無言で立ち上がった。

俺がその手を取って歩きだそうとしたが、美雪は無言で左手を差し出した。

目眩がした。

美雪の綺麗な左手の甲が、赤く腫れていた。そして手の皮が剥けて、血が少し滲んでいた。

普通だったら消毒して放置しておけば、一週間も経たない内に傷は跡形もなく治癒するだろう。

だがその傷は、どう見ても誰かに噛まれた傷だった。歯形が手の甲についている。

「・・・この傷は・・・、どうした・・・・・・・・?」

俺は震える声で聞いた。周りの風景が、急速に色あせていくのがわかった。

美雪は何か吹っ切れたように、明るく答えた。ただ、その目からは涙が流れていた。

「ヘリの中でさ、五里くんと一緒に噛まれちゃったんだよ、わたし。だからわたしも、そろそろゾンビになるかもしれない」

嘘だろ。なんで、どうして、こんな事ばかり起きるんだよ。
なんで皆、俺との約束を破るんだよ？なんで俺を残してさっさと死
んじまうんだよ。

最悪の気分だった。

目の前に神様がいたら、その顔面に迷わず拳を叩き込んでいたかも
しれない。

——いや、まだ終わってはいない。

俺は墜落したパイプロウへ向けて走り出そうとした。だが俺の腕を
美雪が掴んだ。

「武、何するつもりなの？」

「決まってるんだろ！治療薬はまだ残ってる。あれを使えばお前はゾ
ンビにならずに済む！」

「駄目よ！！あれは世界を救うために必要なんだよ！？こんなところ
でわたしの為なんかに使っちゃ駄目だよ！！」

美雪の言う通り、治療薬はあと2本しか残っていない。それは治療
薬を研究して量産し、人類を救うのに必要な最低限の数だ。ここで
使ったら、治療薬を増産することは出来なくなってしまう。
だが、

「世界を救う？んなことはどうだっていい！俺はお前が好きだ！！
だからどんな事をしたって守る、他の連中なんか知ったことか！俺
はお前が大事なんだよ！！」

俺がそう叫ぶと、美雪は少し驚いたような顔をした。

好きな女一人守れないで、何が世界を救うだ？大切な人すら守れないなら、世界を救えるわけがない。

もう俺には美雪しか残っていない。だから俺は、何をやったって彼女を守る！

「・・・駄目だよ。武、あなたは生きて。そして世界を救って。わたし達が生きていた事を忘れないでいてくれれば、わたしは満足して死ぬことができるわ」

「なに死ぬとか言ってるんだよ！？お前の気持ちなんか知るか！俺のわがままでお前には生きて欲しいんだよ！お前が何を言っても無駄だ、俺はお前を死なせない！！」

こんな地獄で、一人にしないでくれよ。俺だけ残していくなよ。

一人は、いやだ。

そう言うと、美雪は微笑みを浮かべた。

「ねえ武、わたしのこと、好き？」

「・・・ああ。好きさ、大好きさ。愛してるよ！お前は一番大切な人なんだよ！！」

「そう・・・。よかった・・・。」

美雪は笑った。そして

「ごめんね。最期に一緒にいてくれるのが武で、うれしいよ」

次の瞬間、美雪は拳銃を抜いて、顎に押し当てた。

止める暇すらなかった。

笑顔のまま、美雪は引き金を引いた。

この日、俺は守るべき人々を、俺を初めて好きだと言ってくれた少女を、わずか数十分のうちに全て失った。

俺は、一人ぼっちになってしまった。

第61話 checkmate（後書き）

次回予告

第62話..

「judgement」

第62話 judgment (前書き)

行動目標..

死者を埋葬する。

第62話 judgment

俺は泣き続けた。泣いて泣いて泣いて、気がつけばとつくに陽は沈んでいた。

やがて街灯が次々と点りはじめた。発電所がまだ生きているから、自動で点灯したのだ。

そしてようやく涙が出なくなった。腕時計を見れば、すでに深夜12時を回っていた。

実に5時間以上泣いていたのか。その間、ゾンビには一回も襲われなかった。もしかしたら、この辺りで生きている人間は俺だけで、ゾンビすらいなくなったのかもしれない。

俺が泣いている間、ラインはずっと俺の傍で座っていた。まるで、俺を守るかのように。

俺は全てを失った。

最初に遥と緒方を失い、親友達も、俺に様々な事を教えてくれた傭兵も、危険を冒して救助に来た勇敢なパイロットも、助けた人々も全ていなくなった。守りたい全てをたった数十分で失った。

「皆を守りたい」。その一心で俺は戦ってきた。全てが終わったこの高校を脱出する時そう誓った。紆余曲折を経たが、ずっとその思いを胸に戦ってきた。

だから俺は救助な陽動を買って出た。親父を殺し、世界をこんなにした前田クリスを倒し、その置き土産の化け物蜘蛛も倒した。なのに、

それがこんな結末じゃ、報われないだろ？

皮肉なもんだ。俺達にとって全てが始まったこの豊島高校が、全てが終わる場所になるとは。

そもそも、ただの高校生がそんな望みを抱いたのがいけなかったんだ。俺はただの軍事オタクで、力が強いわけでも頭がいいわけでもなかった。クラスで目立たない部類に入る、ただの高校生だった。思えば高校にゾンビが入って来た時に、俺は食われていてもおかしくなかった。映画だったら「高校生D」くらいの役柄。決して主役にはなれず、真っ先に死ぬ役。

それが何の間違いか生き延びてしまった。他に生きるべきやつはいっぱいいいたのに、俺が生き残った。

で、それがこのザマだ。

俺は立ち上がった。そして覚束なく歩き、用具倉庫の中に入った。用具倉庫はグラウンドを整備するための用具が納められた倉庫だ。俺は隅に並べられていたシャベルを一つ取り、今度はグラウンドの隅にふらふらと歩いて行った。グラウンドの隅には桜の木が植えられている。

ここで、いいか。

俺は地面にシャベルを突き立てた。そして無心で、地面を掘ってい

く。

たちまち手の平の皮が向けた。だが痛みは感じなかった。俺はただ淡々と、いくつも穴を掘る。罪人のように、何も考えずに。

一人が充分入る穴が、36個出来た。いつの間にか、東の空が青くなり始めている。そろそろ日の出だ。

俺は33人いた避難民の遺体を、一つ一つ丁寧にその穴の底に横たえていった。そう、ここは彼らの墓場なのだ。

彼らの遺体を放置しておくのは忍びない。自分の身体が腐るか動物に食われてしまうのは、彼らも望んでいないだろう。

まず、ゾンビ化していた親子三人を埋めた。家族だから大きな穴を掘り、一緒に埋めた。

次々と遺体を埋葬していく。家族や恋人は一緒に穴に埋めた。その他の遺体は、一人一人丁寧に埋めていった。

ショッピングモールにいた避難民達は、全員が免許証や保険証、生徒手帳などの身分がわかるものを携帯していた。俺はそれらをビニール袋に入れ、遺体と一緒に埋めた。

墓標代わりに体育倉庫からコーンを持ってきて、油性ペンで名前を書いて墓の上に置いた。いつか誰かがこの墓場を発見し、遺体を掘り返せば身元がわかる。もし彼らの親族が生きていれば、いずれちゃんとした墓に葬られるだろう。

避難民のほとんどを埋葬した俺は、続いてニコライ氏を埋葬した。外国人で身体が大きかったニコライ氏を墓まで運ぶのは苦労した。

出血で意識が朦朧としていたのに、最期までへりを飛ばそうと続けたニコライ氏は尊敬に値する人間だ。

ニコライ氏はキリスト教を信仰しているらしいので、体育倉庫にあった劣化防止処置を施された木の棒を使い、墓の上に十字架を立てた。

リサさんを埋葬した。

結局、本名を聞くことはできなかったな。彼女は自分自身についてほとんど語らなかった。だか俺達と共に戦ってくれた。

彼女は俺に、戦い方を教えてくれた。銃器の分解清掃方法、狙撃、近接戦闘方など、様々な事を教わった。

俺は二人の墓の前に立ち、そして敬礼した。

亜衣と麻衣を、一緒に墓に埋葬した。

亜衣の作ってくれた料理は美味かった。殺伐としたこの地獄で、彼女の料理が俺の楽しみになっていた。亜衣はいつも一歩引いて、母親のように皆を見守っていた。

麻衣はよく、俺のボケにツツコミを（暴力含み）入れてくれた。彼女と漫才のようなやり取りをするのが楽しかった。麻衣はいつも先頭に立ち、戦った。

俺はもう、亜衣の料理を食うことも、麻衣にツツコまれることもない。

死後硬直でやりにくかったが、俺は亜衣と麻衣を手を繋いだ状態で埋葬した。二人は仲のいい双子だ、墓でも仲良く二人でいたいだろう。

奈津美を埋葬した。

奈津美は元気いっぱいな明るい少女だった。彼女がグループの雰囲気明るくしていた。

奈津美がいたおかげで、俺は遥を助け、そしてショッピングモールにたどり着くことが出来た。俺は彼女に感謝してもしきれない。

ゴリを埋葬した。

ゴリは俺の親友だった。高校に入学した時から、ゴリとは仲がよかった。

心の友と言っているいい関係だったな。ゴリには何度も命を助けられた。彼はいつも他の人を優先し、自分は後回しにしていた。そんないやだった。

もう二度と、こんな親友のような人間に出会う事はないだろう。

ゴリ、お前は最高の相棒だった。

そして最後に、美雪を埋葬した。

美雪は初めて俺を好きだと言ってくれた少女だった。俺も美雪を好きだった。

美雪に告白された後、彼女が希望となっていた。この地獄を脱出して、美雪と一緒に生きていく。それが、俺が昨日まで思い描いていた未来だった。

その未来が訪れることは、もうない。

美雪を穴の底に横たわらせ、俺は丁寧に土をかけていった。血まみれの制服が、その美しい顔が、あっという間に見えなくなった。

「ごめんな、美雪。俺、やっぱお前達がいなきゃ生きていけないわ。だから……………」

今から、俺もそっちに行く。

俺、いっぱい頑張ったよな？

もう、休んでもいいよな？

こんな地獄から、サヨナラしてもいいよな？

俺は疲れきっていた。今までやってきた全てが無駄になり、友達全員死んだ。俺の生きる意味が、全て失われた。

もう世界がどうなろうと俺の知ったことではない。

墓穴が一つだけ残っていた。俺はその底にひざまづいた。

ラインが俺の前に駆け寄り、悲しそうな目で俺を見つめた。これから俺が何をするのかわかっているようだった。

俺はラインの首輪を外した。

「お前は自由だ。もう俺といる必要はない。好きなところで好きなように生きろ。今までありがとうな」

俺はそう言って、ラインの頭を撫でた。ラインは悲しそうに鳴く。ライン、お前はずっと俺といてくれた。親父が死んでから、お前は俺の心の支えだった。お前がいてくれたおかげで、俺は家に帰るのが苦痛でなかったんだ。

今まで俺と一緒にいさせて悪かったな。こんな馬鹿なご主人様につきあってくれて、本当にありがとう。

「さあ、もう行け」

俺がそう言っても、ラインは俺の前から動くことはない。いつもは冷たいのに、こういう時だけは優しいんだな。

俺はU S P拳銃を抜いた。そして、銃口を顎に押し当てる。

もうこんな世界など、どうでもよかった。皆が死んだ世界は色あせて見えた。

だから俺は、この世を去る。後の事は知らない。俺は今まで分不相応なまでに頑張ってきたんだ、ここで終わりにしてもいいだろ？ 本当の意味で墓穴を掘るとは、まさに俺の事だな。生きている内に、自分が入る墓穴を掘っているんだから。

もしかしたらこれは天罰なのかもしれない。壊れた世界で暴力を振るう喜びに目覚め、殺しを楽しみ、この世界を好きになってしまった俺に下された罰なのかもしれない。

あるいはこれは夢で、頭に銃弾を撃ち込めば暖かい布団の中で目を覚ますかも。

多分俺は遅刻していることだろう。冷たい目でラインが見ている中、慌てて俺は学校に向かうんだ。そして遅れて教室に入ってきた俺を、皆が笑う。

奈津美は「あんたが遅刻するなんて、明日雪でも降るんじゃない？」

と呆れ、ゴリは笑っている。美雪は「どうかした？身体具合でも悪いの？」と心配してくれる。

で、休み時間に廊下でゴリとふざけていると、通りかかった麻衣にうっかり抱き着いてしまう。キレた麻衣に俺とゴリは追いかけて回され、そして亜衣が俺達に謝りにくる。そうやって亜衣と麻衣と友達になる。

たまに親戚の遙が遊びに来る。遙は何人も友達を連れて、その中には緒方もいるだろう。

そうやって俺達は、平穏な日々を過ごしていく。たまにテストや勉強のことで悩み、恋愛相談をしたりされたりするような高校生らしい生活を。

だが、

もうそんな日々は、二度とやってはこない。

これは現実だ。皆は死に、俺だけが生き残った。そんな高校生らしい日々を想像する権利は、すでに2週間前に奪われている。

もう終わりにしよう。俺は銃口を口に加えた。拳銃を握る手に力が入り、手が震える。ラインが俺に「やめろ」とでも言うかのように吠える。

だが、引き金を引けない。

俺の脳裏に、皆の笑顔や笑う声が流れる。

ここで躊躇うなよ！せつかく死ぬ決心をしたんだ、今揺らいだら死ねないんだ！！

俺は全てを失った。だからもう俺は、生きている意味がないんだ。

———なのに、

なんで俺は、泣いているんだろう。

皆死に際に何を思ったのだろうか？まだ生きていたいと願ったのだろうか？

俺にそれはわからない。だが皆なら、きっと最後まで他の人と一緒に生きる事を諦めたくなかったはずだ。

だから奈津美、亜衣、麻衣は人間同士の争いを止めようとして死んだ。美雪とゴリは、世界を救うために自ら命を絶った。

なら、俺がここで自殺したら、あの世で皆に何と言われるだろう？

グラウンドで足音がした。するとそこには、一体のゾンビがいた。

ゾンビは人間の臭いに釣られ、俺の方に向かって来る。ラインがゾンビに吠え、そしてその足に噛み付いた。

だがゾンビには痛覚はなく、さらに力も強いのでラインの噛み付きは無駄だった。ゾンビは足に噛み付くラインを引きずったまま、俺に向かって来る。

俺はワクチンを打っているから、噛まれてもゾンビにならない。それすなわち、死ぬまで食われ続けるということだ。

死んでもゾンビ化しないから、俺の死体はひどい有様になるだろう。バラバラのグチャグチャになり、顔の判別もつかない程損傷する。そして残った部分も、カラスや犬猫に食われる。俺がいたという痕跡は、跡形もなくなる――。

いや、待て。それは俺に限ったことではない。

唯一皆の生き様と死に様を知る俺が死んだら、皆が何を思って生き、そして死んでいったかを知る人間はいなくなる。いつか皆の遺体が発見されても、彼らが最期まで人のために戦ったという事実が知られることはない。

それは寂しい。俺はそう思った。

日の出を迎え、空が一気に明るくなる。

俺を食おうとするゾンビは、俺のいる墓穴からあと5メートルの距離にまで迫っている。

さて、最後にもう一度だけ自分に問おう。

今すぐ頭を撃ち抜いて、この地獄から楽にオサラバし、あの世に行って皆と一緒にいるか。

それともこの地獄で生きて、一生苦しみ続けるか。

どっちにしてもゾンビに食われれば楽にあの世には行けないし、これ以上地獄にいたこともない。

……なんだ、答えは簡単に出るじゃねえか。

ゾンビがあと1メートルにまで迫った。ラインは俺を守ろうと、その足に必死に食らいついている。

もういいんだ、ライン。そんなことをしても無駄だ。俺の答えはもう決まったから。

俺は、USP拳銃の引き金を引いた。

第62話 judgment（後書き）

次回、いよいよ最終回。

最終話 サバイバル高校生

陽が上り始めた青い空に、乾いた銃声が響く。

排出された空葉莢が地面に落ち、小さく音を立てた。

続いて、どさりと何かが倒れる音。

倒れたのは、今まさに俺に食らいつこうとしていたゾンビだった。

「だから言ったら、ライン。俺が倒すから『無駄だ』って」

俺は今まで入っていた墓穴からはい出た。それはまるで、昔の映画に出てきたゾンビのように。

今、俺は一度死んだ。

さっきまでの弱く、自殺を考えるような俺は過去のものとなった。
今の俺は、さっきまでの俺とは違う。

俺はなんて馬鹿なことをしようとしていたのだろう。自殺して楽になるのが最善の方法だと考えていたなんて。

皆必死に生きようとした。武器を取って戦い、この地獄を生きてきた。途中で辛いことが何度もあった、それでも諦めなかった。

その先に待っているのが死だとしても、それでも最期まで諦めなかった。奈津美、亜衣、麻衣は人間同士の争いを止め、皆で生き残ろうとした。美雪やゴリは、世界を救うために自らの命を捨て、俺に全てを託した。

皆俺に、「生きろ」と言ってこの世を去っていった。

なら、俺が死んだら彼らの遺志に背くことになるんじゃないか？

皆はまだ高校生だった。まだまだいろいろやりたいことがあったのに、世界が壊れたせいで理不尽に生を奪われた。

だがその理不尽な生の中でも、決して諦めなかった。自らの死を悟り、仲間に後を託した。

ここで俺が死ねば、勇敢に戦ってきた彼らの遺志を受け継ぐ者はいなくなる。そして、彼らがどんな人生を送ってきたのかを語り継ぐ者もいなくなる。そうなれば、彼らは誰の心にもいなくなる。皆に忘れられる。それは、あらゆる意味で死ぬことと同じだ。

だから俺は生きて、彼らの生きるという遺志を受け継がなければならぬ。彼らがどのように生き、戦い、死んでいったのか、俺が記憶し語り継がなければならない。

それは唯一生き残った俺に課された義務だ。この義務は投げ出すことも、忘れることも、誰かに托すことも出来ない、俺にしか出来ない仕事だ。

だから俺は生きなければならない。俺は彼らの遺志に従って、この地獄で生きていく。それは俺の意思ではない、彼らの遺志だ。

それに俺は、皆と約束した。「生きよう」と。

皆はその約束を果たせなかった。俺は嘘つきになるつもりはない、

だからその約束を果たす。

「ごめんな、皆。俺は馬鹿だったわ。生きることから勝手に逃げようとして、自殺しようとしたなんて。お前達は生きたかったはずなのに、生きてる俺が生を投げ出したら、お前ら怒るよな？あの世でボコボコにされちまう。

だから、俺は生きるよ。精一杯生きて、お前達のことを絶対に忘れない。お前達が最期まで諦めなかった生を、最後まで全うするよ」

俺の命が燃え尽きたその時は、俺を優しく迎え入れてくれるか？

そうきいても、返事をする者は誰もいなかった。ただ、俺は絶対に聞いた。

「頑張れ」

そう皆が言ったのを。

もうこの身体は俺だけのものではなくなった。この身体は、俺と皆のものだ。だから俺が勝手に死ぬことは許されない。

ラインが足元に擦り寄ってきた。その頭を撫で、俺は尋ねる。

「さっきはごめんな。これからも俺と一緒にいて、皆の遺志を果たすのを助けてくれるか？」

そうきくと、ラインはワン！と力強く吠えた。わかった、とでも言うように。

さて、何から始めようか。とりあえず最初は、美雪とゴリが命を投げ出してまで俺に託した義務を果たすでしょう。ワクチンと治療薬を然るべき場所に届け、世界を救うんだ。

その後に、俺は困っている人を助けにいく。一人ずつでも助けていけば、やがて多くの人が助かる。

ただ俺一人が生き残るってのは皆は望んでいないだろう。だから俺は可能な限り、出会った人々を助けていく。

救いはないんですか！？と問われれば、こう答えるんだ。

俺が救いになるんだ、と。

俺は早速、出発の準備を始めた。

墜落したペイブロウヘリに散乱していた武器弾薬をあるだけかき集め、さらに学校の内外を回って使えそうなものを回収する。

前田や巨大蜘蛛と戦った時に落としてきた空の弾倉や、弾切れで捨てた軽機関銃も拾ってきた。予備の弾はまだたくさんある。弾倉はいくらでも必要だし、銃はいくらあっても困ることはない。

さらに学校の自販機を壊して飲み物を集めた。購買にも向かい、賞味期限が切れていない菓子類などを回収する。

この先食料がいつでも必要な時に入手できるとは限らない。水道も止まるかもしれない。そうなった時に飢えて死んだのでは、あの世で皆にフルボッコにされてしまう。

化学室や物理室にも足を踏み入れた。武器に転用出来そうな薬品がいくらかもある。身近なものを活用して戦うのが俺のやり方だ。

保健室では薬や包帯を手に入れた。俺はワクチンを打ったから噛まれてもゾンビにはならない。だが怪我はする。無事な医療施設がど

ここにあるかわからない以上、傷の手当ては自分でしなければならぬ。

学校中を回って入手した物資を積み上げると、ちょっとした山になった。中には前田が持ってきた。

たとおぼしき、屋上に転がっていたステインガー対空ミサイルもある。使う機会が無いことを祈る。

もちろん俺は普通の人間なので、こんなに大量の物資を担いで移動することは出来ない。なので学校保有のライトバンを調達した。

豊島高校は普通科の他に園芸科を併設している。その園芸科が肥料など重いものを運ぶ時によく使われているのが、学校保有のライトバンだ。

職員室のドアを蹴り破って室内に侵入し、ライトバンのキーを手に入れた。ライトバンは俺が前田を倒した職員用駐車場に停めてある。職員用駐車場に向かう。昨日俺が粉々にした前田の死体には、早速カラスがたかっていた。赤や白い色をした粒状の肉片が散らばっている。

ライトバンはすぐに見つかった。白い車体に校章と「県立豊島高校」と書いてある。

ドアを開け、運転席に座った。エンジンを始動させてグラウンドに向かう。

不思議なことに、そこまで運転は酷くはなかった。今まで車を運転したのは前田を倒す時だけだったのに、前から知っていたかのように運転できる。

ゴリ、お前のおかげか？お前が俺に憑依して、運転技術を向上させてくれるのか？

いや、まさかな。あいつの運転、なんだかんだで下手だったし。

グラウンドにライトバンを止め、俺はかき集めた物資をライトバンに積み込み始めた。後部座席が次々と物資で埋まっていく。

出発の準備が終わった時、すでに午前8時を回っていた。

俺はレッグホルスターに収まっていたUSP拳銃を抜いて後部座席に置き、代わりにベレッタM93Rをホルスターに収める。

リサさん、これはしばらく預かるよ。いつか俺が自分に課せられた責務を果たしたら、その時はあんたに返しに来るから。

俺は再び皆の墓の前に立った。

さっきまで俺が入ろうとしていた墓穴は、まだ埋めておかない。俺が世界を救い、皆の遺志を果たし、いつか死を迎えたら、その時はこの墓穴に入る。そして俺は、美雪の隣で永遠の眠りにつく。だからその時が来るまで、皆はここで待っていてくれ。

皆、見ていろよ。ただの高校生が、どこまでこの世界で生き残っていけるかを。

「つてか、墓参りする場所が増えたなあ……」

いつかショッピングモールに眠る遙や緒方の墓参りにも行かなければならない。その時は世界が平和になっていればいいが。

俺はライトバンに戻った。ラインが俺を待つように、助手席の傍でお座りの姿勢でいる。

「ライン、行くか」

俺がそう言うと、ラインはワン！と吠えた。助手席のドアを開けると、すぐさまラインは座席に飛び乗る。

助手席のドアを閉め、俺は運転席に座った。全ての窓を開け、ラインが開いた窓から顔を外に突き出す。

俺は一人ではない。心の中で皆は生き続けているし、隣にはラインこいつもいる。これから行く先々で、また仲間も出来るだろう。

「まずは、どこに行くとするかね？」

そうきくと、ラインは太陽の方を向いた。東ってことか。

ここから東にはもっと大きな都市がある。そこなら生存者はたくさんいるだろうし、もしかしたら自衛隊も展開しているかもしれない。自衛隊だってゾンビの発生した原因と防ぐ方法を研究しているだろうから、そこに渡すのが手っ取り早いだろう。

「よし、行くか」

俺はそう言って、ライトバンを発車させた。開きっ放しの窓から、涼しい風が車内に流れ込んでくる。

2011年5月1日10時50分、俺達にとって世界は終わった。その日をもって何もしなくても平和と安全を享受出来る日々は終わり、自ら武器を取って迫り来る死と戦わなければならない死と暴力に満ちた日々が幕を開けた。

俺達は一生懸命戦った。皆は誰かのために、自己犠牲も厭わなかつ

た。

2011年5月14日18時10分、俺にとって世界は二度目の終わりを迎えた。今まで戦ってきた仲間達を全て失い、俺は絶望のどん底に突き落とされた。

世界はもう、どうすることも出来ないのかもしれない。俺が何をやったところで、もう以前のような平和な日常が戻ってくることはないのかもしれない。

だが俺は戦い続ける。いや、戦わなければならない。それが皆との約束であり、そして皆が俺に望んだことだ。

皆が出来なかった「生きる」という簡単そうでもどんな事よりも難しい行為が、ただ一人生き残った俺に課された義務だ。俺は戦い、生きて、皆がどんな人生を送ったのかを語り継がなければならない。そして皆が命を投げ出してまで救おうとしたこの世界を、守らなければならない。

もしかしたらそれは、無駄な足掻きなのかもしれない。ただの高校生がやるには荷が重すぎる、無駄で無謀で無理な事かもしれない。

だが、やってやるさ。

俺はまだ死んじやいない。生きていればなんだって出来る。
ハッピーエンド
そして今度こそ、幸せな未来を掴んでやる。

見てろよ、皆。

ただの高校生がどこまでやれるのかを。

俺の戦いは、サバイバル始まったばかりだ。

最終話 サバイバル高校生（後書き）

まだだっ！まだ終わってないっ！！

ということで、次回エピログがあります。それで本当に終わります。

・・・終わる終わる詐欺じゃないよ？

エピソード 俺達の戦いは、まだまだこれからだ！ (前書き)

いよいよ、本当に終わります。今回の主人公は武くんではありません。そので、そのところを了承して読んでいただけたら幸いです。

エピローグ 俺達の戦いは、まだまだこれからだ！

1年前、2011年の5月1日に世界は崩壊した。わたし達が当然のものとして受け入れていた平和と安全は、自ら勝ち取るものに代わった。

わたし、秋山^{あきやま} 恵理^{えり}も1年前に、この地獄に放り込まれた。世界は死者が歩き回る場所と化した。

幸いなことにわたし達の高校があるこの地域には、ゾンビはあまりいなかった。わたし達は高校を避難所にして、この一年を過ごしてきたのだ。

この地域は悲しいかな、いわゆる過疎地域と呼ばれていたので住民は少ない。人間が少なければ、当然ゾンビも少ない。

最初の1ヶ月は、特に世界が終わっている事を意識せずに過ごせた。

だが、だんだん食料が少なくなりはじめた。町のスーパーなどにある食料は早い内から集めておいたが、いつまでも保つものではない。野菜などを育ててどうにか過ごしたが、それで全員の飢えが満たせるわけでもなかった。

しばらくすると、外から避難民がゾンビの少ない地域を求め、この町にも流入してきた。

世界が終わってから1ヶ月もすると電気水道ガスなどのインフラが

全て停止し、わたし達の町は情報不足に陥った。わたし達は外からやって来る避難民達から、今世界がどうなっているか断片的な情報を得た。

避難民の一人が言ったことには、どうやらゾンビ化ウイルス（これは早い内から知っていた）を防ぐワクチンと、噛まれても一定時間内ならゾンビにならずに済むワクチンがあるらしい。

その避難民は東京からやって来た。東京には1200万人以上人間がいたので、当然ゾンビも多かった。早い内から都民は別の地域に流出し、今の東京にはごくわずかの人間と大量のゾンビ、そしてゾンビ掃討にあたる自衛隊くらいしか残っていないのだとか。

自衛隊は指揮官が無断で出動していたおかげで初動が早く、被害も抑えられていた。だが駐屯地や大きな避難所を守るのが精一杯で、ゾンビ掃討はなかなか進んでいなかったのだという。

で、ゾンビ発生から1ヶ月ほどした時、ゾンビ化ウイルスのワクチンと治療薬を持ってきたという少年が自衛隊を訪れた。

無論隊員達もそんなのはでたらめだと思った。だがその少年はワクチンと治療薬があることを証明するために、なんと目の前でゾンビに噛まれてみせたのだという。

結局、少年がゾンビになることはなかった。彼が持ってきたワクチンと治療薬はすぐさま生き残っている研究機関に引き渡され、量産されているのだとか。ちなみにその少年はどこから手に入れたのか、大量の軍用銃火器を持っていたという。そしてワクチンと治療薬を渡すと、どこかへ去って行ったらしい。

だが生産施設もそれを動かす人間も少ないため、ワクチンと治療薬

の生産は思うように進んでいないようだ。どうにか警察官や医師、自衛官やインフラを維持するために必要な技術者達に行き渡る分は出来たが、国民全員に配る分はないし配る手段もないのだという。

「ま、こんな状況で何人国民が生きてるかわからんがね」

その避難民はそう言っていた。

別の避難民によると、すでに「生きている人間」の日本国民は6000万人を切っているらしい。

どうやら外国では戦争まで勃発したようだ。大量のゾンビによって領域を失った国が、安住の地を求めて外国に進攻を仕掛けたという。日本の周囲でも紛争が始まったそうだ。世界一の人口を持つ某国が、億単位のゾンビを抱えたせいで周辺国に侵略を仕掛けたらしい。

いずれ日本にも、外国の軍隊が攻めてくるのではないか。その避難民はそう語った。

6ヶ月もすれば、避難民を受け入れることもなくなった。こちらの食料事情も悪化の一途を辿り、他人を気にする余裕がなくなったからだ。

もつとも、やって来る避難民も時が経つにつれて少なくなっていたが。

切れ切れに得られた情報によると、どうやら政府は北海道に移転したそうだ。自衛隊はゾンビ掃討を諦め、大部隊を集結させて特定地域の治安維持と外国の侵攻に備えているらしい。他の地域の生存者を救助にくる余裕はないという。

わたし達の町にも、救助は一度も来なかった。

ゾンビ発生から10ヶ月、わたし達はいよいよ高校から一步も出ることは出来なかった。時とともに流入してくるゾンビの数が増え、町中にあふれていたからだ。

わたし達150人を越える生存者は、高校に立て籠もった。田舎なので土地は有り余り、高校の面積は広く充分個人の空間を作ることが出来た。だが生きていくのに必要な食料は最低限しかなかった。ゾンビは高校の周りを取り囲んで、わたし達が中から出て来るのを待っている。校門を補強してバリケードを作ってゾンビの侵入を防いでいるが、わたし達も外に出ることは出来ない。

高校に立て籠もってから2ヶ月。つまり今日。

今日はゾンビ発生から1年が経った日だ。1周年だとかなんとか言っている同級生もいたが、笑えない1周年記念日だ。

食料はほとんど底をついた。今は一日一食、しかも量だって少ない。高校の外に出れば食料は調達できるだろうが、ゾンビが高校を取り囲んでいる状態では不可能に近い。そもそも、入口を開けた瞬間に中になだれ込んでくるだろう。

高校に避難している者は皆、飢えと死の恐怖で殺気立っていた。大人の怒鳴り声と子供の泣き声が、いつもどこからか聞こえていた。

——そして今日。

わたし達の避難している高校に、ゾンビがなだれ込んで来た。

きっかけは、この高校の教師が教え子の女生徒を強姦しかけたこと

だった。その教師はゾンビが発生したその日から避難所となった高校で献身的に働いていたが、最近は粗暴な行動が目立っていた。食料がほとんどないことによる飢えと、周囲をゾンビに囲まれしかも救助が来ないという絶望的な状況で、頭がおかしくなってしまったのだ。

女生徒が抵抗したせいで教師はすぐ他の避難民に捕まったが、皆も殺気立っていたのだろう、その教師を殺すと言い出した。

その言葉を聞いて教師は自分を拘束していた避難民を殴り倒し、そして貴重なガソリンが入っている数少ない車の一台に乗って逃げ出そうとした。だが運転を誤ってバリケードに衝突し、そして壊れたバリケードからゾンビが侵入し始めた。

「秋山、どうするんだ!？」

男子生徒が悲鳴のような声を上げた。わたしはこの高校の生徒会長をやっていて、高校生たちのリーダーを務めていた。

大人はあてにならない。彼らは自分が助かることしか考えていない。なら、わたし達か、戦うしかない。

「前にこういう事態になった時の練習をしたでしょう!？男子と力がある女子、バットを持って一階に行って!その他の女子は屋上からコンクリートブロックを落として!校舎に入れたら終わりよ!」

わたしはそう指示して、自らも金属バットを持って一階に向かう。この高校に避難している高校生は約50人、男女比はほぼ1…1だ。一階に下りてグラウンドに出る。すでにグラウンドの半分までゾンビが押し寄せている。

「牧野^{まさの}！ バリケードで入口を塞ぐ準備をして！ わたし達がその間に時間を稼ぐから！！」

そう怒鳴ると、男子生徒の牧野が頷いて校舎に戻った。

高校の敷地からゾンビを追い出すのははや不可能だ。ならせめて校舎への侵入だけでも阻止しなければならぬ。

だがその後どうすればいいか、それはわからない。このままここでゾンビに食われて死ぬか、あるいは校舎に立て籠もって餓死するか。

どっちにしろ、今を生き延びなければそんな事を考える未来すらない。

野球部員を始めとした男子や力がある女子が、バットや角材を手にゾンビに立ち向かっていく。数人いる弓道部員が屋上からゾンビを狙うが、焼石に水としかいいようがない。

わたしもバットを振り回し、必死に戦った。だがわたし達に死者（負傷者はカウントしない。ゾンビに噛まれたらアウトだからだ）が出ないように戦うと、必然的に敵味方入り乱れての白兵戦などは出来ない。ゾンビはわたし達より多く、そしてのろまだが力も強い。

わたし達はとうとう昇降口付近まで押されてしまった。屋上から女子達がコンクリート片など重たい物を投げつけ、それがゾンビの頭に当たり何体か倒れた。まだテレビが使えた頃、ゾンビの頭が弱点だと聞いたからだ。

だが投石も、ゾンビの大群には敵わない。昇降口にバリケードを築く作業は終わっておらず、このままではゾンビの校舎侵入を許してしまう。

そうなればもう、わたし達に逃げる場所はない。

「秋山！どうするんだよ！？」

ゾンビにバットを掴まれ、手放して丸腰になってしまった野球部員が悲鳴のような声を上げる。

そんなのこっちが知りたいわよ。こっちにマトモな武器はない。警察や自衛隊は救助には来てくれない。逃げ場もない。

終わるの？ここで？わたしの人生が？
せっかく1年も生き残ってきたのに？

ゾンビ達がわたし達に近寄ってくる。わたしは覚悟を決め、どうせ死ぬなら多くのゾンビを道連れにしてやると突撃しようとした。だがその直前、屋上から女子の声が聞こえてきた。

「センパーイ！なんか車がこっちに来てまーす！！」

車？こんな時に？

「自衛隊！？それとも警察の！？」

「違います！ただの白いライトバンです！」

なんだ、救助じゃないのか。

おそらくそのライトバンには避難民が乗っているのだろう。この町に避難してきたようだが、生憎わたし達は絶賛死亡寸前中だ。来たって受け入れることは出来ないし、食料も何もない。

わたしにも、自動車のエンジン音が聞こえてきた。エンジン音はどんどんこちらに近づいてくる。

あ、そうだ。あの車にゾンビが引き寄せられて行ってくれないかな

？・・・などと考えてしまうわたしは、相当心が荒んでいる。

自動車のエンジン音が大きくなってくるにつれて、何か音楽が聞こえてきた。軽快なリズムで、低い男の声で何やら歌が聞こえている。

『やらないか やららいか やら やらかいかい』

・・・何？

「・・・・・・・・バラライカ、いさじバージョン？」

と、わたしの隣にいる牧野が呟いた。

エンジン音と『やらないか』と卑猥な歌詞はどんどん大きくなってくる。そして・・・・・・・・くる。

どーん！という音とともに、校門のバリケードの残骸が吹っ飛び、ライトバンが校庭に侵入してきた。

ライトバンは何かの映画みたくだりフトをきめながら、校庭にいるゾンビ達を次々と轢いていく。運転席の窓が開き、そこから腕が突き出されていた。

その手には短機関銃が握られていた。運転手はゾンビを轢きながら短機関銃を撃ち、どんどんゾンビを倒していく。

「なんだ！？救助・・・か・・・・・・・・？」

慌てて昇降口から出て来た牧野が、いや、いまここにいる全員が絶句した。

なぜなら、その白いライトバンは、いわゆる痛車だったからである。

ライトバンの側面には「県立豊島高等学校」という高校名と、校章らしきものが描かれていた。だがそれ以外の箇所には、いわゆる「美少女キャラ」と呼ばれる二次元の女の子のシールなどが所せましと張られている。

美少女の笑顔を張り付けたライトバンが次々とゾンビを轢いていく光景は、シール以外の何物でもなかった。ライトバンの前面にはシールが張っていない。ゾンビを轢いた時に傷つくのを運転手が嫌がっているのだろう。

白いライトバンの前面がゾンビの返り血で真っ赤に染まった時には、すでに校庭に侵入していたゾンビの数は半分にまで減っていた。高校を取り囲んでいたゾンビは400体程で、それらが全部侵入していたとすれば200体以上が轢殺された計算になる。

わたし達が啞然と血まみれの痛ライトバンを見ていると、ライトバンは徐々に速度を落として停止した。助手席のドアが開く。

そこから飛び出してきたのは、一匹のシェパード犬だった。まさか、あのシェパードがライトバンを運転していたの………？

そんなわけはなかった。運転席のドアが開き、そこから一人の少年

が降りてきた。

その少年は学生服を着ていて、わたし達と同じ高校生らしかった。ただ、高校生と違う点は、その手に軽機関銃を携えていたことだった。

しかも少年は自衛隊員のように、いくつもポーチがついた厚いチョッキのような物を身につけている。右の太股にはホルスターが装着され、大きな拳銃が収まっていた。

なにより印象に残ったのは、少年の右の頬に、ナイフで斬られたような大きな傷跡があることだった。

「あれ・・・誰？」

「知らないわよ、なんか見た目は高校生っぽいけど」

わたし達が場違いにもそうひそひそ話し合っていると、突如、少年はわたし達に機関銃の銃口を向けた。

「その人達、伏せろ!!」

少年がそう叫んだ。そうだった、わたし達はゾンビに囲まれていたんだっけ。

わたし達が慌てて伏せた直後、機関銃が火を噴いた。連続した銃声が響き渡り、機関銃から吐き出された銃弾を食らったゾンビが次々倒れていく。

わたし達の頭上を、何発も銃弾が飛んでいった。銃弾は校舎の外壁をえぐり、一階の教室の窓を次々割っていく。

「逃げるやつはゾンビだ！逃げないやつは、よく訓練された魔装少女なゾンビだ！！この世は地獄だぜ！フウハハアアア――！！」

銃声の合間に、少年がそう叫ぶのが聞こえた。頭がおかしいの？大丈夫なのあの少年？

気がつくとも銃声は止んでいた。恐る恐る頭を上げると、あれだけいたゾンビは数える程しなくなっていた。

地には頭を吹っ飛ばされたゾンビが累々と倒れている。弾が切れたのか少年は機関銃をライトバンに放り込むと、ホルスターから拳銃を抜いた。

開いたライトバンのドアから車内の様子が見えた。後部座席には、散弾銃や自動小銃、狙撃銃などが所せましと並べられていた。どうみても軍用の銃火器である。

「ライン、行け！！」

少年がそう叫ぶと、シェパードがゾンビに飛び掛かった。体当たりを食らって地面に転がったゾンビの頭を、少年が拳銃で撃ち抜いていく。

いや、拳銃ではない。だって一回引き金を引く度に三発発砲しているのだから。

スライド上部が大きくえぐられた黒い機関拳銃を持った少年と犬によって、あつという間に残っていたゾンビも倒された。少年は機関拳銃の弾倉を交換しつつ、わたし達に近づいてくる。

この少年はたった一人で、わたし達数十人がてこずっていたゾンビ数百体を倒してしまったのだ。

無論彼が銃を持っているという事もあるだろうが、それにしたって手際が良すぎる。まるで、何度も戦ってきたかのように。

少年はわたし達の目の前までやってきた。そして口を開く。

「誰か噛まれた奴はいるか？いたら安心して名乗り出してくれ、治療薬を持ってる」

治療薬？なんでそんな貴重な物を、この少年が持っている？

だが嘘ではないらしい。少年は注射器とアンプルを取り出していた。幸い、噛まれた者はいなかった。少年は安心したような顔で、注射器とアンプルをしまった。

この少年は一体何者なんだろう？いきなり痛ライトバンで突っ込んできて、銃刀法違反確実な銃器をたくさん所有していて、何者？

「あの……、あなたは、誰ですか？」

わたしが皆を代表して尋ねると、少年は待ってましたとばかりに笑顔で答えた。

「俺？俺は変態という名のしんs痛い痛い痛いライン噛まないでもう一回やり直すから」

少年が最後まで言う前に、シェパードが彼の足に噛み付いた。まるで「ふざけるな」と言っているかのよう。

少年は大きく咳ばらいして、「もう一回よろしく」とわたしに言った。なんか脱力したが、素直にもう一度聞き直す。

「あなたは、誰ですか？」

「俺？俺か、俺はな……」

少年はポケットに手を突っ込みながら答えた。

「ただの、高校生だよ」

サバイバル高校生 E N D

エピローグ 俺達の戦いは、まだまだこれからだ！（後書き）

という訳で、本当にこれで終わりです。皆さま、長い間ご愛読していただき、誠にありがとうございます。

最初の頃は某学園黙示録のパクリだとかなんだとか言われまくっていましたが、皆さまのおかげで総合アクセス100万を超えるまでに至りました。本当、感謝してもしきれません。

とりあえず、この作品の最初の目的である「某学園黙示録より早く終わる」ことは達成出来ました（おい

これで学園黙示録がどんな展開になっても、もうパクリだとか何とか言われずに済むね！（コラ

それと、なんかジャンプ打ち切り回みたいなのサブタイトルですが、別に打ち切った訳ではありませんよ。何か中途半端な気はしますが・・・。

あとここだけの話ですが、実は続編のアイデアもあります。エピソードでいろいろ伏線張りまくってますが、それは続編のためです。「つまんない」「意味がわからない」「誰得？」という声が上がりますので恐いですが。

「続編読みたい！」という感想を頂いたら、続編の執筆を始めます。というか、ストーリー展開はほとんど考えてあるので、ぜひ書きたいというところです。

さて、

死んでいったキャラに哀悼を捧げつつ（ほとんど全員だけだね）、

サバイバルな生活を送る武くんの無事を祈って、
この辺で終わりにしたいと思います。

それでは。長い間、本当にありがとうございました！！

続編です

←

http://ncode.syosetu.com/n57333
t

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5225k/>

サバイバル高校生

2011年6月13日04時58分発行